
グラビティワールド

りい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

グラビティワールド

【Nコード】

N3869U

【作者名】

りい

【あらすじ】

かつて大人気だったVRMMORPG グラビティワールドしかし、15年の時を経てスペック的に限界が来てしまい、メーカーの必死の引き止め工作も空しく、遂に2年後にサービス終了という憂き目を見ることとなった。彼こと近藤零夜<キャラクター名：レオ>は、白いローブの男に誘われるまま、急に現れたネオン満載の怪しい門を潜ると、ついた先は異世界だった。 本作品は完全に作者の悪乗りです。燃料は全て作者の悪乗り……の、ハズが最近わりと真面目に書いていたりします。

プロローグへ歩き出すまで

15年前、世界初のVRMMORPG グラビティワールドが発売された。

巨額の制作費がかかったと云われるそれは、システム面での作りこみも素晴らしく、当時は爆発的な人気があった。

しかし世界初と言うのは問題も多く、搭乗型の操作媒体である<スフィア>も高額であった上に少々脆く、改良版が出るまでは買い控える人も居たくらいだ。

再現できるポリゴンは少し荒いものだったし、10年経った今でも基本スペックはさほど変わらないので今では少々時代遅れに成ってしまったが……。

そう、今はもう殆ど人は居ないのだ。

理由は色々あるが、一番はやはり、4年程前に発売された新作ソフトだろう。

最新型の<スフィア>と同時発売されたそれは、従来のものより数段上がったスペックを利用して現実と見紛う程の世界を創る事に成功していた。

会社の方もプレイヤーの引止めのため、様々なイベントやキャンペーンを行ったが、一時的な効果しか出せず、10以上あったサーバー（世界）が5つまで統合されたのを期に、残り1年半でサービ

スを終了すると告知した。

そんな寂れたゲームに、一人の男がログインしている。

近藤零夜ことキャラクター<レオ>は、発売当初からの古参プレイヤーの一人で、今年で28歳になる社会人だ。

彼が操作するアバターは黒髪のハイエルフ。15年の歳月で自分の分身様な存在になっている。

発売当初は両親が会社勤めで高給取りだったのもあり、<スフィア>も簡単に買ってもらえたのだが、ゲームを優先した生活をしていたせいで、彼自身はバイトしていた近所のホームセンターの平社員であり、多少の貯金も作りたかったので新型の<スフィア>とソフトが必須の新しいゲームには、手が出せなかったのだ。

「やっぱ赤龍は倒すだけでテンション上がるな」

灰色の塊になって消える赤龍を見ながら、レオは草原に座り込み、ドロップ品を確認する。

そこは 神域 と呼ばれる、天使や龍や天馬が徘徊する草原のようなエリア。

レベル130の火竜は、レベル150のレオにとって本来苦戦する敵であった。

しかし、度重なるキャンペーンと過疎化による人口減少に対する緩和によって、プレイヤーの大幅な強化が成された結果、気楽に倒せる敵になったのだ。

具体的に言うと、世界に一つだけのアイテムが、もう一つ取れるようになるキャンペーンと、本来メインジョブの半分のレベルまでしか能力を発揮できないセカンドジョブを、同じレベルまで引き上げるダブルジョブに変えたと言うもの。

それによる現在の彼のステータスは

種族：ハイエルフ

ジョブ：忍者150（上限）／学徒150

力：220

知恵：187

信仰：255

耐久：180

器用：240

俊敏：255

魅力：210

装備はメインジョブの忍者仕様。学徒は攻撃魔法はあまり使えないが、回復とサポート魔法が得意な特化ジョブ。ちなみにステータスの最高値は装備も含めて255までとなっている。

ちなみに、本来後衛向けのエルフにしては力が高いのは、ステータスを2ずつプラスする高難易度クエストを、複数クリアした報酬である。

本来なら小太刀の二刀流がメインの忍者では、これでも赤龍は相手には苦戦するのだが、レオの所有物の中でも……このゲームの中でも最強と言われる武器 天羽々斬り があるため、雑魚と言っても過言ではない。

天羽々斬り は、どんな物でも紙の様に切り裂き、斬撃時に両手武器並みの大きさに伸びる為、両手武器と同等の威力があるのだ。そのほかにも一つ、この武器には隠し機能がついているのだが、ここでは割愛する。

世界に一つだけの素材を三つも使ったこの武器にかかれば、赤龍など何匹来ようと物の数ではない。

この刀については、一度あまりに強すぎるとして、1度弱体された事があるのだが、プレイヤーの猛反発を受けて元に戻した経緯がある。

「さて、約束の時間までもうちよいあるし、適当に狩って待つかね」

レオは現状レベル150のキャラクター数人分の能力を持つため、過疎化が進んだこの世界では知人にパーティ規模の戦力としてよく頼られる。

その後、2〜30匹の幻獣やら龍やらを狩った頃、メールの着信を告げる音が聞こえた。

視界の隅の操作ウィンドウ表示ボタンに指を当て、画面を引っ張ると新着メール1件と書かれてた場所をチェックした。

『手伝い頼んだのにすまん。急用で行けなくなった……今度お詫びに勤務シフト都合するからカンベンして〜(＜|＞)』

メールには職場の同僚から、今日の予定が無くなった事を知らせるメッセージが書かれていた。

昨日会った時の話から察するに、大方彼女からの小言に耐え切れず、そちらを優先する事になったのだろう。

「全く、30分待たせてキャンセルの拳句にリア充とは……どうしてくれようか」

ウィンドウを閉じて平原を見渡した。最近では殆ど人を見なくなった最高レベルのダンジョンに一抹の寂しさを覚える。

ここはレオ位の能力がないと、5〜6人のパーティ以上でなければ危険な場所。

一昔前はレベルを上げる為に人が溢れ返っていた狩場も、今では無人に近い状態だ。そこでふと、最近このエリアを探索した人が少ないのではないかと思に至る。

この所、運営側が殆どやけっぱちになって色々なイベントを追加している（滅茶苦茶な内容が多く、あまりやっている人はいない）が、この 神域 でも何かやっているかもしれない。久しぶりに見て回るのも悪くない。

それから数時間かけて 神域 を見て周り、そろそろ帰ろうとした時、ありえないモノが目に入った。

「なんじゃこりゃ……」

それは何の冗談か、暁の草原に白い門のような建造物が建っていた。そこまではいい、だが問題はその建物が色とりどりのネオンで虹色のゴテゴテした光を放っている事だ。

呆然としながら歩いて近づくと、白いローブを着た目つきの悪い魔術師風の男が現れた。

彼を見てレオは驚いた。

体の特徴を自由に選べる代わりにポリゴンの荒いプレイヤーと比べ、モンスターやNPCは総じてクオリティが高い。しかし、それを踏まえても目の前の男は信じられないくらい完璧で滑らかなCGで出来ていた。

「いやあ、ようやく人に会えました。もう誰も来ないんじゃないか

と不安になっていた所ですよ」

目の前に立つた男が突然口を開いた。

自分から話しかけてくるNPCと言うのは聞いた事が無いのだが、AIの試験導入でもしているのだろうか。

「えっと、これは何かのイベントか？」

取り合えず会話の選択肢も出ないので普通に返してみる。

「イベントと言えばイベントですね。私の人生の全てを掛けたイベントです」

「はあ……」

何とも重い返事が返ってきたが、ずっとここに居るしかないNPCとしては、人生の全てはこのイベントに掛かっているのかもしれない。

「貴方は凄いですね。この辺りは魔物が来ないので私でも何とか耐えましたが、近くの魔物を見たときは私では絶対に勝てないと確信しましたよ」

「まあ、そこそこ頑張っているので……」

とても謙虚な方だ……と、大仰に頷く男を見て、このAIリアクション過多じゃないか？等と関係の無い事を考えていると、男が真剣な表情で見つめてきた。

表情が変わる事自体が驚きなのだが、男から気迫と言うか威圧感のような物を感じられて、レオは一步後ずさってしまった。

「貴方には是非、この門を潜って頂きたい」

「え、ええ……」

先ほどから驚きの連続で、完全に相手のペースに乗せられてしまっているレオは、否定とも肯定とも取れる声を漏らした。

「門の向こうの世界は、ここよりずっと鮮明です。それに、沢山の出会いや冒険が待っています。多少の不便はありますが、冒険者の貴方なら、きつと気に入るハズです」

「うーん」

鮮明と言う事は、CGのクオリティが増すと言う事だろうか。それに新しい冒険…… テストかなにかだろうか。

とは言え、胡散臭いのも確かだ。もし参加してこのキャラクターのデータが破損でもしたら目も当てられない。

「私の力では一人を送る事が精一杯ですが、貴方ならばきつと何の問題も無いでしょう」

悩んでいる様子を見て、もう一押しだと思ったのか、先着1名のみだと暗に告げてくるNPC。ここまで言われたら、ゲームならば乗らねばなるまい。

「オーケー、行きましょう。このまま入れれば良いだけですか？」

「おお……行ってくれるんですね。そうだ、それとカークスと言う人に会ったら、この手紙を渡してくださいますか」

黒い毛皮で作られた便箋を渡され、それを背負っていた収納袋に入れた。

収納袋は入れた物の大きさを小さくし、沢山の物を入れて歩く事が出来る収納アイテムだ。

これがこのイベントのキーアイテムなのだろう。と考え、特に気負わず門に入る。

「んじゃ、入りますねー」

何やら男が真剣な目で見ていたが、その時はその理由が解らなかった。

そしてその日、時間が経てばどんな死体も消えるゲームの中に、永遠に消えない白いローブを着た男の死体が置かれた。

入った瞬間、プツンという軽い音がした。

その音は聞き覚えがあった。数年前落雷によってゲーム中に停電があった時、強制終了させられた時の音だ。

何でこのタイミングで……と思ったが、冷静で居られたのはそこまでだった。

気がつくとは彼は裸で半透明な紫色の泥の中に居た。

何が起きたかと混乱している間に、全身に激痛が走った。

「いぎいいいいあああああ……」

身体が解けてドロドロになっていた。

骨も内臓も皮膚も、脳以外が全て溶けているのを感じる。

「っ……」

肺が溶け、声すら出せなくなった。

その状態で、どんと泥の深くへと墮ちていく。

暫くすると、身体が少しずつ形を取り戻してきた。

どこか違うような気もするが、なじみの物のような気もする。

「……くっ……あぁっ」

何とか声が出せるまで回復してきたようだ。すると、目の前に入った時と同じような門が見えてきた。

本能的に這い寄って全力で門の外へ身を乗り出す。

「はっ」

気がつく草原に倒れていた。

大の字になってゼイゼイと荒い息を吐く。

額の汗を拭おうと、手を当てると、ゴツゴツした感覚が感じられて目を剥く。

視界に入っているのは確実にレオの手だ。しかしその手には見慣れたようで何かが違う、革と布で出来たグローブがつけられていた。慌てて起き上がって全身をチェックするが、そこに在るのは、グラビティワールド。でいつも操作していたハイエルフの身体に、ピツタリと合う忍び装束だけだった。

「マジかよ……」

呆然と呟いたが、答えをくれる物は居ない。

そこでふと、左手に引つかかっている紐に気がついた。

手繰り寄せると見慣れた収納袋があった。

しかし、ゲーム中での常に風船のように膨らんだ形ではなく、いかにも中身が入っているような潰れかけた形になっていた。

それを見ただけで嫌な汗がじわりと背中中に浮かんだが、中身を確認すると特に変わったところは無かったので、一応の安心ができた。

「データは破損してないみたいだ……しかしこの世界……」

物を掴むと掴んだ感覚があった。頬をつねると痛みがあった。

グラビティワールドではその辺りは、『何となく触れている』程度であったので、それにはかなり驚いた。

「グラビティじゃないのは確かだけど……とてつもない完成度だ」

草の葉一本一本まで完全に作りこまれ、頬をなでる風の感触まである。

数種類出ている新作のVRMMORPGは、試しに一度だけ友人宅でやった事があるが、それとも比べ物にならないリアリティだった。

「黙ってても仕方ないし、ちょっと歩いてみるか」

立ち上がって見回してみると、左側に森が見えた。右側は見渡す限りの草原なので、森に入る事を選択した。

森に入って少し歩くと、狼のようなモンスターが群れで襲い掛かってきた。

荷物を置いて応戦したのだが、一太刀目を振った後、絶句する程驚く。

「おいおい……」

胴を真つ二つにされた狼が、内臓をぶちまけて崩れ落ちた。その様子に硬直していると、四方八方から狼が襲い掛かってきた。

慌てて全力で飛びのくと、あり得ないほど遠くまで飛ぶんでしまい、思わずたたたらを踏む。

距離にして7メートル程だろうか。元のゲームでは移動速度が一定に決められていて、それを越えた速度で移動する事は出来なかったはずなのだが、此方ではそれは関係ないようだ。

それでもまだ追い続ける狼達に、舌打ちしつつ応戦する事にした。刀身の短いサブウエポンでは頭部を狙い、天羽々斬りは無理せず胴体を狙う。

少し心配な要素もあったが、喚き散らす鳴き声さえ無ければゲームの虎型モンスターより戦いやすかった。

右手の天羽々斬りで斬る分には殆ど感触が無いから問題ないのだが、左手の武器で斬る時、肉や骨を断つ感触がモロに伝わってきて、気持ち悪い事この上なかった。

およそ半数を切り伏せた所で、狼達は逃げていった。色々違和感を感じて考え込みたい所だったが、むせ返るような血の臭いにその場に立っていられず、先に移動する事にした。

走ってある程度離れた後、ふと魔法を使っていなかった事を思い出した。

移動速度がどこまでも反映されるならば、行動を早くする魔法、クイックで更に速度を上げられないかと思ったのだ。

「クイック」

単語登録したハズの言葉を口にしても、変化は見られない。
仕方なくメニュー画面から選択しようとしたが、そもそも、常に
視界の端にあるはずのメニュー画面展開用のボタンが見当たらない。

「嘘だろ……」

狂ったように手を視界の端で動かすが何の反応も無い。

「GMコール！メッセージ発信！ええと……そうだ、ログアウト！」

必死にメニューバーの単語を連呼するが、反応は無い。

「なんでだよ……GMコール！クイック！ログアウト！」

半泣きになりながら喚き散らす、何の効果もない。

ログアウトが出来ない……その事実にはゾツとした。だが、喚いて
いる内に辺りからガサガサと何かが近づいてくる気配がして慌てて
逃げ出す。

あんな弱い狼が居るような森だ、なにが出てきても勝てるだろう
が、ログアウトが出来ないという事実と、さっきの狼の血肉を見た
ときの嫌悪感が、レオをその場から移動させた。

「とにかく、魔法だ……魔法が無くちゃ怪我したら死んじゃう」

できれば何も無いさっきの平原に戻りたいが、森に入ってあちこ
ち走り回ってしまった。方向が解らなくなった以上、どうにかここ
で生き残れるようにしなくてはならない。

呼吸を整え、再度魔法を呟く。

「クイツク」

何も起きない、ガクガクと震える膝を抑え、どうすればいいか考
える。

メニューは開けない、グラビティワールドの魔法には、詠唱
なんて無かった。しかし、魔法が使えなければ<レオ>の実力の半
分も出せない事になる。

クイツクには何時も助けられていたのに……と、使っていた魔法
の、体が淡い金色に光るエフェクトを頭に思い描いた瞬間。

体が金色に光り、軽くなったような気がした。

「よしっこれか……」

思わず拳を握り締めた。その後ついた安堵の溜息で、力が抜けて
座り込んでしまった程だ。

その後回復魔法を一通りと、防御力強化の魔法を試して、取り合
えずは安心する事が出来た。

気を取り直して歩き、狼や大きめの鳥を蹴散らして数時間進んだ
所で簡素なバリケードを両脇に立てた道が現れた。

「街道だよな……さて、どっちに行くか」

土を固めただけの街道は、カーブが多く、見通しが利かない。

判断材料が無いので、森で拾った木の棒が倒れた右側に進む事に
決めた。

胸を抉るような不安があったが、その正体がなんなのかはなるべ
く考えないようにして前へ進む。

生身のような手足の感覚は氷のように冷たく強張り、微かに震えているような気がした。

プロローグへ歩き出すまで（後書き）

どうも、作者です。

勢いだけで書いてみました。一応第一部の内容はある程度決まっています。

誤字脱字・矛盾などのご指摘お待ちしております。

更新については場合によっては遅くなるかと思いますがご了承ください。

一章 荷馬車と炎

草原を駆ける数台の荷馬車。

その前から2台目に当たる、真新しい木製の荷馬車で馬を鞭打ち、苦々しげに叫んだ中年の男いた。

「クソツたれ！」

商人のアルザダは、自分の迂闊さを大いに悔やんでいた。

事の発端は四日前、火山近くの村でつるはしや作業着を売り、手頃な鉱石を買い取って商人仲間3人と金を出し合い、護衛の延長と追加を済ませた時に起こった。

見るからに金回りの良さそうな商人が一人、入れてもらえないかと言ってきたのだ。

「流石に一人では心細いと思っていたので、宜しければ一緒に行かせて頂けませんかね」

小男が指した金額は金貨7枚、日本円で70万に相当する大金だ。こういった場合、隊列に加わるのには金貨2〜3枚が妥当だ。

護衛に使う傭兵への給与の半額近い額に眉を顰めたが、積荷を見

て納得した。

汚い格好の痩せ細った男女が十数人、押し込められているのが見えた。

割合は圧倒的に女性が多い、所謂奴隷商である。

アルザダは個人的にはあまり気乗りしなかったが、他の3人が乗り気だった。この所魔物が多く出現し、損害が出やすく、護衛代もかさんでいたのだ。

「変な物は積んでないでしょうな」

奴隷商は裏社会と繋がりが深く、禁制品やら盗品やらを扱う事が多い。

「いやいや、さすがにこんな恐ろしい所で危ない橋は渡りませんよ」

この火山の村ドリユークは、採れる鉱物や宝石以外にも、現れる魔物の危険さに定評があった。

何時魔物が攻めてきてもいいように、町を囲む塀の他に、各家に必ず地下室がある程だ。

衛兵も魔物と戦いなれている為、この町で犯罪を起こせば、とてもではないが抵抗できない。

「最後の馬車にはかなり大きな荷物が積んであるようですが……」

「あれは奴隷達の食料ですよ。さすがに飲まず食わずで運べば死んでしまいますから」

そう言って笑った小男の顔は大いに気に食わなかったが、他の3人が合意しているので何とも言えない。自分が外されると困るからだ。

結局一緒に行く事になったが、その後三日間は全体的に特に問題は無かった。

アルザダ個人としては、小男が奴隷に食わせる腐りかけの食事が余りに不憫で、自分の商品をこっそり食わせていたので多少の損害は出ていたが、概ね予定通りの行程だった。

問題が起きたのは四日目の昼過ぎだ。

草原を走っている途中、空から恐ろしい泣き声が聞こえた。

見上げてみると全長15メートルはあるつかと言う赤い翼竜が2頭、凄まじい速度で襲い掛かってきていた。

「レッドワイバーンだ……」

誰かがそう呟いたのが聞こえ、その姿を見て凍りつく。

呆然と見上げている内に、翼竜は先頭の馬車に火炎の塊を吐き付け、道ごと馬車を炎上させた。

慌てて止めた馬車の列の周りを、数度旋回したレッドワイバーンは、奴隷商の連れていた3台の荷馬車の内最後の1台を襲うと、中から白い楕円形の物を取り出した。

卵だ。

竜種の卵などまごう事無き禁制品である。国家規模で討伐隊を組み、竜騎士用に取りに行く事はあると聞くが一般人がそれを行ったらどうなるかなど、目に見えている。

小男の姿は見えない。恐らく人の多く乗った自分の馬車は危険と

見てはいけないと思いつつ、どうしても気になって振り返った。
視界の奥に崩れた馬車に襲い掛かるレッドワイバーンの姿が見えた。

と、馬車の片隅に見覚えのある悪趣味な服を着た小男の姿が

「てめえ！よくも俺の馬車に乗れたもんだなあ、絶対に殺してやるぞ！」

「ひいつ」

小男は怯えたようにビクンと跳ねた。

よく見ると小男の他にも、3人の奴隷が乗り込んでいる。女性が2人に男性が1人だ、彼女達は唇を真っ青にして震えている。

荷物を全力で蹴れば、小男を馬車の外に落とせるかもしれないが、それをするとな彼女達も一緒に落ちてしまうので何とか自重する。

こうして物語は冒頭へ戻る。

「クソツたれ！」

そう呟いた瞬間荷馬車の幌の端を炎弾が掠め、前を走っていた馬車が炎に包まれた。

「うおおおおおお」

大量の冷や汗をかきながら手綱を引っ張り、ギリギリで炎上する荷馬車を避けて森へと直進する。

馬車はもう、アルザダの所有する2台しか残っていない。

その時、奴隷商が信じられない事をした。

奴隷の首輪に付与された呪いを発動させ、苦しんでいる彼らを撒

餌にするかのように突き落としたのだ。

「このクソ野郎！てめえも落してやろうか！？」

アルザダが荷物に足をかけたのを見て、小男は小さく悲鳴を上げてそれを中断したが、残っている奴隷は一人だけだった。

だが、このままではどうあっても森へはつけない、最早ここまでかと思ひ始めたその時

道なりに進むと、森を抜けて草原へ出た。

どうやら、森の外側をつたって歩いていたようだ。

目の前は何処までも続く平原……なのだが、遠くから荷馬車が土煙を上げて走ってくるのが見えた。

それに沿う様に、見たことの無い赤いワイバーンの様なモンスターが、空を飛んでいた。

どう見ても彼らにワイバーンをどうにか出来る力があるようには見えない。

今助ければ情報源として力になってくれるだろうか。等と考えていると、荷馬車はあつという間に追いつかれてしまった。

慌てて防御魔法を使う。物理障壁プロテクトアーマーLv7、魔法結界レジストシエルLv7、体感時間を早めるクイツク、そして瀕死からの気付け効果のあるオートリザレクトやある程度のダメージを肩代わりしてくれるエアースキン。

グラビティワールドでワイバーンと戦った経験から、レビティトも使う。これは空中に足場を作る魔法で、思い浮かべると地面に見覚えのある模様が浮かんだ。

これでワイバーン程度なら一瞬で撃破できる……ハズだ。だが、ワイバーンの口についた赤黒い血を見て、どうしても体が竦んでし

まう。

あの口に噛まれたら……と思うと、膝も手も感覚が無くなる程に冷え切り、震えが走る。

やっぱり、森に隠れよう。と思い、数歩後退したとき、先頭の荷馬車が炎に包まれた。

「うっお……」

馬車の先頭に座っていた男が、悲鳴をあげながら燃えるのが見えた。

このままではあの商団は全滅してしまうだろう。

俺なら、倒せるかもしれない。

痛い思いは嫌だ。

今助ければ命の恩人だ、大抵の頼みを聞いてもらえるだろう。

死ぬかもしれない。

この刀があるんだ、ワイバーン如きに負けるはずが無い。

でももし負けたら……。

燃え上がる荷馬車の脇から、2台の荷馬車が現れた。残っているのはあの2台だけのようだ。

それを見てもまだレオが迷っていると、先頭の荷馬車から人が落ちるのが見えた。

落ちた男性は地面を転がり、ワイバーンに食われてしまう。

レオこと近藤零夜は、平和な時代の現代人だ。そんな光景を見て黙っていられる筈が無い。

だが、それでも死への恐怖で逡巡していると、今度は馬車から女性花落された。

サーツと血の気が引くを感じる。まさか先頭の馬車は、乗っている者を一人ずつ突き落としているのだろうか。

「やめろおおおおおおおおっ」

ワイバーンが女性の前に立つ。焦りによって走り出したレオだったが、最早全てが遅い。

視界内転移魔法のビューレポートを使い、数秒でワイバーンの前まで駆け寄ったが女性は喰われた後だった。

「ハッアアアアアア」

全身を駆ける焦りが怒りに換わり、全力で 天羽々斬り を振るう。

ヤケクソ気味にすれ違い様に振るった刀によって、ワイバーンの右翼の端が切れた。

舌打ちしつつ後ろを見ると、ワイバーンが飛び上がりながら炎弾を吐いてきた。

宙返りでそれを避けつつ、空中で姿勢を整える。

爆音が轟き、それをかわしたレオをワイバーンが驚愕の表情で見

るが、その顔を見ても怒りしか感じない。

ジグザグに空を蹴り、ワイバーンの上空に躍り出た。クイツクのお陰で周囲の時間が遅く感じる。ワイバーンが此方を見てから炎弾を吐くのが、スローモーションのようだ。

こうして見ると、敵はそれほど脅威でもなかった。むしろ炎弾が誘導してくるゲームの竜の方が、戦いにくいくらいだ。

刀の扱いもどいう原理か自在に扱えるし、敵の行動の予測までできる。

布で口元を覆われた忍び装束の中で小さく晒い、上空から螺旋状に空を蹴って距離を詰める。

炎弾が上空に向けて乱れ撃ちされるが、凄まじい速度で空を駆けるレオにはかすりもしない。

ゴエエッ

ヤケクソのように炎弾を吐きまくっていたワイバーンが、苦しげに呻く。

どうやら連打のし過ぎで喉が枯れたようだ。

「ハアッ！」

敵の顔の横を抜け、背後に回り体を回転させながら背中を滅茶苦茶に斬る。

浅いと感じたので、即座に反転して頭部に狙いを定める。

ギイイイイ ツ

悲鳴のような叫びをあげて背を反らせるワイバーンの首に、上昇

の勢いを乗せて左の刀を刺す。

「これで」

そのまま刀を取っ手に、ワイバーンに張り付き、天羽々斬りを頭部に突き刺す。

「終わりだあっ」

突き刺さった天羽々斬りは刀身を伸ばして頭部を串刺しにし、そのまま振りぬかれた刃はワイバーンの硬い鱗と頭骨を紙を斬るように負荷無く切り裂いて真っ二つにした。

浮力を失ったワイバーンは崩れ落ちるように地面に落下し、数秒遅れてレオもその隣に降り立つ。

地に下りたレオは、その姿勢のまま固まっていた。

恐怖、焦燥、怒り、高揚、それら戦闘の余韻による震えで、動くことが出来なかったのだ。

一度地面に尻をつき、何度目かの深呼吸を終えた後、左手用の刀を刺したまま放置していることに気付いた。

左手用の刀は、攻撃力や機動力強化用など用途別に数本持っているが、首に刺さっているのは攻撃力強化能力のある來国俊という名刀だ。ワイバーンの死体と眠らせるのは惜しい。

ワイバーンの首に足をかけ、刀を引き抜いていると後ろから声をかけられた。

「あ、あの……助けていただいて有難うございます」

振り向くとガタイの良い中年男が、体を強張らせて立っていた。こいつがさつき2人の人間をワイバーンの餌にしたのかと思うと、怒りが込み上げてきた。

自分をもっと早く助けに行っていれば、とは思うが、八つ当たりでも非難の声を上げずには居られなかった。

「何で人を突き落としたりしたんだ。もう少しで助けられたのに」
嘘だ。自分でそのことが解るだけに、自己嫌悪で胸が苦しくなっ
た。

彼らとて自分の身が可愛いのだ。それ以前に、一度は全員を見捨てようとした事は他ならぬ彼自身が一番よく解っている。

「い、いえ。彼らを落したのは、勝手に私の荷馬車に乗り移っていた奴隷商人でして……」

奴隷商人という言葉に、再度レオは体がざわつくのを感じた。
そして商人が振り返った先 - 荷馬車が、1台だけ動いていた。

「あの野郎、俺の荷馬車を……っ」

その声が聞けるや否や、レオは視界内転移魔法ビューレポートを
使い、荷馬車の前へ移動する。

突然目の前に現れたレオに、奴隷商人の小男は小さな悲鳴を上げ
手綱を引いて馬車を止めた。

レオはもう一度レポートし男の背後にまわると、彼の首に刀を
這わせて見下ろす。

「下りる。話はそれからだ」

両手を挙げて何度も首を縦に振る小男に、レオはうんざりしたように舌打ちをして刀を収めた。

2台目の馬車の手綱を握っていた傭兵に、ワイバーンの鱗や牙、翼膜等の素材を集めさせ、二人の商人に話を聞く。

奴隷商人は、あぁしなければ自分が喰われると思い、必死だったと訴え、もう一人のアルザダと言う商人も、翼竜の卵を持ち込んだ犯人である小男を次の街の衛兵に突き出さなければならぬからと説得され、奴に関しては簀巻きにするだけにして置く。

問題はその後で、この後向かうという街の名前を聞いて頭を抱えなくなつた。

ダール興商自治区。

はつきり言つて聞いたこともない。

どうやら多少大きい街のようで、知らないと言つたら大いに驚かれた。

「しかし、この道を通るとダール興商自治区には必ず行き着きますが……」

「実は、平原を抜けてきたんです。出身はかなり遠い東方の地で、日本……もしくはジャパンと言っただけ、聞いたことはないですか」

「いえ、残念ながら……」

日本を知らないのに、日本語で話しているのはどういう訳だろう
と思ったが、元々この言葉ですが。と返された。

「ところで、最初も聞いたけどアルザダさんはプレイヤーでもNP
Cでもなく、ここはグラヴィティでもVRMMORPGでもない。
そうですね?」

「ええと、私としてはその言葉の意味が一つも理解できないので…
…恐らく違うかと思いますが」

少々睨みを聞かせて聞いたが、当然返答が変わる事は無い。

最初はメニュー画面が壊れているんだが、代わりにGMコールを
してくれないか。と、聞いてみたのだが、首を捻られるだけで何の
返答も得られなかった。

仕方がないので、ゲームに関する情報を彼らから集めるのを諦め、
森の前まで行って収納袋を持ち寄り、このような袋を見たことがあ
るか、とだけ聞いてみた。

「ええ、収納袋ですね。黒いものは初めて見ましたが、皮袋等に魔
術師が魔力を込めて作ったものを何度か見たことがあります」

ちなみに黒いのはケルベロスの革を使ったからなのだが、これで
この4次元ポケットもどきを街中で使っても怪しまれない事が解つ
てホツとする。これで収納袋については、街中でも堂々と持って歩
けるだろう。

次の問題として、お金が全く無いと言うのがあった。幸い収納袋
に彫金の作成スキルを上げる為の貴金属や賢者の石、スタールビー
等の宝石類が入っていたので、その中から金塊を一つ取り出し、商
人に聞いてみた。

「手持ちの金が無くて困ってるんだけど、これを買取ってもらえないでしょうか」

商人は少し驚きながらも金塊を手にとると、大きく目を剥いた。

「これは純金ですか？」

「そのはず……そんなに珍しいですか？」

「いえ、金自体は金貨にも使われて居て珍しいと言うことは無いですが……まあ、これほど純度の高い物は珍しいですね」

どうも精製技術がイマイチなようだ。

後々の事を考えると面倒になるかも知れないが、現状それ以上簡単に当面の生活資金を得る方法が思いつかなかったので、売ることにした。

アルザダは金が本物かどうか疑っているのか、少し削って確認してから金貨20枚程を手渡してきた。

それを懐に仕舞って素材についての確認をする。

「ワイバーンの素材はアルザダさんにお任せしますね」

「ええ、色々と懇意にしている所があるので、そちらに卸そうと思っっています」

「それじゃ、そろそろ発ちましょうか。ここも安全ではないですし」

せつせと荷台に素材を積み込む傭兵を見て、レオは腰を上げた。

彼らの話では、翼竜はもう1匹居たそうだ。あまりここに長居するべきではないと考え、移動する事にした。

傭兵に声を掛けて切り上げさせ、後方の荷馬車に乗り込む。

アルザダの荷馬車に乗らなかったのは、奴隷商人と同じ馬車に乗るのは嫌だったからだ。

荷台に入ると傭兵が身を乗り出して握手を求めてきた。彼は30手前、現実での零夜に近い年齢のようだ。

「さっきは有難うよ。ギルってんだ、よろしくなエルフのあんちゃん」

「こちらこそ、ずっと歩きだったので助かります。名前はレオです」

「しっかしアンタつええなあ。レッドワイバーンを瞬殺する奴なんて聞いたことねえぞ」

「そうなんですか、まあ俺としても空中戦はそれほど経験が無いので、上手く行ってホッとしている所ですが」

実際あれほどアグレッシブな空中戦は初めてだった。ゲームならば炎弾は魔法判定で避けることが出来なかったし、移動速度に上限があったので、そもそもあんなに早く動けなかったのだ。

「ホントかよ……っていうか、アンタも冒険者だろ？その変な口調やめろよ。折角強いのになめられるぞ」

言われてみればそうだと思った。

ここが現実かどうかと言う考えは後回しにするにしても、普通の口調にしてもそれほど悪印象は受けにくいはずだし、舐められて厄介

「ことになるよりはマシだろう。」

「そうだなあ……その方がよさそうだ」

「変な奴だなあ、ま、エルフは大概変わってるって聞くけどさ。ところで、魔法使いは前の荷馬車に乗ったのか？」

「いや、魔法使いなんて居ないぞ。向こうに乗ってるのは奴隷商人だけだ」

「マジかよ……って事はさっきの空を飛ぶ魔法もアンタが？」

この質問には困った。さっきのレビティトは大型の鳥や翼竜等が現れる少し前の、レベル20後半に覚える魔法なので、てつきり此方でも一般的だと思ったのだ。

戦闘に関しては素人の商人からすれば、「すごい」の一言で終わりだったのだろうが、プロの傭兵から見ると別なのかもしれない。

「そうだけど、そんなに珍しいかね。結構一般的な魔法じゃないか？」

「いやいやいや、確かに北の魔術帝国の魔術師団には数人使える奴が居るって聞いているが、他だと宮廷魔術師くらいしか使える奴はいんじゃないかね」

「そうだったのか……」

これには参った。巨鳥や竜種と戦うには必須な魔法だけに、これを使うと目立つと言われても場合によっては使わざるを得ないからだ。

常識的なことがあまり解らない以上、暫くの間は目立つ行動は避けたかったのに、これでは話題に上るのは避けられない。

「ちょっと頼みたいんだが、俺がさっきのレッドワイバーンだっけ、あれを倒した事を秘密にして欲しいんだ」

「はあ？何でだよ、レッドワイバーンを一人で倒したって知れたら、確実に有名になれるぞ。冒険者なんて名が知れてなんぼなんだから、秘密にしたって損するだけだぞ」

「いやあ、俺は細々と旅をするのが性に合ってるからさ、有名になり過ぎて軍隊とかに目をつけられるのは嫌なんだよ」

ホント変ってるなアンタ……。等と言いつつ、不思議そうにしてるギルドだが、恩もあるし黙っといてやると言ってくれた。

恐らく、アルザダも頼めば口をつぐんでくれるだろう。奴隷商については脅せばいいだけだ。

その後魔法の話を中心に聞いてみたのだが、どうもレオの知っている魔法によく似た魔法もあるものの全く知らないものが大半なようだ。

特に水を温めたり、水を回して洗濯する魔法等はゲームにはそもそも必要なかったたので存在しなかった。

冒険者ギルドという所に行けば、初級の魔法なら教えてもらえると言う事で、町に着いたら行ってみる事にした。

「しかし、空を飛ぶ魔法は覚えてるのに、生活に使う魔法は覚えてないなんてどんな魔術師だよ……東の国ってのは常識ねえな」

どちらかと言うと、温水や衣服を洗濯する魔法は失敗してもリス

クが少ない為、見習いの頃に最初に覚える魔法なのだそうだ。

「ま、主に戦ってばかりだったからな。その他の事は宿に任せていた」

「おいおい、貴族じゃないだし、こつちじゃ宿屋は洗濯なんてしねえぞ……」

「一人で旅して来たから、その辺は無ければ無いで大丈夫だよ」

旅をしていたと言うのは嘘だが、一人暮らしの経歴は永い。

短期間付き合った恋人も居ない事は無かったが同棲していた経験は無いため、一人暮らしの間は家事は自分でしていた。

「大丈夫だろうと思うが、何か困った事があつたら言ってくれ。大概夜は冒険者ギルドの隣にある酒場に居るから」

「二三日したら顔をだすよ。よろしく」

事情通と顔見知りになれるのは助かるし、断る理由も無かったので好意を受けておく。

ギルとしても強い知人は居れば何かと便利なのだろうし、恩はいずれ返すとして、暫くは頼る事が多いだろう。

休憩を挟んで五時間程走った頃、大きな外壁が見えてきた。

石造りの高い壁は、それだけで見応えがあり、独特の威圧感を放っていた。

「随分立派な外壁だな。ダールってのは商売の国じゃなかったのか？」

「ここは数年前まで国境の町だったからな。今は同盟を結んでるが、昔は何度か戦火に吞まれた事もあるらしいし」

「そつだ、前の馬車に声掛けてくれ。さっきの話を向こうにもしてくる」

前の荷馬車に行つてアルザダにワイバーンの事について話すと、少々渋い顔をした。

「そうなりますと、レッドワイバーンの素材は大つぴらには売れませんな。まあ数日待つて頂ければ、商品を買ったお金で私が買い取ると言う形には出来ますが……あまり高くは買えないかと」

「それで構いません。あと金貨の方なんですが……」

両替を頼もうと懐に手を入れたとき、荷馬車の奥に商店の定まらない目で虚空を見つめる銀髪の少女の姿を見つけた。

10代後半だろうか、ボロ切れを纏い、しゃがみ込んで膝を抱えている。

奴隷商人が居たと言うことは、よく考えれば奴隷が居ると言う事だ。そんな事にも気付かなかつた自分の迂闊さが嫌になる。

「おい、あの娘は何だ」

不快感から無意識に攻めるような口調になつてしまい、アルザダを大いに慌てさせた。

「えつ……い、いえ、彼女は奴隷商人の商品でして、罪人の所有物は罰金が払えない場合国が没収する事に……」

という事は、彼女はこれから街で売られる事になるのだろう。
レオは舌打ちすると一枚だけ取り出す気だった金貨を全て取り出した。

「俺が買い取る。いくら出せばいい？」

「し、しかし奴隷の買取は基本的に貴族階級の方でない……」

「ここまでの護衛の報酬。アイツに他に払える物が無いから、特別に彼女を譲り受けるって事でどうだ？」

正直これで駄目なら諦めるしかないのだが、アルザダは、そうです
すね……と、呟くと何度か頷いた。

「私の方でも荷馬車1台分の損失を出しましたし、その補償として
その金貨を受け取った。と言う事にすれば、お役人は面倒で口を出
さないかもしれません」

「よかった、ならそれで頼みます。金額はどれ位でしょう」

「そうですねえ……奴隷の相場はよく知りませんが、少々少なめで
金貨6として置きましょう」

「有難うございます。他に問題になりそうなことはありませんか」

「ええ、一つだけ。と言うかこれが厄介な問題なのですが、奴隷に
ついて首輪は、専用のアンロックスタンプと呼ばれる物でしか
解除できません。無理に呪いを解こうとすると、首輪がはじけ飛ん
でとても危険です。これが貴族しか奴隷を買えない理由なのですが

……スタンプはとても高価で、基本的に貴族にしか売らないので、買うのはかなり大変です、貴族の知り合いが居れば貸してもらえ、るかもしれないが……」

アンロックスタンプの存在はレオに頭を抱えさせた。

なるべく目立つ事はしたくない以上、派手に金を稼ぐことは難しい、かといって貴族の知り合いなど居るはずも無い。

「金は……追々何とかします。というか、彼女を売りに掛けたら買った人が何するか考えれば、今は選択肢がないですしね……」

銀髪の少女はかなりの美人だ、彼女を大金を出して買った人間がどう扱うかなど目に見えている。

彼女を買ったからといって、如何するかなどレオとしては思いつきもしないが、今は頭の中が滅茶苦茶だ。厄介事を考えるのは後回しにしたい。

「すみません、私としてもこればかりは何とも……」

しんみりした空気を振り払うように、勤めて明るい声を出して言った。

「仕方ないですよ。それより、金貨って大きな硬貨ですよ、銀とか銅とかあったら両替して欲しいのですが」

金がそこそこ珍しいならば、金額の大きい通貨として扱われているだろう。

そう言って金貨を渡すと、ザルザダは7枚の大きな銀貨と28枚の小さな銀貨、それに20枚の銅貨を差し出した。

レオはそれを受け取って礼を述べると、奴隷商人とOHANAS

H Iして元の荷馬車に戻った。そしてギルに手綱を引かれた馬がゆつくりと動き出す。

そうして一行は最初の街、ダール興商自治区へ入っていったのだ。った。

一章 荷馬車と炎（後書き）

ども、作者です。

通貨についての補則です、質により多少の誤差はありますが

金貨10万円 大銀貨1万円 小銀貨1000円 銅貨100円
以下場所により鉄貨や粗悪な翡翠などの宝石というか色のついた
石を小銭代わりに使っている。

といった脳設定になっています。

それと、どうでも良いかもしれませんが、主人公の零夜の名前の由来は、キャラクターの体が自分の体になるってつまりレイヤー（コスプレイヤー）じゃね？という酷い由来です……。レオはレ繋がりで適当に決めました。

こんな酷い名前の主人公としようも無い作者ですが、続きも読んでくれると嬉しいです！

ps 次話から街での生活（少々ギャグ多め）になります。頑張るのでご期待ください。

投稿したばかりですが、読み返してみると句読点が多すぎてテンポが悪く感じたため多少改正しました。

ダール興商自治区

レオ達の担当だった門番10代前半のような、少年と言っている男だったのだが、事情を話すと慌てて引っこ込み、その後額に深い皺を刻んだ歴戦の勇士然とした老騎士が現れた。

部屋の真ん中に奴隷の少女、レオ、アルザド、奴隷商人の小男の順で並び、対面に老騎士が立っている。傭兵のギルが居ないのは、彼は冒険者ギルドに報告に行ったからだ。

「それで、レッドワイバーンに追われた馬車かが逃げて来たのを見て、目くらましを行って森に招き入れた。と言う訳か……」

マーウィルと名乗った老騎士は、そう言っただけで年季の入った鋭い眼光を向けてきた。

悪い事をした訳ではないのだが、嘘をついている為かその眼光がやたらと痛く感じられ、唾を飲み込みそうになるのを必死に堪える。忍び装束には口元を隠す伸縮性に富んだ布が付属されているのだが、流石に口元を黒い布で覆った状態で聴取には出れないため、今は鉄板入りの頭巾と共に収納袋に入れている。その為表情を誤魔化す事ができない。

「ええ、森に入って暫くしてから戻って見ましたが他の馬車は焼かれ、あるいは壊されていたので、仕方なく無事な荷馬車に乗って来た次第で」

答えに窮していたレオに助け舟を出すように、アルザダが口を挟む。

マーウィルも、レオの緊張でガチガチになった態度に矛を収め、

アルザダと話すように向き合った。

「しかし、嗅覚の鋭いレッドワイバーンがそう簡単に諦めるとは思えんが……」

「我々も数時間隠れましたから。それに卵を持ち帰った番いが心配になったのではないでしょうか。ともかくレッドワイバーンの再来に備えて、あの街道は暫く閉鎖すべきかと」

「いまだ納得しきれていないマーウィルだったが、問題を一つずつ片付けようと思いき直して奴隷商人を見下ろした。

「まあ、状況は解った。それで、その丸太になっている小男が今回の元凶か」

簀巻きもとい丸太の小男がビクンと跳ねるように震える。

アルザダも見抜けなかった負い目からか、肩を落として頷く。

「はい。卵は間違いなく、奴の荷馬車に積んでありました。今思えばこれ程強欲そうな男が、例えば奴隷商人だったと言えど初めから金貨7枚の参加費負担を言い出すなんておかしかった。自分の迂闊さが嫌になります」

頂垂れるアルザダの肩を軽く叩くと、マーウィルは小男を抱え上げて部下の衛兵二人に投げつけた。

衛兵は二人で何とかそれを受け止めると、「痛い、痛い」と泣き喚く小男を抱えて部屋を後にした。

「さて……そちらのお嬢さんは、奴の商品かな？」

レオはグツと齒噛みした。ここから先はさすがにアルザドに任せっぱなしとは行かない。

気負いして口を開きかけたレオを制すように、アルザドが一步前に出て話し始めた。

「実は、彼女はレオ様が報酬代わりに差し押さえたのです。さすがにそれだけでは不釣合いなので、金貨を払って。その金貨は私が潰れた馬車代として預かっています。必要とあらば国に返還いたします」

ですからどうかここは見逃してください。と、暗に訴えかけるアルザド。

それを見て何やら少し悩むような、値踏みするような視線をレオに向けるマーウィル。

「俺としては、折角助けたのに無報酬ではと思って差し押さえただけ。他意はありません」

何とかそれだけ目を見て言うと、マーウィルはレオの顔を見て何か感じ取ったのか、「ふむ……」と言って微かに頷いた。

それから振り返って机に向かい、何やら書くと、羊皮紙を3枚差し出す。

「奴隷一名、冒険者一名、商人一名、通行許可を出す。この紙を持って詰め所へ行け、身分証が貰える」

「有難うございます」

そう言って書類を受け取ると、彼らは安堵の溜息をついて部屋を出て行った。

マーウィルがそのまま門の脇の詰め所へ向かう彼らを眺めていると、ずっと黙っていた少年衛兵が後ろから声を掛けた。

「叔父上、宜しいのですか、あんなに簡単に奴隷の所有許可を与えて」

奴隷制度は、貴族の地位を守る重要な柱の一つだ。そう簡単に特例を出していいものではない。

だが、マーウィルは彼らを見たまま軽く微笑むと、何でもない事のように言った。

「一昨日、ウチの息子の嫁が、孫娘を産んだのは知っておるじゃろう？何やら運命のようなものを感じてな」

好々爺のような口調になった叔父に溜息をつきつつ、一応の反論を試みる。

「しかし、彼があの子に酷い扱いをする可能性が無い訳じゃないでしょう」

「なあに、あの男は腕は立つようじゃが、根っから気弱のようじゃ。押し倒す勇気なぞ無いわい」

「バレたら減俸では済まないかも知れませんよ」

中々に不味い問題なのだが、マーウィルはこれに対しても肩をすくめて答えた。

「だからこそ、報告書には可能な限り余計な事を書いて、その事を小さく書くのじゃよ。ワシの報告書偽装技術にかかれば、誰かが漏

らさん限り許可判を押されるまで誰も気付かんじやるうて」

悪戯をした子供のような老騎士の微笑み（ウィンクつき）に、若い衛兵は一際大きな溜息をついた。

街に入ったレオ達は一旦別れ、それぞれの目的地へ向かった。

ギルはまだ冒険者ギルドから帰ってきていない。アルザダは亡くなった商人仲間の家と、金塊や鉱石を売るための鍛冶ギルドへ向かった。

頭巾を被り布を口元に掛け直したレオは、アルザダに譲ってもらった簡素なマントを少女に着せ、自己紹介を始めた。

「俺の名前はレオ。まあその……冒険者を始めようと思ってる、暫くの間よろしくな」

と言つて右手を差し出したが、少女に変化は見られない。

そのまま10秒程待ってみたが、光の無い碧眼を向けてくるだけで何も言わないので、泣く泣く握手は諦めることにした。

「え、ええと……それじゃ、取り合えず服を買いに行こうか、君ちよつとその……寒そうだし！」

酷い格好だし。とは口が裂けても言えない。

その後見切り発車で歩き出したが、不安になって後ろを確認するとどつやら付いてきているようでホツとした。

多少強引にでも移動を始めたのは、彼女の格好が余りに酷かったからだ。なるべく早く服を用意するか、人目のつかない所へ行かせたい。

とは言え、女性経験が豊富とはいえないレオは、こんな状態の女性相手にどう接すればいいのかさっぱり解らないので、自然と会話は無くなってしまう。

20分程歩き回った頃だろうか、多少往復して時間が掛かったが、アルザドに教えてもらったの洋服の専門店に着いた。

重苦しい沈黙に耐え切れなくなっていたレオは、店を見つけた瞬間「あつたつ、いやあやつと見つかったね」と言ったのだが、少女の方は空ろな目で虚空を見つめるだけで何の変化もみえない。

それを見たレオは少女に背を向けて、遣る瀬無さに震えたのだが……周りにから変な目で見られたのでやめた。

その洋服店は出来合いの服は無く、寸法を測って注文した後ある程度決まった布を繋ぎ合わせて作るタイプだったので、自分と少女の分を頼んで置いた。少女の寸法を図る際、店員が少女の格好に顔をしかめたが、勤めて気付かない振りをする。

丁度職人が数人空いていて、急げば数時間で出来ると言われたので、通常の倍の大銀貨7枚を払って急ぐよう頼む。

ちなみにレオが自分の服を頼んだのは、着物風の忍び装束があまりに目立つ事を自覚したからだ。

他にも鎧やローブは収納袋に入っているが、基本的にアーティファクトや神話級の装備ばかりなので、何を着ても目立つ事請け合いだ。

服の予約が終わったので、宿を探す事にした。

大きくて、清潔そうで、割合安めの……と、条件をつけたので探すのに少し時間が掛かってしまう。

その間文句も言わず黙ってついて来る少女だったが、余りの気まぐさに精神が削られる思いだった。

ようやく見つけた宿のカウンターで、女将と思われる女性に2部

屋を2泊だと頼むと言つと、後ろに立つ少女を見た後ギリリと睨ま
れ。

「大銀貨1枚……いや、大銀貨1枚に小銀貨5枚だ。嫌なら出てい
きな」

この女の敵め。と小声で言われ、泣きそうになりながら小巾着を
見ると、洋服店で大銀貨を使って切らしていたので

「き、金貨で払ってもいいですか……」

と、とても弱々しい小さな声で返事をした。

自分の部屋に収納袋を投げ込んで鍵を掛けると、隣の部屋に少女
を招き入れた。

部屋には、いずれも簡素ながらテーブルと椅子のセットとベット
が置かれており、床もカーペット等は無いが綺麗な状態だった。

よろよろと頼りなく歩く彼女に座るように薦めると、ベッドから
可能な限り離れた床にしゃがみ込んだ。

どうしたものかと頭を抱えるが、打開策は見つからないのでその
まま話す。

「ええとそれじゃ改めて、俺はレオ。忍者をやってる……つもりだ。
君の名前は何て言うんだ？」

少女は暫く膝を抱えたまま動かなかったが、20秒程して囁くよ
うに答えた。

「リサ」

ようやく名無しの少女を脱した事に安堵するが、これまで露骨に警戒され続けたダメージはかなり大きい。

（つて言うか、今まで我慢してきたけど普通ワイバーンの襲撃から身を守ってやったんだから、もうちょっと心を開いてくれても良かったかね？）

別に其れだけで惚れられたり等と過剰な反応は求めていないが、もう少し友好的な態度でも罰は当たらないのではないか。

しかし心を開いてくれるまで待つていては埒が明かないので、取り合えず今後の方針を語って聞かせる。

「これからの事なんだけど、当面は俺は冒険者になって彼方此方に顔を売る。その過程で貴族に知り合いがきたら、お金を払ってアンロックスタンプを貸してもらったり代わりに買ってもらうりするから、それまでの間は一緒に居よう」

相手にとっては良い事尽くめの条件の筈だが、此方の話を聞いていないのか信じていないのか全く返答は無く、小刻みに震えるばかりだった。

その後レオは出身やこの街についての知識があるか等の話題を振ってみたのだが、どんどんリザの震えが増して行ったので、会話を切り上げて食事を取りに行く事にした。

ロビーの横の酒場件食堂で軽食を2皿頼むと、ドワーフのコックが無表情で皿を突き出す。

何で男にまで……。と思っていると、チエツクインの時から食堂に居た全員がレオを白い目で見ていた。

ここに至ってようやく、自分が平民全員に白い目で見られている事に気がついた。街中では貴族も居る手前スルーされていたのだから、宿の中ではそうは行かないのだ。良く考えれば、貴族は罪人や平民の奴隷を娼婦や耕作道具の様に使っているらしいのだから、同じような事をしているようにしか見えないレオに反感を抱くのは当然だろう。

しかし、だからと言ってリザに怯え切られている今、助けるために買ったと言っても誰も信じまい。

これからの態度で改善するしかないと考え、皿を持って黙って部屋に戻る。

部屋の隅に蹲っているリサに椅子に座るようを薦めると、多少訝しげにしながらも席についた。

料理をテーブルに置いて対面に座り、食べるように促す。

「どうぞ、何だかんだで暇が無かったし、お腹も空いたでしょ」

そう言って先に自分の分を食べて見せ、警戒心を解く。

街についてから歩き詰めだったので、リザもお腹が減って居たのだろう、黙って食べ始めた。

それを見て満足した様に頷くと、レオも自分の分を掻き込んだ。

食後、そろそろ服の出来を見に行こうかと思った所で、はたと気がついた。

リサの体はかなり汚れているのだ。臭いもレオは慣れ始めて気にならなかったが、このまま新しい服を着せたら汚れが移ってしまうだろう。

「あー、ちょっと待ってて」

そう言っつてロビーに行くと、女将に風呂が無いか聞いてみた。

「風呂なんてある訳ないだろ。そんなモンが御所望なら貴族向けの宿に移りな」

話に拠ると、魔法で温水を作る事は容易だが、下水処理が大変になるのと維持に手間や経費が嵩む為一般の宿は風呂が無いのが普通だそう。

公衆用の風呂もあるにはあるが、下水処理施設の近い町の反対側にしかない上に、その辺りは貴族の溜まり場なので平民は近づけないとの事。

仕方が無いので水桶と布を借り、それで拭かせる事にした。

水桶と布を持って部屋に入ると、それを見たりサが転がるように椅子から下りて床を後ずさる。

口を真一文字にきつく結んで睨みつける様子に、レオは今日何度目か解らない溜息をついた。

恐らく綺麗にして襲うと思われているのだろう。

「あの、これから服を取ってくるから、体を拭いて……」

言い終わる前に首を横に振られた。

どうした物かと思ったが、こうなってしまうてはどうしようも無い。仕方なく水桶を持ってロビーに戻る事にした。

これ以上ないほど肩を落として猫背になった状態で、呆れ顔の女将に頼み込む。

「ええと、これから頼んで置いたりサの服を取ってくるので、彼女

の体を拭くのを手伝ってあげてくれませんか」

「まったく……何でアタシがそんな事しなきゃならないんだい」

「ほら、あのままで寝たらベツトも汚れますし……いえ、服を汚したくないだけです。神に誓って本当に他意はありません」

ベツトという単語が出た所で女将の雰囲気が悪くなったので、慌てて言葉を変えた。

「その、お金が必要と言うなら払いますので、何とかお願いします……」

「別に金なんか要らないよ。あのままじゃ困るのは確かだし、ただ一つ条件がある」

睨みながら言う女将に、「な、何でしょう……」と若干ビビりながら聞くと、女将は低い声で続ける。

「アタシの宿であの子を襲わないと約束する事。それが嫌なら今すぐここから出て行きな、勿論あの娘は置いてね」

「そんな事当たり前じゃないですか………というか、本当にそんなつもりは全く有りませんよ」

脱力しながら言うと、女将はまだ信用はして居なそうだが一応の納得はした様子で頷いた。

水桶と布を渡して自室に戻る。収納袋はベッドの下の金庫に隠し、サイフ代わりの子巾着を持って街に出た。

洋服店に行ってみたが、完成までは後少し掛かると言われて街を散策する事にする。

宿に戻らないのは勿論、手ぶらで部屋へ戻ったら女将に出入り禁止にされそうだと思ったからだ。

っていうか、命がけでレッドワイバーンを倒して人助けしたのに、こんな仕打ちはあんまりだ……。

現状を省みると目頭が熱くなってくる。

瞳に貯まるのはただの汗だと言い聞かせ周りを見てみると、鎧を来た男達が多く出入りする建物を見つけた。

奥にはカウンターがあり、その横の掲示板に張られた紙を男達が熱心に見ているのを見て、ここが冒険者ギルドではないかとあたりをつける。

周りを見回しながら中に入ると、受付の女性が声を掛けてきた。

「貴方、初心者ですよね？登録ならこちらで受け付けてますよ」

「あ、はい、そうです。いやーよく解りましたね」

レオが感心したように呟くと、受付の女性は微笑む。

「初心者に声を掛けるのも受付の仕事ですから。それに、貴方はとても興味深そうにキョロキョロしていたので誰でも気付くと思いますよ」

そう言って微笑まれたが、言われた通りなのでレオも苦笑してしまふ。

彼の好きなゲームのジャンルはファンタジーだ。冒険者ギルドなど、最も憧れる要素の一つである。

その冒険者ギルドの実物の中に今まさに入っているのだ、興奮するなと言う方が無理な話だ。

「取り合えず、名前と種族を聞かせて貰えますか」

「レオです。エルフで忍……アサシンのような軽装備での強襲が得意です」

こちらに来てから刀や和服を見たことはない。忍者と言うよりアサシンと言った方が解りやすいだろう。

受付嬢は、ふむふむと言いながら羊皮紙に何やらメモを取っていた。

「取り合えず自己紹介から、私はフィルと言います。説明を始めるので、良く聞いてくださいね」

レオが頷くとでは、と姿勢を正したフィルが、ギルドに関する説明を始める。

「まず、ギルドにはS・A・B・C・D・E・F・G・Hというランクがあります。これはパーティを組んだ時の上下関係を決める意味と、困難な依頼を受けようとする無謀な方を止める意味があります」

「ここまでは良いですか。と確認されたレオは軽く頷く。

「Sが一番上で、Hが一番下……なのですが、Hは基本的に孤児や依頼で体に欠損を負った元低ランク冒険者に、簡単な依頼を優先す

る為のランクなので貴方のように問題の無い方はGランクからになります。

ちなみにGランクとFランクはそれほど大変な依頼は無いので、貴方のように体付きの良い方ならずぐ越えられると思いますよ。一応試験とありますが、E以下は戦闘訓練みたいなものですしね」

「なるほど、試験を受けてランクを上げて、最終的にはSを目指すって事ですね？」

ある程度理解したつもりになって返事をしたが、それを聞いたフィルは顔を顰めて否定した。

「あー、Sを目指すのは止めた方がいいです。よくSランクを目指すって言うって無茶する方が居るんですが、大抵はCかB辺りで無理をして死んでしまいます。」

Sランクなんて実際は5人しかいなくて、その5人も転移魔術の権威と言われるホワイトパール様や、剣聖と謳われるブルーローズ様、数種類の翼竜を騎乗用として保有する獣王様など、若くして偉才を放った方々が最後に到達する地点ですから」

「なるほど……」

納得したように頷くレオだったが、ワイバーンを何匹か持つてるだけでそんなに偉いのかなと不思議に思う。

脱線した話題を区切り、フィルは書類を見ながら説明を再開した。

「そうそう、それと受けた依頼をキャンセルする場合報酬の1割を違約金として払ってもらいます。違約金はそのまま報酬に追加されるので払い戻しはされませんのでご注意ください」

な魔石に貴方の魔力を認識させて終了です。ちなみに初回はタダですが、無くすと再発行に結構お金が掛かるので注意してください」

銅製のロケットを受け取り、握り締めると中心に着いた小さな石が淡く光った。付属品として簡易なネックレスやブレスレット等数種類あつたが、ベルトに着ける金具を選んで固定した。

それを受け取って今度こそ掲示板を見に行く。

討伐依頼の枠を見ると、ウルフ3・ウルフ5・ウルフ10と書かれた紙が複数あつた。10はランクFなので、ウルフ5と書かれた紙を引き千切って受付へ持っていく。

「はい、ウルフ5匹ですね。二週間後までに持ってきてください」

「これって今日中に終わらせて、次を受けても良いんですか？」

「かまいません……というより、複数受けてもいいんですが、夜の森は危険なので止めた方がいいですよ」

「それもそうか、明日にします。有難うございます、フィルさん」

「いえいえ、命は一つですから、無理はしないで下さいね」

フィルに軽くお辞儀をしてギルドを出て、洋服店へ戻ると服はすでに仕上がっていた。

さすがは商人紹介の店と言うべきか、仕上がりは中々よかった。

旅人用の、と前置きを言っていたので、前と後ろに分厚い布をあて、脇はチェック柄である。尻の部分には馬車に乗った時の為に、厚い布が2重に掛かるようになっていた。

色はレオの分が黒と赤、リサの分が青と白を基調にしてある。デザインも悪くないものだった。

レオの服に関しては 天羽々斬り の刀身が黒地に赤い血管のような線が3本入ったものなので、それを見せて合わせて貰ったのだが、リサの方は何故青と白なのか解らなかった。

他にも下着を数着買って、袋に入れてもらった。

それを持って店を出る頃には、辺りは暗くなり始めていた。

宿に入った所で女将にチェックするかなのような視線を向けられる。どれだけ信用無いんだろつとへこんでいると、女将に声を掛けられた。

「体は拭いてあげたよ。しかし、アンタも大概変ってるねえ……魔法が使える奴隷をかうなんてさ」

「えっ、あの娘魔法が使えるんですか？」

レオが驚きの声を上げると、女将はしまった。という顔をした。

「あー、今の話は忘れな。もしくはあの娘が魔法を使って抵抗したら、逆らわずに死ね」

「いや、死ねってそんな……」

自分の失言にイラついたのか、女将はレオの反論を無視して帳簿に向き直った。

いい加減不遇に慣れ始めたレオは、頭を切り替えて部屋へ向かう事にする

自室に戻り、自分の分を置いてリサの部屋に向かう。

扉を開けたレオは一瞬固まって一度部屋の外へ出た。

(えーっと、リサの部屋は俺の部屋の向かいで、1回の突き当たりから2番目……で、いいんだよね?)

うんうんと一人頷いてもう一度部屋に入る。

部屋の隅で不思議そうにレオを見ているリサは汚れていた時とは別人のように変わっていた。

肌は驚くほど白く、アルビノを思わせ、透き通る青い目をレオに向けている。汚れていても解る程の整った顔立ちは、汚れを落とす事で更に際立っていた。

だがその美しい顔立ちすら霞む程の驚きが、彼女の髪だ。

銀色の美しい髪は、毛先が淡いスカイブルーに染まり、宝石のような輝きを放っていた。

しかし、リサが着ているボロは魔法で洗濯したようで多少綺麗になっただけ、ボロな事には変わりがない。

汚れを落とすだけで別人のように変わってしまったリサに、若干緊張しつつ持ってきた衣類を渡す。

「これ、夕方に仕立てさせた服なんだけど……」

リサは無言でそれを受け取ると、警戒しながらもぎこちなく微妙に頭を下げた。

その仕草に胸を貫かれた中身28歳独身男のエルフは、若干上ずった声で続ける。

「そ、それじゃあ廊下で待ってるから着替えたら出てきてくれ。遅くなったが夕食にしよう」

そう言つと逃げるように部屋を出た。

おっさんと呼ばれ始めるような歳になって、10代中盤くらいの少女に見とれるなんて……。と、多少自分自身に呆れつつ部屋に戻つて着替えをした。

因みに、忍び装束を脱ぐと下がふんどしだったのに愕然とし、急いで買ってきた下着に着替えたのはレオが墓まで持っていく秘密になった。

宵の始めの食堂兼酒場は、冒険から帰ってきた冒険者で溢れ返っていた。

カウンターに行つてオススメは有るかと配膳係に聞くと、メインが2種類から選べると言うので両方頼むと言って人気の無い食堂の隅へ座つた。

特に話す事も無く　　というか緊張で何も話せず　　待っていると、15分程で料理が来た。

それを適当に受け取り、銀貨を払う。

一口食べてから、リサの何かを待っているような視線に気付いて食べるように促す。

「どうぞ、何でも食べていいよ」

そう言つとりサはこちらを気にしながら食べた。その様子に安堵しながらも、改めて自分の前に置かれた料理を眺める。

夕方に軽食を食べたときは、リサの事で頭が一杯でろくに考えな

かったが、湯気を上げる鶏肉の炒め物のようなものを見て急に不安にかられた。

今までの所、彼はこの世界が グラビティワールド でないことは解っている。ただ、もしかしたら他のゲームではないかという思いを捨て切れていないのだ。

VRシステムには多少の味覚を偽装する機能もついている。ただそれは、何となく甘いような気がするとか、何となく辛いような気がする。くらいのもので、先ほど一口食べたこの鶏肉の炒め物は、塩気が少々薄い以外はハーブの味などの繊細な味付けがしてあって美味しいし、何より肉としか思えない食感とハーブの強い香りがあった。

将来的に実現可能かどうかはともかく、『零夜』が持っていた一昔前の<スフィア>では再現不可能なのは確実だ。

現時点でレオは、もしこれが異世界でもゲームでもなるべく問題が起きないように行動している。しかし、どちらか選べるならば、出来ればゲームでしたというオチの方が好ましい。

自分は帰れるのだろうか。そんな言葉が、ふと頭を過ぎる。すると、今まで必死に目を背けてきた不安や絶望が、堰を切ったように溢れてくるのを感じた。

目の前が真っ暗になるような錯覚に囚われ、更にそれが引き金となり、門に入った後の薄暗い紫の泥の中に浸かった時の不快感が身体を襲い、背中に冷や汗が伝う。

カチャカチャと鳴る耳障りな音にハッと気付くと、自分の持っているフォークとナイフが皿に当たって音を立てていた。

リサに訝し気な目で見られているのに気がついて、慌てて体裁を整える。

「な、何でも無いんだ。今日は色々あったし、さっさと食べて眠ろう」

誤魔化すために勢い良く鶏肉を掻き込み、なるべく味を感じないようにして飲み込んだ。

現実の料理に比べれば薄い味付けの料理も、今のレオにはしつこい位に感じられた。

部屋の廊下でまた明日と言って別れようとした時、便利な物が有る事を思い出した。

リサを待たせて自室に入り、収納袋から指輪を1つ取り出す。かつて グラビティワールド が人気だった頃、天羽々斬りの材料を2つも持っている事で様々なプレイヤーキラーに狙われた。その時活躍したのがこの指輪で、近くに害意を持ったモンスターやプレイヤー（武器を抜いたり詠唱を始めたりする者）を感知すると、アラームが鳴る仕組みになっている。刀が完成してからは、意思を持つ武器として正式な所有者のレオにしか扱えなくなったので長らく使っていなかったが、リサの防衛には役立つってくれるだろう。レオ自身は泥棒程度なら襲われても返り討ちに出来るだろうと言う自負もあるし、簡単に効果を説明して指輪をリサに渡した。

「かなり大きな音だから、何かあったら俺も起きる。だから安心して眠ってくれ」

リサは言われるがままと言った風体で指輪をはめ、そのまま頼りない足取りで自分の部屋に入っていた。

彼女を見送ったレオは、鍵をかけてベッドに横たわる。

緊張の糸が切れ、静かな部屋で一人ぼっちになると、どうしても

この世界の事を考えてしまっ。

不安。

この先どうなるのか、そもそもこの現象は一体何なのか。何時になつたら戻れるのか、それとももう戻れないのか。

絶望。

現実での身体はどうなっているのか、ひょっとしてもう死んでいいのか。この世界で死んだらどうなるのか、怪我をしながら戦う事になつたら、それは痛いのか。

怒り。

あの白いローブの男は俺に何かしたのだろうか、だとしたら何をしたのか。

レオの中で黒い靄のような感情が渦巻く。

それを必死で堪える為に、ベッドの中で肩を抱いて震えた。

そして自分に言い聞かせるように言う。

「大丈夫、ログインしたまま12時間経ったら、強制終了が掛かるはず……きっとこのまま眠れば、〈スフィア〉で目覚める事が出来る」

精神的な疲れの為睡魔が襲ってくる中、縋るように同じ言葉を繰り返す。

どんなに毛布を着込んでも身体を丸めても、一向に暖かくならない寝床の中で、レオはゆっくりと眠りに落ちていく。

言い訳ばかりの無様な自分を、どこか冷めたもう一人の自分が、

「本当はとっくに解ってるくせに」「とあざ笑うのを感じながら……」

ダール興商自治区（後書き）

色々頑張った結果、何とも微妙な雰囲気……。

ちなみにレオがここまで露骨に怪しまれた理由は、純粹に格好が怪しいからです。門を抜けて街に入ってから口元を隠し直したレオは、装備重視のゲーマーとしては優秀ですが人としては残念な感じですね。

それはさておき、そろそろ感想……期待してます！

誤字脱字矛盾の指摘から、ウケ狙ってるんだろうけど、あれは無いわ〜とか、戦闘の描写をもうちよい（細かくor大雑把に）してとか、要望みたいな物でもいいので是非欲しいです。

次は少々シリアス多め予定ですが、何とか読みやすくなるよう頑張ります！

あれ、悪乗りだけで書くはずが……

青銀の少女

寝覚めは最悪だった。

今後も良くなる要素が無いので、明日もこんな絶望的な気分で起きるのかと思うと憂鬱になる。

時計が無くて時間は解らなかったが、太陽の位置から何となく7時か8時くらいだろう。

ロビーで桶と布を借りて井戸の場所を教えてもらい、冷たい水で顔を洗って部屋へ戻った。

リサの部屋を小さくノックするが、反応は無い。あれだけ色々な事があったのだ、昼過ぎまで眠っても当然だろう。

自室に戻って1時間程何も考えずに過ごしたが、黙っていると余計に暗い気持ちになるので、朝食を取って昨日のウルフ討伐依頼に向かう事にした。

リサの部屋には鍵が掛かっているため、ロビーで女将に小銀貨を数枚渡す。

「昼頃になったら、連れを起こしてこれで何か食べさせてやってください」

食事の費用ならば小銀貨1〜2枚で十分なのだが、多めに出したのはチップと手間賃だ。

「言われなくともそのつもりさ」

そう言うと小銀貨1枚だけ取って残りをレオに返してきた。
お人好しな女将に苦笑しつつ、返されたお金を再度差し出す。

「それなら残りは彼女に渡してください。無一文じゃ不便だろうし」
女将はそれを眉を顰めて暫く見つめると、唸るように言った。

「それは良いけど……………ひょっとしてアンタ、良い奴なのか
い……………」

そのあんまりな言い様に、脱力しながらレオも答える。

「俺そんなに悪そうに見えますかね……………」

「そりゃ、古今東西どんな逸話だって真っ黒な服を着てナイフ持つ
てる奴は怪しいと相場が決まってるからね。今日はまだしてないみ
たいけど、昨日は顔を半分隠してたしあれで堅気かとも思う奴は、
馬鹿かお役人くらいのもんさ」

言われてみればこの世界の文化レベルはそう高くない。貴族や騎
士は別として民衆の学歴など無いような物だろうし、物語や逸話に
出てくる悪役は大抵黒と相場が決まってもおかしくは無かった。
かといって、鉄よりもミスリルよりも硬く服のように軽く、さら
には身体能力強化の効果まであるこの忍び装束に代わる防具など、
この世界にはあるとは思えない。

それに収納袋に入れて出かけている間に盗まれたり、弱い防具を
来ていたせいで負けたりしたら悔やんでも悔やみきれないので、諦
めるしかない。

「これは俺の持つてる最高の防具なので……………怪しくてもこれを着る

「しかないんですよ」

「ま、好きで着てるんじゃないなら良いや。疑って悪かったね、今度それとなく客にも言っというてやるよ」

「是非お願いします」

そう言っただけで宿を出て、門へと向かう。

衛兵にギルドの依頼の紙とロケットを見せ、門をくぐると歩いて1時間程の森へと向かった。

森に入って20分程歩いたところでウルフの群れに出会った。

舞うようなステップで刀を滑らせ、3匹程切り刻んだ所でふと気になり、力試しに4匹目のウルフに全力の蹴りを叩き込む。

するとウルフは凄まじい速度で吹っ飛び、木に当たってグチャグチャに潰れた。

「うっわぁ……」

自分でやったのは解っているのだが、余りの凄惨な光景を前に少し引いてしまう。

スプラッタを回避するため打撃を封印し、刀に依る殲滅に切り替えたのだが、さっきの光景が敵を萎縮させたのか2匹程斬った所で散り散りに逃げてしまった。

仕方なく耳を切り取るうとしたが、潰れた1匹には触りたくないし、天羽々斬りで誤って耳を切ったのが1匹居て、更に死体の1つをウルフが引き摺って行ってしまった為、3つしか取る事が出来なかった。

「これは効率悪いなあ……」

かといって無理に追いかけても、置いていった死体を他の動物に取られたら元も子もない。

誰かに頼めれば良いのだが、どう考えてもレオよりランクの高いギルに小間使いを頼むのは不味いし、強さを余り知られたくない現状では、他の冒険者を雇うのも避けたい。

「と、なるとりさくらいしか居ないんだけど……まあ、駄目元で聞いてみるか」

そうして切った耳をどうしようかと考え、皮袋か何か買ってくれば良かったと後悔した。

2度目の群れで何とか予定の耳を揃え、門の前まで戻った頃には正午になるうとしていた。

戦闘で幾分か気を逸らす事に成功したレオは、調子を取り戻して街へ入っていく。

耳を手を持ったままギルドに入ると、受付のフィルに呆れられた。

「初心者だとは思ってたけど、まさか皮袋も持たずに狩りに行くなんて……。左向かいの店に、血が滲みにくい3層の皮袋が売ってるから、次までに買うと良いですよ」

「ありがとうございます」

「いいですよ、助言は大事な仕事ですから。けど、貴方は全体的にもう少し考えて行動した方が良いでしょう」

「うっ……す、すいません」

後頭部をガリガリ掻きながら反省していると、フィルがそれを見て楽しげに微笑んだ。

「それと毛皮なんかもちちらで買い取るので、取れたらまとめて袋に入れて持ってきてください。あっ、でも毛皮は強制じゃないので商人の伝があればそっちに卸して構いません」

昨日言い忘れましたと言って頭を下げるフィルに、手を振って答える。

「いや、気にしないで、今日の分に関しては初めてだったし、全力で攻撃したから……毛皮が取れそうなのは無かったんですよ」

依頼の紙と認識証、そしてウルフの耳を受付の上に置く。

フィルはそれを確認すると、報酬として小銀貨4枚を渡した。

「有難うございます。ウルフは群れの数に依っては難易度が上がる場合があるので、群れが合さって大きくなりすぎると受ける人が居なくなつてノルマが越えられない時もあるんですよ」

「ノルマなんて有るんですか」

「ええ、弱い魔物も大群だと討伐が大変ですからね。都市毎に国からのノルマが定められているんです、これに届かないと強制召集をかける事もあります。と言つても、滅多に越えられない事は無いですけど」

冒険者と言えば気楽な旅人というイメージしかなかったが、面倒な事も多少はあるようだ。

強制召集の頻度を聞くと、大体5〜6年に1度位のようなのだ。この街にはそれ程長く滞在する予定もないし、恐らくここでそれに出くわす事は無いだろう。

同じウルフ5枚の紙を掲示板から引き千切り、登録を済ませた。

「さて、袋を買って戻ります。色々教えてくれて有難う」

「いえいえ、気をつけて行って来て下さいね」

用を終えたレオの後ろで、フィルが次の冒険者の対応をしていた。入り口を見ると、更に皮袋を持った男がギルドに入ってくる。受付の仕事も楽ではなさそうだ。

10代後半位に見えるフィルの働きぶりに関心しつつ、冒険者ギルドを後にした。

宿に戻ってリサの部屋をノックすると、丁度食事を食べ終わった所だった。

食べ終わった食器を廊下の返却棚に戻し、部屋に戻って皮袋と鞆に入ったままのナイフを取り出した。

「ええと、実は頼みがあるんだ。今日実際にウルフ討伐を試みたんだけど、耳を切る作業が意外と手間で、よかつたら一緒に来てそれだけでも手伝って欲しいんだけど……」

正直死体の処理などあまり頼みたくは無かったが、背に腹は変えられない。

リサは暫くの間じつとレオの顔を見て迷っているようだったが、駄目かなと思いついた頃に頷いた。

それに気を良くしたレオは、おおっと声を上げて喜び、袋とナイフを手渡した。

「これで左耳を切ってくれるだけでいいから。あ、でもその格好で森に入るのは危険か……ちよつとまって」

そう言つてレオは自室から収納袋を持つてきて、中身を探り出した。

レオが取り出したのは、グラビティワールド がまだ栄えていたとき、パーティで盾役をしていた頃のナイトの鎧だった。

オリハルコンとアダマンチウムで作られた全身鎧は少々古い型だが、とても高度な防御力と魔法耐性を有している。

グラビティワールド ならレベル制限があつて着れない筈だが、それについてはステータス画面から選択する訳じゃないし着る事は出来るだろうと思つた。

見る者が見れば愕然とするような伝説級の鎧を、「身長差があるからちよつと大きいけど、何とか着れるかなあ」等と軽い調子でリサに着せていく。

その途中で何となく、この状況を見たら、あのノリの良い職場の友人なら「ちよつ、初心者にカスタムレベル装備とかレオさん自重ww」等と言いつつだなあと思つてしまった。

手が止まつたレオに、リサが訝し気な視線を向けてきたので、頭を振つて作業を再開する。

リサに鎧を着せた後、今度は収納袋の中からメートル程の盾を

取り出した。

こちらは実は 天羽々切り と同じ神器クラスの盾の一種なのが、誰でもクエストで作れる代わりにとても時間の掛かる物だったので、本職ではないと言う事もあって途中でやめてしまったのだ。

それでもこの盾 イージス は、周囲に攻撃を緩和させる障壁を展開すると言う便利な能力を持っているので、それが此方でも発動されるならリサは怪我など負わないだろう。

しかし、盾をリサに持たせようとしたとき問題が起きた。

「痛っ」

今まさに腕に着けようとした時、盾から電撃が発せられたのだ。

慌ててレオが魔法で治療するが、リサは イージス を持ったレオを見ながら驚きと恐怖を顔に浮かべている。

レオは混乱しつつも反射的に謝る。

「ごめんわざとじゃ」

そこまで言ってハタと気がついた。そう言えば神器クラスの武具には人格が宿っていると言う設定があった筈だ。

ちよっと待ってね。と言うと、部屋の片隅に行き、しゃがみ込んで イージス を睨みながら

「お前のこれからの使命はリサを護る事だ。今度彼女に怪我をさせたら 天羽々斬り で真つ二つにしてやるぞ」

と、極小さな声で脅しつけた。

振り返って此方を睨んでいるリサに笑顔を向け、低姿勢で頼み込む。

「今度は絶対大丈夫だから、もう一回だけ着けてみて」

「恐る恐ると言った様子でもう一度手を出したりサだったが、今度は何事も無く掴む事が出来た。」

こうして考え得る最強の守りを与えられたリサは、ぶかぶかの鎧でガチャガチャと音を立てつつ、レオに向き直る。

仕上げに頭全体が入る兜を被せて、鎧の方は着終わった。

最後にそこそこ強い剣を渡そうとして、ふと思いつまなかった。

動物如きではあの鎧は貫けないが、この剣は別だ。転んだ拍子に刺さったりしたら大惨事になりかねない。

ナイフは持たせだし、魔法も使えるらしいから大丈夫だろうと思いき直して収納袋を閉じた。

「それじゃ、そろそろ行くか。明るいうちに帰りたいたい」

黙々とついて来るリサを背に、収納袋を自室の金庫に戻して宿を出た。

門で午前についた衛兵に呼び止められ、依頼の紙をしたまでは良かったのだが、彼はリサの方を見て驚いた。

「そいつは誰だ」

慎重に不釣り合いな鎧を着て黙ってついて来るリサを、不審に思ったのだろう。

どう答えたものかと焦ったが、衛兵が「凄い鎧だな……貴族の息子か？」と呟いたのを利用する事にした。

「え、ええ。実はお忍びで実践を経験したいとの事で、親の鎧を借りたらしいのですが……ウルフを少し狩るだけですし、見逃してもらえませんか」

衛兵は少し考えるように顎に手を当てて首を傾げたが、暫くして溜息交じりに頷いた。

「貴族に目をつけられると面倒だしな、その代わり帰りもこの門を使えよ」

そう言っただけで別れ際に「あんたも大変だな」と、小声で囁いてきた。それに曖昧な笑顔を返し、森へ向かう。

鎧を着たりサが少々息を荒げているが、狩りは概ね良好だった。朝に暴れた場所とは違う方向へ向かっていたのだが、中々ウルフに出会えなかった。少々街から離れた所まで来てしまった。

2度の襲撃を乗り越え、10個の耳を取る事が出来た。現在は3度目の襲撃で5匹のウルフが現れ、その内の2匹を屠った所だ。

残りも片付けようと刀を握りなおした時、天羽々斬りが淡く光っているのに気がついた。

グラビティワールドには、ゲームに良くある『必殺技』が無かった。

理由は、体を使ったアクションが苦手なプレイヤーが、一定レベル毎に覚えなければならぬ必殺技の動きを、全部覚えるのは無理だろうと判断した為だ。

メニュー画面から選べば可能だろうが、ナイト等盾を持つジョブは両手が塞がっている。

それでも暫くは1撃が3回攻撃になるスキル等でお茶を濁したのだが、魔法に比べてエフエクトが地味だ。という意見が多く寄せられ、仕方なく最上位の武器にのみ『固有技』と言う形で必殺技を着けた。

使うには何度も刀を振って血を喰わせなければならぬのだが、武器が淡く光っているのは、それが仕様可能になった合図だった。これまでは直ぐに戦闘が終ってしまった為、使えなかったのだ。

別に使うまでもないのだが、試してみたいと言う気持ちもある。後ろのリサを確認すると、何処と無く疲れも見え始めているようだ。

早く終らせる為だ。と、自分に言い訳しつつ、刀を握る手に力を込める。

天羽々斬りの固有技は『断裂』で発動条件は、刀を強く握り締めて回転し、正面に向けて斬撃を放つ、だ。成功すれば狙った敵の体が微妙にずれて真っ二つになる筈だ。

愛刀の晴れ舞台に興奮しつつ、慣れた調子で回転しながら先頭のウルフが分断される光景を幻視する。

そうして力を込めて刀を振った、瞬間

目の前の森が、刀の軌道をなぞる様に扇状になぎ払われ

た。

二人はあんぐりと口を開けてその光景を眺めていた。斬った本人のレオですら驚いているのだから、リサなど完全に硬直してしまっている。

何度か瞬きをするが、目の前の光景は嘘でも幻でもない……と、理解した時、もし人が居たら大変だと思いつた。

レオは意味も無く木の影に隠れ、某家政婦よろしく顔だけ出して広場になった森の様子を見る。

前方100メートル近くまで見渡せる広場だが、ウルフの物の他は血の跡などは無いようだ。

安堵の溜息をついて振り返ったレオは、自分を呆然と眺めるリサの視線に気がついた。

酷い痴態を見られてしまったレオは、咳払いをして体裁を取り繕う。

「ふ、ふふふ。ウルフ共め、思い知ったか！」

何の意味も無い言葉である。

だが、レオが何か口にした事に驚いたのか、リサは体を震わせた。1歩どころか3、4歩も後ずさり、震えて鎧が金属音を立てていた。

心中で「やっちまった……」と呟き、取り合えず武器を仕舞う。

「ええと、それじゃそろそろ帰ろうか……」

一緒に冒険して多少は心を開いてくれたら……と、思っていたのに余計に距離を置かれてしまった現状に落胆しつつ、街へ向かう事にした。

しかし、ウルフに出会わなかった事でかなり遠くまで来てしまっていたので戻るにも時間がかかる。

行きはウルフを探しながらだったので、会話が無くても何とも思わなかったが、帰りはある程度警戒するだけで良いので、静寂が痛い。

必死に話題を探していると、1つ気になっている事が有るの思いついた。

彼女の魔法の事だ。この世界の魔法は グラビティワールド とは別物のようなので、前々から興味はあったのだ。

「そういえば、女将さんから聞いたんだけど魔法が使えるんだって？」

何の気無しに聞いたつもりだったが、リサは大仰に体を強張らせた。

ウルフでも居たのかと思い、辺りを見回すが、特に敵の影は無い。自分の言葉のせいかもしれないが、ギルの話では魔法はそれ程珍しい物でも無いようなニュアンスだったので、何が不味かったのか解らなかった。

「ちなみにどんな魔法が使えるの？」

不味いかなとも思ったが、気になったので駄目元で聞いてみた。

「下位と中位魔法を、少し……」

初めてのまともな返事に、レオは少し面食らって足を止める。

そのまま顎に手を当てて、少し考え込む。

レオのダブルジョブの片割れである『学徒』は、回復とサポートに特化したジョブだ。攻撃魔法も使える事は使えるが、本職の半分以下くらいまでのレベルの魔法しか使えない。

回復とサポートに関して本職の僧侶ほど万能ではなく、個人に対する魔法が主流だ。

有体に言えば、魔法の、特に攻撃面に不安を持っていたのだ。彼女が攻撃魔法を使えるなら、大幅な戦力増加に繋がるかもしれない。

「っていつか下位とか上位とかどんなもんなんだ……」。

こちらの世界はそもそもレベルと言う概念が無さそうなので、漠然としたランクが有るのだろうか。

気になったので、自分にレジストシエルレベル7をかけて、彼女に向き直る。

ワイバーンに苦戦する世界なのだ、多少の攻撃魔法を受けても問題ないだろう。

「ちょっと魔法の威力を確認したいから、俺に向けて雷の魔法を撃つてみてくれないか」

グラビティワールドでの雷の魔法は、出は早いけど威力が小さいと言う特性があった。

それを聞いたリサは、驚いたように固まったが、次第に鎧の隙間から見える眼光が鋭くなっていくのを感じた。

「手加減しなくてもいいよ、全力でどうぞ」

レオが微笑んで手を広げると、リサはレオに手を向けて呪文のよ
うな言葉を呟いた。

「雷神雷公・我が手に怒りの矛を」

呪文を唱えるという行為に驚いたレオに向けて、腕程の太さの雷
撃が飛来した。

しかし、レオが展開したレジストシエルに阻まれ、レオの体に到
達する前に消えてしまう。

呆然とレオを見つめるリサに気付かず、レオは首をかしげる。

レジストシエルは本来魔法を軽減する効果しかなかったはずだ。
どんなに弱い魔法でも消えると言うのはおかしい。

ひょっとしたら手加減してくれたのだろうかと勝手に納得して、
リサに声を掛ける。

「あー、手加減とかしなくて良いよ。俺はこのくらいの魔法なら受
けても大丈夫だから」

そう言つて右手を木に向けて振る。

学徒が扱える最強の雷魔法<ライトニングボルト>は、手が水平
になった瞬間発動された。

右腕全体から無数の雷光が走り、指の先30センチ程のところ
で収束し、直径50センチ程の一本の稲妻となって木を黒こげにした。

轟音を上げて着弾した稲妻をみて、リサはペタンとその場に膝を
突いた。

そして、レオがリサに向き直ったのに合わせるように

「ううううあああああああ」

と、叫びながら泣き出した。

あまりにも予想外なその攻撃にレオは慌てふためくが、リサはそのまま力の限り泣き続けた。

彼女　　リサ・グラント　　の不幸は、10年前に始まった。

彼女達一家が住んでいたのはとある貴族領で、そこに彼女達の部族、ディアマンデイ人と呼ばれる銀髪の一族が暮らしていた。

魔術帝国の端にひっそりと暮らしていた部族には、1つの特徴があった。

優秀な魔術師が生まれる確率が高い。　　と言う物だ。

ただでさえ姿美しい銀髪の部族に、優秀な遺伝子という要素が加わり、彼らの価値は必要以上に高くなっていった。

しかし、彼らは基本的に同属同士で結婚するため、滅多にその血が外に出ることは無かった。

それでも問題が起きなかったのは、領主の一家が1代に1人娘を

王家に妾として嫁がせていたからだ。

だが近年王家の発言力が低下し、2000年ほど前にあった戦争から発言力を増していた奴隷商人と貴族が結託してその貴族領を瓦解させようとした。

リサの父親は行商をしていた為、いち早くその事態を察知し、近所に触れ回って街を出た。

その後その貴族領は崩壊し、領主一家は捕らえられ、多くの民も奴隷として売られたが、リサの一家は逃げ延びていた。

ところが安心したのも束の間、数年後にリサの姉が逃亡先の街の貴族に見初められてしまう。

折角逃げてきたのに、またも狙われてしまった娘を護ろうと、父親は必死の抵抗をした。

彼は行商と言う仕事柄売られていった同族の奴隷の末路を知っていたのだ。

商人仲間と協力して、のらりくらりと要望をかわす父親に業を煮やした貴族は、盗賊を雇って彼らを襲わせた。

リサの父親は冒険者を傭兵として娘と妻につけ、自分は別れて反撃の為に知り合いの商人達と出て行くが、そのとき私財の殆どを失ってしまった。

だがそれが仇となって、彼は騎士団にマークされてしまう。

命からがら逃げ出していたリサ達一家は、それを知って安堵するが、追い詰められた貴族は最後の手としてリサ達にあらぬ罪を着せてその首に懸賞金を掛けた。

こうなってしまうえば形の上では罪人である。

そしてその話は、リサ達を護衛していた冒険者達にも聞こえて来た。

「聞いたか、あの母娘今は罪人扱いらしいぜ」

「マジかよ……って事は、それ護ってる俺らも罪人じゃねえか」

「見つけましたっつって突き出しちまわねえか？ 姉の方意外は生死は問わないって言うし、妹の方は未だしも母親はかなりの上玉だぜ」

水を汲みに行っていたリザは、その冒険者達の会話を聞いて慌てて家族の居るテントへと向かった。

事情を聞くと、母親は残りの路銀を全て姉妹に持たせて逃げるように行ってきた。

「ミナ、貴方はお姉さんなんだから、リサを見捨てちゃ駄目よ」

姉のミナはその言葉に強く頷いて、リサの手を引いてテントを出る。

リサは母親と一緒に来てくれと頼んだが、「すぐ追いかけるから」と頑として譲らなかった。

暫くしてテントの方から怒声と悲鳴が聞こえたが、ミナに抱えられたリサにはどうする事もできなかった。

それから幾つかの街を転々とした。

風の便りに件の貴族が捕まったと聞いたが、戻ってみても父親の消息は掴めなかった。

北で落ち合おうと言っていた父親の言葉を頼りに、姉妹は北へ向かって歩いたが、火山の村ドリュークに辿り着いた所で、路銀が尽きてしまった。

年増も行かない少女達に、火山の村で食べ物を得る方法など、身売りか泥棒しかなかった。

父親が助けに来てくれると信じていたリサは、身売りしようとする姉を止めた。

ミサの方も、逃亡生活が慣れていた事もあり、見つかっても何とか逃げ切れるだろうと思っていた。

だが、それは大きな間違いだった。

火山の町リユークは周囲の魔物が強力な事で有名で、街の衛兵もそこいらの軍人より遙かに優れた腕を持っていたのだ。

姉妹の付け焼刃の逃亡術など、全く相手にならなかった。

そうして捕まったりサとミナは、盗んだ物を返すお金も無いと言ふ事で揃って奴隷になる事になった。

「大丈夫よりサ、何があっても私が何とかしてあげるから」

ミナはそう言って、奴隷になって泣いてばかりのリサを励ました。それから数日後に現れた奴隷商人に買われ、彼女達は荷馬車に乗せられダール興商自治区を目指すこととなった。

4日後、レッドワイバーンが現れた。

卵を密輸していた奴隷商人は逸早くその事に気付き、一番値の張るリサ達姉妹と護衛用の男を一人、自分の馬車から連れ出すと、衣類や農具の詰まった最も軽そうな荷馬車に移動した。

あまりの出来事にリサが震えて呆然としていると、ミナがその手

を強く握って声を掛けてくれた。

「だ、大丈夫よ。きつと逃げ切れる」

折角掛けてくれた励ましの言葉だったが、生まれて初めて聞く姉の震えた声に、リサは益々不安になった。

怒声や悲鳴、爆音が連続して轟き、一瞬静まり返った時、奴隷商人の叫んだキーワードが耳に入る。

「束縛の首輪よ力を放てっ！」

所有者の告げるキーワードに合わせて首輪から呪いが放たれ、3人の奴隷はもがき苦しんだ。

そして奴隷商人まず男を突き落とす。彼は後続の馬車馬に轢かれ、ポロポロになって馬車の下を抜けていった。

次に手を伸ばされたのはリサだった。だが、止めに入ったミサとの間でもみ合いになる。

何とかリサも立ち上がるが、時既に遅く、ミナが荷馬車から落ちていくところだった。

互いに伸ばされた手が空を切り、ミナが落ちていく光景が、やたらとゆっくり感じられた。

「……………姉……………ちゃ……………」

地に落ちたミナは、後続の荷馬車を操っていた傭兵が馬を離れた隙間に入り、そのまま荷馬車の後ろに行った。

やがて断末魔のような骨を砕くような音が聞こえたが、後続の荷馬車によってその光景が見えなかったのが幸だったのか不幸だったのか、リサには判断が着かなかった。

こうして彼女は、それまでの人生の全てを失った。

気がつくとりサは、冒険者に買われて街に立っていた。ずっと呆然としていてレッドワイバーンからどうやって逃げたのか解らなかったが、もう何もかもどうでも良かった。

だが、宿にベッドを見ると、急に恐怖が蘇ってきた。そしてミナの最後の表情を思い出す。

彼女は地に落ちる寸前、リサを心配するような表情をしていたのだ。

ミナを助けられなかった自分は最低だと思っ反面、ミナが最後まで護ってくれた自分を、何とか護らなくてはと思う。

幸いリサには切り札がある。故郷に居た頃裕福だったので、街に来た魔術師に魔法を教えてもらっていたのだ。例え主人を殺した罪でその後死罪になろうとも、最後まで抵抗しようと心に決めた。

リサを買った冒険者は何とも警戒感の無い輩であった。服を買い与え、奴隷から開放すると言い、金やナイフまで持たせた。

だが、奴隷から開放すると言う話はどうしても信じられなかった。彼女の頭の中には、家族を裏切つて母を犯した冒険者の姿が、今も鮮明に残っているのだ。

しかし、流石のリサも街の外へ一緒に行こうと言われた時は驚い

た。

まともな武器を持たせて貰えないので、信用されている訳では無いだろうが、街の外では主人を殺してもモンスターに負けて死んだと言ひ張る事もできるからだ。

だが、すぐに甘い相手では無いと考え直す事になる。

彼の放った斬撃は、森をなぎ払った。

その上考えられない事なのだが、それを行ったのは彼が持つ小さな刀なのだ。

魔術師の素養があるリサは、小さな刀が斬撃の直前、周囲のマナを物凄い勢いで貪り喰うのを感じた。

あんな武器は、見た事も聴いた事も無い。肉弾戦では絶対に勝てないと言つ事を見せ付けられた。

それから暫くして、彼は魔法の事を聞いてきた。

一瞬冷や汗が走ったが、何とか普通に返す。

すると彼は驚くべき提案をしてきた。

「ちよつと威力を確認したいから、俺に向けて雷の魔法を撃つてくれないか」

意味が解らなかつた。雷の魔法は、当たると体が痺れて少しの間動けなくなる凶悪な魔法だ。

リサとてダイヤモンド人の端くれだ、並みの魔術師より強力な魔力がある。

全力で相手を痺れさせ、得意の氷の魔法でトドメを刺そうと思つていると、なんと相手から手加減は要らないと言つてきた。

中位以上の魔法を受けて無事な人間が居るはず無いのに、馬鹿な奴めと思いつつ、全力で魔法を放った。

「雷神雷公・我が手に怒りの矛を」

しかし、リサの渾身の魔法は当たる事無く消える。

何が起きたか解らず呆然としていると

「あー、手加減とかしなくて良いよ。俺はこのくらいの魔法なら受けても大丈夫だから」

と言って見たことも無いような強力な魔法を、それも無詠唱で放った。

絶対に勝てない。

そう思うと、盾で怪我をした際、回復魔法を使っていた事が更に恐怖の事実として蘇ってくる。

以前奴隷商人がこんな事を言っていたのだ。曰く

『僧侶は滅多に買わないだろうが、回復魔法が使える魔術師に買われないように祈りな。奴等死ぬ寸前までいたぶって魔法で直すのを延々と繰り返して、壊れるまで遊ぶんだ。あれを見たときは流石の俺も声をかけられなかったね』

彼の移動速度の速さは戦闘で見ている。逃げるのは絶対に不可能だ。

不意に膝が力を失い、ペタンと地面に座り込む。

それを合図に、堰を切ったように絶望の涙が溢れ出た。

本気で困った。

どれだけ必死にあやしても、リサは一向に泣き止む事が無かった。

どうしようかと思っていると、泣き声に引かれてウルフが現れ、ウルフを狩るとその血の臭いと泣き声で更にウルフが現れ、血の臭いが濃くなると見たことも無い白い大蛇が現れ、それを倒すとダチヨウに大きな羽を着けたような巨鳥が現れ……

スタミナ S P 持続回復の魔法で、肉体的には疲れなかったが精神力は別だ。1時間半ほどリサに声を掛けながら敵を倒していると、モンスターIの死体が一山出来上がった。

泣き疲れたりリサを背負って帰る頃には、精神的にヘトヘトで、この時ほどM Pがマナポイントでなくメンタルポイントなら良かったのにも思っただけは無かった。

不幸中の幸いというか、門番は泣きながら背負われているリサを、実戦の恐怖で泣いてしまった貴族の子供と勘違いし、そのまま通れと合図を送ってくれた。

一目散に宿に戻ると、懐から金貨を取り出し「甘いもの片っ端からお願いします」と、言い残して部屋へ向かった。

リサの部屋に戻ると取り合えず重そうにしている鎧を外し、椅子

に座らせた。

甘味をテーブルに並べると、一応腹は減っているのかゆっくりと食べだす。

それが一区切りついた所で、レオは切り札を切る事にした。

昔彼女と別れた時は情性が理由だったので、こんな修羅場は初めてだ。

故に切れる手札は1つだけ 即ち土下座だ。

いくら女性に疎いレオでも、あの号泣が自分のせいなのは解る。なので、誠心誠意全力で土下座して、理由を教えてもらう事にした。解らないままで地雷を何度も踏むのは嫌だからだ。

泣き疲れて気が抜けたのか、彼女はつらつらと自身の生い立ちを語りだした。

最初の頃はレオも相槌を打っていたものの、途中から何もいえなくなってしまう。

ミナがレッドワイバーンに喰われる話の直前まで来て、レオは目を瞑った。

あの時躊躇った数秒のせいで、リサがこのような状態に成ってしまったと気付いたからだ。

「あの時、奴隷商人は私を突き落とそうとしてた……本当なら死ぬのはお姉ちゃんじゃなくて私だった……」

「それは違う」

「違う……っ」

また泣き出しそうになるリサに、レオは無機質に告げる。

「あの時俺がレッドワイバーンにビビら無けりゃ、君の姉さんは死ななかつた」

「何を……」

「覚えてないのか、俺はあの後レッドワイバーンを殺したんだ。ホントは簡単に殺せたのに、始めてみるアイツにビビって躊躇ってた。あれが無ければ君の姉さんは生きていた」

そこまで聞くとリサは拳を振り上げ、レオの胸を全力で叩いた。ダンツと言う音が、部屋に響く。

「アンタなんて……冒険者なんて……」

そのままレオの服を掴んですすり泣くりサの背を、レオは優しく摩った。

摩りながらも、レオは冷静に彼女を見ていた。即ち、これは別にレオに心を開いた訳ではないのだ。

ずっと一人で気負っていたから、それが折れて人肌が恋しくなっただけだ。ここに宿の女将がいれば、間違いなくそちらに抱きついたらだろう。

彼女の冒険者 特に男 への不信が、この程度の事で解消される訳がない。

けれど、レオはそれでもいいと思う。

彼はこれまで、これがゲームか異世界かと言う問いの結論から逃げていた。

だからこそ、リサを「我侭な登場人物」としてしか見ていなかった

ただ。

その結果がこれだ。いつまでも彼女の異常に気付けなかったせいで、彼女がここまで追い込まれる羽目になった。

(28の男が現実逃避してたせいで、15〜6の少女を泣かせるなんて、本気で最悪だ)

彼はここを現実だと認めた。その上で、優先順位を決める。

リサの奴隷解放。

自分に何が起こったのか調べる。

帰る手立てを探す。

これを絶対に変えない優先順位として決める。

数十分か、数時間か、長い時間の後に彼女が手を離す。
途中女将がフライパンを持って様子を見に来ていたが、状況を見て黙って帰ったようだ。

リサは自己嫌悪の為か、思い切り渋い表情で目を逸らしている。
その肩にそっと手を乗せると、怖がるように体を竦ませた。

「リサ」

可能な限りの優しい音色で語り掛ける。

「今日は無理につき合わせてごめん。疲れただろう、もう寝るんだ」

そう言って手を離し、扉を開ける。
リサはこちらを見ずに俯いたままだ。

「おやすみ。また明日」

扉を閉め、自分の部屋に戻る。

着替えて直ぐにベッドに横になったが、昨日のように震える事は無かった。

「リサ、必ず……」

疲れのせいで言葉は途中で途切れてしまったが、その先は言う必要が無いほどに決まりきっていた。

青銀の少女（後書き）

おお作者よ、完徹くらいで死んでしまうとは情けない。

1時くらいまでに出来るだろうと思っていた時期が、僕にもありませんでした。

（現在時刻朝4：50

こんば……おはよう御座います。屍です。

評価有難う御座います。思わぬ高評価に、プレッシャーで震えている作者です。

これでリサの伏線は粗方回収したはずです……何か忘れてなければ……。
それと、現状ツンツンなりサさんですが、もう少し暖かい目で見て貰えると嬉しいです。

PS強引に仕上げたので、後々あちこち変更するかも知れません。

ご了承ください。

盾の効果変更しました

一人の冒険者

明け方、まだ街に殆ど人が居ない時間に、レオは冒険者ギルドの前に立っていた。

夜中も営業しているギルドだったが、流石に人通りも殆どない早朝なので戸は閉まっている。

門の方も同じで、用があれば通して貰えるだろうが一応扉が閉めてあった。

通常であれば衛兵に話せば空けてもらえるかもしれない、しかし生憎昨日の依頼の紙には出国の判だけ押されて帰国のものが押されていない。

昨日の衛兵も居ないようだし、面倒なので忍者のスキルである「透身」を使う。これは姿音臭いを消す低レベルのスキルで、上位には自分より強いモノを欺くための気配を消す「無心」や、神や龍をも欺けるようになる最終スキル「一体化」があるのだが、今は「透身」で十分だろう。

スキルはSPとMPを消費する。スタミナ

スキルの発動は初めてだったが、魔法と同じようにエフェクトを思い描くことで発動できた。

外壁の上にビューレポートで移動し、もう一度使って草原に出た。

更にクイックやレポートを使い、あっという間に森に着く。

「……」

森に入る前、一度だけ街を振り返ったが、黒い影は何も言わずに

そのまま森へ入っていった。

太陽が真上に差し掛かる少し前、レオは冒険者ギルドへ向かっていった。

ギルドに入る時、燃えるような赤い髪をしたドワーフとぶつかった。

「おつとごめんよ。おい、ゲオルグは居るか …… 全く、他人に剣の修理頼んだまま消えるなんざ、どんな神経してやがる」

レオはそれに特に反応する事無く、カウンターのフィルの前へ向かった。

「ウルフの耳です、それと昨日の依頼証。それから、沢山持ってきたのでその分の依頼をクリアした事にして貰えませんか」

カウンターに置かれた皮袋は、パンパンに膨れ上がっており、中には昨日の討伐の分と早朝から狩った分、合わせて4〜50匹分もの耳が入っていた。

周囲の冒険者が、驚いてレオを見つめる。さすがのフィルも驚いたよう目で目を丸くして皮袋の中身を確認した。

「ええと、それは良いですけど、昨日の今日で良くこれだけ狩れましたね」

「別に…… 運が良かっただけです。所でランクアップには後どれくらいの依頼をクリアすれば良いですか」

生気の抜けた目で皮袋を見つめるレオの様子に、フィルは眉を顰めた。

「これだけあれば十分足りません。それとランクアップの試験ですが、捕まえて来たウルフ4匹との多対一の戦闘訓練なので、この耳の量から見るに、訓練の必要無しと判断される可能性が高いです」

期待通りの答えだったが、特に反応せず淡々と質問を続ける。

「それじゃ、もしランクアップに必要な耳に余りがあつたら、それをフランクの依頼用に回してください。午後からまた行くので、ウルフ以外に良い獲物が居たら教えてもらえると助かります」

掲示板まで一緒に来るよう促して立ち去ろうとするレオの肩を、フィルが慌てて掴んだ。

「待ってください。それは許可できません」

止められたレオは、苛立たしげにフィルを睨んだ。
しかし、レオの鋭い眼光正面から受け止めたフィルは真剣に続ける。

「レオさん、貴方自分が今どんな顔をしているか自覚していますか」
顔と言われても鏡など殆ど無いこの世界で、自分がどんな顔をしているかなど確認しようの無いレオは疑問の声を上げた。

「見えないので解りませんが……何の事ですか？」

するとフィルは頭を振って、諭すように続ける。

「レオさんは、この街で昔戦争があった事は知っていますか」

それについてはギルから聞いた気がする。確かあれは石造りの外壁について聞いたときだ。

レオが頷くと、ファイルは彼の顔を真っ直ぐ見て続けた。

「私の父は10年程前、戦争で死にました。その父を最後に見た時の顔と、今の貴方の顔はそっくりです」

そこまで聞いても意味が解らないと訝しんでいると、彼女は困ったように微笑んで続けた。

「母に後で聞いた話では、父は、母と私を護ると言って昼夜を問わず戦っていたそうです。何が原因か知りませんが、今の貴方も同じようなものではないですか？」

「けど、だからって……」

「まだ納得出来ないなら、前例の話をししましょう。前にも、似たような顔をした冒険者を1人見たことがあります。その時は私も気のせいかも思っていました。数日後、彼は死にました」

どういふ事が解らず困惑するレオに、ファイルは優しく止めを刺す。

「彼は腕のいいBランクの冒険者でしたが、普段通りなら絶対に掛からないような幼稚な罠に掛かって死んだそうです。レオさんは腕に自信が有るようですが、今の貴方はいつも通りの判断が出来ていると言い切れますか？」

何も答えられない。

昨夜の出来事で気が逸っていた今のレオなら、落とし穴のような古典的なトラップに掛かって串刺しになっていたかもしれない。

「急いで行動する事で良い結果に繋がる事も勿論あるでしょう。でも、ランクアップも確実でない今の状況で急いでも、それはただ焦っているだけです。それでも未だ行くというのなら、私の権限で依頼の受注を止めさせてもらいます」

フィルの尤も過ぎる指摘に、碌な反論も出来ずに言い負けたレオは溜息混じりに頭を掻いた。

「やれやれ……降参です。本当にフィルさんには敵わないな」

それを聞いたフィルは満足げに頷いて、向日葵のような明るい笑顔を作った。

そしてどこか誇らしげに胸をそらす。

「当然です。父さんが死んでからずっとこのギルドで働いてるんですから。最初は小間使だったけど、それでも年季が違います」

「そう、でしたね。俺はまだ駆け出しの冒険者だった……」

「解つたら、報酬で買い物にでも出かけてください。気分転換になりますよ」

何とも女性らしい意見を口にして銀貨を差し出すフィルに、苦笑して頷く。

礼を言っただけでギルドを出ようとすると、入る時にぶつかったドワーフに声を掛けられた。

「お前さん、フィルちゃんには負けたようだが、モンスターには滅法強いみたいだな、気に入った！珍しい武器を使ってるようだが…あれだけ斬ったんだ、多少は痛んでいるだろう。これも何かの縁だ、昇進の祝いに研いでやろう」

刃物の手入れなど解らない上に、作成スキルでの修復も失敗が怖くて出来なかった（ゲームでは武器は失われないが、現実では別だと思っ）ので、その言葉は渡りに船だった。

「おお、是非お願いします。俺の名前はレオ、この武器はカタナと言います」

レオが手を差し出すと、ドワーフはまめと火傷だらけの手で力強く握り返してきた。

「俺はバルドイン、バルドと呼んでくれ。取り合えず工房にいこうか」

バルドの工房は鍛冶ギルドや織物ギルド等が立ち並び、所謂工業地帯にあった。

小さな工房だが個人で職場兼店として運営しているらしく、手前の部屋には武器が所狭しと並べられ店番のドワーフのおばさんが座っているが、奥の部屋の扉からは微かな熱気が漏れている。

招かれるまま中に入ると、釜から溢れ出ている熱気が頬を炙る。作業台の前に座ったバルドは、左手用の來国俊を指差した。

「まずそっちからやる。見せてくれ」

腰の來国俊を鞘ごと取り外し、バルドに手渡す。
刀身を見たバルドは目を輝かせて笑った。

「これは良い剣だ……いや、カタナだったか。どっちにしても、この薄さであれだけ斬って殆ど刃毀れが無いとは……何で出来るかわからんが、随分と頑丈だな」

「ま、まあ、結構良い物だからな」

装備を褒められたゲーマーが照れて頭を掻いている。

上機嫌に始めて見る刀を眺めていたバルドだったが、次第に顔が険しくなってきた。

「お前ちゃんと血脂ふき取ってないだろ……いつも何で拭いてる」

「ええと、その辺の草とか、皮袋の端とか……」

「はあっ！？ テメエこんな名剣を使い潰すつもりか！」

突然豹変して立ち上がったバルドの剣幕に圧され、レオは一步身を引いてしまう。

バルドが拳を握って睨んでいると、「す、すいません……」と情けない声を出したので、脱力して溜息を突いた。

「まったく、これじゃ作った奴が浮かばれんな……後で手入れ用の布を何枚か持たせるから、次からはそれで拭け。今すぐ研いでやるから、ちよつと待ってるよ」

最後の優しい言葉は、刀に向けて掛けられたものだ。

真剣に刀を研ぐバルドの横顔は、豪快な鬣たてがみのような鬣と良く合っ
て赤獅子のような印象を持つ。
じつと顔を見つめるレオに気付いたのか、刀を研ぎながらバルド
が声を掛けた。

「どうした、俺の顔に何かついとるか」

「いや、見事な鬣だと思って……」

それを聞いたバルドは目を見開いてわなわなと震え、刀を置いて
立ち上がるとレオの両肩を掴んだ。

「お前さんこの鬣の良さが解るのか……っ」

何でこんなに驚くのか良く解らなかったが、元の身体で鬣を生や
そうとして上手く行かなかった彼は取り合えず頷いた。

「エルフは何万歳になっても、アゴをツルツルにして俺らの鬣を馬
鹿にする、いけ好かない奴等ばかりだと思ってたが、お前は最高だ
！」

「はぁ……」

そう言ってレオの肩を数回叩くと、機嫌を直して研ぎを再開した。
研ぎ終えた刀を綺麗に拭き、油を塗って、一度ばらして掃除した
鞘に戻すと、それを手渡して 天羽々斬り を指差した。

「次はそつちだ、ほれ、早く出せ」

そう言われたレオは少々困ってしまふ。

昨日リサに、初めて イージス を持たせようとした時の事を思い出したからだ。

「実はこれ曰くつきの代物で……俺以外が持とうとすると怪我をするから、帰って自分でやりますよ」

「何言つてやがる素人が、何でもいいから見せてみる」

呆れ顔で言うバルドに仕方ないなと思いつつ、天羽々斬りを取り出す。

すると取り出した直後からバルドが驚愕で目を見開いた。

「な、そのカタナも魔法の武器だったのか……しかも何て魔力だ、さっきのカタナより強いじゃねえか」

この言葉にはレオの方が驚いた、それは暗に魔力と言うものを知覚できる事を指している。

形も光も匂いも無いものを、どうやって感知するのかさっぱり解らないレオは、素直に感心した。

「良く解りますね」

「そりゃあ小僧の時から、何十年も鉄を打ってるからな、剣の事なら大抵解る。しかし、鞘に入っている時は何も感じなかったのだが……」

それを聞いて思い当たる事があった。

確か世界に1つの材料である『夢界の王の魂』が鞘に使われているはずだ。

「ああ、それは多分鞘の中で刀が眠っていたから……だと」

言いながら、そう言えばこっちの世界に意思のある道具など有るのかなと思いつた。

案の定バルドは口をポカンと開け、呆けたようにレオを見ている。

「このカタナには人格があるのか……？」

最早言い逃れの出来ない状態に成ってしまったので、諦めて自供する事にした。

「は、はい。実はさっき言った他の者には使えないってのは、そう言う理由なんで……できれば秘密にして欲しい事なだけけど」

「ああいや、別にそれについてとやかく言うつもりは無い。それにしても、このカタナは素晴らしいな。完璧と言っている」

呆然と眺めながら、ドワーフの国の名工でも作れんだろうと小さく呟く。

感動したように言うバルドに、何となく気恥ずかしさを感じてくる。

「あの、そろそろ良いですか、刀も問題無いみたいだし……」

「おう、良いぞ。しかし良い物を見せてもらったな……カタナか……」

悩むように唸るバルドに、不意に思い立った提案を出してみる。

「作るなら見本用に一本貸しましょうか、宿に戻れば同じようなの

が数本あります」

「本当か、是非頼みたいが……幾ら出せばいい？」

「お金はいいです。扱いになれてもらえば研ぎも頼みやすいし、強いて言うなら研ぎの代金として貸しますよ」

バルドはクツクツと楽しそうに笑うと、立ち上がって最初に持っていた剣を取った。

「お前さん本当に不思議な奴だ。さて、俺はまたこの剣の持ち主のアホを探しに行かなきゃならん、残念だが今日はここまでにしよう」

「了解、愛刀を研いでくれて有難う。今度来る時は予備の刀を持ってきますよ、楽しみにしてください」

「おう、楽しみに待っているぞ」

そう言って、二人は連れ立って工房を出た。別れ際に無骨な腕を笑顔で振るドワーフは、本当に楽しそうに見えた。

バルドの工房から帰る途中、近くの織物ギルドで、おかしな物を見つけた。

店の隅にぶら下げられているそれは、かなり粗悪では有るが、どう見てもゴムだった。

割りと高品質そうだったアルザダの紹介してくれた洋服店でも、ゴムの類は一切見られなかったので、この世界には無いのだろうと

思っていたのだ。

興味深そうにゴムを見ていたのに気付いたのか、店員が説明に来た。

「いらつしやいませ。お目が高いですね、こちらは南方より試験的に取り寄せた伸縮性のある素材で、ゴムと言うものなのです」

「ほづ……」

興味がありそうな声をチャンスと捕らえたのか、すかさず定員が畳み掛ける。

「ズボンの腰の部分とかに括り付けると、とっても便利なんですよ。まだ試作品なので、あまり強く引っ張ると切れてしまいますが……」

確かに現状の布キレのようなベルトで縛るのは大変だが、このゴムはかなり脆そうだ。

強度はどのくらいなのかと聞くと、「そ、それは……」と目を逸らされた。

「で、でもこちらのリボンのように小物に編みこんだモノは、中々長持ちするんですよ」

そう言って定員が取り出したのは、赤と白の絹糸で作られたレースのリボンだった。

それがゴムの力で微妙に縮んでいる。

そんな物を男に進められても思っていたレオだったが、暫く見ているうちにある事を思いついた。

「あの、このリボンこれくらいの長さに切って、フックで留めて輪

になる様にして貰えますか」

定員は腕より少々太いその輪に首を傾けつつも、「解りました」と言っけてリボンを持って作業場へ消えていった。

眩しい光に目を覚ますと、真上に上った太陽が枕元を明るく照らしていた。

二日連続で昼に起きた自分に呆れつつ、泣き疲れて気だるい身体を横に向ける。

寝ぼけ眼でベッドから部屋を見渡すと、昨日の光景が思い起こされた。

自分の醜態から目を背けるように、相手の事を考える。

未だ彼を信じられる訳ではなかったが、あれだけの事があったのだ、これまでのように無視し続ける訳にもいかない。

それに、彼が最後に言った「おやすみ」という言葉は、どこか優しかった父に似て　と、思ってしまった瞬間、鳥肌が立った。

（私は、あれだけの覚悟をしたのに、自分の力が及ばないと解った途端、あんな奴をお姉ちゃんの変わりにして縊ろうとしたの……？）

吐き気を堪えるように毛布の中で丸くなったりサは、拳を握って不快感が過ぎ去るのを待った。

暫くそのまま蹲っていたが、落ち着いたのでベッドを出て立ち上

がる。

昼まで寝ていたので流石に空腹だ。黙っていても腹は膨れないので、銀貨を持って部屋を出ることにした。

宿に戻って早朝には居なかつたカウンターの女将に声を掛ける。

「すみません、宿泊の延長をしたいと思います」

「アンタか。ウチは別に構わないけど、アンタ駆け出しの癖に宿暮らして金持つか？」

「正直キツイですが、今の彼女を連れそのまま雑魚寝の宿に泊まる訳にも行かないですしね……」

リサの境遇を考えれば、冒険者ばかりの安宿は問題を起こすにしろ巻き込まれるにしろ、厄介な事になるのは目に見えている。

それに収納袋の中身を考えれば、雑魚寝は不味い。盗まれる覚悟でそんな事をするくらいなら、中の金塊をもう1つ売った方がマシだ。

「ま、あの娘は頼りないって言うか……ほっとけない感じがするからね」

それに同意するようにうんうんと頷いていたレオだったが、「アンタもだけど」と付け加えられて固まった。

部屋を目指す途中、リサが昼食を取っているのが目に付いた。ついでなので軽食を頼んで対面に座ると、リサが目に見えて食べる速度を上げた。

それに苦笑しつつ、ここ数日でかなり不遇慣れしたレオは気にせず話す。

「今日は良く眠れた？」

リサは何か言いそうになって途中で止めたが、顔色は良さそうなのでよしとする。

「今日はギルドでバルドっていうドワーフに合ってたね、彼には刀を研いで貰っただけなんだけど、帰りに良い物を見つけたから買ったんだ」

そう言ってレースの輪を取り出した。

彼女が不思議そうに見ていると、フックを外して帯にした状態で手渡す。

「首輪の上から着けてみたらどうかと思ってね。そのままじゃ外に出にくいだろうし。試しに着けてみて、大きすぎたら調整してもらおうし、苦しかったら買い直すから」

リサは緩慢な動きでそれを受け取ると、奴隷の首輪の上にレースの輪を巻いた。

特に苦しそうでも無くズレそうでもない。そして青と白のみのリサの格好に、赤のレースはアクセントとしてとてもよく似合っていた。

「よし、大丈夫そうだね」

満足げに頷くレオに、目を逸らしたまま無表情を貫くりサだったが、やがて諦めたように溜息をついた。

「……どうも」

そう言っただけで食器をもちと、席を立つて足早に食堂を後にした。感謝の気持ちが欠片も感じられない礼だったが、今のレオにはもう特に気にならなかった。

部屋に戻って収納袋を取り出し、中から金塊を出してテーブルの上に置く。

午前中にバルドの工房に行った時、物を作って売れば良いのではないかと思ったのだ。

幸い金やオリハルコンがある程度ある。後はゲームでのスキル通りの加工を出来るかどうかだ。

「ええと……金の腕輪は確か……」

必死に作った時の光景を思い起こすと、魔法を使った時のような感覚が起こり、少しずつ金塊が浮き上がって、高温に熱せられて赤い液体状になって行った。

その様子に興奮しつつ、腕輪の形状を完全に思い出す為に目を瞑って集中する。

「確かDNAみたいな模様が入っていて、内側は角をつけずに滑らかで……」

と、なにやら焦げ臭い匂いがして目を開けた。

腕輪のイメージの余りの金が、零れてテーブルを焦がしていた。

慌てたレオは腕輪のイメージを崩してしまい、腕輪の分の金もテーブルに落ちる。

ここまで来ると炎が上がり、テーブルが燃え始めた。

パニックになったレオは、慌てて立ち上がって後ずさるが火の勢いは衰えない。

部屋に煙が充満し、更にパニックになったレオは、テーブルに水の攻撃魔法を放った。

最低レベルの魔法とも言えども流石に攻撃魔法、火を消したまでは良かったが、それに留まらずにテーブルを粉碎して床を水浸しにした。

血の気が引いたレオは、何とか誤魔化そうとテーブルの破片を持って部屋をウロウロと歩き回るが、やがて部屋の扉が開く……

ゆっくりと首を曲げてその先を見ると、満面の笑みを浮かべた女将が、右手でフライパンを弄んでいた。

……

女将にこつてりと絞られたレオは、テーブルを弁償し、肩を落として宿から出るところだった。

そこで、目の前にアルザダが居る事に気がつく。

「おお、やはりこの宿に泊まっていましたか。昨日から何度かこの辺りに来ていたのですが、見つかってよかった」

「ああーすみません、そう言えば貴族の事を頼んだのに落ち合う場所を言っただけでしたね……」

修羅と化した女将に絞られた直後のレオが、必要以上に猛省するのを、アルザダが手を振って遮った。

「いえいえ、私もあの時は洋服店の事を伝えて、もう大丈夫だろうと安心していましたから。本来なら宿も紹介すべき所でしたし」

取り合えず座りませんか。と言うアルザダの提案を受け、宿の酒場兼食堂に2人で入り、軽い酒を頼んだ。

席に着くと、アルザダが金貨の入った袋を渡してきた。

「レッドワイバーンの素材の代金です。それと、言い忘れていた事が1つあります」

「なんででしょう」

「滅多に無いとは思いますが、念の為。奴隷の首輪の発動条件ですが、主人が『束縛の首輪よ力を放て』と言うのが呪いを発するキーワードなので、気をつけてください」

言われてみれば、間違えて言ってしまう事も有るかもしれないなかつた。

「なるほど、気をつけます」

「それと貴族の件ですが、難しいかもしれませんが。レオさんは、この街が商業が盛んな街だと言う事は知っていますか」

「街の名前からそうじゃないかとは思ってましたけど」

「ここは国境の街なので物流が多く、現れるモンスターもドリユーク村方面以外は弱いものばかりなので商売が盛んなのです。それによって成功した商人が多く居ます」

アルザダがここで一旦話を区切ったので、理解した意味を込めて頷く。

「この地の貴族も税でそれなりに潤ってはいるのですが、国同士の条約で税にも上限があり、貴族より商人の方が資産を持っている場合が多いのです。」

問題は貴族が、地位が下のはずの商人達が自分達より裕福な生活をしている事へ不満が根強い事で、その為、貴族には金銭に関してかなり汚い者が多くいます」

「つまり、この街で貴族相手に頼みごとをするのには、とてつもな

「金が掛かる。と言う事ですか」

「ええ、しかも聞いた話によると、昔同じように奴隷を解放しようとした商人が、前金を3回払った拳句に反故にされ、文句を言いに行ったらそもそもその行為自体が違法だと、捕まえられてしまった事もあったそうです」

元々それを承知で取引したはずなのに、貴族の方は仲間と結託しており何の罰も受けなかったと言う。

「良心的な方も居るには居ますが、周りの目が怖くて助けてやる事はできないと言われました」

これはつまり、この街では奴隷解放は困難だと言う事だ。
ある程度ギルドでランクを上げたら、他の街に移った方がいいかもしれない。

「解りました。調べてくれて有難う御座います」

「いえいえ、恩人の頼みと言うのもありますし、私も共に窮地を脱したあの娘を何とかしてあげたいですから」

「後は、何処に移動するかが問題か……」

「それについては私の方でも考えておきましょう。私は良く西門から3軒目の問屋に居るので、用があれば来て下さい」

会話の合間にちびちびと飲んでいた酒が空になったのを合図に、アルザダが立ち上がった。

レオも立ち上がったのもう一度礼を言って握手する。

「そうそう。それと、ギルの奴が探していましたよ。ギルドの隣の酒場に居ると思いますから、行ってみてはどうでしょう」

時刻はもう直ぐ夕暮れになるかと言うところだ。酒場に行くには丁度いい時間帯かもしれない。

「あー、そうですね、今から行ってみます」

宿を出た後、冒険者ギルドの方へ向かっていると、露天で首を傾げて商品を見るリサの姿を見つけた。

一般の市民のようにのんびりと買い物をする少女を見て、レオは満足げに微笑んだ。

酒場に入るとギルが手を振って来た。

こちらにも振り返って席に行くと、隣に女性が座っているのに気付く。

筋骨隆々のギルの隣に居ると華奢なように見えるが、鎧の隙間から覗く腕には筋肉が見えていた。

「ようやく来てくれたか、座ってくれ。こちらはレオさん、新人だが、腕は確かなエルフだ」

「よろしく」

握手しようと手を出すと、その手を全力で握られる。

レオが何とかそれを押さえると、彼女は上機嫌に自己紹介を始めた。

「おつホントだ、なかなか根性あるね。アタシはゲオルグ、自由奔放が心情の冒険者さ。男の名前だけど、厄介事を避ける為の偽名だからまあ気にしないで」

この人がゲオルグか何処か納得したようにしみじみ思っていると、ゲオルグが眉を顰めた。

それを見てやれやれと首を振りつつ、ギルが口を挟んだ。

「どつかでお前の噂を聞いて、自由奔放って所に疑問を持ったんだろ。ウルフ討伐の強制召集蹴ってAランクからBに特例で落とされた冒険者なんて、お前くらいのもんだ」

呆れたようなギルの口調と、納得したようなレオの仕草が気に食わなかったのか、ゲオルグはそっぽを向いて酒を煽った。

その姿に苦笑しつつレオが席に着くと、横においてあった予備の酒を薦めつつギルが聞いてきた。

「それで、例の嬢ちゃんはどうなった、目処はついたか」

「やっぱそう簡単には行かないわ、この街では駄目だろうってさ」

渋い顔をして酒を飲むレオに、ギルも難しい顔をして「そうか…」と呟いた。

「なになに、何の話？」

いじけても誰も反応しないので諦めたのか、ゲオルグが話しに加わってきた。

「奴隷の女の子を助けようって話なんだけど、上手く行かなくてね……」

「あー、なるほどねえ。ホントここの貴族って頭固いしケチだし最低だよな、あいつらがもうちょい聞き分けがあったらアタシのラックだって」

「もうお前だまってるや」

ギルの鋭い突っ込みにゲオルグは再び機嫌を悪くし、舌打ちしながら目を逸らした。

彼はそんな相方の仕草を無視し、レオに向き直る。

「まあ、街を移動するのが決まったら声を掛けてくれ。古参の俺達の方が他国への護衛の依頼やら、配送の依頼やらは耳に入ってくる」

「その時は頼むよ」

そんな男2人の気の合う会話が気に食わなかったのか、ハブラれたゲオルグが嫌味を言ってきた。

「しかしまあ、女の子1人の為に逃避行とは、どこぞの騎士様じゃあるまいし」

「お前そう言い方はねえだろ……」

流石に不味いと思ったのかギルが止めに入ったが、レオは苦笑して手を振った。

「別に愛の為にとかそんなんじゃないよ。俺は俺の理由で彼女を助

けるし、彼女は単純に生きようとしてるだけだ」

この返事にはさすがのゲオルグも目を見張った。ギルは面白そうに笑っている。

だが、暫くしてゲオルグはその顔を獰猛な笑みに変え、レオを見定めた。

「なかなか面白そうじゃん、そんな時はアタシも連れてってよ。これでもアタシは実力はAランク、足手まといにはならない筈さ」

その提案には正直面食らったが、「まあ予定が合えば」と曖昧な返事を返した。

だがそれがいけなかったのか、ゲオルグは勢い良く立ち上がり、握り拳を掲げた。

「よしつ、途中の依頼を蹴ってでも絶対付いてくからね。黙って行ったら承知しないよ！」

その様子を呆気にとられて見ているレオに、ギルが溜息混じりに補足した。

「残念だったなレオ、こりやもう決まりだ。こうなったコイツは振り払うより放置した方が楽だ。俺も着いてってやるから、まあ何とかなるだろ」

なにおーと喧嘩する2人を眺めながら、こいつらと旅したら楽しそうだとレオは思った。

それから空が暗くなるまで仲良く飲んで、宿に戻る事にした。

<透身><とく無心>を使って安全に女将の居るロビーを抜けて、
部屋の前まで行くと、入り口でリサに出会った。

「リサ、さっき買い物してたみたいだけど……」

途中まで言った所で、鼻を押さえて顔を顰めるリサの真意を察し、

「お、おやすみなさい……」

とだけ言って部屋へ入った。

昨日の夜との状況の差に、毛布を被って「どうしてこうなった…
…」と、反省したのは言うまでも無い。

一人の冒険者（後書き）

こ、こんなにアクセスが増えたからって、（リサがレオを）好きになったりしないんだからねっ、カン違いしないでよねっ！

作中にラヴが足りないので後書きでツンデレしてみました。

どうも、作者です。

急増したアクセスのお陰で昨日は1日パニックってました。

修正もちよろちよろ行つたのですが、まだ色々と不備があると思うので、気になるところがあつたら感想等お願いしたいです。

っていうか、こんなに期待してもらつたのに説明＋登場人物紹介パートですみません……何分始めたばかりで、色々と不足しているので……

PS 前話のイージスの性能変更しました。

パニックってた名残のせいか読み返してみると誤字ばかり……修正しましたorz

人型の魔物（上）

昨日初めて飲んだ酒が効いたのか、起きたのは既に日が6割ほど上っていた頃だった。

カラカラの喉を潤す為に食堂に行こうと思いつが、軽い二日酔いのままでリサに会うのが嫌で、廊下やロビーをそれと無く確認しながら移動する。

水を貰い、スープを頼んで席で突っ伏していると、女将がやって来た。

「部屋をボロボロにして飲んで帰ってくるとは、いい身分だねえ、ちょっと教育が足りなかったかな」

女将の声が耳に入った途端、弾かれたように起き上がりゴクリと喉を鳴らすと、必死の弁明を試みた。

「い、いやぁ仕方なかったんですよ。冒険者の先輩に進められて…」

「はいはい、やましい思いがあるまま酒飲んだ冒険者は大抵そう言うんだよ。次からはもっとマシな言い訳を考えな」

対面に座った女将は、呆れたように手を振る。

遣る瀬無い感情に包まれながらも、再度怒られる流れでは無いよ
うなので溜息をついた。

「それはそうと、あの娘何時まであのままにして置くつもりだい」

急に真剣な表情になった女将が、レオの目を見て聞いてきた。一人で居る事の多いリサの事だろう。

確かに首輪の問題は解決し、多少は外に出れるようになったが、この街は近いうちに出て行かねばならない。友人を作れとも言えないし、かと言ってレオも彼女ばかりに構っては居られない。

ここに留まるなら良いが、不信感が強いままのリサを連れて旅に出るのは、不安があるのも事実だ。

「何とかしてあげたいのは山々なんですけど、現状俺ができる事全てやってこの状態なので……」

「不甲斐ないねえ、まあ私から見てもあの娘は取っ付きにくいけど。何だったらアタシが少し話してやろうか」

さり気なく頼んでくるかのような口調を不思議に思ったが、少し考えるとレオに配慮しての事だと解った。

恐らくもつと早くリサと話したかったが、所有者であるレオの性格が不明だったので、余計な事を言わないために遠慮していたのだろう。

「是非、お願いします。冒険者の、特に男には強い抵抗があるので、出来ればそこは気を利かせてあげて下さい」

自分で言っただけ少し悲しくなったが、現状は認めるしかない。

女将は何処かホツとしたように息をつくとき、いつもの笑顔に戻って続けた。

「アンタならそう言うと思ってたよ。さて、スープも出来たようだ、

水ももう1杯飲むかい」

「3杯程まとめてお願いします……」

あいよ。と言って苦笑すると、女将は食堂のカウンターへ向かう。リサの事は女将に頼めるようなので、昼には戻れないかもしれないが1度ギルドに行つて依頼を受ける事にした。

ギルドに行つてフィルに挨拶すると、「ちょっと待つてください」と言われた。

暫くそのまま待っていると、鎖のついた赤色の水晶のようなものを持ってきて、にこりと微笑む。

「おめでとう御座います、ランクアップです。魔晶石の色を移すので、ロケットを出してください」

ロケットと魔晶石を重ねると、ロケットが赤く光った。

恐らく衛兵がロケットを確認していたのは、識別とランクを確認する為だったのだろう。

「これで完了です。それと、昨日の戦績を見て、ギルド長の判断で条件付で更にランクアップできる事になりました」

「本当ですか、ちなみに条件と言うのは」

「レオさんは今まで、ギルド近くの東門から出ていましたよね」

その通りだったので頷く。

「Eに上がる為には、西門から出た先にある森で、ゴブリンとホブゴブリンを倒してもらわないといけません。知能も低いし強さはウルフと同等らしいですが、一応規則なので」

その話は正直気が進まなかった。

実を言えば、人型のモンスターには今まで出会っていない。恐らく東門の先には居ないだろう。

正直ホツとしていたのだが、旅先でそれらに襲われるならば、それを殺せる事も必要な要素の1つだ。冒険者の前提条件だと言われてもおかしくは無い。

「解りました、行ってきます。因みに数はどの位ですか」

「形だけの条件なので、ゴブリン5、ホブゴブリン1でいいそうです。余り奥に行くと彼らの集落が有りますから、行き過ぎないようにして下さい」

そう言って手渡された紙を受け取り、レオは内容を確認して懐に仕舞う。

敵の特徴 特にゴブリンとホブゴブリンの差 を聞いてお礼を言つと、ギルドを後にした。

ギルドの外に出て空を見ると、太陽はまだ昇りきっていないかった。急げば正午には戻れるかもしれない。

西門から外へでて、1時間ほど歩いた所にある街道脇の森へと向かった。

少しするとゴブリンが8体現れた。グラビティワールド でも

狼男のような魔物はいたが、醜悪な子供のようなゴブリンを斬るのは中々に覚悟が要った。

一瞬気絶させて耳だけ取るうかと思っただが、ランクアップが掛かっているのだ、下手な事はできない。

叫び声を上げて倒れるゴブリンに顔を顰めつつ、丁度5匹倒した所で他の3匹は逃げ出した。

「しかし、それにしても……」

他の冒険者からするとウルフと同じらしいが、何やら戦いにくさ以外にも手こずった気がした。

ウルフの時と比べれば消極的だったが、それでも必要な事だと言い聞かせ、暫くゴブリンを斬って歩く。

少し体が大きめで、赤い肌の色が濃いホブゴブリンを見つけて倒す頃には多少は戦いなれていたが、妙な違和感が残ったままだった。

結局西門に戻った頃には正午を過ぎてしまい、リサの様子を見るのは諦めてギルドに行こうとした矢先、近くの間屋前でアルザダとギルが話をしているのを見つけた。

声を掛けてみると、丁度行き先の事を話していたようだ。

「公国の近場は駄目そうだし、ナルバ共和国に行ったほうが良いかも知れませんか」

公国というのは、ここダール興商自治区を含むガザン公国だ。

ダールは公国と共和国の国境なので、外国だが、近場と言える。

国外に行くと言うのは面倒じゃないかと思っただが、アルザダの話

では商人護衛として行けばそうでもないらしい。

「ナルバ共和国に行けば可能性が有るんですか」

「あの国は奴隷制度発祥の地です。その為かなりの数の奴隷が居ますが、全体的にはここより待遇は良いのです。スタンプ持ちもこの国より多いですから、行ってみる価値はあるかと」

レオが興味を持ったように考え込むと、ギルが口を挟んだ。

「俺は、あそこの貴族はあまり信用できないと思うんだが。まあ、ここよりはマシか」

「何か問題でも？」

「人によるが冒険者を舐めてやがる。騎士団が強いという自負からだろうが……アルザダが交渉すれば、大丈夫かもしれんけどな」

アルザダの方を見ると、「勿論同行しますよ」と言った。
レオが少し困ったような顔を見ると、笑って手を振る。

「ドリュークから持ってきた鉱物の残りも、新しく仕入れた物もありますから、赤字にはなりません」

「そうですね、なら数日後にでも発ちましょう。俺も今からギルドに行ってランクアップの試験をしてくるので」

「解りました、詳しい話は2日後にギルド隣の酒場で落ち合って話めましよう」

そう言つと、アルザドはお辞儀をして問屋の中に入って行く。
彼を見送りギルドに向かおうとすると、ギルに声を掛けられた。

「そついや、ランクアップするって、今のランクは幾つなんだ」

「Fだよ、特例ですぐ上げてもらえる事になったから、もうすぐEかな」

「まてまてFって……ってそつか、今までギルドに入ってなかったのか。よし、俺もついて行こう。Fのランクアップなら俺が居た方がいいはずだ」

にやにやと笑いながら着いて来る、突っ込み担当だったハズのギルに首をかしげながら、今度こそ冒険者ギルドへ向かった。

食堂の椅子に座って外を眺めていると、不意に女将が向かいの席に座った。

「どうした、何か考え事かい」

彼女は少し額に浮かぶ汗を拭きつつ、笑いかけてくれた。

身体を拭くのを手伝ってもらった時から、女将は良くリサを気遣って声をかけてくれる。

「いえ、別に……」

「なんだいなんだい、仕事が珍しく早く片付いたんだ。ちょっとくらい話し相手になってくれても良いじゃないか」

そう言って、じっと見つめてくる女将を見るのが気まずくて、俯いてしまう。

「はい……」

言いにくい事だったので、ついつつかえてしまつが、女将は黙って待っていてくれた。

暫くして何とか言葉を紡ぎだす。

「私は、ずっとお姉ちゃんに護られていました。お姉ちゃんが死んで、彼に買われて、必死に抵抗するつもりだったけど、今思えば自分の力で状況を何とかしようなんて、今まで一度も考えてこなかった」

俯いているのも気まづくなつたので、顔を上げて外の喧騒を見る。

「でも、昨日外にでて街を見て周ったら、急に懐かしい気分になつて……あの頃に戻りたいと思つたんです」

あの頃、まだ故郷に居た頃。自分と母と姉の3人で、父が仕入れを行つている間、良く買い物に出かけていた。

今は自分1人しか居ないけれど、活気のある街はどこか暖かくて、懐かしい気持ちになつた。

「だけど今の私には、何にも出来る事がない……」

遠い目で外を見るリサに、女将は言う。

「あの男を手伝ってやれば良いじゃないか。アイツが悪い奴じゃないって事くらい、リサだって解ってるだろう。アイツの言ってる事が本当なら、手伝えば手伝った分だけ、リサが自由になるまでの時間は短くなると思うよ。」

「でも……」

言い淀んでしまいうリサに、呆れたように女将が続ける。

「嫌だと思ったら止めればいいんだ、そんなに難しく考えなくてもいいさ。」

「けど、私はまだ信じられなくて」

「別に信じなくって良いだろ。アイツが襲ってきたらタマでも蹴って『貴方は最低のクズです』とか言えば、アイツの事だ、泣きながら逃げていくに違いないさ。」

その様子が何となく頭に浮かんだりサは、クスリと小さく笑ってしまふ。

それを見て満足した女将は、「さて」と言っ立ち上がった。

「そろそろ仕事に戻るか。元気出たなら、また街でも歩いてきな」

「はい」

女将に笑いかけたリサは、立ち上がって宿を出て行く。

それを横目に見た女将は、鼻歌交じりにロビーに歩いていった。

ギルドについて皮袋と依頼証を取り出し、フィルに預けた。
フィルはそれを確認して別な書類に何か記入すると、カウンターに銀貨を置く。

「確認しました。少し待っててくださいね、今」

「ああ、フィルちゃん、模擬戦の相手なら俺がやるぞ」

突然割って入ったギルに、フィルは驚いたような目を向けた。

「え、でもこの中でも上位のギルさんが相手だと……その……」

「大丈夫、下手な事はしないさ」

「ならいいですけど……ちゃんと手加減してくださいね」

その言葉にギルは苦笑してレオを見る。

そういえば戦闘訓練みたいなものって言ったなあ。などと考えていたレオは、それに気付いて視線を合わせた。

「手加減なんて要らねえよな、レオ」

「ん、ああ。良いんじゃないか？」

その様子に、呆れたように「怪我しても知りませんよ」と呟き、
フィルはギルドの奥へ向かった。

ギルドの裏手にある小さな訓練場は、夕方や夜には真面目な冒険
者が詰めているが、昼間は皆出歩いていて人は居なかった。

フィルとギルド長だという老人の監督の下、木製の得物を持った
2人の男が開始の合図を待っている。

「それでは、始めッ」

老人の合図により、2人はゆっくりと距離を詰めた。

2人は軽く剣を合わせ、お互いの力量を測る。

ナイフの形の木刀は、刀に慣れたレオには少々扱いにくく、力で
ねじ伏せるタイプのギルの剣は流すので精一杯だった。

それでも上手く使って牽制を加えつつ、時には身を翻して予想外
の行動を取るレオの動きは、対応が難しく、ギルも攻めあぐねてい
た。

先に息が上がってきたギルが勝負を仕掛ける。

低い姿勢から繰り出された足払いを、レオが宙を舞ってかわした。

レオが空中から首めがけて木刀を振るうが、ギリギリで避け、着地点に向けて強引に剣を振るう。

「グッ」

2本の木刀を何とかあわせ、後ろに飛んで威力を軽減する。

距離が開いた隙にギルは剣を持ち直し、完全に体制の整っていないレオに向けて大きく振りかぶった。

しかし、レオが前傾姿勢になりかけるのを見て、慌てて剣を振るうとする。

直後に姿勢を戻したレオに、ギルもフェイントだと気付いたが時既に遅く、次の瞬間に止めかけた剣と首に向けて、尋常ではない速度で体重と勢いが乗った木刀が襲い掛かる。

「まいった」

首に添えられた木刀を見て、ギルは少し残念そうに呟いた。

「さすがだ、やっぱり駄目だったなあ」

「そうでもないさ、着地の時の一撃はかなり危なかった。対人戦はあまり慣れてないから、本気でやったけど思うように行かなかったよ」

グラビティワールド での対人戦とは、プレイヤーキラーとの戦いの事だ。

確かに一時期狙われていたが、基本的にはモンスターと戦うゲームなので、全体から見れば極僅かだ。

「そっぴゃ、確かにフェイントは一回しか使ってねえな」

「うっ、後でその辺ちよつと教えてくれると助かる」

恐らく、ゴブリンに妙に苦戦したのはその辺りが理由だろう。知能がある相手と戦いなれていないのだ。

その当たり前のような二人の様子を呆然と眺めていたフィルとギルド長は、一度互いに顔を見合わせてしまう。

「腕は立つだろうとは思ってましたが、ここまでとは……」

「いつそDにしてみようか……？」

呆然と呟くギルド長に、慌ててレオが止めに入った。

「ま、待って下さい。ただでさえ特例2回で目立つんですから、これ以上されたら悪目立ちしすぎます。取り合えずはEでいいですよ」

本来名を売って貴族に繋がりを持つつもりだったが、ここの貴族が駄目だとわかった以上、あまり目立ちたくはない。

せっかくの提案を断られたギルド長は少々顔を顰めたが、一理あると思ったのか、諦めてフィルと共にギルドへ戻っていった。

ランクアップの作業を終えて、ロケットの光を赤から黄色に変えたレオは3時間ほどギルと訓練をした。

日が傾きかけて来たので訓練を終えてギルドを出る。

「どうだ、汗も流したし、今日も付き合っついていかないか」

酒を飲む仕草をして誘ってくるギルに、レオは困ったように視線を背けた。

「昨日あの後ちょっとな……今朝二日酔いもしたし、今日は止めとくよ」

今日も飲んで帰ったりしたら、明日の朝フライパンを持った女将に出会う事になるかもしれない。

残念そうに「そうか」と言っつて酒場に入るギルの向こうで、トランプのような物で遊んでいる男達が見えた。

「あれは……」

「ん、トランプがそんなに珍しいか？確かにちょっと高くて、持っている奴はそう多い訳じゃないが」

トランプの存在に興奮したレオは、売っている店を聞いて後で買っつていこうと心に決めた。

幾らここが現実だと認めたとはいえ、望郷の念が消えた訳ではない。

元の世界の遊びに再会できると興奮しているレオに、呆れたようにギルが声をかける。

「そんなに喜ぶ事かあ？トランプなんて、結構一般的な……」

と、そこまで言っつて何か思い出したのか、ギルが入りかけた酒場

から戻ってきた。

「そついや、前に一般生活用の魔法覚えるって言ってたが、もう覚えたのか？」

「あ」

折角教えてもらっていたのに、冒険者ギルドに入った時の興奮から、すっかりその事を忘れていた。

間抜けな声を上げたレオに苦笑しつつ、ギルと一緒に冒険者ギルドへ戻るように促した。

「生活用の魔法ですか？」

受け答えたフィルが、考えるように首をかしげた。

「ええ、魔法は使えるので、覚えられると思うんですよ。有れば便利なものも結構あると聞くし、覚えておこうかと」

「因みにどんな物を？」

「洗濯とか、綺麗な水を作るとか、お湯を沸かすのとか有ると聞いたんで、良かったらそう言っの教えて欲しいです」

「それ位なら、魔術師を探すまでも無いですね。実は私も多少魔力があるので、訓練所で教えてあげますよ」

訓練所に行って待っていると、フィルが桶を持ってやって来た。

「それでは、まずはちょっと見ていてくださいね」

そう言ってフィルは桶を置き、その上で指を下に向けると、「雫よ」と呟く。

指先から水道を捻った時のように水が出て、暫くすると桶が一杯になった。

「こんな感じですね。使う魔力も少ないので呪文も簡潔です」

その後「回れ」と言うと、今度は桶の中の水が回りだす。

それが止まると立ち上がって、「どうぞ」と水の入った桶を指した。

レオは少し緊張しながら桶の前に立つ。周りではフィルと、何故かついてきたギルが様子を見ている。

「回れ」

さっきの光景を思い出しながらレオがそう言うと、とてつもない勢いで水が回って周囲に飛び散った。

「「「……………」」」

ずぶ濡れになった3人は暫し無言になったが、フィルが場をとりなすように声をあげる。

「……………ええと、水、無くなっちゃいましたし、次は水を出す魔法を試してみますか」

何となく先の予想がついたのか、レオが指を桶に向けると、ギル

は慌てたように数歩身を引いた。

「雫よ」

すると、お世辞にも雫とは呼べない量の水が一気に溢れ出し、水鉄砲となって発射されて桶が地面を滑っていった。

流石のフィルも、これには困ったと頭を抱えた。口元を隠して震えているギルは、笑っている訳では無いと信じたい。

「えっと、レオさんは手加減という言葉を知っていますか？」

「ハイ」

そうですかー知ってるんですかー。と再度頭を抱えるフィルに、レオは目を瞑って肩を落とした。

落ち込んでいるレオを何とか励まそうと、フィルがフォローを入れる。

「ま、まあ皮袋を買ったお店に行けば、金属製の水筒もある筈ですよ。それじゃ、次は……お湯を……」

そこまで言ってフィルは自分の体を見た。

さっきの『水』で、ずぶ濡れになっている。

隣のギルを見ると、彼も同じ事を考えていたようで、2人は視線を合わせて背中に伝う冷や汗を感じた。

「きよ、今日はここまでにしましょう。私もそろそろ、ギルドに戻らないといけないし!」

「あ、ああ、俺もそういや、ゲオルグと飲む約束があったんだ」

「いやっ、ちょっ……」

片手を上げて引き止めようとするレオから逃げるように、2人は訓練所から消えていった。

部屋に戻って忍び装束から服に着替えていると、誰かが扉をノックしてきた。

「ちょっと待って……どうぞ」

てっきり女将かと思ったのだが、扉を開けてこちらを見ているのはリサだった。

「へ、リサ？あ、どうぞ入って」

悩むように逡巡しているリサに声をかけ、部屋に招き入れる。

椅子にリサを座らせ、レオは少し離れて立つ。

テーブル脇の椅子は、昨日巻き込まれて1つ壊れてしまったため、修理中で1つしかなかった。

「それで、何か用かな」

「……」

中々言い出さないリサにえもいわれぬ焦りを感じたレオは、何の

話か考えた。

街中を歩いているようなので、買い物相談かと思う。

「あ、なにか必要なものがあるなら……」

「違うんです」

否定したあと、また暫く黙り込む。

首を傾げたレオに、意を決した様子でリサが話し出した。

「……次から私も、街の外に行く時に連れて行って欲しいんです」

「外へ連れてつてくれって、依頼に……？」

これにはレオも戸惑ってしまう。

依頼を手伝うと言う事は、冒険者の同業になると言う事だ。彼女の心情を察すれば、少々急すぎる変化に思えた。

「無理はしなくて良いんだよ。信じられないかも知れないけど、俺も結構強いし……」

リサに見られた痴態の数々を思い浮かべ、後半は声が小さくなっていた。

しかし、リサは真剣な表情でレオの目を見つめ、冗談では無いと訴えかけている。

暫く見ても表情を変えないリサの真意を察し、レオも真面目に答える事にした。

「解った、正直リサが居ると色々助かる。これから宜しく頼むよ」

リサはそれを聞いて何処かホツとしたように肩の力を抜き、一度立ち上がってレオの方を向く。

そして奴隷商人に仕込まれた通りの挨拶をした。

「よろしくお願いします。レオ様」

それを聞いたレオは笑って軽く頭を振り、「様なんて着けなくていいよ」と、言

おうとしたのだが、そこは流石にレオも男。頭を振るまでは実行出来たのだが、そこまでで止まってしまった。

れ、れれれおさま？レオ様あ！？い、いや駄目だ、俺はリサを奴隷から解放しようとしているんだから……でももう一回くらいなら

……

ハツハツハツと笑いながら暫し壊れた人形のように頭を振り続けるレオを、リサが不審に思い始めた頃、ようやく決断したレオが言葉を続けた。

「も、もういつ……ゲホゲホ。俺に様なんで着けなくていいぞ、別に俺は貴族でも何でもないんだし」

言ってから、ふう。と深呼吸をするレオに、不思議そうに「はあ」と曖昧に頷くと、挨拶をしなおした。

「よろしくお願いします、レオさん」

うんうんと微妙な表情で頷くレオに、これで良かったのかなあ。
と少し不安になるリサだった。

話が終わり、リサを部屋から出そうとした時、レオはいい事を思いついてリサを引きとめた。

「リサっ、ちょっと頼みたい事があるんだ」

突然真面目な顔で呼び止められたリサは、少々顔を強張らせると、レオが切羽詰った声で頼み込む。

「魔法を教えて欲しいんだ……」

以前に強力な魔法を見せ付けられていたリサは、少々面食らうが、知りたいのは生活用の魔法だと言う事で納得した。

真面目な顔で頼み込まれた時は、一体何を頼まれるのかと思っただけ、簡単な事だったので安堵の溜息をつく……が、数分後、彼女は別な意味で溜息をつく事になった。

師匠に教えてもらった魔力制御の基礎を、2時間かけて説明した頃には、夕暮れになっていた。

それでもほんの少ししか弱まらなかった水鉄砲に、リサは頭を抱える。

レオの方は生まれて初めて感じる体内の魔力に、とても上機嫌に

なっていた。

何でも頼んでいいよと言われたので、リサは片っ端から高いものを頼んでやった。

「あ、そうそう。食事が終わったらちょっとトランプでもやるう」

「とらんぷ？」

懐から出したトランプに、リサは小首をかしげる。

しかし料理が来たので一度仕舞い、食後に説明する事にした。

「食べたらやるう、幸い報酬の銀貨が結構あるしポーカーでもしようか」

そうして食後にポーカーをしたのだが、最初の3戦程はルールが良く解らず、リサが連敗してしまう。

リサの顔がどんどん険しくなっていくが、4戦目にわざと1回負けると、ほんの少し嬉しそうにしていた。

その顔を見ただけで、トランプを買ってきた甲斐があったなと思う。

例えその報酬として、リサに大銀貨を3枚払う事になったとしても。

人型の魔物（上）（後書き）

こつこつと事って、良く有りますよね。

え、何かって？

連敗している初心者をかawaiiそくに思っ、わざと負けたら、本当にツキが逃げていってその後連敗してしまう事です。因みに作者はあります。ギャンブルって難しいですね。

ようやく仲間が1人増えました。これからが本番なので気合を入れなおしています。

そろそろ説明も終わりです。近く、動き出す事になると思うのでご期待ください。

ps ちょっとPCの調子が悪い……大丈夫かな

人型の魔物（下）

朝、服のまま外へ出ようとすると、女将に呼び止められた。

「ようレオ、昨日は良い見世物だったよ」

痛いところを突かれたレオは、ぎこちなく振り返る。

「見てたって……仕事はどうしてたんですか」

「仕事なんて手につく訳無いだろ、3戦勝った後のアンタの負けっぷりって言ったら……プツ」

昨日の光景が思い出されたのか、女将が噴出した。

その場に居るのが辛くなってきたレオが、振り返って宿を出ようとしたのだが、何とか堪えてレオを呼び止めた。

「ああ、ちょっと待ちな。昨日はみんな面白がって見てたからほっといたけど、ウチは博打は禁止だ。次やったら引つ叩くから覚悟しな」

「はい……」

「ま、昨日で多少は懲りただろうがね。皆にカモだと思われたんだ、今日は早めに帰ってきな。ウチに居る限りは守ってやっから」

女将の優しさに、不遇慣れしたレオはついつい瞳を潤ませてしま

った。

「あ、有難う御座います」

肩を竦めながら、さっさと行けと手を払って笑いかける女将にもう一度礼を言つて、レオは宿を出た。

小太刀を持ってバルドの工房に行く前、ギルドの左向かいの店鉄製の水筒を買いに行ったが、鉄板が薄く、少々強度が不安だった。後で鍛冶師に会いに行くのだし、駄目元で強化を頼もうと思いい、取り合えず買つていく。

バルドの工房兼店が見え始めた時、店からエルフが出て行くのが見えた。この街で始めて見るエルフに興味もあったが、工房に用もあるし、道の反対側に行ったので諦める事にした。

レオが店の中に入ると、奥の工房からそれを見つけたバルドが「待っていたぞ」と、声を上げた。

「良く来てくれた、座つて話そう。工房に来てくれ」

中に入り、椅子に座つてポケットから刀を取り出した。

それを見て目を輝かせたバルドは、慎重に受け取つて刀身を見た。

「それは回避……というか、攻撃に対する対応速度を上げる魔法がかかっている……はずです」

「ほう、それはまた便利な……」

嘗め回すように全方向から刀を見るバルドに苦笑しつつ、來国俊も取り出す。

「言われた通り手入れしてみました。それと今回は他にもう一つお願いがあるんですが」

持っていた刀を置き、先に來国俊を確認し始めた。前回余りにも酷い扱いを受けていたと知ったので、心配だったよ
うだ。

「ふむ……カタナの方は大丈夫なようだな。それで、頼みつてのは何だ」

「この水筒の鉄板を補強して欲しいんですが……」

「んな事鍛冶ギルドに頼めよ　って、もしかや旅に出るのか？」

腕を組んで聞いてくるバルドに、レオが頷く。

「ええ、数日後にナルバ共和国の方へ行きます」

「それならこのカタナを貸すのは不味いだろ、それに着いてく訳にもいかねえんだ。代償の研ぎだつてできん」

「刀は予備がまだ幾つかあるから、大丈夫です。それと、研ぎの代わりに水筒の強化と、ナルバ共和国に居る腕の良い鍛冶師を紹介して欲しいんですが」

確かにコイツは素人には……と、納得したように頷いたバルドは取り合えず水筒を見せると言ってきた。

水筒は一般的な楕円状の物で、それを見たバルドは少々顔を顰めた。

「これは面倒だな、1から作った方が楽だろう。他に何か要望はあるか」

「それなら全体は薄く、口を大きくしてもらえますか。水は自分で作れるんで、空にして常に持ち歩けるように」

「解った、明日……いや、明後日には仕上げよう。半端なものは渡したくないしな」

お礼を言っ て握手をすると、今日は多少暇があるのかお茶を持ってきた。

ドクダミ茶のような香りがする薬草茶で、レオは一口飲んで驚いた。

「随分と美味しい茶ですね。何処で買ったんです」

「ああ、いや、実はさっき来たエルフに買ったんだ。気に入ったならアイツが前に持ってきたメモをやるう。俺はそれを見ても薬草の見分けがつかなかったが、お前さんなら解るだろう」

そう言っ てバルドは作業台の横にある机からメモを一冊持っ てきた。

軽く中を見ると、様々な薬草の効能や特徴が書かれていた。

「ありがとう、旅の途中で見かけたら集めてみようかな。ところでここにはエルフっ て結構来るんですか」

「おう、この街はドワーフの鍛冶屋は2軒しかないからな、鏝やナイフなんか良く買いに来る」

ファンタジー系のネタでは、ドワーフとエルフは仲が悪いのが通例じゃないかと思ったのだが、ここでは違うようだ。

レオが少し考えるようにしていると、バルドも思いついたような声を上げた。

「そう言えばお前さん、弓は使わないのか。エルフは例外無く弓の名手だと聞いたが」

それを聞いたレオは小さく唸った。手裏剣や投げナイフのスキルはあったのだが、弓は現実でもゲームでも経験が無い。

ちよつと不味いだろうかと思いかけた時、バルドが慌てて付け加えた。

「ま、まあ……何事にも例外はつき物だよな」

気まずそうに目を逸らすバルドに、何とも言えない気持ちになりつつ、取り合えずは誤魔化せて良かったと胸をなで下ろした。

工房で朝食をご馳走になった後、バルドに貰った紹介の手紙を持って部屋に戻る頃には、気分は少し浮ついていた。

昨日リサが、これからは一緒に依頼をこなすと言ってくれたからだ。

忍び装束に着替えて収納袋を取り出し、部屋をノックすると中から返事が返ってくる。

「どござ」

部屋に入って挨拶をすると、早速今日の予定を言う。

「数日後にはここを発つから、旅の準備に服の注文をした後、ちょっと依頼を受けようと思うんだ」

そう言って収納袋を探るレオを、リサが制止した。

「あの、その前に1ついいですか」

「ん？」

言いつつ収納袋を探り続けるレオを、呆れ混じりの困ったような声でリサが止める。

「あの鎧は、無いと思うんです」

「えっ……」

リサの最もな指摘に、小心者で心配性なレオは眉を八の字にして、収納袋から顔を上げた。

自慢の装備が否定されて悲しいと言つのもある。

「で、でも危ないし……」

「それを言つなら、あれを着ていると、いざと言つ時に走れないです。それに、レオさんは足が早いので着いていくだけでも大変でした」

「じゅめん……」

「それとまた門の衛兵さんに、事情を聞かれると思いますよ」

「うっ……」

それでも何とかリサに鎧を着せようと食い下がるレオだったが、やがてリサの視線がどんどん冷めていくのを感じて、盾だけを持たせるに止めた。

あの後レオの持つローブを着せようかとも思ったが、元々長身のレオでもブカブカだったローブをリサに着せても結果は見えているので、新しく買う事にした。

一応丈を合わせられないか洋服店で聞いてみたが、魔法が掛かっているので加工が難しく、時間が掛かると言うので今回は諦める。

既製品の灰色のローブを着せ、レオの持っていた地味目の装飾の青い杖を持たせると、どう見ても魔術師なりサが出来上がった。

服の寸法だけ測りなおして、ギルドを目指す。

「しかし、やっぱり胴鎧だけでも……」

「まだ言いますか」

リサの呆れたような声にしゅんとなるレオだったが、通りの向こうからゲオルグの声がして驚いて顔を上げた。

「よう、レオじゃねえか。おっ、そっちが前言ってた女の子か」

隣のギルも「よっ」とリサに手を上げる。

「ああ、彼女はリサ、ダイヤモンド人の魔術師だ。こっちはゲオルグとギル。BとCランクの冒険者で、これから一緒に旅をする事になってる」

レオが簡潔に仲介をすると、リサもおずおずと頭を下げた。それを見てゲオルグは笑って右手を差し出す。

「よろしくね、リサちゃん。アタシはゲオルグ、訳あって男の名前だけど、こう見えて正真正銘女だ」

女性と言う所で多少警戒感が薄れたのか、リサも手を右手を出して握手をした。

「ま、正真正銘、意外にも。だけどな」

「何か言ったかい」

おどけた調子で言ったギルだったが、ゲオルグの鋭い眼光を前に「いや、別に……」と、視線を逸らした。

そんな2人の様子に、リサも楽しそうに少し笑うと、顔を戻して挨拶をする。

「よろしくお願いします。ゲオルグさん、ギルさん」

あつという間に仲良くなった3人を見て、心を開き始めたリサに嬉しくなりつつ、これまでの苦労を考えると遣る瀬無さを感じてしまっレオだった。

話を聞くと、丁度旅費の準備に一稼ぎしようとしていた時らしく、一緒に行かないかという話になった。

「珍しくオーガ群れが出てるらしくてね、これから討伐に行くんだけど、レオ達も一緒にどうだ」

話によるとオーガと言うのは、人より少し大きめの、ゴブリンのような人型の魔物だそうだ。

少し強い部類に入る魔物らしいが、対人戦の訓練をしたかったレオには丁度良かった。

「行ってみようかな。けど、Eランクでも受けれるものなのか？」

「単体ではそこまで強く無いからな。群れとなると別だが、俺達と一緒に問題ないだろう。俺とレオでギルドに行つて受けてくるから、二人は先に行つてくれ」

「あいよ、女をあんまり待たせんよ。リサちゃん、行こうか」

「はい」

そうして男女に分かれて少し歩いた所で、何度か背後を確認したギルが小声で相談を持ちかけてきた。

「ちょっといいか、ゲオルグの事なんだが……」

「ん、どうした？」

その困ったような口調に、少々真剣な雰囲気で答える。

「アイツの性格は知ってるよな」

「ああ、悪い奴じゃないよな」

「そう、悪い奴じゃないんだが……アイツの頭の事情も知ってるよな」

何の話か大体察したレオも、一度背後を確認してから頷く。

「レオの実力の件なんだが、あまり知られたく無いなら、街を出るまでも良いからアイツには秘密にして置いた方がいいぞ」

「そうか……」

正直今目立って引き止められたりしたら面倒だ。ゲオルグには悪いが、ひとまず秘密にして置く事にした。

ギルドに行くと、フィルは昨日の2人の訓練を見ていたので、特に問題無いだろうとオーガ討伐の依頼証を渡してくれた。

西門の前で合流し、4人で森を目指す。

その途中、リサが前に渡した指輪をつけ続けている事に気がついて、外すよう頼んだ。

「戦闘中には、何回か敵に狙われる事もあるだろうし、その度に警報が鳴ったら皆驚くから、外しておいて」

「あ、すみません」

そう言って指輪を外すりサを見て、ゲオルグはニヤニヤと笑った。

「大仰な盾に警報つきとは……しかも、聞いた話じゃ全身鎧まで着せようとしてたみたいじゃない」

恐らく女性2人で待っていた時に話したのかもしれない。レオは勤めて聞こえないふりをして森を見たが、長い耳が真っ赤になっていてバレバレだった。

唯一の救いと言うか、残念なところは、リサが良く解らないと言う顔をしている事だろう。

しかし、放っておけば気付かれそうだったので、慌てて話題を変えた。

「そ、そう言えばオーガは何匹くらいの群れなんだ？」

「ククツ……ああ、5〜6くらいってフィルちゃんは言ってたな」

後ろでこっそり笑っていたギルが、助け舟を出した。

ゲオルグは、まだからかい足りない様子だったが、森の前に着いたので顔を引き締める。

「んじゃ、行くよ。レオはEランクだから、無理せず援護とリサの護衛。まあ、やれそうだと思うたら自由にしな。リサは魔法でアタシ等の援護を」

「はい」

1番ランクの高いゲオルグの指示に頷き、4人は森へ入っていった。

森に入って2時間ほど雑魚を蹴散らして歩いた頃、ようやくオーガの群れを見つけた。

聞いた数より少々多く、10を少し越えるくらいだ。

まずゲオルグとギルが襲い掛かり、側面をレオが牽制する。

少し離れた敵にはリサが魔法で氷柱を飛ばし、4人が連携になれ始めた頃。

左側面から、敵の増援が来た。

それを見たゲオルグは驚愕する。

「ジャイアント……」

見上げる程の巨人は、ジャイアントと呼ばれており、Bランク以上でも安全に倒すなら2人、それ以下なら4〜5人は要するという化け物だ。

更にその外にオーガが数匹、ゲオルグの近くに現れた。

「不味い引けっ、アタシが

ギヤイイイイイイン ……

は？」

自分が引きつけると言おうとしたゲオルグの前で、巨人の持つ斧の先端が3割程、切り取られて宙を舞った。

ん、随分でかいなあのおーガ、リサの方に行きそうだし俺が相手するか。

ジャイアントを最初に見つけたレオは、特に気負い無くその巨人へ向かう。

あれだけ大きければ、動きも鈍いだろうと思ったからだ。

最初はジャイアントも雑魚を払う気持ちでレオに斧を振った。

レオの方も動きは遅いだろうと思っていた事もあり、意外と早いその斬撃に少々面食らい、刃を全て落とすつもりが、3割程しか斬れなかった。

両者共に驚きで一瞬距離を取ったが、鉄の斧を呆気無く斬られたジャイアントは、最も優先すべき敵としてレオを認識した。

襲い来る巨人に舌打ちしつつ応戦する。

敵の動きは想像以上に素早く、リーチの差もあって中々攻めに転じられない。

(つていうか、リアルでこんな相手に魔法禁止の縛りプレイをする事になるとはね……)

ゲオルグの前で魔法は使いたくなかったが、巨人は中々に強敵だった。

一方、巨人の方もレオが右手に持っている 天羽々斬り の威力

を知って、左側を攻める為に四苦八苦していた。

しかし経験の差か、やがて完璧なタイミングで巨人の斧がレオに迫る。

それを強引に左手の刀で受け流したレオは、転がるように巨人の懐に入り、刀を振るう。

火花を散らせながらも、折れる気配の無い左の刀に巨人も慌てて後退するものの、下段から伸びた刃を避け切れず、右の脇腹から胸までの斬り上げを食らった。

体制を崩したレオも一旦引き、両者の距離が開く。

チラリとゲオルグの様子を見ると、増援のオーガに集中していた。

その隙に、せめてこれだけはとクイックを使う。

ゴッオオオオオオ！

突然魔法を使った相手に驚いたのか、巨人が慌てた様子で叫びながら突撃して来る。

レオも刀を構え直し、巨人に向けて走り出した。

限界まで引き絞った斧がレオを襲う。

寸前に左の刀を捨てたレオは、倒れこむように地面に伏す。

胸を狙った斧は、本来ならばそれでも僅かに当たっていただろうが、刃を削がれていた事で完全に空を斬る。

斧が過ぎた直後、レオは左手と足に全力を注いで飛び上がった。

宙を舞いつつ、アドレナリンとクイックで限界まで引き伸ばされた時間の中、視界の端に見えた巨人の首に刃を這わせる。

流石に強引に飛んだせいで、しゃがみ込むような無防備な格好で着地してしまい、慌てて周囲を警戒した。

周囲の安全を確認した後、レオが緊張と興奮で荒れた息を整えつつ立ち上がった頃に、背後で巨体が崩れ落ちる音を聞いた。

一息着いてゲオルグ達を援護しようとして振り向くと、オーガは全員逃げ出していた。

「あれ？」

間抜けな声を出して首を傾げるレオを、オーガを倒して援護しよ

うとしていたゲオルグは口を開けて眺め、ギルは苦笑しながら、リサは無表情で周囲を警戒していた。

仁王立ちしたゲオルグの前で、レオは何故か正座している。

どうして正座を選んだのかと言うと、ここ数日で身につけたレオの勘が、今は正座だと告げたからだ。

「へっええ〜、つまりこう言う事。アタシが馬鹿でえ、口を滑らすかもしれないからあ、秘密にして置いた。と……」

鞘に入った剣でペシペシとレオの顔や肩を叩くゲオルグに、必死の弁明を図る。

「ち、違いますよ、別にわざわざ言うほどの事でも無いかなあ。なんて……」

ゲオルグの眼光により、言い訳は途中で途絶えてしまう。

必死にギルに助けを求める視線を送るが、ギルは笑いを堪えるような妙な顔をして周囲を警戒するフリをしている。

いっそばらしてしまおうかと思うが、口裏を合わせていたと知られたら、頬を撫でる鞘着きの剣から、鞘が取られる事請け合いである。

「ジャイアントを単独で瞬殺できるのって、言うほどの事でもないんだー。ふーん」

剣呑な雰囲気、背中を伝う冷や汗が倍增した。

「で、でもホントなんか気迫を感じ無かったと言いますが、弱つたような……」

「はあ？つたく、何言つて……」

だが、ジャイアントの死体を見たゲオルグは眉を顰めた。

「おいギル、レオもちよつと手伝え」

リサを警戒に残し、3人で巨人をひっくり返した。

「これは……」

死体を仰向けにして見ると、ジャイアントは確かに痩せていた。ジャイアントは元々少しアバラが見えるのだが、この死体はそれが多い。

しかも良く見ると頬もこけている。

魔物は強さで上下関係が決まる。この森の中で、ジャイアントは間違いなく1番強いだろう。そのジャイアントが痩せ細っていると云うのはどう考えてもおおかしかった。

「レオの話は置いといて、コイツは全員で倒した事にしてでも、早く帰って報告した方がいいんじゃないかねえか」

「そうだな、何だか妙な感じだ。上に報告を入れておいた方がよさそうだね」

ギルの言葉にゲオルグも頷いて、オーガとジャイアントの耳を持つて街へ戻る事にした。

報告を終え、酒場に行くとアルザダが待っていた。

5人分の席を取っていてくれたので、皆でそこに座る。席に座るとアルザダがリサに声をかけた。

「大分顔色も良くなったね。食事はちゃんと食べているかい」

「はい、あの時はお世話になりました」

奴隷の輸送中に食べ物分け与えていたアルザダは、父親と同じ商人と言う事もあってリサにはかなり好印象だった。

因みにギルがさほど警戒されなかつたのは、アルザダと共に食べ物を配っていたからでもある。

ただ、それを見たレオが「何で俺の時だけ……」と、誰にも解らないよう小さく肩を落としたのは仕方のない事かも知れない。少しして飲み物が届けられた。レオとリサ意外は酒だ。

「では、再開と新しい出会いに」

アルザダの挨拶で乾杯も終わったところで、旅の計画を練る前に、今日あったことを話し合う事にした。

「最近魔物が増えてるのは良く聞くけど、西の街道でジャイアントが出るってのは、さすがに予想外だね」

「そうだな、しかもジャイアントが痩せてたなんて聞いたことねえ」

神妙な顔で考え込む冒険者2人に、アルザダが不安げに声をかけ

た。

「ギルド長はなんと？」

「調査をしてみるつてさ。まあ、北の街道の近くだから流れて来た可能性も無くは無いが……向こうでも滅多に見ないからね」

「それでは、暫くは様子を見た方がいいのでしょうか」

少々気弱になったアルザダに、ギルが首を傾げる。

「どうだろうなあ、正直、この後変化があるとすりゃ、悪い方だと思っぞ。行くなら早い方がいいだろう、さもなきゃ暫く様子見かな」

「待つてくれ、アルザダはもう仕入れをしまったら。今から中止になったら、かなり不味いんじゃないか」

皆の視線がアルザダに集まる。

アルザダは、少々困ったように頬をかいた。

「そうですね……この辺りが特産の食料も結構買ったので、暫く行かないとかなるとかなりの赤字になってしまいます」

暫し沈黙が場を支配したが、レオは迷いを振り払うように頭を振った。

「俺としてはアルザダの助けも必要だし、ここに居続けても良い事は無い。行く事にするよ」

「ま、そうだね。アタシらが居れば、大抵の敵が出てきても問題無

いだろう」

リサは少し不安そうだったが、この際仕方がない。

「で、出発はいつだい」

「二日後でどうだ、間に合いそうか？」

アルザダは頷いた。

「私はもう殆ど準備は終わっています」

「俺とゲオルグは、元々冒険者だ。出るなら直ぐにでも出れるさ」

「なら明日俺達の荷物のチェックを頼む。準備は念入りにしたい、出発は二日後だ」

それから夕食をとって酒場を後にした。

宿に戻って部屋に入ろうとすると、背後から呼び止められた。

「あの……」

「ん、リサ、どうかした？」

彼女は少し迷うように言い淀んだが、

「……いえ、何でも無いです」

と言って部屋に戻ってしまった。

何を言いかけたのか少し気になったが、良く解らなかったので、
才も深くは考えなかった。

人型の魔物（下）（後書き）

これで説明と紹介ばかりの一章は終わりです。

特に話しに進展もなかったのに読んでくれて有難う御座いました。

二章は序盤笑いも少なく、地味な展開ですが、後半はちょっとは盛り上がるカンジになると思うので、もう暫く我慢してお付き合いください。

今回はちょっと最後不気味な雰囲気を出したくて、後半笑いを少なくして予定していた物より少し短くなりました。雰囲気は出ていたでしょうか……？

さて、次回はちょっと時間が飛んで旅立つところからの予定です。これからはシリアス成分が増えるかと思いますが、よろしくお願います。

二章 盗賊と手紙

二日後、街を出る挨拶をして周る事にした。

「女将さん、今までお世話になりました」

レオの生真面目な挨拶に、女将は苦笑してしまう。

「別に今生の別れでもないんだし、ただの宿の女将にそんな丁寧な挨拶は要らないさ」

「いえ、女将には本当に世話になったので」

そう言つて頭を下げると、流石の女将も気恥ずかしくなったのか、頭を掻いて背を向けた。

「テーブルは弁償して貰ったけど、椅子の修理代はまだ払ってもらってないんだから、絶対に今度払いに来なさいよ」

「はい、必ず」

頷いて、宿の外で待つリサの元へ向かう。

「リサは挨拶は済んだ？」

彼女は黙つて頷く。

元々この街での知り合いなど、女将くらいしか居ないのだ。

「俺はもう少し回る所があるから、西門のアルザダの荷馬車へ先に向かってて」

「はい」

そこで一旦リサと別れ、冒険者ギルドへ向かった

ギルドに入ると、フィルがいつもの笑顔で迎えてくれた。

「街を出るんですってね。レオさんは強いから大丈夫だとは思いますが、くれぐれも気をつけてください」

「解ってます、もう叱られるような事はしません……多分」

言葉を濁らせたレオに、仕方がないなと言つ視線を向けながらフィルが言う。

「奴隷の女の子を助けるんですってね。大変だと思つけど、無茶は禁物ですよ」

「あー、その話は誰から……」

「ゲオルグさんからですけど」

当たり前のように答えるフィルに、やはりゲオルグは信用できないとレオは胸にしつかりと刻み込む。

「恥ずかしいから、余り言いふらして欲しくなかったのに……」

「良いじゃないですか、別に責められるような事でもないし」

そう言っつていつかの向日葵のような笑みを浮かべるフィルに、レオも苦笑を返した。

「ま、そうですね。それじゃ、いつかまた来ますから、それまでお元気で、色々教えてくれて有難う」

「お礼はいいですから、また来ると言うのだけは守ってくださいね？」

その言葉に、レオは力強く頷く。

最後にレオは、バルドの工房へ向かった。

「こんにちは、水筒は出来てますか」

「おう、仕上がったぞ。それと刀の方だが、本当に預かっていいのか？」

バルドの作った水筒は完璧だった。

これならば忍び装束の中に入れておいても邪魔にならないだろう。

「良いですよ。ただし、貸すだけですから」

「必ず取りに来る。だろ？勿論構わんさ、四六時中眺めて、何回か試作も作ったし、いつでも取りに戻って来い」

それはもう殆ど要らないんじゃないかと思うが、そんな無粋な事は言わない。

「絶対に、取りに戻ります。水筒有難うございました」

「今から行くんだろ、見送りに行くぞ。西門だったな」

店番のドワーフのおばさんに声をかけ、2人は連れ立って西門へ向かった。

西門に行くと、仲間はまだ準備を終えていた。

門の前に停めてある荷馬車は2台あり、それぞれにアルザダの商品が所狭しと積まれている。

「おっ、ゲオルグも一緒か。ゲオルグ、レオの事頼んだぞ。ちょっと頼りないが、コイツには俺も借りがあるからな」

「アタシに頼まれても困るよ……レオって滅茶苦茶強いんだから……」

その返事はバルドも意外だったのか、少々目を見開いた。

レオは心中で、「ホント簡単にバラすなあ」と思ったがバルドになら良いかと黙っておく。

「ほう、そうなのか。ゲオルグのお墨付きとは……本当に見かけに

依らないが強いだな」

何とも失礼な言い草に、レオは苦笑してしまう。

それを見て面白そうに笑ったバルドは、肩を叩いてレオを送り出した。

「それじゃ、達者でな」

「ああ、バルドも」

「じゃあなバルド、今度来た時はまた剣の手入れ頼むわ」

「研ぎ終わるまで待つてるなら、また手入れしてやる。今度は途中で消えるなよ」

しつけえ奴だ。と肩を竦めて荷馬車に乗るゲオルグに続いて、レオも荷馬車に乗り込む。

衛兵には、リサの所有権について尋ねられたが、正規の書類もあるので通る事が出来た。

大分小さくなったダール興商自治区の外壁を見ながら、この先の旅に思いを耽る。

それから二日、荷馬車はのんびりと街道を進んでいた。

2度ほどゴブリンに出会ったが、問題にはならなかった。

「しっかし、朝から晩まで水鉄砲撃って、良く魔力枯渇を起こさな

いなあ……」

ずっと魔力制御の練習をしているレオに、ギル呆れたように声をかけた。

現在こちらの後続の荷馬車には、ギルとレオとリサの3人が乗っている。

レオとリサ以外は手綱を握れるので、ローテーションを組んでいるのだ。

「だってこれ、生活用の魔法だろ。フィルも消費は少ないって言うてたし」

「この世界の魔術師が全員レオみたいだったら、井戸なんてそもそも掘る必要無いんだがな……」

言われてみればそうだ。この勢いで10人が水を出し続ければ、数十世帯分の水は優に用意できるだろう。

宿の隣に井戸はあったし、これは普通ではないと思った方が良さそうだ。

「ふーむ、そういう物なのか」

「これ以上頭が痛くなる事言わないでください。ほら、また背中から魔力が溢れ過ぎてますよ」

薬草の本を読みながらリサが困ったように言った。

リサも根気良く教えているが、中々上手く行かない。

練習を一旦休んで、気晴らしに話題を変える事にした。

「これから行くナルバ共和国って、どんな所なんだ？」

「ああ、レオは最近この辺に来たんだっけ……元は同名の帝国だったんだが、200年前の戦争中に、神の怒りを買ったとかで滅ぼされたらしい。本当かどうか知らんがな、その後元属国だった国が合わさって今の国になった」

「神の怒りとかあるのか……」

「そりゃあおつかないって話だぜ、それからは神の威光に逆らおうなんて国は無くなっただくらいだ」

と、ギルが肩を竦めながら言う。

この世界の神がどんなものか解らないが、実際に危害を加えてくると言うのは驚きだった。

「そういえば、この辺の国って公国、共和国、魔術帝国の3国だけなのか？」

「いや、その他に教国がある。こっちは小さいが、殆どの神が祝福してる国だから、発言力はデカイ」

これにはレオも多少驚いた。

「神が祝福してるとか、解るのか」

「ああ、何でも愛の神イシスの言葉を聴ける巫女が、その国に居るらしい」

「神の声……か」

自分の身に起きた事を聞いてみたい。と一瞬思ったが、先にリサを何とかすると決めた以上、頭の端に留めて置くくらいがいいだろう。

そこまで考えて、初日に貰った手紙の事を思い出した。達筆すぎて何が書かれているか解らなかったが、この世界の人には解るかも知れない。

「なあ、これ何て書いてあるか解るか」

収納袋から取り出した黒い手紙を取り出し、ギルに渡した。

それを見たギルは「随分達筆だなあ」と、顔を顰めていたが、やがてその顔を驚愕に変えた。

「お、おいおい……『親愛なる友カークスへ、ホワイトパールより』って……お前、あのホワイトパールと知り合いなのか……？」

ギルの余りの変貌ぶりに、レオは戸惑ってしまふ。

しかし、ホワイトパールと言う名はどこかで聞いたような気がした。

「知り合いつて言うか1回会っただけだけど……有名人なのか」

「お前、世界に5人しか居ないSランク冒険者を知らないとか、ホントに冒険者かよ……」

そう言えばフィルに説明を受けた時に、そんな名前を聞いたかも知れない。確か転移魔法の権威とか。

「なるほど……それでか。しかし、あの悪趣味なまじゅ

」

と、いいかけた所で、ギルが全力でレオの口を押さえに掛かった。口を押さえたギルは、少し震えながら辺りを見回している。

「バカ！もし聞かれてたらどうするんだ……ホワイトパール様は神出鬼没で有名なんだぞ！」

その言葉に不安になったのか、リサも何処と無く怯えたように身を竦ませた。

ギルの手をを何とか振り払い、眉を寄せながら聞く。

「そんなに怯えなくても、喧嘩っ早い雰囲気の奴じゃなかったけど」

「あの方に敵対した奴は、例外無く無人島へ飛ばされたって話を聞いても、同じ事が言えるのか……？」

「……」

そういう事なら全力で訂正したかった。

専門職の魔術師では無いレオは、長距離の転移は出来ない。空を飛ぶ事は出来るが、距離によっては不味い事になるだろう。

「しかも、いつどこで現れるか解らない……そして、自分の趣味を否定されると、子供のように怒ると言う話だ」

あのネオン満載の門の趣味も、本人の前では褒めた方が良いらしい。

「カークスって人に渡せって言われたけど、誰だか解るか」

「さあな、さつきも言ったが神出鬼没で有名な方だ。Sランクの冒

「険者にしては珍しく、個人情報も殆ど出回ってねえし」

「そうか……」

「冒険者の事でギルに聞いても解らないと言う事は、現時点では諦めた方が良いでしょう。」

「それに余りそちらに集中して、リサの事が疎かになっては本末転倒だ。」

「手紙を収納袋に戻し、この件は保留する事にした。」

「しかし、随分と魔物が少ないな」

「ああ、この辺は国境で軍が介入しにくいし、盗賊が多いからな。奴等だって、ねぐらの近くに魔物が居れば狩るだろう」

「盗賊と言う言葉に、レオは正直身が竦んだ。」

「これまで人型の魔物は倒してきたが、人間を殺した事は無い。」

「そう、か……」

「対人戦の事気にしてるなら、大丈夫だぞ。魔物を倒してるつつつてもゴブリン程度だし、俺達の敵じゃねえよ」

「その的外れな補償に、レオは肝が冷えた。」

「ギルは暗に、この世界で盗賊を殺すのは当然だと言っているからだ。」

「それから4時間程して、遂にその時がやって来た。」

水鉄砲を撃って、リサに魔法の指導をして貰っていると、突然

ビイイイイイイ　　ッ！

と言う警報が、指輪から発せられた。

「リサッ」

荷馬車の上で警報が鳴ると言うことは、遠距離からの詠唱か弓矢しかあり得ない。

音に驚くりサを抱えるように守ると、盾の結界で弱体化した氷の魔法がレオの腕を凍らせた。

「敵しゅ……敵襲だ！」

無理に動かそうとした右腕の皮膚が、凍っていた為に裂けてしまった。

急いで治癒魔法を使い、ギルと共に外に躍り出る。

多少呆然としていたリサも、少し遅れて杖を構えて立ち上がった。

「ゲオルグ、敵だ！」

「聞こえてるよっ」

20人弱の盗賊が森から現れる。

ギルとゲオルグは気にせず盗賊をザクザクと斬っているが、レオは武器では手足を狙い、打撃での気絶をメインにしている為、殲滅が遅かった。

4人程処理した時、背後で微かな悲鳴が聞こえた。

見るとレオが抑え切れなかった盗賊3人が、リサに襲い掛かる所だった。

「ッ！」

レオは反射的に手を振って魔法を使う。いや、使ってしまった。咄嗟に出の早い雷撃の魔法を発射してしまい、雷光が盗賊3人を貫く。

雷光に貫かれた3人は、煙を上げてその場に崩れ落ちる。突然の殺戮に凍り付いてしまったレオに2人の盗賊が斬りかかるが、殲滅を終えたギルに斬り伏せられた。

「大丈夫か」

「あ、ああ……悪い」

震えを隠すために急いで荷馬車に乗り込んだが、ギルは特に気にならなかったらしく、黙って後に続いた。

盗賊を倒してからのレオの様子は、明らかにおかしかった。

レオは、嘘や誤魔化しが下手だ。

ギルやゲオルグは、冒険者としてのレオの実力を買っている為、気付いていないようだが、彼らより少し付き合いの多いリサの目には一目瞭然だった。

ずっと楽しそうに聞いてきた魔法の話は一切しなくなり、先ほどから黙って薬草が書かれたメモを読んでいる。

ギルの話にもまともな返事はしていないし、集中しているような顔を作ってはいるが、目はぼんやりとしていた。

「そろそろ一旦休憩だ。つたく、本気で尻が痛いぜ」

森の中の道が開けた所で、前を走るアルザダの荷馬車が止まった。その横に着ける形でギルの荷馬車も止まる。

荷馬車を降りるなり、レオは「薬草を探してみる」と言って森の中へ入っていった。

他の者は特に気にせず腰を下ろしているので、リサは黙ってレオを追いかけた。

少し奥に入った所で、レオがじつと薬草と思われる草を見つめているのを、見つけた。

リサが近づいたのに気付いたのか、彼は薬草を摘み取る作業を開始する。

「どうかした？」

声は普段道理だったので、考えすぎかなとも思ったが、一応聞いてみる事にした。

「レオさん、もしかして人を殺すのは初めてですか」

ほんの一瞬だったが、薬草を摘むレオの手が止まったのが見えた。

「そんな訳無いだろ」

「……やっぱり、私が悲鳴をあげたから」

「違う」

目を薬草に向けたまま、レオが言った。
初めてのレオの強い否定に、リサは一瞬身を強張らせる。

「違うんだ。本当に人を殺したのは初めてじゃない」

ばつが悪くなったのか、レオが口調を和らげて言い直した。

だが、ここまで来ればもう確定だ、それ以外に考えられない。

暫し沈黙が下りるが、どうしても聞いてみたい事があって、リサは声を上げた。

「あの……」

いい淀むリサに、昨日の夜と同じ雰囲気を感じたのか、レオも顔を上げる。

「どうして」

「おーい。何やってんだお前ら、そろそろ行くぞ」

ギルの叫び声に、リサは再び口を噤んでしまう。

気まずい雰囲気にならなくなっていったレオは、立ち上がるとリサを促すように歩き出した。

「行こう、皆待ってる」

リサは遣る瀬無い気持ちになったが、今更言い直すことも出来ず、荷馬車へ向かった。

「ウエエエ」

目の前の森の中で、ゲオルグが吐いている。

レオの位置からは見えないが、流石に1人では危険なので、森の中ではリサが看病している。

「だ、大丈夫か……？」

切っ掛けは夕食の際、レオが取った薬草を煮た料理を出した事だった。

普通に食べても美味しい、山菜に近い薬草だと思っただけ、出来上がった煮びたしから、どう考えてもメモと違う匂いがする事にリサが気付いたのだ。

慌てて食べるのを止めたレオ達だったが、ゲオルグだけが食べてしまっていた。

「ごめん、ちよつ、ちよつとぼうつとしてて、間違えたんだ。決して悪気があった訳じゃ……」

「アハ、アッハハハハ」

狂ったようなゲオルグの笑いに、姿も見えないのに震えて数歩後
ずさる。

「ハハツ……殺してやる……殺してやるよお！」

それを聞いたレオは、全身に冷や汗を流し、走ってギルの荷馬車
に逃げ込んだ。

荷馬車に逃げ込んだレオが、メモの内容を全て暗記するまで、そ
う時間は掛からなかったという。

それから更に二日が経った。

朝食の折、全員が集まったのだが、皆一様に渋い顔をしている。

二日前に出て以降、盗賊は一度も出ていない。

正直レオは助かったが、その代わりに魔物が多く出てきていた。

「どうもきな臭いね」

あの時はゲオルグもかなり怒っていたが、旅路の異常さに怒りは
なりを潜めていた。

「ああ、オーガもちよく見るしな、この間のジャイアントみ
たいに痩せてる奴が多いのも気になる」

元々この街道には多少のオーガが出ていた。

それが増えて、狩っていた盗賊が撤退したと考えればありえなく
も無いが、以前のこの街道を思えばやはりおかしかった。

「や、やはり引き返した方が……」

魔物との連戦に弱気になってきたのか、アルザダが控えめに言った。

しかし、ここで引き返せば荷は完全にゴミになってしまう。

本人もその事が解っているだけに、落ち着かない様子でレオ達を伺っていた。

「ここまで来たんだ、どうせなら2〜3日で生ものを売ってしまった、それから戻っても殆ど変らないだろう」

「そうだね。急げば今日中には着くはずだ」

一応意見を聞こうかと思って視線を向けたが、リサは困ったように俯いたまま、何も言わない。

それをフォローするように、ギルが締めくくった。

「とにかく、行くしかないんだ。アルザダとゲオルグの荷馬車は交代しつつ、俺の荷馬車は後の2人が警戒して、なるだけ急いで街に入る」

その言葉に頷いた仲間は、急いで朝食を掻き込んだ。

そして、数度のゴブリンやオーガの襲撃を抜けた後、一向は2番目の街、ナバル共和国のハウラ城下街に着いた。

二章 盗賊と手紙（後書き）

前言通りの地味回です。すみません……。

何とか他の言葉も乗せようと思いましたが、これしか言えません、ホントすみません……。

奴隸の国

街の中に入ってみると、心配していた混乱は無く、普段道理と思われる活気に満ちていた。

アルザダと別れ、宿を取ってリサを休ませると、前衛3人はバルドに紹介してもらった鍛冶屋に向かう。

ゴブリンやオーガとの連戦で、武器を酷使していた為だ。

その店先で、店主と思われるドワーフと、エルフの少女が楽しそうに話していた。

だが、こちらに気付いて笑いかけ　ようとして、後ろの仲間2人をみて顔を顰めて去っていく。

何で出会う女性全員に嫌われるんだろうと思ったが、良く考えるとゲオルグも女だった事に気付いた。

「何か失礼な事考えてない？」

「えっ、いや、何も……」

「そう、ならいいけど」

本当に何となく思ったただけなのか、ゲオルグは深く追求してこなかった。

だがレオは、元Aランク冒険者の勘の鋭さに肝を冷やす。

鍛冶屋のアイゼンに紹介の手紙と武器を渡して、来た道に戻る。

それから長旅の疲れもあり、レオ達は宿に戻って直ぐに眠ったのだが、その夜、一度目の魔物の襲撃があった。

翌日にはちょっとした騒ぎになっていた。

午前中、冒険者ギルドに情報を確認しに行ったゲオルグが、レオとギルの待つ宿の食堂へ戻ってきた。

リサは長旅の疲れか、それともレオへの指導の疲れか……ともかく、まだ眠っている。

席に着くと、ゲオルグは顔を顰めて首をひねる。

「奪われたのは、外壁の、外の畑にある食料だけらしい。偵察は出したようだし、他に被害が無いから大きな騒ぎにはなっていないけど、これはいよいよヤバそうだ」

それを聞いた2人は唖った。

街の中に居る住人達はまだ危機感が薄いが、異常を感じていたレオ達は別だ。

「直ぐ戻るにも、多少の準備は必要だぞ。武器は今日中に出来るらしいが、夜に発つ訳にもいかん。疲れもあるし食料も……そう言えばアルザダはどうした」

思い出したように聞くギルに、レオが頭を掻きつつ答えた。

「すまん。実は駄目元で奴隷を解放してくれそうな貴族を探して貰ってるんだ」

「そうだったか。まあ、それが当初の目的だし、多少は調べないとな」

「ああ、どの道出るのは明日になるだろうと思って、無理を言っただけで済ませてもらう」

軽く頭を下げるレオに、「気にするな」とギルが手を振った。と、暫く黙っていたゲオルグが苦しげに呻く。

「規模は小さいとは言え魔物の群れの侵攻なんて、御伽噺でしか聞いた事なかったけど……もし本当に来たら、ギルドから強制召集されるかもね」

「ああ、ランクの低いレオは別だが、BやCの俺達は恐らく駆り出されるだろうな」

「すまない、こっちに来たのは俺の判断ミスだった……」

目を伏せて落ち込むレオに、2人は笑いかける。

「別にいいさ、アタシら好きで付いて来たんだから。それにダールに居たって、魔物が来ない補償なんて無いんだ」

「ゲオルグの言う通りだが、特に俺達は無理言っただけで来たんだからな」

その時、食堂の扉が開き、アルザダが帰ってきた。

「おお、良かった。レオさん、ちょっと良いですか」

レオが断りを居れて食堂を出ると、アルザダが興奮した様子で外へ連れ出した。

「実は、何人かの奴隷を解放していると云う貴族の噂を聞きまして、話を聞いてみると金貨15でスタンプを貸してもらえた方も居たよ。うで、頼んでみたら面会の機会も得る事ができました」

「本当ですか、良く受けてもらえましたね」

「ええ、何でもこの国では有数の資産家だそうで、多少の我俣も効くそうなので」

これは嬉しい誤算だ。準備は他の者に任せてでも、行ってみる価値はある。

「ここで待っててください、リサを起こしてきます」

「あ、ちよつと待ってください」

喜び勇んでリサを連れてこようとするレオを、アルザダが引き止めた。

「この前のギルの話ではありませんが、貴族の方は少々困った性格の方も多いのです。まずは我々だけ行って、取引を成立させた後で、彼女を連れて行っても遅くは無いです」

「なるほど……」

一度金を受け取った後ならば、さすがの貴族もそう易々と話は変

えまい。

それに、奴隷については良く知らないアルザダが無理をして駆け回って掴んだ情報だ、ある程度は慎重に行動した方がいいだろう。

「解りました。取り合えず俺達だけで行きますか」

「それが良いかと。さて、お待たせしているはずなので、急いでいきましよう」

アルザダに促され、レオは貴族の住む高級住宅街へ入っていった。

貴族が多く住む高級住宅街の中ほどまで行った時、バスラ公爵の屋敷が見えてきた。

平均して大きな家が立ち並ぶ通りの中でも、その家は一際大きく見える。

使用人に案内されて執務室に入ると、多少顔立ちの良い、筋肉質な中年の男が出迎えた。

「これはアルザダさん、どうも初めまして」

にこやかにアルザダと握手を交わしたバスラだったが、レオを見て若干顔を顰めた。

「もしや、こちらのエルフが依頼主ですか？」

「はい、冒険者のレオさんと言います」

「どうも、始めまして」

レオが手を出したが、バスラは握り返さずに椅子を勧めた。

「どうぞ。しかし、開放するのは人間の女性と聞いていたんですがねえ」

その言葉には流石のアルザダも面食らった。

「いえ、開放するのは人間の女性ですよ。リサさんと言う方です」

「ほう……」

バスラは少々訝しげな視線をレオに向けた。

レオは何故そんな視線を向けられたか解らず、困惑してしまふ。

「ちなみにランクはいくつで？」

「Eです」

それを聞いたバスラは薄く笑う。

流石のレオも少々怪訝に思い始め、アルザダが何とか場を取り成そうと声を上げた。

「ええと、それで報酬の件ですが……」

「ああ、金貨15と決めているが、正直それはどうでも良い」

多少高くても払えるようにと、金貨を全て持ってきた2人は驚いた。

だが、その後の言葉で凍りつく事になる。

「そうだな、三日ほどその奴隷を貸してくれるならそれで良いんだ」

「は？」

思わず呆けた声を上げるレオに、バスラは笑って続ける。

「私は、気に入った女しか解放しないと決めていてね。本当に親しい相手の頼みでもない限り、必ずこの条件をつける事になっているんだ。なあに、安心してくれ、他人の物を壊すような事はしないさ」

その言葉を聞いたレオは握った拳が無意識に刀に伸びかけ、慌てたアルザダが声を上げる。

「待つてください！先ほどと話が違うじゃありませんか」

「大っぴらに言う事でも無いのでね、いつも家に入れてから話しているんだ。それに、こちらもエルフが主人だったとは聞いていない」

あまりの発言に、更に怒りの声を上げようとしたアルザダだったが、レオの冷たい言葉に身を竦ませた。

「アルザダ」

レオの実力を知るアルザダは緊張に身を強張らせるが、バスラの方はEランクの冒険者に負けるはずが無いと嘲笑を浮かべている。

「暴力に訴えるのはやめた方がいいと思うよ。私はこれでも、数年前まで騎士団でそれなりに上位に位置していたからな」

できれば「レオが本気になったら、お前なんて素手でバラバラにされるぞ」と、教えてやりたかったが、隣のレオが突然立ち上がったので恐怖で身動きが取れなくなる。

「帰ろう」

それだけ言ってバスラに背を向けるレオに安堵しつつ、アルザダは彼の後を追った。

「私の要求を蹴ったら、後々後悔しますよ。私の他にエルフにスタンプを貸す者など、絶対に居ないと言っておきましょう」

背後からバスラの嘲りが聞こえてきたが、2人は振り返る事無くその場を後にした。

バスラの屋敷を出てから数分して、がっくりと肩を落としたアルザダがレオに謝罪した。

「本当に申し訳ありません。まさかあんな事を言われるなんて……」

「別に、アルザダさんのせいじゃないですよ。それより、明日には発ちますから、準備をお願いします」

「解りました……レオさんはどうしますか」

「刀を取ってきます。あ、保存食を売っている店を教えてください。終わったら宿の食堂で落ち合いますよ」

「それでは時刻でいいですか」

その答えに頷いて店の場所を聞いたレオは、アルザダと分かれて商業区の広場へ向かう。

1人になったレオは、先ほどの事を考えていた。

盗賊を殺した時、あれほどの罪悪感に包まれていたのに、バストラの事を本気で殺そうかと思っていた事に、ショックを受けているのだ。

人型の魔物を多く殺して、普通の人間の感覚が麻痺して来ているのかもしれない。

それともう一つは、リサの事だ。

ひよっとしたら、リサの人生全体を考えれば、先ほどの申し出を受けた方が良かったのかもしれない。

だが、レオとて薄々気付いていた。

初めの内は、どちらかと言うと罪悪感や、他の事が上手く行かない自分から目を背ける形でリサを助ける事に専念していたレオだが、徐々に好意の方が強くなっていた。

「情けねえ」

吐き捨てるように呟いても、胸に残る靄が消える事は無かった。

商業区にある広場の脇の、保存食専門店に向かう途中、中央で奴隷のオークションが準備されているのに気がついた。

檻に入った奴隷の中に、女性のエルフが居た。

彼女は檻を掴んでレオに助けを求めるような視線を向け、レオは

反射的に財布を確認してしまう。

しかし、そこまでで思いとどまる。

ダールの街で、強ければ何でも思い通りに成る訳ではない事は痛感していた。

自分がただの1人の冒険者でしかない事は、フィールに叱られた事で嫌と言うほど理解している。

渋い顔をして目線を逸らすレオに、エルフの女性は力なく座り込んだ。

なるべくそれを見ないようにして店に入　ろうとして、昨日鍛冶屋の前であったエルフの少女に腕を掴まれた。

「なっ、ちょっと」

そのまま人気の無い路地まで引っ張られ、ようやく手が離される。

「何なんだ一体……」

「お願い、お金を貸して！」

突然、お金の無心をされたレオは困惑した。

「待ってくれ、何で俺に頼む」

「他にこの街に出てきている者が居ないの、貴方だって解るでしょう」

何を言ってるんだ。と返そうとして、ハタと思いとどまる。

そういえば自分はエルフだが、エルフとしての常識は持っているな

い。

「ええと、何の事だか解らないんだが……」

なるべく疑われないようにやんわりと聞いたのだが、エルフの少女は困惑の表情を浮かべた。

「何を言ってるの、貴方くらいの歳なら……」

途中まで言った言葉が途切れ、目が見開かれる。

「貴方、もしかしてハイエルフ……?」

「えっ、解るのか」

確かにゲームの設定ではエルフでは無くハイエルフだった気がする。

「失礼な口をきいて、申し訳ありませんでした。黒い髪のハイエルフと言うのは、初めて見ましたので……」

突然腰の高さまで頭を下げた相手に、レオが混乱する。

「ちょ、ちょっと止めて下さい。それより、どういう事だか教えてくださいませんか」

「はい。私はセシリア、この近くの静寂の森と呼ばれる所から来ました。貴方はどちらの森の方でしょうか」

「俺はレオ……その、東の方の島国から来たんだ」

異世界から来たとは言いにくく、何とか誤魔化そうとしたレオだったが、それを聞いたセシリアは驚いたように呟いた。

「もしか、最近発生したのですか」

「発生？」

「ハイエルフの方は、樹齢数万年の霊木が昇華して成ると聞いています。といつても、こちらの大陸では若葉が薬草として使われて乱獲され、実際に生まれた所を見たことはありませんが……東の島国には、その事を教えてくれるエルフは居なかったのですか？」

内容は少々の外れだが、勘違いされたままの方が良さそうなので頷く。

するとセシリアは少し考えた後、困り顔で言った。

「少し時間も有りますし、こちらの大陸のエルフの事情を説明します。貴方様にとつても、聞いておいた方が良い話だと思しますので」

「様は止めてくれ、こちらのハイエルフは偉いかもしれんが、俺はただの冒険者だ」

セシリアは「解りました」と言つて説明を始めた。

「3千年程前まで、この地に住む者と魔物は定期的に戦争をしていました。最近の状況は、昔の戦争時に酷似しているらしいのです」

「待て、魔物と言うのは野生生物じゃないのか」

そんな素朴な疑問に、セシリアの方も首をかしげた。

「魔物は魔界からやってきます。この世界と魔界は重なり合って存在していて、その歪から抜け出て集落を作っているのが、森に居る魔物です。勿論、ウルフ等は元からこちらの動物ですが」

魔界から来る者というのは、ゴブリンやオーガといった者達のことだ。

勿論人型以外にも居るようだが、今までは魔物の弱い場所にしか行っていないため、名前を出されてもわからなかった。

「と言う事は、近くそこから魔物が攻めてくるのか」

「はい。ですが、エルフにとっての問題はそれとは別で、これまでの3千年の方にあります」

意味が解らなかったので、レオは口出しを止めて聞くことにする。

「3千年前の戦争は、こちらに住む者の完全な勝利で終わりました。ですが、向こうの魔界は魔物の地、それ以上侵攻する物好きはおらず、魔物との戦いの為に増強されていた人間の軍は、やがて力を持て余し人間同士で戦争を始めます。」

私達この大陸のエルフは、その間森から出ずに不干渉を貫いていたのですが……2000年程前、当時この場所にあった帝国で力を増してきた、一部の貴族と奴隷商人が、エルフの長い耳はゴブリン等のがった耳と同じ魔物の証しだ。と言う、根も葉もない噂を流したのです。

帝国はその頃長い戦乱と、貴族の優遇で腐敗を極めており、民衆

の不満の捌け口としてエルフに戦争を仕掛けました。

エルフも応戦しましたが、かつての戦友達の子孫を相手に序盤で剣先を鈍らせ、不利になってそのまま数に圧されてしまったのです。

結局最後は見かねた人間の神が、天罰を下し、神々が直々にエルフに謝罪して戦争は終わったのですが、神の口ぞえが有っても所有物となってしまうたエルフの奴隷は見つけるのが難しく、所有者が死んで売りに出されるのを探し出す為に、私のような若いエルフが旅をしているんです。

奴隷制度を守りたい諸国が緘口令を敷いたので、今では殆どの人間がその事を知りません。けれどこの大陸のエルフは、その事を永遠に忘れないでしょう」

道理で街では殆どエルフを見なかったはずだ。

「でも、そのわりに昨日は楽しそうに話してたけど……」

「ドワーフは別です。元は仲が悪かったですが、彼らは一方的に攻撃されるエルフを見かねて、かつて自分達が住んでいた鉱山や洞窟にエルフを匿ってくれたんです。表面上は悪口を言い合うこともありませんが、心の底からドワーフを嫌っているエルフは、今はもう居ません」

言われてみれば街でエルフを見かけたのは、全てドワーフの店の近くだ。

人間とは種族を別にするドワーフは、当時周囲の人間より冷静に状況を見られたのかもしれない。

そこまで言うと、セシリアは再度頭を下げた。

「東方の島国から来た貴方には、関係の無い事情かもしれませんが、あの子は私の幼馴染なんです。でも、オークションを考えるとどうしてもお金が足りなくて……金貨5枚、いえ4枚で良いんです。何とか貸してもらえませんか」

レオは唸った。

正直リサの事や状況を考えると、金を失うのは厳しい。

だが、ここまで聞いて断れば、森に戻った彼女から事情を聞いたエルフ達から、冷やかな視線を向けられるかもしれない。

少々悩んだが、金塊もあるし今後の為にはどうしようもないと結論付け、貸す事にした。

幸い交渉の為にワイバーンの素材の代金も持って来ていて、手持ちが多い方だ。足りなかったと言う事になれば目も当てられないので、多めに貸す事にする。

「オークションなら予想以上に高くなる事もあるでしょう、10枚渡して置きます。明日にはこの街を出るつもりですが、余った分は返して下さいね」

「ありがとうございます！」

土下座しようとするセリシアを、こんな所ゲオルグやギルに見つかつたら何日も笑われる。と焦って止めた。

ついでに宿泊している宿を告げ、向ここの宿も聞いた。

「商業区の十字路にある大きな宿です。私も魔物の事をドワーフに警告して回っているのです、数日は滞在します。何か用があったら来て下さい」

恐縮して何度も頭を下げるセリシアをなだめ、当初の目的だった

保存食の店に向かう。

その後アイゼンの鍛冶屋に行くと、既に研ぎは終わっていたので、それを持って宿へと戻った。

夕刻、宿の食堂で反省会をしたのだが、皆一様に渋い顔をして押し黙っていた。

アルザダがあの後調べた所、バスラはこの国全体でも有数の貴族で、発言力もそれなりに大きいと言うのが解ったからだ。

「すみません、私の調査が不十分だったばかりに……」

「いや、アルザダさんは悪くない。さっきのエルフの話を考えれば、責任の一旦は俺にもありそうだ」

セシリアに聞いた話は既に皆にしている。

落ち込んだ雰囲気壊すように、ゲオルグが一気に酒を煽って言った。

「あーもう、それはこの際しようがないよ。それより、魔物の軍の話は本気でヤバい。準備も済ませたし、金を返してもらったら午前中にも出よう」

「そうだなあ、俺も強制招集は避けたいぜ。アルザダ、荷物の方は？」

「まだ多少売れ残っていますが、もう諦めますよ。午前中に出る方向で、異論ありません」

皆の息が合った所で、レオが頷いた。

「解った、それじゃ今日はもう解散にしよう」

そう言つて隣で終始無言だつたりサを見ると、怯えるように顔を伏せていた。

彼女はレオのように力を持っている訳でも無い、ただの商人の娘だ。奴隷の解放も上手く行っていないし、戦争が近いと聞けば恐ろしいだろう。

レオはそんなリサの頭に手を乗せ、ポンポンと撫でる。顔を上げたりサを安心させるように、微笑んで言葉をかけた。

「大丈夫、俺が何とかしてみせるよ」

やつれた顔に無理やり笑みを乗せるレオを見て、今度こそリサは死んだ父のようだと思つた。

部屋に戻つて数刻後、そろそろベッドに入ろうかと言う時、ノックの音が響いた。

「どろぞ」

ギルかアルザダかと思つたが、入ってきたのはリサだつた。

部屋に入ってきたリサは、気まずそうに俯いている。

少々不思議に思つたが、こつ言つ時のリサは黙つていれば話すと学んだので待つてしていると、やがて小さい声を発した。

「あの……トランプしませんか」

「ああ、そうか、別にいいよ」

不安で眠れなくて暇を潰しに来たのだろう。

レオは立ち上がってテーブルを薦めると、収納袋からトランプを取り出した。

「気に入ってくれて嬉しいよ。ギルは金を賭けなきゃやらないって言うし、アルザダには賭博関係は一切やらないって断られるし……」

言っていて「俺、人徳無いのかなあ」と不安に思ったレオは、取り合えず言葉を区切って席に着いた。

日本と同じ遊びが出来るなら、いつでも歓迎だった。

賭けはもうこりこりだが、リサは賭けたくないと言えばそのままで相手してくれる。

暫く殆ど会話も無いままポーカーを続けたが、やがてリサが声をかけてきた。

「レオはさんは、どうして……そんなに必死に、私を助けてくれるんですか」

その質問に、カードを3枚取り替えながらレオが答える。

「んー、何でだろうな」

真剣に聞いたりサとしては、その答えはちよつと気に入らなかったが、眉を顰めたりサに、慌てて訂正するようにレオが続けた。

「ああ、いや、本当に解らないって言うか……最初はお姉さんを見殺しにしたとか、何かほっとけなかったとかそう言うのだったけど、いつの間にかそうするのが当たり前になってたって言うか……」

好意の事も正直に言おうかと思ったが、以前のように警戒されるといけないので黙っておいた。

「そう、ですか……」

それからお互い少し黙っていたが、やがて手札を晒す時が来る。

レオは3のスリーカード、リサは8のフォーカードだった。

「また、私の勝ちですね」

そう言っただけで彼女はクスクスと笑う。

「リサは本当に強いなあ」

初心者に惨敗しているレオは、困ったように頭を掻いた。

それから何度かポーカーを続け、暫くするとリサは部屋へ帰って行った。

そして、明け方、二度目の魔物の襲撃があった。

奴隷の国（後書き）

ちなみに、バスラさんの名前の由来はネーミング辞典の162ページ下から2行目か、エキサイトスペイン語でBasuraと打つて下さい。

それと申し訳ありませんが、少々難しい所に入るため、集中するので、感想等への返信遅くなります。

友人にチエックしてもらって、本当に不味い所は確認するので、ご容赦ください。

セシリアとの会話、霊木関連追記しました

忘れられていた軍

「魔物の群れだっ、冒険者は全員強制召集をかける、北の門の前に
こい！」

騎士風の男が、宿の中で何度も同じ言葉で怒鳴っている。

素早く忍び装束に着替えて部屋から出たレオは、リサの部屋をノックした。

「はい」

彼女も起きていたようで、緊張した様子で扉を少し開けた。

「リサは宿で待っていてくれ。不味くなったらアルザダと東の門へ行って、荷馬車で逃げる準備をしておくんだ」

頷いたリサを尻目に、レオは廊下を歩き出す。

「ゲオルグ、ギル、いけるか」

丁度2人も部屋から出てきた所だった

「問題ない。北門へ急ごう」

食料を奪って野を駆ける魔物の群れを、数度切り裂いた所で、死んだ馬と共に木陰で蹲る老剣士の姿を見つけた。

老剣士の足は斬られて千切れかけており、顔色もかなり悪い。レオが駆け寄ると、襟首を掴んで必死の形相で語り始めた。

「た、頼む……戻って伝えてくれ……この先に、魔物の軍が……」

恐らくは昨日の偵察兵だろうが、このままでは長くあるまい。

そう思ったレオは周囲を警戒するが、レオの凄まじい移動速度に着いて来れる者はおらず、近くに味方の姿はみえない。

安堵して治癒魔法を使う。

全身の傷が見る見る塞がり、足も完全に繋がった。

驚愕する老剣士の耳元で、小さく囁く。

「1つ頼みが。私が治癒魔法を使った事は内密に」

「あ、ああ……解った」

老剣士は目を白黒させながらも、取り合えず頷いた。

しかし千切れかけていた足は違和感があるらしく、立ち上がった老剣士は少しふらつく。

そのまま放置する訳にもいかないので、レオは彼を背負って一旦街へ戻る事にした。

老剣士の情報が行き渡った街は、かなりの混乱を起こしている。

今回は少しだが街の中に進入を許してしまい、大量の食べ物も奪われていた。

「駄目だ。朝の、強制召集を装った騎士の行動のせいでギルドも突っ張ってるが、アタシらの強制召集は免れない」

冒険者ギルドに話を聞きに行っていたゲオルグが、苦々しく呟く。朝の強制召集騒ぎは完全に焦った国の独断で、無理矢理駆りだされた低ランク冒険者に多少の犠牲者が出ていた。

「やっぱりそうだよなあ……これでもう俺達は街からはでられんな」

諦めたようなギルの言葉に、リサが申し訳なさそうに言う。

「ごめんなさい、私のせいで……」

これまで殆ど何も言わずに着いて来たリサの、突然の反応に一同は少々面食らったが、ゲオルグはいつもの様に笑った。

「魔物は別にリサちゃんのせいじゃないさ。昨日も言ったけど、好きで着いて来たんだし……って、そっぴやまたアルザダの姿が見えないけど、どこ行ってるのさ」

「食料が奪われたから、売れ残りを軍が買い取りたいと言ってきたそうさ。今交渉に向かっているが、俺達の分は残してくれるらしい」

「そうか。まあ、昨日の内に旅支度をしてたから、保存食もあるし、アタシらは食料には困らないだろうね」

暫し悩むように黙っていたギルが、ここで口を挟んだ。

「なあ、レオは、リサとアルザダを連れてダールに戻るべきじゃない

いか？話ではゴブリンやホブゴブリンが主だと言つが、数は脅威だ。幸いランクも低くて強制召集の対象外のレオも居る。ダールに移動するくらい問題にならないだろう」

「それは」

「嫌です」

キツパリとしたりサの声に、言葉を遮られたレオを含む全員が再度面食らった。

「けどねえりサちゃん、戦争になればアタシらも自分の身を守るのが精一杯だし……」

「お願いです。ここまで皆を振り回した責任を、取らせてください」
それを聞いたギルとゲオルグは、渋い表情で顔を見合わせる。
だが、レオは別な事を考えていた。

「俺も、これはチャンスだと思っている」

仲間の視線がレオに集まり、その言葉の先を待った。

レオも一瞬躊躇ったが、決断を変える事は無い。

「例のバスラ公爵のせいで、正攻法ではスタンプは借りられないけど、この状況なら戦果を挙げれば可能性はあるかもしれない」

今、国は冒険者に借りがある。

その上、今後を考えれば何とか繋ぎとめて置きたい相手だ。知名度のあるゲオルグやギルを連れて行けば、無視する訳には行かない

だろう。

「確かに……でも、一筋縄ではいかないよ」

ゲオルグの言葉に、ギルも頷く。

「だろうな。下手に出てるのも、今だけだと思っぞ」

「解ってる。前もって約束を取り付ける事は必須だろう。これから会いに行くつもりだから、2人にもついて来て欲しい。リサは宿で待っていてくれ」

そう言って立ち上がったレオに、仲間2人がついて行く。

リサは不安げに彼らを見つめていたが、やがて部屋に戻っていった。

領主のクラウスの館は、かつて国だった名残もあり、城をそのまま使っている。

その会議室は今、荒れに荒れていた。

白髪交じりの長い髭を撫でつつ、クラウスが苛立たしげに呻く。

「クソッ。冒険者など、魔物を倒すくらいしか脳が無いのだから、黙って言われた通りに戦えば良い物を……」

会議室のテーブルの上には、冒険者ギルドからの抗議文が散らばっている。

冒険者ギルドは確かに、こういった場合頼めば強制召集をかけてくれるのだが、だからと言って勝手にそれを騙れば問題になる。

騎士団にも悪態をつきたかったが、他の貴族が居る手前、大っぴらに言う訳にも行かない。

「失礼します。クラウド様、冒険者が謁見を申し込んでいますのですが」

「ランクはいくつだ」

「Eですが」

クラウドは溜息をついた。

この忙しい時に、Eランクの冒険者の相手などしてられない。

「放っておけ、兵力にもならんのだ。話を聞く価値も無い」

「ですが、元Aランクのゲオルグと、ランクはCでも、冷静な判断と実力に定評のあるギル、それに、軍に食料を納めたアルザダと言う商人が共に来ています……」

こうなると話は別だ、元Aランク冒険者に、非常時に食料を持ち込んだ商人まで居る。

彼らを無視した事が伝われば、既に気まずい雰囲気になっている冒険者との関係が更に悪化しかねない。

しかし、彼らの名前には聞き覚えがあった。

「仕方ない、通せ。因みに代表はなんとと言う冒険者だ」

「はい、レオと名乗っています」

これには抑えきれない舌打ちがでた。

レオと言う冒険者の仲間と、彼の奴隷であるディアマンディ人のリサと言う少女の話は、バスラ公爵から聞いている。どの道断らなければならぬが、かと言って無視も出来ない。

暫くして、レオが会議室へ入ってきた。

会議室は広くないので、本人のみが通されたのだ。その場に居た貴族達の視線が、レオに集まる。

「失礼します。私はレオと言う冒険者です」

彼は黒い服を着たエルフだった。

「構わぬ、今は火急の時だ。用件だけを申せ」

「はっ。実はお願いがあつて参りました」

その先の言葉が理解できたクラウドスは、溜息をついた。

「お前達の話は、バスラ公爵から聞いている、リサとか言う青い髪のディアマンディ人の女の事だろう。スタンプの借用の事なら駄目だ、幾ら積まれようと貸す事はできん」

その言葉に微かにレオが身を震わせる。

バスラにはリサを見せていないハズなのに、特徴まで伝わっている。

だが、早く帰れと手を振られても、レオはその場に留まった。

「借用を確約して下さいれば、必ずや大きな戦果を立てるとお約束します」

「駄目なものは駄目だ、バスラ公爵を怒らせたのはお前の失態だろ。絶対に貸すなど言っている彼を無視すれば、我々の方が被害を被るんだ」

「そこを何とか、お願い致します」

「くどいつ、お前達に貸すのは絶対に無理だと言っている！」

怒鳴り散らしても頭を下げたまま動かないレオに、呆れたクラウドは大仰に舌打ちして、吐き捨てるように言った。

「敵将の首でも持ってくればくれてやる。解ったらとっとと下がれ！」

尚も食い下がろうとしたレオだったが、使用人が肩に手を置いたので仕方なく立ち上がり、部屋を出た。

「宜しかったですか？」

渋い顔で聞いてくる隣の貴族に、クラウドはもう一度舌打ちしながら答える。

「奴が敵将に迫ったら、撤退命令を出せばいい。それを聞かずに首をとったら、命令違反の角で食い下がる事もできる。どの道Eランクではどうにもならんさ」

それを聞いた貴族は、何度か頷いて書類の整理に戻った。クラウドも、やれやれ。と言うと手元の書類に目を通す作業に戻る事にした。

「どうだった」

館の前で待っていた仲間の中で、ギルが代表して聞く。

「駄目だ。借りられる気配は無い。こっちの情報を調べてまで、バスラが話を伝えているようだ」

それを聞いた3人は肩を落とした。

「完全に目をつけられたな……」

ギルが渋い顔で言った。

貴族に目をつけられると厄介な事になるのは解っていたが、これほどとは思わなかった。

恐らく、この国でも有数の貴族と呼ばれるバスラに、あのような態度を取ったのが原因だろう。

「ただ……」

「ん？」

ギルが反応したが、レオは「いや、何でも無い」と首を振った。

「皆は宿に戻ってくれ。俺は敵についてもう一度セシリアに聞いてくる。余り詳しくは無いようだったが、聞いて損は無いだろう」

そうして、領主の館でレオは仲間と別れた。

昼間、着替えて少し休んでから部屋を出たゲオルグが食堂に入ると、丁度セシリアの部屋に寄っていたレオが宿の食堂に戻ってきた。その後、真剣な表情で話し出す。

「セシリアの話だと、現状歪を広げて集結している途中で、更に魔物は知能が低いものが多いため大軍だと思疎通が難しく、集合も進軍も遅いらしいから、まだ2〜3日は余裕があるそうだし」

それを聞くと、ゲオルグが安堵したように溜息をついた。

「そいつは良かった。もう既に鳥や早馬で援軍を要請してるって話だし、それが着くまで持たせれば、外壁が落ちる事は無いだろうさ」

「そうだな、守りの堅い騎士ならゴブリン相手には殆ど消耗しないだろうし」

冒険者2人はそれで安心したようだが、アルザダやリサは少し心配そうにして押し黙っている。

レオは暫く何か考えるように押し黙っていたが、やがて首を振って言った。

「ともかく、今は時間も有るし魔軍の情報が欲しい。俺は一度セシリアと一緒にエルフの森へ行って話を聞いてくる。人間には風当た

りが強いらしいから1人で行くが、そう遠く無いようだから、遅くても明後日までには戻る」

強い口調で言うレオに多少面食らったが、取り合えず皆頷いた。

「解った。アルザダはどうするんだ」

ギルの問いに、アルザダは困ったように笑う。

「こうなれば一蓮托生ですよ。戦いが終わった後の為に、多少仕入れをしておきます」

それからレオは部屋に戻って多少の準備をし、セシリアと買い取ったエルフの奴隷と共に街を出た。

残されたゲオルグ達は、予備の剣や弓矢等装備を揃えて待っていた。

レオが戻ったのは、それから2日後の昼だった。

「あれ、レオ、戻ってたのかい」

丁度ゲオルグが食堂から出る時、忍び装束のレオが2階の部屋から降りてきた。

突然声をかけられたレオは、驚いたように身を強張らせたが、何とか返事をする。

「ああ、実はさっき戻ったんだ。話は後ですから、ちょっと出かけてくる」

そう言って足早に宿を出て行くレオを、ゲオルグは不思議そうに見送った。

夕刻、皆で一度食堂に集まるはずが、レオが来なかった。どうやら買い物をしたまま戻っていないらしい。

探してみると冒険者ギルドの近くの酒場で、老剣士と話していた。

「おいおい、皆待ってるんだぞ。早く来いよ」

「あ、ああ、すまん」

宿に戻る途中、白いローブの青年を見かけた。

「ちよ、ちよっと、すいません」

レオは彼を見ると、慌てて肩を掴んだ。

「なんででしょう」

「ホワイトパールって人の知り合いじゃありませんか？」

「先生をご存知なのですか」

「はい、実は……」

そこまで言って言葉を止める。

レオは何やら悩むように沈黙した後、目を瞑って頭を振った。

「ごめんなさい。話したい事があるのですが、今は戦いに集中したいので、終ってから訪ねてもいいですか」

「はい、構いませんよ。領主に魔軍の危険性について話に来たので、城の通りの赤いレンガの宿に泊まっています。貴方も魔物と戦うなら無理に」

「ありがとうございます。大丈夫、我々は前線でゴブリンを食い止めるだけです。無理はしませんよ」

「そうですね、では、お気をつけて」

青年とレオはお辞儀しあって別れた。隣に戻ってきたレオにゲオルグが聞く。

「アンタ、ホワイトパールと知り合いなの？」

「知り合いつて程でもないよ。一度会っただけで」

ゲオルグはあまり他の冒険者には興味が無いようで、それを聞いても「ふーん」としか言わなかった。

その後食堂でレオの報告を聞いたのだが、

「特に目ぼしい情報は無かった。強いて言うなら、ゴブリン主体な

ら知能は低いから、落ち着いて防戦に徹すれば問題ないとの事だ」
としか言わなかった。

何やらその後リサがレオに詰め寄っていたが、肩を竦めて首を振っていた。

それからレオは全員に見た事のない金属で出来た指輪を渡した。

「皆これを着けてくれ、気付け効果のある魔法が3回分込められた指輪だ。多少の怪我なら同時に治してくれる」

「ほう、良く買えたねこんなの」

「元々持ってたって言うか……まあ取り合えず、着けておいてくれ。それとりサ、代わりに前に渡した指輪を返してもらえるか」

「はい」

返された指輪を仕舞い、全員が渡した指輪を着けるのを見ると、レオは満足げに頷いた。

翌日、いよいよ魔軍が近づいてきた。

召集がかかり、ゲオルグが少し遅れて行くことになると、それよりも遅れてレオが宿からでてきた。

何やら中に着込んでいるらしく、いつもより着膨れしていた。

「中に何着てんだい」

「静寂の森でエルフに貰った、矢を止める服だ。乱戦が予想されるから、革や布だけじゃ心もとないだろうって」

「そんなもこもこで、何時も通り動けんのか」

そう言われると、レオはゲオルグの前から宙返りして、背後に降り立った。

「アンタの身体能力甘く見てたよ……」

ゲオルグが呆れたように笑うと、レオも苦笑した。

「取り合えず行こうか」

北門に行くのとギルとリサが居た。ギルは思い切り渋い顔をしている。

話を聞くとリサも戦いに出たいと言ってきたので、レオが慌てて止めようと、声を荒げた。

「リサっ、幾らなんでも戦場に出るのは不味いだろ」

「大丈夫です、後方支援に徹しますから」

「矢だつて飛んでくるかもしれないし、魔法だつてそうだ」

「解ってます。でも自分の力も使わなきゃいけないんです」

その後もレオは必死に止めたが、どうあつてもリサが譲らず、絶対に出ないと言う約束で参加する事になった。

「すまん、ゲオルグ……俺は前が出るから、リサを頼めるか」

「任せな。アンタも、いくら矢止めがあるからって、無茶するんじゃないよ」

レオはそれに相槌を打ちつつ迫り来るゴブリンを見ていた。北の森から、魔物の軍はゆっくりと歩みを進めてきた。

やがて戦闘が始まり、ゲオルグとギルは前衛で、リサは矢避けの板から魔法を放って戦っていた。

レオは敵陣に入り込んで、陣形を霍乱しながら戦っている。

ゴブリンなど物の数ではないとばかりに、一心不乱に駆け巡るレオを見て、ゲオルグとギルは溜息をついた。

「相変わらず呆れた強さだねえ」

「だな、あれはほつといて、こっちは地道にやるっ」

レオの強さは明らかに目立っていた。

今までの目立たないように。と言うレオの行動から考えて少し異様かと思っただが、今は後方にリサも居るし気が張っているのだろう。少々危険かと思っただが、どう見てもレオがゴブリンやオーガ程度でやられるとは思えない。

数時間後、近隣から騎士団の増援が来た。

元々それ程押されても居なかったが、騎士団の参入で魔物は少し引き気味になっていく。

それを見た貴族軍が数名、手柄を焦ったのか馬でレオの開けた道を通って強引に本陣に入る。

レオの方は少しバテて来たようで、最初から見ると動きが悪くなっていた。

と、手が滑ったのかレオの左手から刀が抜けて飛んで行く。

「まったく何してんだ」

それを拾ってやろうと目で追った時、視界の端に、黒金でできた矢避け着きの荷車のような物が見えた。

かなり大きくて目立つはずだが、隠蔽の魔法が掛かっていたらしく、今まで気付けなかった。

嫌な予感がしたゲオルグは、ギルに向かって怒鳴る。

「ギル、ちよつとしゃがめ！」

「は？なんで……」

「いいから！」

「何なんだ一体……いだっ」

ギルと横の兵士を足場に高く飛ぶと、先ほどの荷車が数台で敵の本陣を囲むように配置されているのが見えた。

悪態をつくギルと兵士を無視して、レオに向かって叫ぶ。

「レオ、戻れ罨だ！」

その声に仲間全員がレオを見る。

レオの方も驚いたようにゲオルグを見た、瞬間 ……

バチンッ！という音と共に魔方阵が展開し、レオを巻き込んで敵の本陣が消えた。

「えっ……」

リサが小さな声をだして呆然と前に歩みだす。

「あんのバカ……ギルツ、リサを頼む！」

「畜生ツ、解った！」

ギルがリサを抱え、ゲオルグが援護して3人は戦場を後にした。

レオが魔軍と共に消えてから、6日が経った。

あの後戦闘、リサはレオが遺していた刀を持って毎日北の平野に来ていた。

アイゼンに作らせた簡易な鞘に入った來国俊を大事そうに抱え、ただ黙って敵の本陣が居た場所を眺めている。

しかし、辺りは夕暮れとなって来た。何も無い平野とは言え、夜になれば危険もある。

「リサ、今日はそろそろ……」

「はい、帰りましょう」

彼女はレオが消えてから、周りが驚く程落ち込んでいた。

毎日何も言わずに平野を見に来ているが、呆然とした顔を見れば心中は察せられる。

だが、リサを取り巻く事態は悪化して来ている。

バストラ公爵はあの戦いでレオと共に消えたが、エルフの奴隷として知られてしまっているリサを、主人が死んだのだから売りにかけると貴族が圧力をかけて来たのだ。

今の所、レオが死んだとは限らない。とか、仲間の遺品になるのだから、そう簡単には渡せない。等と言って強引に突っ撥ねているが、あれから魔軍の侵攻もなく、貴族の冒険者に対する遠慮は無くなって来ている。

「こんな事、私だって言いたくないけど、レオの事は別にしてそ

そろ移動した方がいいと思うんだ」

本来こういった事は言わないゲオルグだが、男のギルでは言いにくいからと頼まれていた。

「解っています、本当に……でも、もう少しだけ……」

思いつめたように言うリサに、ゲオルグは困って頭を掻いた。

宿の食堂に戻ると、ギルとアルザダが黙々と食事を食べていた。チラリと視線を向けてきたが、ゲオルグが気まずそうに目を逸らすと小さく溜息をついた。

2人が席に着くのを待って、ギルが切り出す。

「リサちゃん、その、今すぐと言う話じゃないが、いつ頃街を出るか考えて置かないか……」

その言葉にリサが身を強張らせた時、見覚えのある老剣士が現れた。

「なあ、お前達レオと言う男の知り合いだろう、ちょっと良いか」

皆驚いて彼を見たが、取り合えず空いている席を勧める。老剣士は勧められた席に着くと、一息ついて語り始めた。

「実はレオと言う男から、リサ、ギル、アルザダに伝言を。と、頼まれていてな。お前達で間違いないな？」

3人は困惑しながらも頷く。

「では、『6日経っても俺が戻らなければ、リサを連れて街を出てくれ。俺の荷物はリサに預ける』だそうだ。確かに伝えたぞ」

「なっ、他に、他に何か言ってなかったかい」

慌てたゲオルグが詰め寄ったが、老剣士は首を横に振った。

「いや、ワシが聴いたのはこれだけだ。それ以上の事は聞いても答えてくれなかった」

それを聞いた仲間達は顔を顰めた。

レオには何か考えがあったようだが、予定に狂いが出たのならこの先は彼の言う通り移動した方がいいだろう。

皆がりさに視線を向けると、彼女は必死の形相で訴えかける。

「まって、待ってください、後1日だけ……お願いします」

涙を浮かべて頭を下げるリサに、仲間達は困り果てて視線を交わした。

彼の戦い

領主の館に行った後、レオは商業区の宿に泊まっているセシリアの部屋に来ていた。

ノックすると返事が返ってきて、直ぐに扉が開いた。

「どうぞ、入ってください。昨日は有難う御座いました」

セシリアはそう言って余った金貨をレオに手渡した。

それを受け取ってサイフに入れる。

奴隷のエルフも涙ぐんでお礼を言う。

「本当に助かりました。もう一度人間に買われていたらと思うと、ぞつとします」

あまりに感謝されて照れ臭くなったレオは、手を振りながら答え
た。

「俺はちよつと金を貸しただけですよ。そういえば、公国では奴隷は貴族しか買えなかつたけど、こちらでは買えるんですね。それとも代理を頼むんですか」

「いえ、本来は買えないんですが、エルフは神の口ぞえがあつて、同族に限り買える事になっているんです」

この前は、精神的に追い込まれていた所に色々な事を聞いて、そ

の上時間も無かった為に詳しくは聞いていなかったが、購入した後首輪はどうしているのだろうか。

「それならアンロックスタンプはどうしてるんですか、お金を払って貸してもらったか？」

「いえ、一般人は忘れていますが、エルフを陥れた貴族や奴隷商人の間では有名な話で、報復を恐れている彼らには、誰でも首輪の効果を発動できるように細工した上で、絶対にエルフにアンロックスタンプを渡してはならないと言う暗黙の了解があるんです」

「なん……だって……」

それを聞いたレオは青ざめた。

なんてこった、スタンプは絶対に貸せないと言うのは、俺のせい……。

レオは絶句するが、セシリアは気がつかずにそのまま続ける。

「開放されたエルフは、人間が殆ど入ってこれない森の奥深くで静かに暮らしているのです、あまり問題では無いのですが……できれば取ってあげたいですね」

そう言って幼馴染の首輪を見るセシリアだったが、レオには最早何も聞こえていなかった。

そんな……俺の、俺のせいでリサが……。

たった1日で、領主にも話を伝えてしまうバスの影響力に、更に血の気が引く。

リサの容姿まで含まれたあの情報は、瞬く間に貴族中に広まってしまっただろう。

前日の夜にトランプをして笑っていたリサの顔が思い出される。

一瞬バスラに土下座でもして許しを乞おうかと思っただが、許す条件として何を要求されるかなど目に見えている。

それだけは、もう絶対に不可能だ。

「あの、レオさん、どうかなさいましたか」

「あ、ああ、大丈夫だ」

セシリアの声にようやく我に返ったレオだったが、そのまま顎に手を当てて考え込んでしまう。

暫く黙って考え込んだレオは、やがて低い声で唸るように言った。

「なあセシリア、エルフには魔物の軍に詳しい者も居るよな」

レオのあまりの剣幕に少したじろいだが、何とか答える。

「ええ、ハイエルフの長老は何度も戦いを経験しているって……」

「できれば今すぐに、その人に会いたい。森までどれくらいかかる」

「今すぐですか……着くのは夜になると思いますが」

「構わない、俺は一度宿に戻って話してくる。その後直ぐに行こう」
その後魔軍の襲撃時期の予測を聞いて2人のエルフに挨拶をし、
部屋を出ると、仲間の待つ食堂へ向かった。

食堂で、一度皆に事情を言おうかと悩んだが、まだ何の策も無い
ので止めておいた。

その後部屋に戻って忍び装束に着替え、大急ぎでセシリアと合流
し、街を出た。

奴隷だった女性はレオがおぶって行っただが、かなり体力が弱
っており、あまり急ぐ事が出来ない。

魔物にも何度か遭い、結局着いたのは夜中だった。

「さすがに今から長老を起こすのは不味いので、今日は私の家に泊
まってください。明日の朝にでも会えるよう頼んでみます」

気が逸って仕方がないレオだったが、こればかりは仕方がないの
で諦めて朝を待った。

翌日長老に会いに行くと、仲間を助けた恩人と言う事もあり、か
なり手厚く迎えられた。

長老とは言え、見た目はレオと同じで十代後半か二十歳くらいの
男性なのだが、数万年は生きていられると言われて驚いた。

「始めまして、アルフと申します。こちらの大陸ではもう、高齢の霊木は無いので、新しい仲間にあえてとても嬉しく思います。恩人でもありますし、是非遠慮せず何でも聞いてください」

レオは付き添いのエルフに会釈して、これまでの経緯を話し始めた。

始めはワイバーンを倒した事などに笑顔で驚いて見せていたが、次第に顔つきが悪くなってきた。

「なるほど、確かにそれは不味いですね」

「どうしても敵将の首が欲しいんです。何とかありませんか」

アルフはかなり渋い顔で顔を顰めて考えていたが、やがて口を開く。

「レオ殿はワイバーンやジャイアントを単独で撃破したと仰りましたが、本気を出せばどの程度の強さなのですか」

「そうですね……本気を出せば、単独でドラゴンくらいなら倒せませす」

実際にこの世界のドラゴンと戦った事は無いが、ワイバーンの強さはグラビティワールドと同じくらいだった。恐らくは火龍ク拉斯が出て勝てるだろう。

レオの言葉にエルフ達はざわめいた。それを制止すると、躊躇いながらもアルフが続けた

「それなら可能性はあります、しかし……」

「取り合えず聞かせて下さい。無理なようなら諦めます」

「解りました。では、お話ししましょう。本来は方法として他人に言うべき内容では無いですが……正直、もし本当にスタンプが手に入ったら使わせて欲しい、と言う欲目もありますから」

レオはそれに頷く。

元よりリサを開放した後、用が済んだら協力の代償に彼らにスタンプを渡すつもりだった。

「まず、順番に魔物の軍から説明します。

彼らは確かに力での上下関係がありますが、基本的に知能が低く、そのままでは軍隊と成る事は無いのです。しかし魔神と言う存在が原始の海ミンから数百年に1度生み出される事で、そのカリスマに惹かれて命令に忠実に動き、軍隊となります。

魔神はかなり強いですが、それでも単体の生命。それを要にしている彼らが最も恐れるのは、精鋭による魔神の討伐です。

よって彼らの序盤の戦いは、繁殖力の高いゴブリンやオーガを餌に将来脅威になりそうな精鋭を炙り出し、その芽を摘む事から始まります。

具体的に言うと、数代前の魔神が敵の城の地下に作った巨大な魔方陣へ本陣ごと転移し、本陣まで攻め込んでいた強者を孤立無援にして潰すと言うものです。

その設備はとても強固に出来ており、壊す事ができずに戦争では苦労しました。

これにより戦場で敵将を倒す事は困難になりますが、転移で飛んだ先では敵に逃げる場所はありません、外壁は無いはずですし、そこで詰め寄って殺し、全力で逃げればアサシンの貴方なら……」

そこまで言ってアルフは首を振った。

「すみません、夢物語を語ってしまいました……」

自分で言っていて不可能だと思ったのか、諦めたように溜息をつく。

だが

「実はちよつと、変った力がありました」

そう言って、目の前から忽然と姿を消したレオを見て愕然とした。

再び現れたレオにエルフ達は皆驚愕、アルフが興奮したように続ける。

「凄い……魔法も使わずに姿を消せるなんて……」

「少々事情があつて、こういうた能力が使えるんです。それと」

更に、ビューテレポートもしてみせる。

詠唱無しのテレポートが珍しいのか、周囲のざわめきが更に大きくなった。

「この通り、短距離用のテレポートも使えます。長距離は向きませんが、先ほどの能力と組み合わせれば、もし見つかつても逃げ切れる可能性はあります」

それでも少し悩んだアルフだったが、やがて決心したのかレオに向き直った。

「解りました。そこまで言うなら、我々も全力でサポートしましょう。話から察するに時間はまだ有りそうですし、森の奥の宝物庫から色々と持ってきますので、レオ殿も今日は準備をしてしっかりと休んで、明日の朝発つのがいいでしょう」

その後アルフは宝物庫へ向かい、レオはエルフ達を相手に色々と準備をした。

まず解ったのは、どれだけ隠蔽スキルを使っても、レビティ等の常に効果がある魔法を使っていると、魔法使い相手には魔力でばれてしまうという事だ。

それでも姿が消えていればかなり見つかり難いが、確実に求めるなら魔法は避けたほうが無難だろう。

次に、倒した証拠に体の一部を持って帰る手段として、保存の為に盗賊が使っていた破壊力の少ない凍結魔法を学んだ。

調節が多少難しいが、凍れば良いだけなので取り合えずよしとする。

そうこうしている内にアルフが戻り、作戦会議を行う事になった。

「まず、こちらの地図をご覧ください」

中心に城が書かれ、周囲に山や森、平野といった大体の地理が書かれた羊皮紙の地図が広げられる。

「これは魔界の地図で、中心が敵の城になります。こちらに戻る時は空間の歪を通らなければなりませんのですが、歪は常に一定の範囲でズレ続けていて、探す必要があります。」

最も近いのはドリユーク村の近くですが、あの辺りは強力な魔物が多くいるので、探し回るのには適していません。」

次に近いのは今魔軍が居る所なので、その次の、歩いて3日ほど南に向かった所にある歪が直しいかと。ゴブリンの生活する穀物地帯でこちらで言えばダールの近くなので、そこで探すのがいいでしょう。」

それと城の中は最後に見てから数千年経っているのですが、今はどうなっているか解りません。」

さて、レオ殿には念のためこちらの地図を2枚と、昔の戦争で使っていた魔法のコンパスを差し上げます。」

魔界は空間のブレが酷いのであまり宛にはなりません、無いよりはマシでしょう。」

それとこれは、奴隷になっていた者達に渡している霊木の若葉と言われる薬草で、多少の傷の治療と精神的苦痛を緩和する効果があります。十枚程しかありませんが、持っていてください。」

3種類の道具を受け取り、頭を下げる。

霊木の若葉は、エルフの書いたメモには、今では霊木自体の数が減ってとても貴重な薬草になったと書かれていたはずだ。」

「有難う御座いますアルフさん。大切にに使わせてもらいます。」

「もっと手助けが出来ればいいのですが、一緒に行っても足手まといで、迎えに行こうにも着いた頃には終わっているでしょうから……。」

「これで十分です。それじゃ、今日は寝ますね。明日は長い一日になりそうだ」

「必ず帰って来てください。お待ちしています」

レオは力強く頷いて屋敷を出た。

その日はセシリアの家でゆっくりと休み、これからに備えた。

翌日、セシリアに見送られて森を出る事になった。

「では5日後にはハウラに行きます。数日は待つので、この間の宿に来てください」

「勿論です。期待して待っていてください」

そう言って笑いかけ、街へと急いだ。

行きと違って1人だったので、昼にはハウラに着く事が出来た。

戻ったレオは直ぐに自室に行き、森で買った品を収納袋に隠した。
こんな無謀とも言える作戦を、仲間達に言いつもりは無い。

オリハルコンと宝石を取り出し、こっそりと街へ出ようとすると、ゲオルグに見つかった。

タイミングは最悪だったが何とか誤魔化して、買い物に出かける。

レオはまず、織物ギルドで長い布を買った。

次に昨日の路地裏に隠れてオートリザレクションが3回分かった指輪を4つ作る。

それから冒険者ギルドへ向かい、ダールに逃げる低ランク冒険者に正式な依頼をして、宿の女将宛の金貨の入った小包を渡した。

最後にギルドの隣の酒場に居た偵察兵の老剣士に、魔軍の情報を聞き、伝言を頼む。

予定では5日で戻るはずだが、余裕を持って6日後にと伝えた。

そこでレオはゲオルグに見つかり、宿の食堂へと戻った。

途中でホワイトパールと同じローブを着た青年を見かけ、つい反射的に声をかけてしまう。

転移魔法の専門家である彼は、魔軍の転移について知っている様子で、レオはかなり焦ってしまい、強引に話題を変えた。

ホワイトパールの事も聞きたかったが、今は雑念など無い方がいいので、後日会う約束をしてその場を去った。

食堂での報告では、特に情報は無かったと言って誤魔化そうとしたが、リサに怪訝そうに詰め寄ってきた。

「何か隠し事してませんか」

「いや、何も無いよ」

眉を寄せて見つめてくるリサに、「ああ、そう言えば」と言って

話題を変える。

「皆これを着けてくれ、気付け効果のある魔法が3回分込められた指輪だ。多少の怪我なら同時に治してくれる」

込められている魔法、オートリザレクションは、戦闘不能を直す魔法でこちらの世界では蘇生に当たるかもしれないと思ったが、確証が無いので気付けと言っておいた。

これまで グラビティワールド でのソロ活動でよくお世話になっていた指輪に、仲間を守ってくれと願いを込めて渡す。

そして彼らが指輪をつけるのを見て、レオは安堵して頷いた。代わりに警笛の指輪を返してもらおう。一人旅では、非常に役に立つはずだ。

部屋に戻ると、織物ギルドで買った長い帯をサラシのように巻きつけ、前面に霊木の若葉とコンパス、背中に昨日保存食専門店で買った干し肉と地図を入れてきつく縛り、皮袋を右脇に、薄く作ってもらった水筒を左脇に括り付ける。

レオが準備を終えて宿を出ると、またゲオルグに声をかけられた。本当に勘がいい、気をつけなければ。と、ゲオルグを盗み見つつ、北門へ向かった。

リサに戦場に立ちたいと言われたとき、レオはかなり困った。

予定ではレオは途中で居なくなる。何かあったらどうするんだと思っただが、核心については言えず、説得し切れなかった。

レオはもう少し粘ろうかとも思ったが、イージス も持っているし、ゲオルグとギルを後方に置く理由にもなるだろう。

ゲオルグ達のためにもなると諦め、了承する事にした。

戦闘が始まり、レオは敵軍から目立つように攪乱攻撃を仕掛けた。あまりにも強すぎる。と思われぬように、空を飛んだりクイツクで超人的な行動をしたりするのは避けて、徐々に疲れていく風を装う。

やがて増援の騎士団が到着し、手柄を焦った貴族が馬に乗ってやつて来た。

「まで、こつちへ来るなっ」

「喧しい一兵卒がっ、貴様はその場で待機だ！」

返事をしたのは、領主の館で見かけた貴族だった。

「危険なんだっ」

「ここは戦場なのだ、そんな事は当たり前だ、いいから貴様はそこにいろ！」

全く話を聞かない相手に舌打ちしつつ、状況を確認する。

敵の本陣が集まってきている。レオを囲む包囲網が、そこへ誘導するように形を変えてきた。

そこでふと、左手の刀を見た。

そういえばエルフ達は装備の魔力など解らないと言っていたが、バルドは鞘に入った刀の魔力を感じていた。

多少解るようになって来た位のレオは刀の魔力など、持っていてもさっぱり解らないが、魔物の中には解る者も居るかもしれない。

スキルを解いた時ばれてはいけないし、念のためにこちらで捨てておく事にすした。向こうで捨てたら確実に戻らないし、レオの予

定ではそれ程戦闘は多くないハズだ、天羽々斬り があれば十分だろう。

「レオ、戻れ罨だ！」

投げた刀を目で追ったゲオルグが、転移に気付いたのにはヒヤリとした。

巻き込むかもしれないと焦って振り返ったが、こちらに来る寸前に転移が発動する。

バチンッ！という音と共に魔方陣が展開し、視界が暗転した

が、予定通りに行ったのはそこまでだった。

「があっ……」

戦場で隙を見せる事の意味を、レオはまだ解っていないかったのだ。

ゲオルグに気を取られて振り返っていたレオの右脇腹に、忍び装束の隙間から滑り込むようにして、ゴブリンの細い槍が入った。

慌てて槍を斬り払い、柄を短くしたレオだったが、焼け付くような痛みの前によるめいてしまう。

遠くで転送に巻き込まれた貴族兵の絶叫が上がるが、今はそれ所では無い。

今がチャンスとばかりに群がる魔物の兵を飛び越えた時、部屋の奥で護衛と共に階段を上る将軍が見えた。

着地と同時に口元の布を取って少し吐血したレオは、何とかテレポートで追いつくがろうとしたが、激痛で集中する事ができない。

地に下りたレオは槍を抜こうとするが、元は狩猟用だったらしく返しがついていて簡単には抜けない。

「クソ……ッ」

かなり痛いのが、奇襲以外では切り札の魔法は使えない。攻撃を避けつつサラシから霊木の若葉を2枚取り出して口に入れた。

槍先は刺さったままだが、一応出血は止まり、痛みで混乱した頭にも多少の冷静さが戻る。

周囲の魔物を斬り伏せ、飛び上がって様子を見たが、将軍は既に部屋を出た後だった。

気を取り直して状況を確認すると、貴族の兵は最早ほぼ全滅していた。

それに安堵したのか、転移を行った魔術師がぞろぞろと階段を上っていく。

レオは『断裂』を使い、広範囲の敵を殲滅すると、敵陣に突っ込むようにして<透身>と<無心>を使い、姿を消した。

しかし幾らレオが驚異的身体能力を持つとはいえ、苦痛を絶えながらぶつからないように進むのは困難で、階段へ着いた時には最後の1人が柵を越える所となり、飛び込むような格好で滑り込んだ。

「ん？」

強引に滑り込んだせいで、魔術師のロープの裾に当たってしまい、

冷や汗がながれる。

魔物の魔術師は多少首を傾げたものの、それ程気にせず階段を上っていった。

床に少し血もついてしまったが、元々そういった用途の部屋でもあり、薄暗いので気にならなかったようだ。

魔物の城は全体的に薄暗く、1階は床も綺麗とは言えないものだった。

地下室を出たレオはまず、兵士達の詰め所を探す。

レオは名称が解らなかつたが、城の内部はトロールと呼ばれるオーガより少し大きく、知性もある魔物が多く居た。

声を殺して彼らの後をつけながら城内を散策し、開けっ放しの部屋へ入った。

中は雑魚寝のようで、藁に布を被せた簡易ベッドが並んでいる。2〜3匹ほどトロールが居たが、交代制なのか今は眠っていた。

近場のベッドを巡り、少々錆の見えるナイフ、所々黄ばみがある布、枕元にあつた酒を盗んだ。

それを持って2階へ上がり、人通りの少ない物置の奥で隠蔽魔法を解いた。

「いつてえ……」

霊木の若葉の効果も切れてきて、苦痛で汗が噴出し始めていた。時間もそれ程余裕がある訳ではない。急いで槍先を取り除く作業を始める。

天羽々斬り を使わないのは誤って伸ばしてしまうと大変な事になるからだ。

酒を掛けた布でナイフを拭い、ある程度汚れを取った後、もう一

度酒で濡らし、サラシでふき取った。

始める前に霊木の若葉を数枚取り出し、2枚程噛み砕いて少しづつ飲み込んでいく。

布を巻いた來国俊の鞘を啜え、短くしていた槍の柄を持ってナイフで抉り出す。

「ッ！」

血を止める代わりにくっ付いてしまった肉を裂き、槍先を取ろうとするが、切れ味の悪いナイフでは激痛で上手く行かない。

仕方なくある程度切った所で 天羽々斬り を取り出し、返しの周りを切った。

痛み無く切れた事に安堵し、霊木の若葉を飲み込んで槍先を取る。

傷口を抑えるが血が溢れ、鞘をかみ締めて酒を掛けた後、懐から出していた霊木の若葉の残り3枚を全て食べた。

何とか傷口が閉じたので、服についた血を絞って布で拭き、右脇にあつた皮袋を見た。

皮袋には大きな穴が開いてしまったので、2枚ある羊皮紙の地図の内、1枚を三層の皮袋の穴の部分に入れた。

作業を終えたレオは隠蔽スキルを使い、急いで部屋から出て行く。

將軍を探すために歩き回ろうとした矢先、大量の剣を腰に下げた槍を背負い、赤い鎧を着た、エイリアンのような黒いテカテカした顔の悪魔と、その従者と思しき人狼のような魔物が通路の奥に見えた。

かなり豪華な鎧だったので、上位種かと思ひ念のため<一体化>を使う。

レオの輪郭がぼやけ、体が溶けるような違和感に襲われる。

ただ、先ほどチラリと見た將軍は肌が赤く角が生えていて、白い鎧を着ていたはずだ、彼らは將軍ではあるまい。

< 一体化 > によって、魔力とSPがガリガリと削られていく。できれば長居はしたくないと、無視して通り過ぎようとした時、背後で悪魔が呟いた。

「はて、こちらから強い武器の気配を感じたのだが……」

天羽々斬り を使った時の事だろう。

気付かれてはいない筈だが、レオは反射的に身を強張らせる。

「勘弁して下せえよグレイヴ様。こないだも同じような事言って、部下殺してまで武器を奪って、謹慎させられたばかりでしょうに。真面目に戦えば、王以外で最強とまで言われてんですから、もう少し自重してくださいよ」

「それは解っているが……」

小言をもらってもグレイヴは首を傾げ、未だ納得が行っていない様子だ。

彼は従者の人狼に連れて行かれたが、騒ぎが大きくなれば、物置の血の跡が見つかるのも時間の問題かもしれない。

それから一時間近く城内を駆け回ったが、一度見失った將軍の姿は簡単には見つからなかった。

見かける敵は雑魚ばかりで、使用しているスキルは<透身>と<無心>だけとはいえ、使うのには魔力とSPを消費する。レオは常

人を遙かに越える量を持っているが、それでも無限ではない。

いつその事魔神の方を狙おうかと思っただが、上階にレオでも解る魔力の動きを感じて止めた。

恐らく、周囲を包む常在系の攻撃魔法か結界の類だろう、暗殺には不向きな相手だ。

けれど傷も完治した訳ではない、徐々に痛みがぶり返してきているのだが、霊木の若葉は残り3枚だ、帰りの道程を考えれば耐えなければならぬ。

一度外に出て回復を図りたいという思いが幾度となく頭を巡る。

戻るのは駄目だ、この機を逃せば隠蔽スキルを警戒される。それに初見で通じなかった罫など、俺相手には2度と使おうとはしないだろうし……。

諦めかけたその時、見覚えのあるローブを着た老魔術師が廊下を走るのが見えた。

そのローブは転移魔法を行った魔術師達のローブに似ているが、多少豪華にしたような物だった。

<一体化>を使って後を追おうとして一瞬逡巡する。

恐らく、魔力的にもS Pスタミナ的にも上位の者が居る階に行けるのは1度切りだ、もしハズレなら後がない。

だが、1時間探し回ってようやく巡ってきたチャンスだ。これを逃したらもう次はないだろう。

そう自分に言い聞かせ、<一体化>を使って後を追う。

4階へ上った老魔術師が、大き目の扉の前で息を整えるのを見て、
「あたりだと思った。」

扉の枠の上に跳び乗り、壁に張り付く。

やがてノックの音が響いて、返事が帰ってきた。

「入れ」

「失礼します」

老魔術師が扉を開けるのに合わせて、扉を少しだけ外側に押す。
腕に違和感を覚えた老魔術師は、自分の腕を見て眉を顰めた。

その隙に室内に身体を滑り込ませ、反対側の枠に手を掛けてその
上にする。

部屋の中に居たのは、赤い顔に巻き角を生やし、白い鎧を着た将
軍だった。

「何をしている」

「いえ、何やら腕が……」

それを聞いた將軍は溜息をついた。

「いくら魔術師とは言え、怠けすぎじゃないのか。お前とて魔族の
一員なのだぞ……良いから、とっとと入れ」

「し、失礼しました」

慌てた老魔術師は、室内に入ると言いにくそうに額を掻いた。

扉の上に張り付いたレオは、ゆっくりと息を吐いて苦痛に耐える。

「どうしたんだ」

「それが……例の黒いアサシンが、忽然と姿を消したとかで……」

それを聞いた將軍は、元々皺だらけだった顔をさらに顰めて怒声を上げた。

「何をやっているっ、今回は奴を確実に引き込むために、予定より早く飛んだんだぞ！」

「も、申し訳ありませんっ、門は閉まっているので、城内に居るはずなのですが……」

話が長引きそうになり、レオは焦ってきた。顔を伝う脂汗で口元の布は最早びしょびしょになるほどだからだ。

汗が落ちないよう祈りつつ、会話が終るのを待った。

「転移を使ったのでなければ、魔法を使って姿を隠しているはずだ、城中の魔術師を使って意地でも探し出せ」

「しかし、奴は怪我をしても魔法を使わなかったと言っているので、魔法は使えないのではないかと」

「魔法の道具を使っているかもしれないだろう、いいから今すぐ探

しに行け！」

「老魔術師は震え上がって頭を垂れた。

「は、はいっ、了解しました。必ず見つけます」

そう言っつて老魔術師は部屋をでた。

扉が閉まるのに合わせて、レオが床に降り立つ。

「全く、またあの我侂な魔神に小言を言われるではないか……」

そう言っつて、机の上の羊皮紙に目を向ける將軍の背後に、息を殺して回り込む。

ゆっくりと腰から 天羽々斬り を鞘ごと外し、首の位置に構え、痛みで逸る気持ちを抑えて静かに機会を待った。

やがて將軍が羊皮紙から目を離し、「ふう」と言っつて背もたれに身をゆだねた瞬間

漆黒の刃が、横一線に払われた。

鮮血を避けるため、僅かに後方に飛び、鞘を腰に戻す。

震える手を何とか動かかし、皮袋を取り出して床に落ちた將軍の首

を押し込むと、強引に懐に入れた。

扉の前に立ち、カチカチと鳴る歯を食いしばって耳を当てて外の様子を伺う。

気配は無い。

少しだけ扉を開けて更に外の様子を伺うが、誰も居ないようだ。

素早く外に出て扉を閉め、全隠蔽スキルを使い直す。

その後1階まで降りようとしたのだが、警戒が厳重すぎたので断念して戻る事にした

2階へ戻ると、ちょうど血痕が見つかったのか、さっきの部屋に人が集まり始めていた。

急いで建物の反対側へ行き、同じような物置を探して中に入る。小さな窓には柵がかけられており、グレイヴの事があって迷ったが、切り取る事にした。

隠蔽スキルを一旦切って、少し大きめに窓の周りを切り取り、柵を取っ手に引き抜いて床に置く。

姿を消して下の様子を見ると、丁度近場の衛兵が入り口の衛兵に

話を聞きに行く所だった。

一思いに飛び降り、周囲を警戒するが、気付いたものは居ないようだ。

衝撃で血を吐きそうになるのを何とか堪え、街の外へ向かった。

アルフからは外壁は無いはずだと聞いていたが、かなり高い外壁があつて冷や汗をかく。

グレイヴの事があつて城を出てから<一体化>を使っているため、疲れて足元が覚束なくなつてきていた。

それでも何とか門を見つけると、暗殺の話はまだ来ていないのか、空いたままだった。

急いで門をくぐり、<一体化>を止め、距離を取るために走った。スキルは魔力も使うがSPスタミナの消費の方が圧倒的に多い。

「はぁ……はぁ……」

完全に息が上がってしまったが、外壁の周りは草原だ、今スキルを切つて休めば目立つので、離れなければならない。

外壁が小さくなった頃、ようやく木陰を見つけてスキルを解くとそれに合わせたように門が閉まつていった。

とりあえず、傷に解毒と治癒魔法をかけ、SPスタミナと魔力を持続回復させる魔法を使う。

痛みから解放された事に安堵しつつ、警笛の指輪をはめて上着を脱いだ。

水鉄砲で汚れを落とし、水筒で水を飲むと、袋に入った首に凍結魔法をかける。

流石に極限状態が続いていたので、服を着て少しだけ木陰で休む

事にした。

だが、暫くすると外壁の門が開いて犬のような物に跨った者や、巨鳥に乗った者が飛び出してきたので、再び進まざるを得なくなる。元々 グラビティワールド はMPやSPの回復が遅いゲームだったが、現実では更に遅いようで、あまり回復できなかつた。

それでも気を取り直して走り出したのだが、問題はそれだけでは無かつた。

次の日の午後、予定通り穀物地帯に入ったのだが、畑を見たレオは愕然とした。

「ウソだろ……」

穀物地帯を通ると言う事で、食料についてはある程度現地で調達しようと思っていたのだが、畑はその殆どが枯れていた。

魔物が痩せていて、食べ物は少ないだろうとは思っていたが、広大な畑が殆ど枯れていると言うのは、流石に想定外だった。

無事な場所もほんの少しあるにはあるが、オーガやトロールが見回りをしている安易に取りには行けない。

今は目立つ行動は避けたい、殺しても良いなら奪えないことも無いが、森に入ったほうが無難だろうと考えを改めた。

しかし、森の中も木の実には喰い尽されており、ウルフのような食用にできそうな魔物も居ない。

見るからに毒がありそうなカラフルな大蛇や、紫色の植物の魔物などは居るが、とても食べられるとは思えなかつた。

干し肉はとうに底を突き、メモの知識を生かして必死に薬草や山

菜を探し、霊木の若葉を1枚噛むと、水鉄砲で作った水筒の水を多めに飲んで飢えを凌いだ。

何とか2日目の夜には歪の移動範囲内に入ったのだが、魔界の森は魔物が多く、どんなに隠れても、警笛の指輪をつけて寝ると2時間としない内に起こされた。

しかも移動し続ける歪は1人で探すのは非常に困難で、同じ場所に留まっている事もあり徐々に焦りがレオを蝕んでいた。

丸1日近く探し回った頃、既に霊木の若葉は切れ、魔法によって魔力とSPは回復していたものの疲労困憊という体になった時、上空から3羽の巨鳥と1頭のレッドワイバーンが飛来した。

巨鳥からは人狼の従者と兵士、レッドワイバーンからはグレイヴが降り立った。闇雲に探しても見つからないと考え、歪を張り込もうと言うのだろうか。

隠蔽を警戒してか、兵士は結界魔法を、グレイヴは常に微弱な雷を纏っている。

グレイヴが居るので、レオは仕方なく持続回復の魔法を止めてく一体化>を使った。

「いいかつ、絶対に結界を切らすな。標的を見つけても無理に挑まず、必ず笛か魔法で連絡しろ！」

グレイヴがそう怒鳴ると、兵達は敬礼をして素早く散った。

彼らに先を越されると不味い事になるだろう。雑魚の兵士なら一瞬で倒せるだろう、しかしどの道 天羽々斬り を使えばグレイヴにはばれてしまう。

見つかっても強引に突破する事は出来るが、そうなれば中継地予定のダールに寄る事が出来なくなる。

幸いこちらは、1日中探し回ってある程度予想範囲を狭めていた。

賭けになるがそこを探すしかない。

彼らから距離を取りつつ、必要な時だけ隠蔽スキルを使い1時間程探してようやく歪を見つけた。

だが、安堵したのも束の間、視界の端にグレイヴが見える。

必死に走るが、<一体化>でSPが削られ疲労と睡眠不足で思うように走れず、徐々に距離を詰められていく。

やがてグレイヴの魔法範囲が足に着こうかという頃、ギリギリで歪に飛び込むことが出来た。

距離を取って様子を見ると、グレイヴは歪から出て暫く辺りを歩き回った後、やがて魔界へ戻っていったようだ。

魔界に入ってから3日目の夕方にしてようやく元の世界に戻ったレオは、何とか中継地点のダールまではとコンパスを頼りに南を指した。

街道に出た時には安堵で膝を突いてしまったが、まだ安全になった訳ではないと思い直し、ゴブリンやオーガを蹴散らしながらダールへ向かった。

数時間歩いて、夕刻、外壁の衛兵が、レオを見て慌てて駆け寄った。

「お、おい大丈夫か」

その頃には最早レオは足取りもおぼつかず、視線も定まらない状態になっていた。

「魔物の……將軍のく、首……」

そう言って広げられた皮袋の中をみて、衛兵は目を剥いた。隣国が魔物の軍に襲撃されているのは聞いていたからだ。

「ハウラに……持って……」

「これを持って行けばいいのか？」

衛兵がレオから袋を取ろうとすると、レオはその手を振り払う。

「駄目、だ……俺が……でも、少しだけ、やすませ……」

「わ、解った。とにかく入れ」

レオは衛兵に肩を借り、宿の名前を言って街へ入った。宿に入ると女将が慌ててカウンターから出てきた。

「ちよっレオ、どうしたんだ!」

「女将……頼み……が」

「頼み?なんだ、何でも言いなっ」

掠れるようなレオの声に、女将は口元に耳を当てて聞いた。

「ギ……ルドの……フィルに……この袋、凍らせ……魔術師を……」
「解った。フィルに頼んで魔術師を探してもらうから、アンタはとにかく部屋で休め」

女将はそう言つと衛兵にマスターキーを投げつけ、前掛けを脱いで宿を出る。

「どこでも良いからベッドに寝かせるつ、先客が居たら隣に移らせな！」

朦朧とする意識の中、何とかベッドについたレオは、そのまま泥のように眠った。

「オ、レオツ、そろそろ起きるんだ」

女将に呼ばれて目を覚ますと、既に翌日の昼だった。
ベッドの脇に、食事が置かれている。

「腹痛くなるだろうけど、取り合えず食うんだ。ゆっくり食って、また少し休め。フィルが駆け回って良い魔術師2人捕まえてくれたから、袋は大丈夫だ。それと、他に何かあったら、今のうちに言うてくれ」

レオは食べながら簡単に経緯を説明した。

女将は心底呆れたとばかりに頭を抱え、黙って聞いている。

「すみません……あ、お金は後で届くようにしてあるんで、ツケで

「お願いします……」

「はいはい。しかし、バカな奴だとは思ってたけど、アンタマジで本物だよ……」

反論しにくい女将の言葉に頭を下げつつ、どうせなのでもう一つ頼む事にした。

「それと、鍛冶ギルドの近くのバルドインと言うドワーフの工房に行つて、刀を取ってきてくれますか。事情を話せば返してくれるはずなので」

「わかった。持ってくるからもう少し寝ときな」

2時間ほどしてレオが目を覚ますと、窓の外に女将が見えたのでロビーに向かう。

すると女将が、刀と保存食を持ってきていた。

そろそろ出ると言つと、従業員に皮袋を取りに行かせ、待ちながら話をする。

「鍛冶屋から伝言だ、『使い終わったら直ぐ返せ』とさ」

バルドらしい言い草に苦笑しつつ、刀を受け取る。

「これ俺の物なんだけど……」

「そう言つと思つて聞いたら、『あんな見送りさせといて、たった10日程度で戻ってくるヤツにはこの位の扱いで丁度いい』だとさ」

何とも言い返せないレオは、観念したように笑う。

それを見た女将も、面白そうに少し笑っていたが、丁度その時、従業員が皮袋を持ってきた。

それをレオに渡すと、いつもの顔に戻って言った。

「さて、そろそろ行くんだろうけど……気をつけるんだよ、ここま
で来て油断して死んだりしたら、承知しないからね！」

女将の叱咤に、苦笑して頭を下げる。

「絶対に辿り着きます。いつも世話になってばかりで、すみません」

「ウチは冒険者の世話を焼くのが仕事だからね。ほら、とっとと行
きな、リサが待ってるんだろ」

呆れたように微笑む女将に頷いて街を出ると、全快したレオは空
を蹴って真っ直ぐにハウラへ向かった。

260

森の中を蛇行しながら進む陸路と違って、空では一直線に進む事
が出来る。

途中何度か巨鳥に出合ったが、刀も戻ったレオの敵ではない。

問題と言えば警笛の指輪をつけて寝ても、何も襲ってこない事が
あって、一度將軍の頭部が解凍された事があつたくらいだ。

5日の道を2日で通る予定だったが、これまでのアクシデントで
疲弊していたため3日掛かり、昼過ぎ、遂にハウラが見えてきた。

地に下りて門へ向かうと、衛兵が困惑したようにレオの顔を見た。

「な……お前死んだんじゃ……」

レオはそんな衛兵に構わず、皮袋から將軍の首を取り出す。顔に驚愕を浮かべる衛兵を前に、高らかに宣言する。

「敵将の首だつ、今すぐ領主に取り次いでもらいたい！」

衛兵は驚愕して腰を浮かせ、「わ、解った、ちよつと待っていてくれ」と言い残して門の中へ消えた。

暫くして門を通され、直接領主の館へ向かった。

元城という事もあり、通された謁見の間は完全に玉座の間という雰囲気だった。

首は本物かどうか確かめると言われ、実際に將軍を見た兵士や偵察兵、魔物に詳しい者などによって鑑定が行われている。

不機嫌そうに待っていた領主のクラウスは、本物と思われるという報告を聞いて、「そうか」とだけ答えた。

「まあ、違つたろうと言つ意見は無かつたし、あれは確かに敵将の首だろうな」

クラウスは渋々と言つ顔で認めた。

「では、約束通り」

レオが続けてスタンプを要求しようとする、クラウスは手を上げてそれを遮った。

「しかしな、同行していた貴族兵が戻つてこないのはどういつ訳だ」

「それは、彼らが自ら付いて来たのです。私も止めましたが、聞く

耳を持って貰えませんでした」

「貴族兵の中には、バスラ公爵も居たと言う、まさか故意に見捨てた訳ではあるまいな」

それならば確かに疑われても仕方無い部分もあるだろう。

だが、転移先ではそのような余裕は無かった。負傷していた事を告げ、血塗れのサラシを見せると、クラウスは顔を顰めて「もう良い仕舞え」と手を振った。

「しかし、あの条件は戦時下で出したもの。一時休戦となった現状では首の価値も下がるからなあ」

「それは私が將軍を倒して、敵が混乱しているからです！」

必死に抗議するが、クラウスはとぼけた様子で視線を逸らし、周りの貴族は薄く笑っている。

長旅の疲れと暗殺の重圧で、精神的に疲弊していたレオは、青筋を浮かべながらも今暴れば台無しになると何とか堪える。

「そうだな、手柄は手柄だ、あの首は私ならば有効に使えるし、条件着きで良ければスタンプを貸してやるう」

「条件？」

「そうだ、お前にはこの領の軍に入ってもらおう」

「なっ……」

つまりは都合の良い手駒になれと言う話だ。

しかもそれを受けたからと言って、直ぐにスタンプを貸すとは限らない。レオがどれ程スタンプを欲しているか解って居るのだから、反逆を恐れて焦らして来るだろう。

もういつその事この城の兵士を皆殺しにしてスタンプを奪ってやるうかと思ひ始めた頃、謁見の間の隅から、凜とした女性の声が響いた。

「随分と興味深い話をしているな」

声のした方を向くと、金髪の女性騎士が警備の兵士と思われる男を気絶させて脇に置いていた。

彼女を見たクラウスは、震え上がって危つく玉座から落ちる所だった。

「ぶ、ブルーローズ様、どうしてここに……」

「その名で呼ぶなと言っているだろう、恥ずかしい……私の事はシヤンティと呼べ」

ブルーローズことシヤンティは、気絶した衛兵を蹴飛ばすと、クラウスの傍らへゆっくりと歩み寄りながら話続けた。

「言われた通り客間で待っていたが、なにやら城内が騒がしくなつてな。歩き回って聞き耳を立てると、敵将の首が届いたとか言っているではないか。

そこで様子を見に来てみれば、絶対に私は通せないと言われたの

で、衛兵を気絶させて来たんだ。ま、無作法だったがそこは許せ」

顔だけ見れば美女のシャンティを前に、クラウドはガタガタと盛大に震え、周りの貴族も真っ青になっている。

そんなクラウドの肩に左手を置くと、震える彼を無視して右手を件の柄に置き、困惑しているレオに向き直った。

「名乗りが遅れたな、私はシャンティ。Sランクの冒険者で、今はナルバ共和国の親衛隊団長をしている。対魔軍の増援としてこの街に来たのだが……迷惑をかけたな、エルフのアサシンよ」

「なるほど、貴方が……」

シャンティは青い鎧を着ている、恐らくはそこからブルーローズと呼ばれる事になったのだろう。

「さて、前置きは終わりだ。私の耳が腐っていなければ、その者は敵将の首を単独で取って命からがら戻り、金も地位も名誉も要らないから約束の物をよこせと言ったが、貴様はそれを誤魔化そうとした。と言う風に聞こえたのだが、違うか？」

クラウドは冷や汗をながし、何度か喉を鳴らしてから震える声で答えた。

「し、しかし、エルフにアンロックスタンプを渡すのは、色々と不味い事が……」

「だからこそ無茶を言ったのだろう、そしてそれを実現された。これはエルフの失態ではなく貴様の失態だ。しかも敵将の首と言う成果は自分で使おうとしたらしいでは無いか。」

確かにお前の方が共和国から多くの報酬をもぎ取れるだろう。だが、そんな事が許されるとでも思っているのか？」

最早返す言葉が無いのか、黙りこくったクラウドに、シャンティは「スタンプは何処にある」と聞いた。

「部屋の金庫に……けれど渡すのは……」

尚も食い下がるクラウドの首に、瞬きの間に白銀の剣が添えられた。

「2度は言わん、鍵を寄越せ」

シャンティは震える手で懐から出された鍵を引手繰ると、レオに声を掛けて謁見の間を後にした。

使用人に場所を聞いてクラウドの部屋に向かう途中、人通りの無い廊下で、シャンティは突然話し出した。

「これは独り言なのだが」

気が抜けて朦朧としていたレオは、その言葉で現実を引き戻される。

顔を上げたレオを視線で確認すると、シャンティは続きを語りだした。

「この国は強いエルフに対して警戒感を持っている。今はまだ無いが、いずれ近隣の領主から、私にも君を捕縛してでも軍に入れると言

う命令が下ると思う」「

それを聞いたレオは頭を抱えた。

折角長旅から戻ってきたのに、直ぐに発つ事になりそうだ。

「私は誰からも君の名前を『聞いていない』から、報告書にも書く事は出来ないが、数日中にはこの街を出て、奴隷制度と関係の薄い教国か、魔術帝国へ向かった方が良いだろう」

「色々とすみません、ご迷惑お掛けします」

それでも何日か余裕が出来るのは助かる。正直もう歩くのも辛い。よろよろのレオをみて、シャンティは面白そうに笑った。

「別にいいさ、罪は全部領主のクラウスのせいにするし、そもそもこの国のエルフに対する扱いには不満があったんだ。首になっても冒険者に戻るだけだし、気にする事は無いよ」

部屋の前に着くと、シャンティは扉を蹴破り金庫を開け、スタンプについていた鎖を剣で断ち切った。

そのままそれを投げて寄越し、レオに向き直ってニヤリと笑って敬礼をする。

「じゃあな英雄、また会えるときを楽しみにしている」

「はい……」

鋭い眼光でじっと見つめるシャンティを見て、助けてもらった手前正直には言えないが、出来ればあんまり頻繁に会いたくないタイプだなあと思うレオだった。

街へ出たレオは、仲間がどうなったか聞こうと思い、老剣士の待つギルドの隣の酒場へ向かった。

酒場へ入ると、丁度旅支度を終えた仲間達が老剣士と話しこんでいる所だった。

「あれ、まだ居たのか」

疲れたレオが何の感慨も無い再開の挨拶をすると、驚いた一同が目を見開いて振り返った。

刀と収納袋を持っていたリサは、右手に持っていた収納袋を取り落とし、目に涙を湛えていたが、疲労困憊でスタンプを取り出すレオは気付いていない。

「ほら、見てくれよりサ、アンロックスタ　「ばかあつ！」
ゴフウツ」

渾身のグーを左頬に貰ったレオは、スタンプを床に落としかけ、右手でわたわたと握り直す。

白金で出来たスタンプは落としたくらいでは壊れないが、苦勞して手に入れたレオは落とさずにすんで安堵の溜息をついた。

ふと、そのレオの胸にリサが泣きながら抱きついて来た。

そのまま大声を上げて、いつかのように号泣を始める。

疲労で頭がぼやけたレオは、「あれ、リサってこんなカンジだったっけ？」等と見当外れな事を考えて仲間を見渡すが

ゲオルグは「抱き返してやれよ」とばかりに顎をくいくいと上げ、

ギルは意地の悪い顔でニヤニヤと笑い、

アルザダさえも困ったように苦笑していた。

遂に助けも逃げ道も無くなったレオは、羞恥と照れで耳の先まで真っ赤に染めて、ぎこちなくリサを抱き返した。

彼の戦い（後書き）

さて、解った方も多いかとおもいますが、ここまでの話のコンセプトは「スパイ映画みたいな事をファンタジーでやる」です。

忍者と言えば暗殺ですしね。

女性の登場人物が続いてますが、ブルーローズさん実は男で「ブルーローズは止めてくれ」と言う設定だったのが書いてる途中で、「ブルーローズって名前の男」が思った以上に寒い事に気付いて性別変更しました。

もっと良く考えて名づければ良かったです。

それと霊木の若葉の件ですが、10話で奴隷のエルフとの会話を入れるつもりだったのですが、丸ごと11話のトリガーになってしまい、唐突な感が出てしまいました。修正しておきます。

本当はここまでに10件くらいお気に入り登録してもらって、この先は友人に希望とか聞いて多少プロットいじりつつマツタリ書くつもりでした……。

作者は基本もうちょい真面目な物をかこうとするのですが、この作品に関しては本当に悪乗りで始めたので変更しきれません……そこはご了承ください……。

次回ですがちょっと先を考えるのと、誤字脱字修正……それと体重が減ってしまった作者の蘇生の為に休憩入ります。このままでは死んでしまうのでご了承ください。

この先もマツタリ読んで頂けると嬉しいです。

三章 白いロープの青年

あれから3日経っても、リサは機嫌を治してくれなかった。

レオがハウラに着いた初日は、憔悴していた為か仲間も皆気遣ってくれていたのだが、次の日に皆に事情を説明し終わると、全員が呆れ果てた様子で寧ろリサに味方し始めた。

スタンプは初日にリサの首輪を外した後、セシリアに渡してある。

その際に、これを切っ掛けに人間に復讐をするなど考えないようにと諭すと、セシリアは苦笑しながら言った。

「解っています。人間は気に食わないですが、レオさんの仲間が人間だという事は解ってますし、人間は気に食わないですが、長老達は『戦乱の渦に入っても良いことなど何も無い』と、言っていますし、人間は気に食わないですが、数で言えば圧倒的に多いですから」

「あー……うん、解ってくればいいんだ……」

レオとしては三度同じ事を言った件について多少突っ込みたかったが、セシリアの冷たい目を見て諦める事にした。

本来であればスタンプも渡し、ダールの知人に手紙や刀も送ったし、翌日にでも魔術帝国辺りに向かってハウラを発つても良かったのだが、戦いの前に出会ったホワイトパールの弟子への面会が中々実現できず、出発が延びてしまった。

と言うのも、元々ホワイトパールの弟子は魔軍が使ってくるであろう大規模な転移魔法について貴族達に警告しに来ていたのだが、実際に見るまでは信じてもらえず、実際に見てからは対策の為に、周囲から来た援軍達やブルーローズを相手に敵の戦術に関する説明や、転移魔法の解説をしていたのだ。

体験者として参加すれば早かったが、立场上政治に関わる人間には会いたくないので、無理を言って時間を作ってもらう事になっている。

よって、あれから3日経った今の問題は、リサの機嫌だ。

仲間達はギルドの依頼や買い付けで宿を留守にしている為、休んでいるレオは必然的に世話役として残ったりサと2人きりになってしまう。

再開の場面で、全員にレオに泣きつく姿を見られてしまったからかりサも声を上げて非難してくる事は無いが、そのせいで余計に機嫌は悪くなっている。

レオはと言えば、昨日の昼に魔界の事を説明した時、皆に非難の雨を降らされ「どれだけ叱られても仕方なし」と酷評を受けてしまったので、現在は全力でリサに気を使っている。

昼過ぎ、入り口と食堂の間にある、休憩所の一角に置かれた長方形のテーブルで、中央に座ったりサの正面を避ける為通路側の端に座ったレオは、焦燥で喉を鳴らしてから言った。

「ええと、喉が渴いてたら何か……」

「飲んだばかりなので要りません」

素気無く断られたが、喉が渴いているのはレオの方だけなので当然といえば当然の反応だろう。

仕方なく自分の分だけ飲み物を頼み、喉を潤して何とか会話を続ける。

「暇なら本でも」

「昨日買ってもらった本もまだ途中です」

「どうやら、暇で窓の外ばかり眺めている訳ではなかったようだ。

「そうだ、服でも買いに」

「もうすぐ街を出るんですから、今買っても仕立てが間に合わないんじゃないですか」

首輪が外れて嬉しくても、また似たような事をしそうで簡単には許せない。と思っていたリサだったが、レオの的外れなご機嫌取りの連続に呆れ、もう許してしまおうかと思いついて始めた。

そんなリサの内心など知る由も無いレオが、「小物や甘味は既に断られているし、これ以上なにを差し出そうか……」などと考えて唸っていると、宿の入り口に見覚えのある白いローブを着た青年が現れた。

彼はレオを見つけると軽く会釈し、レオ達の居る休憩所のテーブルへと歩み寄る。

「ホワイトパール先生の弟子で、リスイと言います。そちらも急ぎだったのに申し訳ない、中々帰らせてくれなくて……」

フードを取って右手を差し出したリスイは、20歳前後で金髪の優男と言った風貌だった。

レオはその手を握り返し、懐の手紙を確認すると小声で返事をする。

「いえ、それは構いませんよ。ただせつかく来てもらった所悪いんですが、少々内密にしたい話もあるので、そちらの宿で話せますか」

冒険者向けの宿は壁が木製で、中の会話が筒抜けだ。異世界云々の話は、場合によっては聞かれたら頭を疑われかねないので、レンガ造りのリスイの宿で話したかった。

「わかりました」と言って頷いたリスイを見てリスアが同行しようと立ち上がってしまい、レオが慌てて制止した。

「待ってくれ、リスアは留守番を頼む」

それまで無表情を貫いていたリスアの顔が、レオの言葉で思い切り顰められた。

「3日前まであれだけ無茶したばかりだって言うのに、今回も聞かせてもらえないんですか」

「う……」

これまでとは違う本気の怒りの声に、レオは反射的に2歩ほど後退してしまう。

しかし他の仲間ならまだしも、リスアにだけは軽蔑されたくないレオは何とか踏みとどまった。

「こ、今度は帰ってから全部正直に話すから、頼むから待っていて…
…くださいお願いします」

レオが何とか声を絞り出すと、リサは返事もせずに部屋へ戻って
く。

「あらら、ちょっとタイミングが悪かったかな？」

がつくりと頂垂れるレオの背中を撫でながら、リスイは気楽な調
子で言った。

これまでの苦労が水の泡となってしまうたレオは、このまま休憩
所で小一時間休みたいと思ったが、あまり時間も無いので何とか心
を立て直す。

「いえ、多分どのタイミングでもこうなったと思います…」

そのまま背中を撫でられつつ、レオは自らの宿を出て赤いレンガ
の宿へと向かった。

リスイの宿泊している宿は、領主の居た城の近くということもあ
り、富裕層向けのわりと大きな間取りとなっていた。

もうすぐ街を出るのか、入り口の扉の脇に荷物が置かれている。
部屋に入ったレオは、中央に置かれた艶のあるテーブルセットを
勧められた。

勧められるまま分厚い絨毯を踏みしめて席に着くと、対面にリス
イが腰掛け、苦笑しながらレオに話しかけた。

「それにしても、貴方には驚かされる。私の忠告を完全に無視した

事もそうだけど、何よりあんな功績を立てた方がこんな性格とは……ああ、すみません悪い意味では……」

「まあ、悪い意味で言われても仕方ない姿でしたし……」

どういう意味で言ったかは想像に難くないが、あまり掘り下げても聞いたレオの方が落ち込むだけなので、深くは聞けない。

またしてもネガティブになりかけるレオを、パンツという手を叩いた音で引き戻すと、「では」と言ってみてレオは本題へ入った。

「先生の事についてどうしても話したい事があると行ってたけど、どんな内容ですか」

答えなければここに来た意味の無い質問だが、やはり知性的な人物相手に異世界がどのと言う話をするのは、躊躇われるものだ。幾ばくか逡巡したものの、言わなければ進まないと言い聞かせ、レオが口を開いた。

「その……少し前にホワイトパールさんと思われる人物に会ったのですが、その時の状況が少し特殊でして」

「ああ、先生が現れる時は大抵が特殊な状況なので、ある意味それで普通かと思えます」

あくまでも冗談めかして答えるリスイをみて、専門家でもあるし、たとえ信じてもらえなくても言ってみて損は無いだろうと思えた。

この先を言ってみて困惑されたり訝しがられたりしませんようにと祈りつつ、レオは躊躇いがちに言葉を続ける。

「実は、俺が彼に出会ったのは異世界で……して……」

部屋の空気が凍りついた。

『異世界』の単語が出た瞬間、リスイの穏やかな表情は激変し、真剣な表情で睨むようにレオを見つめている。

そのあまりに予想外な反応に、レオは二の句が告げられなかった。

「どうぞ、続けて」

本当に続けて良いのかと確認したくなる程の眼光を向けられ、レオは困惑しつつもどうにか話を続けた。

「彼は人気の無い場所で、光る装飾のついた巨大な門の前に立っていて、俺を見つけると『この門の向こうへ行ってみないか』と誘ってきたんです。そうして門を越えて気付いたら、ダールの北にある平原に」

「レオさん」

だが、レオの説明はリスイの声によって中断される。

不気味なほどに低い声を上げたリスイの顔には、最早隠す事無く憤怒の色が浮かんでいた。

その顔を見たレオは、一瞬的外れな焦燥を感じたが……その後リスイが続けた言葉に、無理矢理現実に引き戻された。

「一応忠告しますが、この世には言っても良い冗談と、悪い冗談があります。もしそれが冗談であれば、間違い無く後者の方ですよ」

数瞬我を失っていたレオだったが、脳がその言葉の意味を解する

と同時に慌てて訂正する。

「ま、待って、最後まで聞いてください。その時この手紙を渡され
たんです、ここに書かれてるカークスと言う人物に心当たりはあり
ませんか」

直ぐにでも追い出されそうな雰囲気になったレオは、腰を浮かせ
て手紙を取り出した。

差し出された手紙を、懐から杖を取り出したリスイは、細心の注
意を払って受け取った。

緑色の宝石が付ついた杖をレオに向けた彼は、レオと手紙を交互
に見ながらも何度も裏返して手紙をチェックする。

だが、リスイの表情は次第に険しくなり、そのうちに手紙を見つ
めたまま考え込むようにして動かなくなった。

暫しの間「ありえない……けど、確かに印の魔力も紋章も、筆跡
まで先生の……しかも、この宛名は……」等と独り言を言っていた
が、やがて顔を逸らし、横目でレオを見ながら小さな声で呟いた。

「グリエルモ・エテルノ」

「は？」

突然意味不明な単語を言われ困惑するレオを、無言のままのリス
イが探るようにつめる。

「えっと、もし誰かの名前なら俺には解りませんが……」

どれだけ表情を探ってもレオの顔には困惑しか写らない事を確認
すると、彼は視線を逸らして頭を振った。

リスイは冷静さを欠いたことを後悔するように目を伏せ、疲れた様子で言う。

「申し訳ない、さっきのはただの独り言です。まず異世界については、私は先生ほど高位の魔法は使えないから、詳しい事はわからない。それとカークスさんについては、知ってますが教えるには1つ条件があります」

「条件？」

先ほどのリスイの様子からどんな事を言い出すのかと思われたが、彼の出した条件は意外なものだった。

「私の紹介で行く以上、あまり異世界の事を言触らさないで欲しいので、手紙を本人に渡すまでこの件を口外しないよう、契約の刻印を胸に刻ませてください。手紙を渡せば消えるものだけど、無理をして他人に伝えれば後悔する事になるでしょうね」

「それは俺の仲間にもですか」

「誰にも、です」

レオは不審に思ったが、理由を聞いても今は教えられないと言っばかりだった。

仲間には元々、信じてもらえる目処が着くまで言わないつもりだったがし、他に聞く当ても無いので諦めて受ける事にした。

躊躇いがちにレオが頷くと、リスイは安堵したように溜息をついて席を立ち、対面からレオの前へ回り込んだ。

「服はそのままです。ただ、多少気持ちが悪くなるかと思うけれど、

終わればすぐに直るので抵抗はしないように」

リスイはレオの隣まで歩み寄って胸に手を当てると、ボソボソと聞き取りにくい声で詠唱し続ける。

その度に不快感が胸から広がってきたが、数分耐えた所でリスイはあっさりと手を離す。

吐き気によってレオが少しむせてしまい、背中をさすってそれが治まるのを待ってから、彼は続きを話した。

「では、約束通りカークスさんの話を。

私の知る限り、先生の知り合いでカークスと呼ばれる方は1人しか居ません。

訳あって同行は出来ないの間違っていても責任は取れないけれど、恐らくはファーツ教国の首都にある大聖堂で、依り代の巫女の世話係をしているカークス・マートンで間違いないはずです」

「依り代の巫女というと、もしや」

レオはハウラに来る途中、ギルが話していた事を思い出した。

愛の神イシスを、その身に宿せる巫女がいる。と言う話を聞いたはずだ。

「ええ、貴方の話が本当なら、向こうに行けば、場合によっては何らかの啓示が得られるでしょう」

神様と話が出来そうだと言うのは、大きな前進だ。

もしかすると、元の世界に戻る方法を聞けるかもしれない。

そう考えた時、一つの光明得と同時に、これまで思いも寄らなかつた不安がレオの中に生まれた。

「ところでレオさん、先生がその後どうなったか知ってますか」

思考が脱線していたレオはその言葉に咄嗟に反応出来ず、うろたえてしまう。

「えっ、ええと……残念ですが、俺は向こうで会ったきりです」

「……そうですか、申し訳ない。少し、疲れたので話はここまでで。私はこれから北の魔術帝国にある、ラウロという街へ戻るの、北に来る機会があったら是非寄ってください」

「ありがとう、俺も明日には教国に向かいます」

そう言って部屋を出て行ったレオを見送ると、1人部屋に残ったリスイは椅子へ座り直して深い溜息をついた。

話が終った後、宿に戻る前にどうしても一人になりたかったレオは、衛兵に薬草を取りに行くと言われて街を出た。

あまり奥に入るとモンスターが出るので、森の入り口で倒れていた苔むした倒木に腰掛けると、口元を押さえて考え込む。

最初、異世界の事を知って居そうなりリスイが怒りの視線を向けてきた時、レオは反射的にこの世界の人間を殺した事を怒っているのではないかと思った。

よく考えればギルやゲオルグのみならず、リサでさえも盗賊相手には容赦なく攻撃していた。ましてや何の関係も無いリスイが、そんな事で怒るわけが無いと一度は落ち着いた。

だが、会話が進むうち、ある事に気付いた。

レオ自身はゴブリンやオーガといった、知能の低い人型の魔物を倒していて感覚が麻痺してきている。

けれど、もし元の世界に居るホームセンターの後輩や他の知人、それに両親に、レオが3人の人を殺し、知性ある魔物の将軍を殺した事を知られたら、どう思われるだろうか。

彼らに知られたら、嫌悪感を抱かれるかもしれない。そう思うと急に元の世界に戻るのが怖くなった。

勿論黙っていれば良いのではないかとも思ったけれど、レオにはそんな重大な事を隠したままにできる自信が無かった。

(もし本当に帰れると言われたら、俺は……迷わずに帰れるかな)

幾らゲームの能力や財産があるとはいえ、こちらでの生活は色々と不便だし、楽なものではない。

それでも、リサや仲間達と居る時間は楽しいが、レオはまだこの世界全体に対する不信感も捨てきれない。声に出して言っても八つ当たりにならなければならないから言わないが、「なんで俺がこんな目に……」と思うことなどしょっちゅうある。

しかもゲームやネットや小説が好きだったレオが、今更娛樂が殆ど無いこの世界に永住する事になれば、後々精神的に辛くなるだろう。

いつの間にか袋小路に入ってしまったような感覚に襲われ、まだ何も解っていないというのに、レオは混乱と恐怖に駆られていた。

木漏れ日の中、そんな答えの出せない事を考えていると、あつという間に時間は過ぎてしまった。

目的地の変更も告げなければならぬし、あまり遅くなっても皆に心配されるので、レオは座り心地の良い倒木から立ち上がると、

近くにあった山菜を適当に采って街へと戻る事にした。

それ程ゆっくりしていたつもりも無かったのだが、レオが宿の前に着いた時には日が大分傾いてきていた。

宿の食堂に入ってみると、既にゲオルグを除く全員が集まってレオを待っていた。

レオがテーブルにつくと、いつものようにギルが代表して聞いてくる。

「どうだった、何かわかったか」

「その事なんだが……例の手紙のあて先が教国の人らしくて、急ですまないが、俺は予定を変更してそっちに行かなきゃならなくなっ
た」

教国は位置的に魔術帝国より遠い。既に仕入れをってしまったアルザダには悪いと思い、レオがここで別れても良いと言つと、アルザダは笑って首を振った。

「いえ、レオさんの帰りが遅かったので、食料品は殆ど買っています。多少移動に掛かる日数が増えても、問題ないですよ」

それを聞いて安堵するレオに、ギルも頷く。

「アルザダもこう言ってるし、ゲオルグは依頼の報告に行ってるが、俺もアイツも教国行きでも別に問題無いぞ。後はリサちゃんだが…

…」

「ここまで来て置いて行くと言われたら、今度こそ本当に怒ります」
今日までの怒りが本気じゃなかったという意味のリサの発言に、
レオは戦々恐々とするが、もう一つ謝らなければならぬ事を思い
出した。

「あー……それで、事情を話すと約束してたけど、カークスって人の情報を聞くための条件として、手紙を届けるまで秘密を守る為の契約の刻印とかいっつうのを受けたんだ。手紙を渡せば消えるらしいんだけど」

そう言っつてレオが胸元を見せると、彼を除く全員がポカンと口を開けてそれをみた。

レオは気にする素振りを見せないが、彼の胸には重ねすぎて最早ほぼ真つ黒と化した魔方陣の円が描かれている。

仲間3人を代表して、魔術師のリサが詰問した。

「あの、こんなの無抵抗に刻ませるなんて……何を話したんですか？ 8属性の上位攻撃魔法に、毒、呪詛、痙攣、その上転移魔法みたいな刻印まで付いてますけど……レオさんならどうか解りませんが、これ、普通の人なら口を滑らせたら間違いないく即死ですよ」

「え」

てつきりちよつと電撃が走るとか、言おうとすると口が動かなくなるくらいだと思っつていたレオは、それを聞いて冷や汗をかいた。

慌てて解いてもらおうかと思っつたが、既に後の祭りだ。あれからかなりの時間が経っつているし、リスイはもうとっくに街を出てしまっつただろう。

「ど、どうしよう」

「いや、どうしようって言われてもなあ」

混乱して助けを求めるレオの声に、魔法に疎いギルとアルザダは渋い顔で視線を交えた。

唯一リサだけは「私を連れて行かないから、そんな事になるんです」と、呆れたように溜息をついたが、流石の彼女も今回はお手上げのようだった。

しかし、それを聞いて力なく頂垂れたレオを見かねたのか、仕方なく声を掛ける。

「ともかく、教国にいけば刻印は消えると言われたみたいですし、行っって見ましようよ」

「そうだな……今更騒いでも仕方ないか……」

当たり前の事を言われて落ち着いたレオは、自分が先ほどの思案で混乱していたのを自覚して目を伏せた。

何故か妙に元気の無いレオを気遣うように、ギルが声を掛ける。

「おいおいどうしたんだ、気分でも悪いのか？」

「あ、ああ、実はこれを刻まれた時ちよつと気持ち悪かったんだ。出発の準備は大体終わっているし、部屋に戻って少し寝るよ」

レオはそう言い残すと、足早に部屋に戻っていった。

残った3人は気になったものの、内容は刻印の事もあって聞けないので、明日の出発に備えて準備の仕上げをしに散っていった。

部屋に戻ってすぐに眠ったレオは、夜中に目を覚ましてしまった。明日の出発に備え寝なければならぬのは解っていたが、悩んでいた事もあり一度目を覚ますと中々寝付けなかった。

仕方なく部屋を出て食堂に向かうと、閉店の準備をしていた店主に、無理を言って酒を売ってもらった。

休憩所のテーブルに座って、殆ど人通りの無い街を眺めながら干し肉を肴にちびちびと水割りを飲んでいると、対面に誰かが座った。

「どうしたんですか、こんな夜更けに」

機嫌が悪かった筈の彼女が、何故現れたのか一瞬疑問に思ったけれど、レオは困ったように笑って返した。

「リサこそ、寝ておかなくて良いのか」

出発は明日の昼なので多少の余裕はあるが、長旅の前だ、しっかりと寝ておかないと後々辛いだろう。

だがリサは特に気にする様子も無く「ちょっと気になったので」と言っ、持ってきたグラスにレオの水割り用の水を入れた。

手に持ったグラスを凝視し、「肌を刺す冷氣よ」と呟くと、中の水が3割程、シャーベット状になった。

「いいなそれ、俺も試しに……」

「間違いなく、中身が全部凍ってグラスが砕けるのでやめて下さい」

リサの的確な指摘に、悲しい事に自分でも納得できてしまったレ

才は溜息をついた。

するとリサがもう一度魔法を使い、レオのグラスを冷やしてくれた。

「ありがとう、それにしてもリサは魔法が上手いな」

「こんなの大した事無いですよ。それに得意属性が氷だというだけで、他の魔法はどちらかと言うと大雑把です。レオさんに比べればずっとマシですが」

そんないつも通りの切り返しにも、「だよな」とぼんやりとした返事しか返せないレオに、リサは遠慮がちに訊ねた。

「詳しい事は聞きませんが、リスィさんに言われた事がそんなにショックだったんですか？」

心配そうに言うリサに、レオは慌てて手を振った。

「いや、それとは関係ないんだ」

酒のせいでつい口を滑らせてしまったが、結局は言えない事なので、黙っていれば良かっただろう。

だが、それを聞いたリサは「じゃあ話してください」と言わんばかりの顔でレオを見つめている。

本当は話したくなかったが、ここまで来て言わなければ後が怖いし、心細かったのもあって思い切って話す事にした。

「俺が住んだ東の島国は、凄く平和な所で……実はこっちに来るまで、人を殺した事なんて無かったんだ」

「それは解ってました」

その言葉に、何とか誤魔化していたつもりだったレオは、驚いてリサを凝視したが「レオさんは物凄く解りやすいので」と、言われて苦笑した。

「今日、ちょっと故郷の事を思い出す事があってね。もし平和な向こうの人達がその事を知ったらどう思うかって、不安になったんだ」
「なるほど」

リサは一度相槌を打って考え込んだ。
そして暫し黙った後、彼女は懸命に言葉を選んで続けた。

「レオさんは、私を助けた事を後悔しているんですか？」

「そんな事は……」

ない。と答えようとしたが、あの時の事を後悔している自分には、言う資格が無い事に気付く。

それが解って反射的に顔を向けると、レオの真意を汲み取ったりサが優しく微笑んでいた。

「だったら、私の為にも胸を張っていてください。助けなければ良かったなんて言われたら、私だって流石にショックですよ」

初めて聞きリサの本心を前に、レオは何の反論も出来なかった。
実年齢の半分程度しか生きていないリサに諭されたレオは、何だか急に情けなくなり、苦笑して頭を掻く。

「ああ、そつだな。」ごめん」

いつも通りのレオの反応を見て、満足げに「解ればいいんです」と言つてグラスの水を飲んだりリサは、暫く外の暗い街道を眺めてから言つた。

「……明日、出発の前に少し街を歩きませんか。教国までは、農村ばかりらしいですし」

「いいね。それじゃ、コレはここまでにして寝直す事にするよ」

そう言つてレオが水差しやグラスをお盆に乗せて立ち上がると、部屋に戻る途中のリサが別れの挨拶をした。

「おやすみなさい、レオさん」

暗くて表情まではよく解らないけれど、その声だけでレオは肩の荷が下りた気がした。

「ああ、おやすみ。リサ」

水割りのセットを食堂に戻し、部屋に帰つたレオは、この世界に来て初めての、安らかな眠りに落ちていった。

三章 白いロープの青年（後書き）

おお作者よ、復活に2週間もかかるとは情けない。

一週間で蘇生できると思ってた時期が、ボクにもありました。

プロットの練りが甘いのも痛感して色々と準備がかかりました。すいません……。

さて、内容ですが、伏線メインの内容で意味深な発言はアレなんです。ファンタジーなのでその辺はご愛嬌と言う事をお願いします。

それと感想で葉っぱの回復力弱いけど、あれで高級なのか……という話が出ました。詳細は8話くらい後で出てくるのですが、あの葉っぱのメインは傷の回復ではなく、精神面での回復効果です。偉い人は肉体的な傷よりストレス等の方が切実な問題なので、そのうちの需要がメインとなります。

blank明けでちょっとクオリティが不安な部分もありますが、楽しんでもらえたら幸いです。

捨てられぬもの

出発の前に、アルザダの護衛依頼を正式なものにする為に冒険者ギルドへ行って受付をしたのだが、レオの話が広まり始めているのか、白髪頭のギルド長が出てきて強引にランクアップさせられてしまった。

特例で試験は無い代わりに、事務的な手続きが必要なようで、ロケットの色がランクEの黄色からDの青に変る頃には1時間程かかってしまった。

一緒に街を回る約束をしていたリサ意外は、既にギルドを後にしている。

「ごめんリサ、こんなにかかるなんて」

「別に良いですよ。時間が掛かったのはギルドの都合ですから」

文句も言わずに待っていてくれたリサに頭を下げたレオは、眉を寄せて唸った。

「あんなに強引にランクアップさせられたって事は、確実な情報として回って来てるのかなあ」

「街を歩くのも、早めに切り上げて出た方が良いかもしれませんね」

「はあ……まあ、仕方ないか。徴兵されるよりはマシだ」

一昨日までアルザダの手伝いをしていたレオ達は、商品の積み込

みの間街を巡るつもり予定だったけれど、この状況では早めに門へ向って手伝った方が良さそうだ。

せっかくリサと街を周ろうと思っていた時間が削られた事に溜息をついたレオだったが、待っていたリサと共にギルドを出る時に、丁度見送りに来たセシリアとかち合った。

「こんにちはレオさん。あら、そちらの方白髪だったので人間の老人かと思ったのですが、違っただけですね」

「ブツ」

レオとしてはセシリアの突然の暴言に驚いて噴き出してしまっただけなのだが、慌てて口元を抑えてリサを見ると、彼女は冷笑を浮かべてレオを見ていた。

「どうしたんですかレオさん、今の冗談がそんなに面白かったならもっと笑っていてもいいんですよ」

「ち、ちがうんだ……今のはただ、ちょっとビックリしたというか……」

リサはそんなレオの残念な弁明を軽く流すと、何故か困惑しているセシリアに向き直った。

「因みに、こちらのエルフさんは何方ですか」

「ええと、彼女は前に魔軍の事を教えてもらったセシリアだ」

「セシリアです。あの、レオさんには何度もお世話になっているので、見送りをしよう」と……」

「スタンプの件とかで、エルフとの繋ぎ役を頼んだんだ。ほんと、それだけなんです」

必死に紹介を続けるが、リサは特に興味が無いと言った風に流した。

「そうなんですかー」

気まずい空気を感じ、セシリアも慌てて手を振って弁明を始めた。

「ご、ごめんなさい。森を出たのも最近だったし、人間とはあまり会話した事が無いので、つい」

流石のレオもこの弁明には納得が行かず、小声で責めるように言葉が続ける。

「いや、ついっつかり言う内容じゃなかっただろ……」

「本当にごめんなさい……でも、ドワーフと話す時は最初にあの位言ったほうが会話が盛り上がるので、異種族は皆そうなのかと……」

言われてみれば、バルドもよく鬚を馬鹿にされると言っていた気がする。

確かにドワーフには彼のような性格のものが多いなら、さっきの挨拶で概ね正解なのかもしれない。

「そういう事なら、もう良いですよセシリアさん、知らなかったなら仕方ないです。レオさんは別ですが」

恐縮してしまったセシリアを宥めるようにリサが言った。

「俺は別なのか……」

「何か言いましたか、1時間待たせた上に私を笑ったレオさん？」

そうやって再度笑うリサの前に、許されたはずの案件まで蘇った事に恐怖したレオは、無難に話題を変える事を選んだ。

喉を鳴らした場面で、目を逸らした先に丁度軽食屋が目に入った。

「その、せっかく来たのに立ち話もなんだろう、何か飲みながら話さないか」

特に反対意見も無かったので、レオはそのままそくさと軽食屋の中へと駆け込んだ。

茶菓子と薬草茶を頼み、セシリアに向き直ったレオは用件を聞く。

「それで、何か用件があつて来たのか」

頷いたセシリアは、戻ってきた時にスタンプと一緒に返したはずのコンパスと、真新しい地図を取り出した。

「はい、実はスタンプを届けた時に、長老からまだこの大陸に慣れていないレオさんに、お礼としてこれを渡してくるようにと頼まれたんです」

彼女の話によると新しい地図はこの大陸の地図のようで、4つの国を分ける線が敷かれている。

その中の一つ、西にある最も大きな国にはナルバ共和国と書かれ

ており、その東の端、中央より少し北の位置に現在居る町、ハウラの名前が書かれていた。

その少し北にはクラム魔術帝国と書かれた地域があり、その国境沿いを西に行った場所に両国の間に割り込むような形で教国と書かれた場所があった。

「この地図とコンパスは、レオさんに差し上げます。国境は状況に合わせて書き換えたもので、森の位置も今では多少変わっているかもしれませんが、平野や山は目印になると思いますし、遠慮なく持っていてください」

「ありがとう、正直助かる。聞いた話から想像するのと、実際地図を見るのとじゃ違うからな……アルフにもお礼を言っておいてくれ」

レオが差し出された地図とコンパスを受け取ると同時に、頼んでいた茶菓子と薬草茶が届いた。

それをテーブルの中央に置くと、受け取った地図を再度広げて見る。

「どうぞ、遠慮なく食べてくれ。それにしても、あまり森をでないって言うエルフが、よくこんなの作れたなあ」

「変わり者が居たんです。本人は馬に乗ってあちこち歩くのが好きで、地図を作ったのはついで見たいなものだったらしいですけど」

「へえ……」

最後にもう一度地図を眺めて仕舞い直すと、豆を潰して焼いた菓子を頬張りながら、レオはエルフの森に行ったときの事を思い出しながらしみじみと言った。

「しかし、アルフもよくあの場面で信じて色々と貸してくれたよな。貸してもらえなかったらかなり厳しかったけど、あの時の俺はかなり胡散臭かったきがするんだが」

「ハイエルフの方々は基本的に嘘はつきませんから、信じるのは当たり前ですよ。レオさんは色々と特殊なようですが、嘘を言う人には見えないですし」

真剣な表情で褒めるセシリアに、

「そ、そうか」

と言つて照れながら茶を口に運ぶレオだったが、干され気味になっていたリサに背後から毒づかれた。

「話を逸らすのと忘れるのは、随分と上手いみたいですけどね」

「うあつっ」

驚いたレオは、飲みかけた茶を少し零して服を汚してしまった。流石に悪いと思つたのか、リサがテーブルの端にあったフキンを手渡す。

「大丈夫ですか。全く、いつも気をつけてって言われてるじゃないですか」

「いつも？」

飲み物を零した事など滅多に無いレオは、いつの事だろうと小首

をかしげた。

するとリサは、何故か顔を伏せて「何でも無いです、間違いました」と言っただけ黙りこんでしまう。

仕方なくセシリアに首輪を外したエルフ達の話聞きながら、食事を済ませ店を出たのだが、リサの顔色は悪いままだった。

「リサ、具合でも悪いのか」

心配になったレオが声を掛けたものの、リサは困ったように笑って首を振った。

「本当に何でも無いんです……ごめんなさい、ちょっと忘れ物を思い出したので、一度宿に行ってから北の門に向かうので、先に行っていてください」

様子のおかしいリサが気にかかったが、隣にはセシリアも居るので、レオは黙って頷いて北の門へ向かった。

リサの姿が見えなくなった所で、レオはセシリアに疑問に思っていた事を口にする。

「そつえば、あんなに人間を毛嫌いしてたのに、リサには普通に接してくれるんだな」

言われたセシリアは、少し呆れたように苦笑した。

「幾ら私でも、あんな娘相手に突っ掛かったりはしませんよ。レオさんが助けたがっていた相手と言つのもありますし、あの子まだ16歳くらいでしょう?」

「ま、確かにな……」

普段すっかりしているのをたまに忘れそうになるが、リサはまだ精神的には大人とは言えないであろう年頃だ。

気を使ってくれたセシリアには、感謝しなければならぬかもしれない。

「けど、レオさんは本当に変わっていますよね……一人の相手にそんなに必死になるなんて、他のハイエルフの方々からすれば、考えられないのではないのでしょうか」

「ん、なんでだ？」

一人の相手に固執するのは、種族関係無くあり得る事じゃないかと思っていたレオは首をかしげたが、セシリアは本当に不思議で仕方が無いという風に続けた。

「アルフさんもそうですが、この大陸のハイエルフは、普通個別の人物に対してあまり感情を持ちません。遠い異国からやって来たレオさんは別ですが、自分の森の者でも、その森のエルフ全体という意味で配慮する事が多いです」

「へえ」

上位種故の感情と言うモノなのだろうか、元が人間のレオには良く解らなかつた。

「生まれた時から皆そうだと言われているので、特例なのでしょうね。魔物の将軍も凄く魔法を使って一人で倒して来てしまうし、レオさんには驚かされてばかりです」

「その話は止めてくれ。仲間にも散々怒られたし、正直今考えれば無謀だった。魔物をナメてたよ」

レッドワイバーンやジャイアントにあまり苦戦しなかった事から、この世界の魔物は大した事が無いだろうと思っていたレオだったが、実際に行った暗殺計画は見事にその奢りに足元を掬われた形になってしまった。

本人としては、今はあまり思い出したくない過去である。

その作戦によって、友人や仲間達が首輪の呪縛から解放されたセイリアはもう少し食い下がりがりたかったが、無謀と言う所はイマイチ否定しがたいので、諦める事にした。

「本来なら、お礼に私も同行したいのですが、私にも使命があるので……」

顔を伏せるセシリアに、レオも沈痛な面持ちで答える。

「行方不明のエルフ達……か、俺の事は気にするな。幸い仲間には恵まれているし、俺も見かけたら助けて静寂の森に行くように伝えておくから、セシリアもそのまま旅を続けてくれ」

「お願いします。ここ数十年あまり見つからなくて……人間嫌いな私も、最近になって森を出る事になったくらいなので」

頭を下げたセシリアを見た視界の端に、北門への道が見えた。

レオが門の脇に目を向けると、丁度ゲオルグとギルが荷馬車に荷物積み込んでいた。

それを見たセシリアは、微妙に顔を引き攣らせながらレオの後ろに隠れて聞く。

「あの、レオさんはアレに乗って旅をしているんですか」

「そうだけど……どうしたんだ？」

「レオさんには何でもない事みたいですけど……普通エルフは、人間の作った乗り物や道具には嫌悪感が沸くものなんですよ」

顔を引き攣らせたままレオの後ろに隠れ続けるセシリアからは、荷馬車だけでなくゲオルグやギルに対しても嫌悪感があるように感じられる。

レオに気付いたゲオルグは隣に居るのがリサで無くセシリアだと言っことに気付き、首を捻った。

「あれ、誰だいその娘。一緒に居たりサはどうしたのさ」

「リサは忘れ物を思い出して、宿に行ってるんだ。こちらはこの前話した、エルフのセシリアだ」

「なるほどねえ、アタシはゲオルグ、よろしくね」

そう言って差し出したゲオルグの手を、セシリアはレオの背に隠れつつじっと見つめた。

「どうも……」

暫くその状態が続き、意味が解っていないゲオルグが手を出したまま首をかしげて、解っているレオもどうしたものかと唸り始めた頃、ようやく前進したセシリアは手をちよっとだけ当てて直ぐに引っ込めた。

場が微妙な空気に包まれ、3人とも何と言ったものかと悩んでいると、見かねたギルが荷物を置いて割って入る。

「何やってんだよゲオルグ、この前レオに、エルフの事情教えてもらったじゃねえか……悪いなセシリアさん、俺はギル、ゲオルグの連れだ。コイツは何も考えないで生きてる奴だからさ、さっきの事は多めに見てやってくれ」

自分を貶し尽くした自己紹介に、若干不満そうなゲオルグだったが、ここはギルに任せられた方が良さそうと思っただけ、渋い顔をして押し黙った。

セシリアもギルの方はまだ話しやすいようで、レオの横にで頭を下げた。

「静寂の森から来たセシリアです。こちらの方こそレオさんにはお世話になって……そうだ、長老のアルフから仲間の皆さんに伝言で、『我々の事情で仲間のレオさんを危険に晒してすまなかった』と」

またこの話題か。とレオは顔を引き攣らせて明後日の方を向き、それを見たギルは苦笑した。

「それは別にいいぞ。聞いた話じゃ、レオの方が教えてくれて頼んだみたいだし、そっちにも事情があったんだ、謝るような事じゃない」

話の流れは悪いものではなかったが、いい加減この話題から離れたかったレオは、強引に話を逸らす事にした。

「ところで、準備の方は終わったのか？」

「俺達の分は終わってるぞ、アルザダの方はもうちょいだな。そこに置いてある分で最後だ、本人ももうすぐ取引先から戻ってくるはずだ」

「なら俺も手伝おう、セシリアは」

「勿論私も手伝います」

「そうか、ならあの袋を頼む」

なるべく急ぎたい状況でもあるし、リサを待つ事も兼ねて、全員で残りを積み込むことにした。

積み込みはレオ達が手伝った事もあり、10分程で終わった。

多少打ち解けた4人は、荷馬車に腰掛けこれまでの旅について話していた。

「ホント、あの山菜食ったときは、リサに掘ってもらった穴に吐き続けながら、絶対レオを殺してやるって思ったもんだよ」

「そ、その事は散々謝ったじゃないか……」

頭を掻きながら目を伏せるレオを、セシリアが驚いたように見つめる。

「レオさんって、あんなに凄いハイエルフなのに、山菜と毒草の区別がつかないんですか？」

「いや、あの時はまだ、このメモの内容もちゃんと覚えてなかったし、他にも考え事をしててボーっとしてたんだよ」

荷馬車に積んであった収納袋から、薬草が書かれたメモを取り出したレオだったが、それを見たセシリアは更に眉を顰める。

「それって、ハイエルフの方が私達普通のエルフにも解りやすいように、薬草の特徴を纏めてくれたメモなんですけど……」

レオがメモを持ったまま固まって二の句を告げられずに居ると、ゲオルグがニヤニヤ笑いながら詰め寄ってきた。

ゆっくりと剣を鞘ごと取り外すゲオルグを見て、レオは荷馬車から立ち上がって数歩後退する。

「おやあ、他のハイエルフはこんなの読まなくても、山菜と毒草の区別は付くみたいだけど、アンタひよっとしてわざと間違えた訳じゃないよねえ？」

ゆらゆらと矛先を探すゲオルグの剣を前に、レオは背中に冷や汗を流しながら後退を続ける。

「や、ヤダなあゲオルグさん、あの毒草は俺も食いかけたんですよ、知ってたらわざわざ食べようとする訳ないじゃないですか」

必死の弁明も虚しく、ゲオルグの剣はレオの足元を小突き始める。突然豹変したゲオルグにセシリアが硬直し、これから始まる見世物に期待したギルは面白そうに笑う。どうしたものかとレオが視線を巡らせていると、取引先から帰ってきたアルザダが目留まった。

「荷物はもう積み終わりましたか。おや、こちらの方は？」

丁度ゲオルグの背後から現れたアルザダは、2人の様子には気付かずセシリアに目を向けた。

「アルザダさん、丁度いいところに……彼女が前に話してた、エルフのセシリアです」

「あ、始めまして、静寂の森から来たセシリアです」

レオの背後から痛い視線を感じる気がするが、振り返ったら負けだと言い聞かせ、何とか平静を保つ。

「どうも、商人をしているアルザダです。ところで、リサさんはどこに？」

「忘れ物を取りに……って、そう言えば遅いな」

アルザダに言われて気付いたが、途中で宿に寄ったとしてもそろそろ着いていなければおかしい時間だ。

様子を見に行きたいが、人間嫌いのセシリアを一人残していくのはどうだろうと思いいレオが視線を向けると、彼女は苦笑していた。

「私は良いですから、様子を見に行つてあげてください」

「すまない、ちょっと宿に様子を見に行ってくる。直ぐ戻るから、待っていてくれ」

そう言つて走り去っていくレオを見送りつつ、ゲオルグがやれやれという風に言った。

「しかし、レオの世話好きも随分板についてきたねえ」

「そこがレオらしくていいじゃねえか。お前だって、アレが面白そうで着いて来たんだろ？」

心底面白そうに笑うギルに、「まあね」と曖昧な返事をしたゲオルグは、小さく笑って荷馬車に乗り込んだ。

レオ達と分かれたリサは、宿泊していた部屋へ戻っていた。

後ろ手に扉を閉め、部屋の中で一人になると、軽食屋での出来事が思い起こされる。

食事中に、飲み物を零していつも叱られていたのは、レオではなくリサの父親だった。

商売仲間を家に呼んで、話をしながら食事をするのが好きだった父親は、酔ってよくお酒を零しては母に叱られていた。

レオが、自分が何とかしてみせると言って笑った時、リサは北の町で落ち合おうといったきり居なくなってしまった父が、ようやく現れたような気がしていた。

だが、彼はリサの父親になりたいくて彼女を助けた訳ではない。

父親のように思っているリサの感情は、レオにとっては不条理な評価なのかもしれない。

けれど、未だ精神的に幼さの残るリサにとって、今最も必要とし

ているのは恋人ではなく、無くしてしまった家族に代わる者だった。それを自覚した時、宿に置いたまま捨てていこうとした奴隷の首輪を、どうしても取りに戻りたくなかった。

嫌な思い出しかない首輪だったが、レオに拾われた時には全ての持ち物を無くしていたリサにとっては、家族の思い出が宿る、最後の品だ。

リサの首には、レオの治癒魔法でもなかなか治せない痣が残っている。今もレオが買ってきたリボンが巻かれている。

今はこれがあれば大丈夫だと思っていたリサだったが、自分の弱さを自覚した今、首輪が捨てられなくなってしまった。

そつと首輪に指を這わせると、両親や姉の事が鮮明に脳裏に浮かぶ。

「じゅめんね……」

ぼんやりとした口からでた謝罪は、誰に対してのものだからリサ自身も解らないけれど、その言葉で、やはりこの首輪は手放せない。と、嫌でも理解させられた。

そのまま、取りとめも無い昔の思い出に浸っていると、あつという間に時間が過ぎてしまい、突然ドアをノックする音が部屋に響いた。

「リサ、まだ居るのか？」

扉の向こうから響くレオの声に、リサは反射的に首輪をポケットに入れた。

「はい、今出ます」

リサは扉の前で一度立ち止まり、表情を作ってから扉を開いた。廊下に出ると、レオがいつもの様に頭を掻いておずおずと聞いてきた。

「その、さっきの事でまだ怒ってるなら……」

「いえ、私はもう何も怒ってないですよ。ところで、出発の準備はもう終ったんですか？」

「ああ、アルザダの荷物も積み終わったし、後はもう出るだけだよ」

感傷に浸っていた間に、かなり時間が経ってしまったようだと言ったリサは、困ったように笑う。

「ごめんなさい、遅くなっちゃいましたね。行きましようか」

それは見ていたレオが心配になるような表情だったが、今のリサには精一杯の笑顔だった。

2人が北門へ戻ると、荷馬車からすこし距離を置いた所に立つセシリアが、頭を下げてきた。

「それではレオさん、お元気で。また近くに来る事があったら、森にも寄ってください」

「ああ、色々世話になったな。セシリアも頑張ってくれ」

セシリアが頷くのと同時に、荷馬車からギルの声が響いた。

「お、来た来た。おい、そろそろ行くぞー」

最後に会釈したレオとリサが荷馬車に乗り込み、二台の荷馬車はセシリアに見送られながら走り出した。

門で衛兵に「もう少しゆっくりしていても……」と引き止められたが、正式な命令は出ていない為か、何とか街を出る事ができた。

ダールと違って出会った人は少なかったが、色々な出来事があったリサは、そつとポケットの中にある首輪を握りながら、小さくなつていくハウラの門を見つめていた。

捨てられぬもの（後書き）

スランプがこんなに辛いものだったなんてorz

お待たせして申し訳ないです。ようやく出来ました……。

内容についてですが、『彼の戦い』までのしわ寄せの影響で、リサの話が多めになっていますが、次回からは仲間の話が出てくるのでご安心を。

それと感想でスタンプについての意見が多く寄せられたのですが、実は1話分省略した話があって、そこで補足するつもりだったのが、そこまで説明ばかりだった事や、どの道『彼の戦い』でスタンプは終わりだと言う事もあり省略しました。

違和感強い方が多いようなら、余裕ができてから加筆しますのでご意見頂ければと思います。

国境の村（前書き）

更新遅くなつて申し訳ありません、スランプ時に無理に書き続けたせいもあつて本格的に体調崩してしまいました。

間結構空いてしまったので、今の所問題ないと思ひますが後に変更点あるかもしれません、ご了承くださいm（| |）m

国境の村

北周りに教国を目指し、二つ目の村が見える頃には、一行がハウラを出てから二週間が経過していた。

予定ではもう少し遅くなる筈だったが、保存の利く食べ物や調味料を一つ目の村で捌くはずが、北にあったその村は、ハウラに来る前に魔軍の略奪に遭い、多くの者が今も近隣の村に逃げ込んでいて廃村に近い状態だった。

アルザダの頑張りもあり多少は売れたけれど、それでも多くの在庫が余ってしまい、リサが魔法の冷気で持たせながら旅路を急いでいたのだ。

この辺りはウルフの上位種であるワイルドウルフが出没するポイントで、ウルフより匂いに敏感なワイルドウルフが背後から群れを連れて現れる事が多いので、レオを含む前衛3人が後続に、リサとアルザダが前方の馬車に乗り込んでいた。

手綱を2人に任せているレオは、相変わらず水鉄砲の練習をしている。

冷気をかける事ができれば練習にもなるのだが、誤って凍らせてしまうと商品としての価値が落ちてしまうので、任せてもらえなかった。

それでも最初に比べれば魔力の操作上達してきており、消防の散水並みだった水圧は、家庭用の物程度には落ちてきていた。

表の座席に座って、気だるそうに手綱を握っていたギルだったが、

ふと思い出したように振り返ると、レオの隣で横になっているゲオルグに声をかけた。

「なあ、そっぴやお前の住んでた所この辺だったろ。ちよつとよつていかないか」

ギルは真面目な調子で言ったのだが、面倒そうに溜息をついたゲオルグは、寝返りを打って背を向けた。

「別に、今は急いでるし、去年は一度戻ってるからいいさ」

「ん、行くならアルザダさんには俺から言うけど、本当に良いのか？」

レオとしては気を使って言ったつもりだったが、ゲオルグはうざったそうにヒラヒラと手を振った。

「いいんだよ、どうせ生きてる知り合いは居ないんだ。墓参りだけなんだから、そう頻繁に行かなくてもいいさ」

「あ、そうだったのか……すまん」

「別に気にしなくていいよ。共和国と魔術帝国は昔から仲が悪くて、小競り合いなんてしょっちゅうだから、それ程珍しい事でもない」

それきり黙ってしまったゲオルグから視線を外すと、ギルが申し訳なさそうにレオを見ていた。視線が合うと、気まずい雰囲気を作すためか、ギルはそのまま軽い調子で聞いた。

「ところでレオ、確か初めて会った時空飛んでたよな」

「ん、そう言えばワイバーンの時は飛んだな」

あまり目立ちたくなかった為、ハウラに戻る時に全力で駆けつけた以外は空を飛ぶのは避けていた。

飛行魔法の話に興味を持ったのか、ゲオルグも顔を上げてレオを見つめる。

「え、なにアンタ空飛べんの？」

レオが頷くと、割り込まれそうになったギルが身を乗り出して聞いてきた。

「なあ、次の休憩の時ちょっと俺を乗せて飛んでくれねえか？」

「別に……構わないけど」

「クッ」

予約が取れたギルは嬉しそうに拳を握り、先を越されたゲオルグは苦々しげに呻いた。

2人の余りのテンションの高さに、ぼんやりとしていた頭が醒めたレオは、慌てて付け加える。

「ただ、あんまり目立ちたくないから、人が来たらやめるからな」

「ああ、わかってるって。しかし、空を飛ぶなんざ、昔大枚はたいて巨鳥に乗らせて貰った時以来だな」

ギルが楽しそうに言い、軽快に手綱を振ると、ゲオルグは心底つ

まらなそうな顔で座席に寝なおす。ただし、寝るときに「二人目はアタシだからね」と言うのは忘れずに。

別に面倒という訳でもなく、楽しみにしている2人に水を注すのも悪い為、極小さな声でレオが呟く。

「良いけど、空飛ぶつつつても大した事無いと思うが……」

その呟きには誰も気付かないまま、荷馬車は真っ直ぐに数時間後の休憩地点へと向っていた。

休憩地点に着いたレオは、安全の為に寝袋数個で作った着地点を用意すると、革のベルトを数個使ってギルの身体を固定していた。

前の荷馬車からリサとアルザダも降りてきて、何をしているのかと聞いてきて、ギルが事情を説明すると、納得したりリサは自分も乗せて欲しいと頼んできた。

「アルザダさんは興味ないんですか？」

「私は高い所は苦手なので……遠慮しておきます」

気まずそうに言うアルザダに軽く謝り、周囲の警戒を頼むと、レオは自身にレビテイトをかけた。

準備を終えたレオは、ギルを背負って一息に空へと駆け上がった。いった。

常人の数倍の身体能力を持つレオの全力の上昇に、ギルが感嘆の声を漏らす。

「おほつ、こりやすげえな。見るよレオ、もうあいつ等あんなちっちゃくなっちまった」

下を覗くと、確かに荷馬車の脇に居るリサ達が小さく見えていた。

「そうだな……けど、悪いがこれ以上は上がれないんだ。あんまり高い所で魔法が切れたら困るし……」

「まあいいさ。お、見るよ森の向こう、次の村が見えてるぞ」

「あれがそうか、じゃ、あっちの方には行けないな。反対に行くか」身を翻し、山道を逆走するレオだったが、ハウラに戻る際森の上に入り込むと巨鳥に襲われると学んでいた為、背中にギルを乗せていて戦闘は無理だという事もあり、あまり自由に飛ぶ事は出来なかった。

それでも最初の内は遠くを見渡して楽しんでいたギルだったが、徐々にその言葉も途切れ、彼の着るチェーンメールが鳴らせるカチヤカチヤという音だけが響くようになっていった。

「なんか……すげえ高い山を走ってるみたいな感じだな……」

「まあ、実際走ってるだけだしな……」

飛んでいると言っても、自由に滑空している訳ではない。レオが空中に作った足場の上を走っているだけなのだ。

慣れてくると飛んでいるというより、吊橋の上を走っているような感覚になってしまい、面白みに欠けてきたのだろう。

「なあレオ、そろそろ……降りないか」

「ああ……」

どことなく残念な空気が流れ始めた所で、空中散歩は終わりとなった。

着地点に降りると、リサとゲオルグが駆け寄ってきた。

「ギル、どうだった？」

目を輝かせて聞くゲオルグに、ギルは何とも言いにくそうな表情で頭を掻いた。

「いや、なんか思ってたのと違って、飛んでるって感じじゃなくな
てな」

上空で感じた残念な空気をギルが説明すると、リサとゲオルグは落胆の表情を浮かべてレオを見た。

「そんな目で見るとよ……俺の飛行魔法はこれしかないんだ。足を踏み外したら危ないし、つまらないって言われてもなあ……」

「怪我しないように、って事なら仕方ないですね」

諦めの表情を浮かべるリサとは対照的に、ゲオルグは口をへの字に歪めて腕を組んだ。

暫く考え込んだ後、首を捻りつつレオに聞く。

「なあ、さっきの飛行魔法、アタシにかけるってのは無理なのか？
自分で走った方が面白そうだ」

「いや、あんな高度な魔法他人になんて無理だと思っぞ」

「無茶振りと思ったギルが割って入ったが、実はレビテイトは他人にもかけられる魔法だった。」

「けれど慣れるまで操作が難しく、向こうでは落ちてもダメージは無かったが、こちらでは高度に寄っては死んでしまう事もある。」

「やれる事はやれるが、危ないから止めた方が……」

それを聞いたゲオルグはニヤリと笑い、その顔を見たギルは「なんでやれるって言うんだよ」という表情でレオを見た。

ギルの言わんとした事に気付いたレオだったが、時既に遅く、ゲオルグに詰め寄られてしまう。

「高いところに行かなきゃ良いんだろ。大丈夫だって、アタシは身体も頑丈だし、木の上くらいまでしか行かないからさ」

ゲオルグの性格を考えると、何とか断った方が良いかもしれないと思ったレオだったが、気晴らしにもなるだろうし、フオーローしてやれば大丈夫だろうと思ひ直した。

「まあ、そのくらいならいいか。俺も並走するから、行き過ぎるなよ」

「わかってるって、良いから早くやってくれよ」

ゲオルグの足元のにレビテイトのイメージ　円とルーン文字が浮かぶ　を浮かべたレオだったが、魔法をかけられた本人は首を傾げた。

「まだかい？」

「え、もう魔法はかけたはずだけど……」

そうなのか。と、生返事をしたゲオルグはその場で足を上げたり、ジャンプしたりしたのだが、一向に空中に足場を作れる様子は無い。空中を足で掴む感じで　とか、足の裏をなるべく水平に　等とアドバイスをしながらも、レオが何度か魔法をかけなおしたのだが、結局アルザダが村の方から来る旅人を見つけるまでかかって、ゲオルグが空を飛ぶことは無かった。

ゲオルグは不満そうにぶつくさ言いながら諦めたようだが、レオはそう単純には済まなかった。

思い返してみれば、リサが放った魔法を完全に食い止めたレジストシエルも、元のゲームの時とは性質が違っていた。

大き目の薪の上に腰掛け、配給された食糧を食べながらどうしてだろうかと考えるレオの所に、ギルがやってきて声をかけた。

「よう、どうしたんだ」

「ギルか。ちょっと考え事してただけだよ、何か用か？」

相談したい所だったが、呪いの事があるので正直には言えずにはぐらかすと、ギルはレオの隣に腰掛けて言った。

「いや、用って訳でもないんだがな。さっきの荷馬車で話した事で、ゲオルグのやつ臍曲げちまって、こっちに追いやられたってわけだ」

肩を竦めて冗談めかして言うギルに、「俺の隣は流刑地なのか」とレオが頂垂れながら呟くと、ギルはニヤニヤと笑いながら答えた。

「困った事がある奴は、皆レオに吸い寄せられていくんだよ」

「全く嬉しくない引力だな……ところで、随分詳しいみたいだったけど、ギルとゲオルグって付き合い長いのか」

「別に長いって訳でも無いぞ。この近くで野垂れ死にかけてたゲオルグを拾ったのが始まりだったんだが、最初は一緒に旅してた時、護身用について剣を教えたら、あつと言う間に追い越されちまってな。俺じゃ高ランクのクエストは着いていくのも覚束ないってんで、すぐに別れたんだ」

更にギルは明後日の方向を見ながら、「それに、あの頃はドラック止まりだったしな」とギリギリ聞こえる程の小さな声で言った。

「へえ……」

何となく興味が沸いてチラリとゲオルグの方を見ると、向こうもレオ達の話している話が気になるらしく、目を据えてこちらの様子を伺っていた。

慌てて食事に集中したレオは、話し相手のギルに視線を戻すと、話題を変えた。

「ん、けどゲオルグに剣を教えたって、ギルって歳いくつなんだ？」

「今年で31になる」

「なるほど」

何だか妙に気が合う相手だとは思っていたが、レオの元の体の年齢と近いと言うのもあったのかもしれない。

一人で納得して頷いているレオを不審に思ったのか、ギルも聞いてくる。

「そういうレオはいくつなんだよ。ハイエルフは見た目と釣り合わねえ歳だったのは前聞いてたけどよ、実際何百歳くらいなんだ？」

別に隠す事でもないしと思いきや正直に答えようとしたが、よく考えるところの世界での1年が何日か解らなかった。

「ちなみに、一年って何日だったけ？」

「360日だろ。って何の質問だ今の」

元の世界と殆ど大差が無い事に安堵し、首を傾げるギルを何とか笑って誤魔化すと、レオは28歳だと告げた。

これにはギルは大いに驚いたようで、大きく目を見開いて声を上げた。

「って事は、お前も年下だったのか」

「ああ、3つ年下だな」

「そうか……」

何やら考え込むように黙ってしまったギルを尻目に、食事を終えたレオは荷馬車でこり固まった身体を伸ばした。

「なあ、ちょっと運動がてらまた剣の練習しないか。この所、ずっ

と座ってばかりだし」

「剣の相手ならゲオルグの方がいいんじゃないかねえのか？」

肩を竦めて自嘲気味に言うギルに、レオは呆れたように溜息をついた。

「ゲオルグは……強いけど、熱くなると終らなくなるんだよ……」

「確かに、それは厄介だな」

納得したように笑ったギルは、立ち上がって荷馬車から木刀を取り出す。

レオもそれに続き、二人は荷馬車が出発するまで、小一時間ほど身体を動かした。

出発してから3〜4時間程度行った所で、寂れた村が見えてきた。近くの商店に交渉しに行ったアルザダとギルを残し、レオ達3人は先に宿を取りに行く。

その途中、ゲオルグが不意にレオの肩を掴んだ。

「東の宿は止めときなよ、あの宿は安いがあんまり清潔じゃないんだ。西の方に小さいが良い宿がある、案内するから付いてきな」

踵を返して西へ向うゲオルグを見て、事情を知らないリサがレオに不思議そうに聞いてきた。

「ゲオルグさんどうかしたんでしょうか、いつもとちょっと様子が

違うような」

「色々と事情があるみたいだ。俺からはちょっと……気になったなら、後で本人に聞いてくれ」

リサは頷くとゲオルグの後に続いた。

あの2人は普段からよく話しているし、間にレオが入る必要も無いだろう。

西にあった宿で、手続きを済ませて部屋に荷物を置くと、魔軍の情報を聞くために道中で見つけた冒険者ギルドへ向った。

通信手段の少ないこの世界では、最新の情報を得るのは難しいかもしれないが、注意して置いて損は無い。

だが、予想通りと言うべきかギルドのカウンターに居た若い男は、レオの魔軍に関する質問に首を捻った。

「うーん、ハウラが襲われたって話はきいたけど、他に魔物の軍の話は聞かないなあ。なんでも、身長3メートルくらいで筋骨隆々の化け物みたいな顔したエルフが、単独で魔物の將軍を倒したって噂だし、向こうもまだ混乱してるんじゃないか？」

「へ、へえ……」

あまりにも尾ひれがついた噂に、どこから突っ込んでいいか解らなくなったレオは、魔物の事以外は聞かなかった事にした。

帰り際、魔物の侵攻は暫く無いと踏んでか、かなり緊張感に欠けるギルドの受付に忠告をしておく。

「まだ話が伝わってないかもしれないが、魔界じゃ飢饉があったらしくて魔物は飢えきってるから、これかは魔軍とは関係なく数が多

くなるかもしれない。気をつけたほうが良い」

「その話は初耳ですね。確かな情報でしょうか？」

「ハウラで聞いた話だ、間違いないと思う」

それを聞いた受付の青年は、困り顔で頭を掻いた。

情報があったとしても、このように多少大きい程度の村では殆どとれる対応など無いのだろう。

溜息と共に言われた礼を受け取ると、保存の効きそうな食材を買い足して宿へ戻った。

食堂へ行くと丁度リサとゲオルグが話をしている所だった。

ゲオルグの話をしていたようだが、一区切りついた所だったようでレオが近づくと、空いている席に着くよう促される。

「ギルドの方はどうだったんだい？」

ゲオルグの問いに、少々顔を顰めたレオが答える。

「あの後はあまり動きは無いみたいだ。といっても、明らかに楽観してる風だからそもそも情報を集めてないだけかもしれないが」

「ただでさえこの辺りは国境の小競り合いで厄介ごとが多いんだ、あんまり期待するのも酷つてもんさ。ともかく、全然話も出てないって事は良い事じゃないか」

「ま、そうだけだな」

序盤でいきなり要人を失った魔軍の方も、今は荒れている事だろう。

自分達で納得している二人を他所に、横で聞いていたリサは首を捻った。

「確かにここまで、そんなに魔物も多くなかったですね……でも、よく考えたら魔物って動物みたいなモノが殆どなのに、どうして少ないんでしょう」

リサに言われて気付いたのが、ゲオルグもこれまで倒した魔物を思い出すように中空を見た。

「言われてみれば、腹減ったら軍の意向なんて無視してこっちの世界に来そうなヤツが多いね」

何でだろう。と、首を捻るリサとゲオルグにレオが答える。

「向こうに行つて見た感じだと、そこそこ頭がいい奴が管理してるみたいだったな。畑とかもある程度整備されてたし」

「ああ、思い出した。前に魔物の研究してるとか言う、ヘンテコな学者に聞いた事があったな。大昔に召喚された悪魔と魔物の混血種は、強くて頭もいいとか」

ゲオルグの話が本当なら、魔物達も意外と人間に近い生活をしているのかもしれない。

向こうでの戦争は新しい魔神が生まれるまで無かった事から、將軍の死で混乱が続いているようだが、その混乱が収まればいよいよ本腰を入れて襲ってくるだろう。

リサとゲオルグは話に昇った学者について話している。それを横目に、もう一度魔物が攻めてきた時、自分は どうして いるだろうかと考えながら、レオはぼんやりと二人を眺めた。

何となく口寂しくなったので、厨房に行って軽食と水の入ったカップを取って戻ると、別行動になっていたギルとアルザダが戻ってきていた。

二人共、少々肩を落として溜息をついている。

「やれやれ、あの雑貨屋の老婆にはやられました」

疲れ果てた様子のアルザダの肩を叩きながら、ギルも呆れたように呟いた。

「あそこまでしつこく値切ってくるとはなあ。ま、こんな日もあるさ」

どうやら相当値切られてしまったようだ。

苦笑したレオが手に持った食べ物アルザダに差し出すと、「ありがとう御座います」と呟いてもそもそと食べた。

落ち着いた頃合を見て魔物の話を始めたが、話と言うほど大した物でもないで、直ぐに終わってしまった。

日が暮れ始めると、酒場としても開放している宿の食堂は人気が多くなってきた。

騒がしくなるかと思ったのか、頃合を見て疲れきっていたアルザダとリサは席を立っている。レオも立とうとしたのだが、襟首をゲオルグに掴まれてしまった。

「ちょっと付き合えよ」

「え、いや俺は……」

断ろうとした時、ギルがそそくさと席を立てて部屋に戻るのに気が付いた。

いつもならギルが付き合っただろうが、今日は雰囲気が悪くない。しかし故郷の近くを通って、飲みたい気分になっているのだろう。

何となく事情が解ってしまうレオは、諦めの溜息と共に椅子へ座りなおした。

「たまにはアンタもどうだい」

差し出されたウイスキーのような酒の入った簡素なボトルに、容易に想像できる翌朝のリサの表情を思い浮かべ、項垂れながらグラスを合わせた。

一口飲んで喉を潤すと、さっさと逃げたギルを恨みつつ損な役回りを演じる。

「しかし、そんなに怒らなくても良いだろ」

「ん？」

解っていると思えない顔でとぼけるゲオルグに溜息をつきながら、もう一度指摘する。

「ギルの事だよ。あいつだって悪気があって言った訳じゃないんだから」

「そんな事は解ってるさ。ただ、アタシにだって色々あるんだよ」

レオとしてもあまり深入りしたい話題ではないが、このままの状態では不味いのではないかと思いついて、ゲオルグが一度グラスを煽ってから続けた。

「旅の途中でもあるし、何日も引き摺ったりはしないさ。この話は終り。ほら、アンタも飲みなよ」

しぶしぶレオがグラスに口をつけなおすと、ゲオルグは嬉しそうに笑った。

店は仕事帰りの農夫達と宿に泊まっている冒険者でそこそこ繁盛しているため、少し大きな声で会話を続ける。

「ところでギルに聞いたけど、ゲオルグってギルに戦い方を教わったんだって？」

未だ何故自分が刀の扱いが出来るようになったのか解らないレオは、戦いの中での駆け引き等はまだまだ練習中の身だ。

今まさにギルに教わっているレオから見ると、ゲオルグは兄弟子と言う事になるのかもしれない。

「教わったって言うっても最初の頃ちょっとだけで、アタシの性分にも合わなかったから、基礎の部分意外はあんまり影響受けてないけどね」

思い起こしてみれば、ギルとゲオルグの立ち回りは真逆だ。援護やサポート重視のギルと敵陣に切り込んでいくゲオルグでは、戦い方が全く違うのだろう。

「それにランクが上がってからは、すぐに別に行動しようって言われたし、期間としてもあまり長くなかったのさ」

当時の事を思い出しているのか、少し遠い目をしたゲオルグが付
け足す。

「なるほどな」

相槌を打ちながら酒を煽るレオに、今度はゲオルグが聞いてきた。

「そういうアンタはどうなんだよ。あんな扱いにくそうな剣自然に
使ってる割に対人戦は弱いし………どういふ鍛え方したら、そうなる
んだよ」

「う……」

刀の扱いはこの世界に来ると同時に、いつの間にか身につけてい
たモノだ。説明を求められてもレオには答えられない。

330

「これは、その……呪いの事とも関係するから、今は言えないんだ」
「ふーん」

全く納得は行っていないようだが、呪いの話を出されては追求し
ようもないので、少し考えて諦めたようだ。

だが最後に、釘を刺してくる。

「今は言わなくていいけどさ。教国にいたら、ちゃんと説明して
くれよ。ギルやアルザダなんかは、恩人だからってあやふやにした
ままでも文句言わないけど、アタシは知っておきたいと思ってるん
だ」

「あ、ああ」

普段あまり思慮深いとは思えないゲオルグからの意外な言及に、レオは少々面食らって頷いた。

一旦両者が黙り込み、暫く酒場の喧騒だけが耳に入っていたが、あまり面白くない話が続いていた為か、ゲオルグが急に話題を変えた。

「ポーカーでもやんないか。結局アタシとは一回しかやってないじゃん」

「え」

確かにポーカーは元の世界を思い出せるのでレオも好きだが、ゲオルグとやるとなると話は別だった。

賭けをしていた訳ではないのだが、前にレオが一度勝負してから、仲間達は全員「ゲオルグとはポーカーはしない」と心に決めていた。実の所ギルが金を賭けないならやらないと言っていたり、アルザダが絶対にやらないと言っているのは、ゲオルグ対策でもあるのだ。

「待て待て、魔物……魔物の話をしないか？例えばこれまで倒した一番デカイ魔物とか」

「誰かさんが一人で倒した、ジャイアントよりデカイ魔物を倒した事なんて無いさ。良いからとっとトランプだしなよ」

話を逸らすつもりが、ジャイアント戦の事を思い出させる事で余計に逃げ道を無くしてしまった。

これから起こる事を考えて冷や汗を流しつつ、顔を引き攣らせたレオは収納袋からトランプを取り出し

開始から三時間程が経ち、辺りはすっかり暗くなり、客も粗方帰り初めている。

ポーカーと言っても金は賭けていないのだが、テーブルの上には点数代わりの鉄貨と、ゲオルグが飲み干した空の酒瓶が数本置かれている。

四度ほど分け直した鉄貨は、今回『も』殆どがレオの前に移動していた。

「ぐ……ぬぬぬ……」

何度やってもリードさえ取れないゲオルグは、空になったボトルを片手に、握りつぶすような勢いでトランプを掴んで震えている。今にも爆発しそうなその有様に、対面に座るレオはいつでも逃げられるようにと腰を浮かせて構えていた。

と言ってもこの惨状の原因の半分はテーブルに転がっている酒瓶のせいだ。

やはり故郷が近いと言う事もあってか、レオが止めるのも聞かずハイペースで飲んでしまっている。

もう一つの原因であるトランプだが、ゲオルグはそれ程運が悪い訳ではない。

だが、手札がそのまま顔に出してしまうのだ。

それは読み合いが主なポーカーに置いては致命的である。どんなに良い手が来ても、降りられてしまえば終わりだからだ。

しかしどんなにレオが指摘しても、一向に改善される事は無く、手が良ければにやけ、悪ければ眉を顰める。

さらに悪い事に、レオがわざと負けたりすると勘の良いゲオルグ

は直ぐに気付き「手加減してんじゃないよ……」と、殺意の籠った視線をぶつけてくる。

レオにしてみれば正しく八方塞がりだった。

始める前から決まっていた終わりが徐々に近づいて来て、レオはゴクリと喉を鳴らした。

「え、ええと……ツープアだ」

レオが手札を晒すと、ゲオルグの手からカードがパラパラと落ちた。

彼女の手札は、何の役も揃っていない。

これにより、ゲオルグの持つ点数は五度ゼロになった。

何とか宥めようと言葉を選ぶが、レオ自身も焦っている為にも何も浮かばなかった。

やがて、猫背になっていたゲオルグがポツリと呟く。

「イカサマだ……」

「いや、イカサマなんて使う必要が……」

つい本音で突っ込んでしまい、慌てて口をふさぐが、最後の祭りである。

視線だけで殺されるのではないかと言う程の勢いで睨まれ、思わずたじろぐ。

「じゃあ、何で毎回アタシのストレート負けなんだ」

「だから、手札の良し悪しを表情に出さないようにしろって」

「アタシは表情になんてだしてない！」

酔っ払いの怒鳴り声に酒場は静まり、レオの背中には冷や汗が流れる。

「ちょ……ゲオルグ、冷静に……」

泥酔したゲオルグはながら、空っぽのボトルを放って腰から剣を抜く。

「ま、まで、剣は抜かないって約束したじゃないか！」

鞘に収まったままとは言え、殴られればただではすまないだろう。泥酔しているはずなのにしっかりと標的を見据えるゲオルグに戦慄しつつ、完全に酔いの醒めたレオは数歩後退した。

半泣きのゲオルグは、ゆらゆらと頼り無い足取りでレオを追いかける。

このまま店内で剣を振り回されると宿を追い出されかねないと思っただレオは、全力で宿の外へ駆け出す。

「待ちやがれレオオオオオ ……」

こうして、泥酔状態のゲオルグの怒声を背に、レオは小さな村の中を暫く駆け回る羽目になった。

国境の村（後書き）

どうも、作者です……。

内容忘れられそうなくらい間が空いてしまいましたorz

勘も鈍つてると言うか、見直してもこれで良いような悪いようなという、完全なブランク明けモードになってしまいました……。

徐々に戻していくつもりですので、暖かい目で見守って頂けると助かります。

内容についてですが、次回もアルザダの話という事で、脇道逸れる回が続きます。

間空いた直後で説得力ありませんが、なるべく早めに出せればと思います。

友と敵と

一行を乗せた馬車が昨夜一泊した村を出て、数時間が経過していた。

とは言え、木々の生い茂る高い山に囲まれた山道を縫うようにして続く細い道は、既に人里からは遠く離れているような印章を与える。

そんな穏やかな風景を尻目に、顔色の悪いレオは荒い山道での馬車の振動で酔ってしまわないよう、神経を尖らせていた。

結局あの後、飽きるまで走り回ったゲオルグを担いで宿の主人に謝り倒す事で、追い出される事は回避できたレオだったが、気疲れと揺れ続ける山道のせいで昨日とは別な酔いを味わい初めていた。

「はぁ……」

一際大きな溜息をつくると、隣に座るギルは、ばつが悪そうにレオを見ないまま顎を掻いた。

風当たたる為に馬車の中から騎手のギルの側へ移り、肘掛に寄りかかっていたのだが、必死に吐き気を堪えていると何となく隣に座るギルへの怒りがふつつつとこみ上がってしまい、チラリと非難の色を含んだ視線を投げかける。

「まあなんだ……次の休憩所行ったらテント建ててやるから、少し休もうか」

「いや、さすがに進行遅れさせるのは不味いだろ」

本音を言えばレオにとつてとても魅力的な誘いなのだが、レオが休みたいと言ってしまうと、もし困るような状況であってもアルザダもなかなか断れないので、簡単に頷く事は出来ない。

そんなレオの心中を察してか、ギルは肩を竦めた。

「別に休むのは罪滅ぼしでっただけじゃないぞ。俺らの主力はレオとゲオルグなんだ、冷静に考えても、二人が潰れてる状況でこの先の国境付近通るのは避けてえしな」

一向が通っている山道は、魔物の増加を警戒して国内寄りの経路ではなく、魔術帝国との国境に沿って進むルートをとっている。

この道は途中何度も細い道がある為に、軍の配備もまばらで、盗賊が多く出没する地点もあるのだ。

「俺はともかく、ゲオルグは大丈夫じゃないか？村を出る時は平気そうだったけど」

「ありゃ、あいつの精一杯の虚勢だよ。昨日はかなり飲んでたみたいだし、昔まだ俺が剣教えてた頃、女騎士に喧嘩売ってボロ負けした時もあんな感じだったからな」

「なんだそうなのか。やたら酒強いんだなと思ってたんだが……」

さすがのゲオルグも今回は悪いと思っっているのだろう、あまり迷惑をかけたくなって無理をしているのかもしれない。

ただ、考えように依っては「無理をしたせいで不利になっては元も子もないだろう」とも言える。

何ともゲオルグらしい気の使い方に、ガタガタと揺れながら前を

走る荷馬車を溜息混じりに眺めた。

「なら、開けた場所についたら休憩にしよう。アルザダさんに謝らないとな」

体調が悪い事もあり、それつきりぐつたりと手すりに寄りかかって動かなくなったレオを、ギルが肘で小突いた。

レオが顔を向けると、ギルが身を寄せて咳く。

「今度この前みたいな事になったら、レオに付いてやるからよ。持ちつ持たれつって事で」

呆れたレオは、溜息混じりにあんな無茶な事は二度としない……と、言いかけたが、脳裏に四面楚歌でリサに謝り続けた辛さを思い出し、フリーズしてしまった。

暫し考えた後、心中で、無い筈ではあるが保険として頷いておこう。と弁明したレオは、なるべく小さな声で答えた。

「じゃあ念のため……貸しという事に」

「何の話しをしてるんですか？」

話の途中だったが、二人の挙動を不審に思ったりリサが荷馬車から顔を出した為、レオは慌てて話題を変える。

「い、いや、大した事じゃないんだ。ところでリサ、ちょっと聞きたいんだけど、魔法って」

咄嗟に昨日の飛行魔法の事を思い出し、つい口に出してしまっただが、異世界の話が出来ない為に肝心な事が言えない。

困ったレオは、仕方なくリサが使える魔法について聞くことにした。

「その、リサはどのくらいの物まで使えるんだ？」

「ええと、あまり大規模なものは使えないですが、得意な属性の氷なら以前レオさんに使った雷撃より上位の、氷の玉を振り回す魔法なんかも使えます」

リサはそこまで言うと、自らの髪を指した

「ちなみに髪が半透明なものも、無意識に返還している魔力が理由です。私達の一族は体内で出来る魔力量が普通より多いので、魔力が集まりやすい髪が変色しているんです」

「なるほど、染料みたいな物か」

「はい、ディアマンディ人以外でも、高位の魔術師なら髪が変色している人は居ます」

関心したレオがしげしげとリサの髪を眺めると、リサは少し拗ねたように目を逸らした。

「そんなに見ないで下さい、どうせ老人みたいな白髪なんですから」

「いや、セシリアも冗談のつもりだって言ってただろ。リサの髪は透明だし、どっちかと言うと宝石を糸にしたみたいだよ」

「あの時笑ってたくせに、今更褒めても遅いですよ」

とは言いつつ、褒められる分には悪い気はしないのか、そのまま魔法の話が続ける。

「生み出せる魔力が多いと言いましたが、私は父が短期的に頼んだ魔術師に基礎を教わっただけで、使える魔法はだいたい一般の魔術師の少し上くらいです」

肩を竦めて言うリサだったが、ギルは感嘆の声を上げた。

「少し教わっただけだったなら、一般の魔術師くらいでも十分凄くないじゃないのか？」

隣で聞いていたレオも頷いたが、リサは少し言い難そうに頬を掻いた。

「それは……その……姉さんと旅をしてる過程で、逃げる時なんか地面を凍らせたりして練習を……」

騒がしい荷馬車の上で小声で呟いたため、よく聞こえずに訝しむ二人に、リサは大きく咳払いをして話題を変えた。

「と、ともかく、私が使うのは前に見せた雷撃クラスの魔法全般と、それより少し上位の氷魔法です。それ以外にも生活用の魔法はある程度使えますが、魔力がある人なら誰でもやれる程度のもんです」

解説を聞いたレオは暫し考え込んだ。

ギルやゲオルグの実力は、剣の腕を見れば解るが、リサについても一度全力を見ておいたほうが良いかもしれない。

（それに、ついでに俺の魔法についても試してみたい所だ。休憩の

時にでも言ってみるか)

消耗した状態で移動はしたくなかったが、休憩中に持続回復魔法で回復すれば良いだろう。

と、レオが考え込んでいる間にギルが割り込んできた。

「なありサ、魔法の基礎は学んだって言ったが、剣に魔法を着けたりは出来ねえのか？」

顔は平静を保っているが、ギルの声には期待の色が籠っていた。だがリサはあっさりと首を横に振る。

「魔法の付与は素材についても知識が深くないと……魔力はイメージ的には液体のような物なので、一箇所に留めるのには高度な技術が要るんです」

「やっぱそうかあ」と肩を落とすギルを尻目に、リサはレオが全員に渡した指輪を取り出した。

「その上、レオさんが渡してくれたこの指輪くらいの物でも、作るのに数週間はかかります。剣となると年単位で必要かと」

「へ、へえ……買ったものだから解らなかつたよ」

実際にはレオが路地裏で数分で作ったものだけに、若干引き攣った顔で誤魔化していると、ギルが辺りを見回し始めた。

釣られて見ると、徐々に道幅が広くなってきた。もう少し進めば、荷馬車を止めて休めるだけのスペースを確保できるだろう。

「開けてきたな、そろそろ休むか？」

「ああ、続きは休憩しながら話そう。アルザダ達に知らせてくる」
頷いたレオは転移魔法を使い、一瞬で前方の車両へと移った。
その光景を半ば呆れ顔で見っていたリサは、レオが荷馬車に入って
いくのを眺めながらボソリと呟いた。

「魔法の基礎も解らないのに転移や飛行の魔法を使うなんて、常識
はどこへ行ってるんでしょうね」

「ま、レオが何者かは俺も気になるが、向こうに着いたら言ってく
れるだろ。アイツは悪巧みできるタイプじゃないし、大した事無い
正体だと思っぞ」

ギルの言葉で悪巧みをするレオを思い描いたりサだったが、どう
頑張っても上手く行く様子が浮かんでこない。

「そうですね、レオさんの悪巧みを心配するよりは、明日の天気を
心配した方が有意義な気がします」

リサとギルが、暫くそんな取り留めの無い話をして笑っていると、
報告が終わったレオが転移で戻り、再び元の肘掛に寄りかかって頂垂
れ始める。

その様子を見た二人は、やはりコイツに悪巧みは無理だろうと苦
笑するのだった。

数十分後、未だ森の中ではあるが、ある程度開けた場所で荷馬車
を止めた五人は食事やテントの準備を始めていた。

ギルが組み立てたテントが出来上がるや否や、ゲオルグが中へ飛び込み、呆れたギルとレオは先に食事を取る事になった。

ゲオルグと見張りをしているアルザダ意外の全員が集まった所で、ついでにと言う事でリサの全力の魔法を見せてもらおう事にした。

「別に良いですけど、切り札を使うとかなりの魔力を消費するので、回復するまではサポートも弱まりますよ」

「休憩が終つたらゲオルグも俺も多少はマシになるだろうし、盗賊くらいなら大丈夫さ」

いつものレオならそれもそうだと思う所だが、乗り物酔いでぐったりしている現状ではあまり説得力がない。

ただギルも居る事だし、レオに至ってはまだ見ぬ魔法に目を輝かせている。若干納得が行かないリサだったが、これ以上は言っても仕方がないだろう。

「行きます」

宣言と共にリサの持つ杖から光が漏れ、詠唱が始まる。

「肌を刺す冷気の結晶、刃の欠片、心の拳、我が腕の分身をここに」

詠唱が終わり、中空に現れたのは、氷の刃が無数に集まった直径二メートル程の球体だった。

リサが杖を僅かに動かすと、その球体は回転しながら高速で木に突っ込み、轟音を上げ抉るようにして切断する。

球体は木を切断すると、半円を書いてリサの下に戻り元の中空で静止した。

上位に位置する魔法が成功したせいか、リサは得意げな表情を浮かべてレオ達を振り返った。

そんな笑顔を向けられても……と、思ったレオだったが、ギルも何と言ったものかと悩んでいるようなので、とりあえず感想を述べる。

「えっと……かなりエグ　もとい、かなり威力の高そうな魔法だね」

最善の答えを選んだレオに合わせ、横に座ったギルも毒蛇にならないように頷く。

「ああ、この魔法ならレオだってイチコロだぜ」

その例えはどうなんだと思ったレオだったが、ギルの目下の関心はあの玉がこつちに飛んでこないかどうからしく、視線は氷球に向けたまま動かない。

二人の評価に気を良くしたりリサは、氷球を巡回させながらレオに向き直る。

「先生に教えてもらったものなんですが、この氷球、維持してる間は何度でも使えて燃費がいいんです。操作はちよつと難しいですが、試しにレオさんも使ってみてください」

先ほどの氷球を盗賊相手に使った図を想像したレオは、引き攣った笑みで断ろうとしたのだが、魔法に関してはリサが教師役をしている面があるので、断りきれず結局使ってみる事になった。

「いいですか、操りやすくするために、球体にする必要があるんです。取り合えず刃は要らないので、球体だけをイメージしてください」

い
」

「解った」

ようやく覚え始めた魔力制御で、必死に球体をイメージして詠唱したレオだったが

案の定、現れた四メートル四方の真四角な氷の塊は、少しも浮くことなく地面へ落下した。

何度かやり直してみたものの、結局現状のレオの魔力操作では一瞬空中に留めるくらいが限界だという結論に至った。

途中から意地になってきたレオが、既に二回ほど再現していたリサに「もう一回だけ見せてくれ……」と頼んだのだが。

「レオさんじゃないんですから、あんな消費の激しい魔法ほいほい使っていたら、魔力枯渴を起こして倒れてしまいますよ……」

と、言われて断られてしまった。

グラビティワールドの基準で言えば、レオでも使えるレベル30程度の魔法と同等の消費しかないようなのだが。

と、そこまで考えて元の世界の魔法の事に思い至った。

「そうだ、魔力を回復させる魔法があるんだ。それをリサに使うから、回復したらもう一度やって見せてくれ」

本人は「何で今まで忘れていたんだろう」という思いだけで言った言葉だったが、それを聴いたりサは信じられないモノを見るよう

な目で、呆然と口を開けたままレオを見つめた。

「あの、何の魔法を使っつて言いました？」

「いや、だから魔力を回復させる魔法を……」

魔界から逃げる時に使ったMPを持続回復させる魔法を思い浮かべつつ、生返事を返すレオに、さすがのリサも眉を顰める。

「聞き間違いでなければ、魔力を使っつて魔力を生み出す魔法という風に聞こえたのですが……何かの間違いですよね？」

ようやく言葉の意味を理解したレオは、硬直して冷や汗をかいた。冷静に考えれば、魔法を『何でも出来る技術』と考えているレオは特に疑問に思わなかったが、原理を理解しているこの世界の人間にしてみれば、ゲームに出てくる魔法などんでもない物の方が多いだろう。

魔法を知らないギルは首を捻っているが、リサは戸惑いに近い表情を浮かべていた。

「昔怪しい魔術師に教えて貰った魔法なんだ、効果も回復するようにならないようになってレベルだから、自分の魔力を分け与えてるみたいなモノかもしれないな」

必死で誤魔化すレオに、何となく釈然としないものを感じながらリサは渋々頷いた。

「安全な術なら、試しに受けてみてもいいですけど……」

魔法自体はレオが自分にかけてた事もあり、他人に補助魔法を使っ

てもなんとも無い事は昨日のゲオルグの一件で確認済みだ。

未だ不安げなりさに頷きかけると、いよいよリサの周囲に魔力持続回復魔法　マナリジエネイト　のエフェクトを思い浮かべる。しかし完全に発動した状態を過ぎても、リサは首をかしげたままだった。

「何もおきませんけど」

「そ、そうか」

成功したらしたで面倒ではだったが、戦力的な面では少し残念な思いもある。

訝しげな表情のリサとギルを何とか誤魔化し、テントの方に視線を向けると丁度ゲオルグが出てきた所だったので、少し休むと言い残したレオは一人テントへと向う。

蒼い顔で唸っているゲオルグに、テントを使うと一声かけると、中に入って横になった。

一人になって考えるのは、やはり先ほどの魔法の事だ。

この世界の事を知れば知るほど、レオの異常さは表立ってくる。確かに異様なまでの力を持ってこちらに来れたのは、元の体で繰るよりはマシだったかもしれないけれど、そう簡単に喜べるものではなかった。

皆に対する説明も、刻印の事もあって誤魔化しているが、教国についた後に何と言えいいのか、今はまだ想像もつかない。

「教国か……」

だが、そんなレオの戸惑いとは裏腹に、教国はもはや目前まで迫っている。

早く事実を知りたいという思いと、何を言われるか解らない恐怖に挟まれながら、レオはゆっくりと浅い眠りへ堕ちていった。

暫くしてレオが目覚めた頃には、既に荷物は片付けられ、荷馬車の準備は終わってしまった。

ゲオルグが復帰したのでリサと二人で後続の車両に乗り込み、レオはギルとアルザダが交代で操作する先頭の荷馬車へと乗り移る。

体調もある程度回復したので、課題である魔法の制御の為に水鉄砲で練習していると、アルザダとギルの声が聞こえてきた。

「そっいや、あの木箱ずっと積んであるが、売れ残ったのか？」

ギルが指した方を見ると、確かに見覚えのある小さな木箱が置いてあった。

「ああ、あれは透貫石と言って、魔法で出来たものを素通りする特殊な鉱石なんだ。と言っても、純度が高いものしか通過できないから、高価で珍しい上に武器全体に使うには量が必要で、滅多に買う相手はいないんだが、最近魔術帝国の方で少し需要があるらしいからドリュークで仕入れていたんだ。本当は途中で売るつもりだったんだが、教国までいく事になったから温存して置いたんだよ」

「お前が売れ残りを出すなんて珍しいと思ってたが、そういう訳だったか」

ギルが関心したように唸ると、アルザダは肩を竦めた。

「まあ、実際に売れるかは五分だけど、その分儲けは大きいのでね」

「相変わらずすっかりしてんなあ」

木箱をぼんやりと見つめながらギル達の会話を聞いていたレオだったが、二人の様子からふと気になった事があった。

ゲオルグはともかくとして、常識派のギルが、雇い主のアルザダと話をする時、いつも普段通りの口調というのは少し違和感があった。

「そう言えば、ギルとアルザダさんって初めて会った時も一緒だったみたいけど、付き合い長いのか？」

「はい、私とギルは同郷の出でして、子供の頃から一緒だったんです」

やはりそうか。と頷くレオに、ギルが続ける。

「アルザダは商店の三男でな、俺が村に戻った時、行商に行きたいから護衛をしてくれてしつこく頼んできたんだ。護衛は俺一人だつて言われて、最初は断るつもりだったんだが……」

「あの当時はガキ大将だったギルが、外の世界でも最強だと信じてましたからね。ギルさえ居れば安心だと思っていたんですよ」

この世界の移動は、徒歩や馬を使ってモノが主流だ。駆け出しの冒険者一人と初めて旅に出る行商人の二人では、さすがに無謀というものだろう。

当時を思い出したのか、ギルは困り顔で笑った。

「最初は絶対無理だと突っ撥ねただけだなあ。あんまりしつこい

から、俺に払う分の金で、もう二人雇って行く事になったんだが」

「最下級の魔法もろくに使えない魔術師と、酔っ払いの剣士……今思えばよく生き残れたモノですよ。あの時のギルへの出世払いは、随分と高くつきました」

恥ずかしそうに頬を掻くアルザダに、当時を思い出してか、ギルが楽しそうに笑って返す。

「んな事言つて、あつと言つ間に稼いで返したのはどこの誰だ。まあ、お陰で俺も、それ以来殆ど食いぶちには困らなかつたがな」

「あんなハズレを引くのは、もう二度と御免ですからね。あれからは紹介が無い護衛は、実際に会うまで雇わない事にしてます」

いつも慎重なアルザダの過去の失敗談が聞けて、何となく嬉しくなったレオだったが、そんな話の一つも出来ない現状に、一抹の寂しさを覚えた。

前に座ったギルも、そんなレオの様子を知ってか知らずか自嘲気味に笑った。

「本当、お前はしっかりしてる……いつまでも彼方此方フラフラしてる俺とは正反対だな」

どこか遠い目をして晒うギルに、アルザダは微笑みかける。

「前にも言つたけど、ギルさえその気なら、私は、一緒にやっつていく相棒と言つ事にしてもいいんだよ」

「ソイツは確かに魅力的だが、今はまだ遠慮する。俺もまだまだ強

くなりたいって夢もあるしな……ま、半分諦めかけちゃいるが」

ギルの求める強さを、偶然の出来事で手に入れたレオは、彼らの何でもない会話を聞いて、心底ギルを羨ましく思った。

だが、この力はこの世界に来た時に降って沸いた正体不明のものでしかない。懸命に生きてきたギルの人生と交換したい等と、思うこと自体がおこがましいだろう。

もしこの世界に来たのがレオ一人で無かったならば、ギルの言葉を聴いても別な事を思ったかも知れない。しかし、現状ではレオの過去を知る人物など、この世界には独りも居ないのだ。

「どうしたんだレオ、水鉄砲は飽きたのか」

唐突に声をかけられ、レオは驚いて顔を上げる。

自覚は無かったが、魔法の事もあって少々感傷的になっていたようだ。

「ちょっと魔力の調整をしてたんだ。ところで、ギルは休んでおかなくていいのか、今日は村を出てから殆ど休んでないだろ」

午前は後続の荷馬車の操縦、休憩中はテントの設営を一人でしていたのだ、多少なりとも疲れは出ているだろう。

だが、ギルは肩を竦めて笑った。

「俺が何年冒険者やってると思ってんだ、こういうのはお手のものだぞ。自分で言うのもなんだが、今のランクだって寧ろこういう所の評価で上がった分が多いくらいだ」

言われてみれば冒険者といえど基本的には旅行者だ、腕っ節も重

要だが、それだけが評価の対象ではないだろう。

寧ろこういった雑務が出来た方が、冒険者仲間からの評判は上がりやすく、顔も広くなるというものだ。

その部分ではゲオルグなどは酷評になるような……と、思いつけたが、あのキャラと頭では好かれる事の方が多そうだ。

今後の事を考えれば、レオも荷馬車の操縦等も一応覚えておいた方が良くかもしれない。

一瞬「あのゲオルグでさえ覚えてるんだから……」と思ったレオだったが、さすがに口には出さなかった。

「なあギル、今度荷馬車の操縦教えてくれないか。さすがにこんな悪路じゃ練習には向かないだろうし、直ぐにつて訳じゃないんだが」

「おお、任せろ。実は あのゲオルグ に教えたのも俺なんだぞ、それなりに自信もあるんだ」

心中を見透かされたようなギルの返事に、沈んでいたレオもつい吹き出してしまった。

「そりゃ、安心だ。世界一の授業を期待してる」

と、その時、背後で聞き覚えのあるアラーム音が鳴った。

ビィィィ という音は、聞きなれた指輪の警笛だ。その意味する所は ……。

「敵襲だ。レオ、アルザダを頼む。俺は後ろの荷馬車を操縦をする」

飛び降りるように荷馬車を降りたギルに、レオは頷きつつ後方を

振り返った。

既に十人近い盗賊が現れ、荷馬車を囲み始めていた。消耗しているリサは直接攻撃ではなく、地面を凍らせたり雷を飛ばして進行を妨害したりといった補助に徹している。

ゲオルグも奮闘しているが、さすがに数が多いため、荷馬車を降りて相手をしているようだ。

だがレオに他人の心配をしている余裕があったのは、そこまでだった。

ギルが後方に行くや否や、人数の減ったレオ達目掛け二十人近い盗賊が押し寄せてきた。

僅かに舌打ちしたレオだったが、さすがに魔界を生き抜いた過程で戦闘にも慣れつつある。

矢が飛んできたが、レオは慌てず、即座に自身とアルザダに低レベルのプロテクトアーマーを使う。

「はっ」

地面に向けて炎系の魔法を仕掛け、散乱した土くれに怯んだ隙に四人の手足を切り裂き、へし折った。

しかし幾ら炎系の魔法で、エフェクトが爆破風とは言え、元々攪乱用の魔法ではない。一度目は音と派手さで怯むものの、二度目以降は目に見えて効果が衰える目くらましだ。

叫び声を上げて突撃してくる盗賊の足を、払うようにして蹴りを入れる。

ある程度は加減したが、骨が折れる軽い音がして敵は倒れこんだ。

ふと、こんな山奥で手足が不自由になった盗賊たちが、この後どうなるのかと言う考えがレオの脳裏に浮かんだ。更にそれを差し引

いても、効率の面から見ても決して賢いやり方とはいえない。

自分でも舌打ちしてしまう程の甘い考えだが、レオは未だ元の世界に未練がある。頭では既に殺した事もあると解っていても、簡単に割り切れるものではなかった。

更に五人ほど行動不能にしたが、勢い良く走り込んでくる敵は増えるばかりだ。

「クソ……数が多い。アルザダさん、一度向こうと合流しよう」

恐らく最初から、商人の乗っているこちらの荷馬車を本隊が狙っていたのだろう。ギル達の方は、既に半数以上を片付け、こちらに進んできていた。

止まれば不利になるが、さしものレオも大きな荷馬車を全方位から襲われ続けるのは辛い。後方の荷物は多少諦めても、合流した方がいいだろう。

レオの提案にアルザダが頷き、荷馬車が停止した瞬間、森の中から魔力の流れを感じた。

「不味い、逃げろっ！」

「え」

慌てたレオが、呆けた声を上げるアルザダに向け、レジストシエルをおおうとするが

それよりも早く、森から飛来した一本の氷柱がアルザダの胸を貫いた。

「あつ……」

胸に刺さった氷を、アルザダが呆然とした表情で眺め、ゆっくりと前屈みに倒れていく。

「よつし、よくやった。なあアンタ、雇い主は死んだんだ。積荷半分渡してくれりゃ、他は見逃してやっても」

目の前の親玉風の盗賊が何か言っていたが、レオにはその内容が理解できなかった。

「邪魔だ」

邪魔と言うよりは目障りだったその男を、レオは加減無しで蹴飛ばした。

男はバキバキと骨の折れる音を鳴らしながらボールのように吹き飛び、森の中へ消えた。

その凄まじい光景に周囲の盗賊は氷つき、唯一僅かに冷静さを取り戻した魔術師が杖を構えたが、こちらも加減無しのレオの雷撃によって黒こげにされてしまった。

ガアアンツという鉄を裂くような轟音と凄まじい雷光に、ただでさえ硬直していた盗賊達は更にその身を強張らせた。

「何……だそりゃ……」

盗賊の誰かが呆然と声を上げたが、そんなことは最早レオにはどうでも良い事だ。

全力で荷馬車に駆け戻ると、群がっていた盗賊達は怯えたように後退した。

本気を出したレオが荷馬車に戻るまで、二秒とかからなかった。「たったこれだけの距離に居たのに」という思いが、脳裏を過ぎる。

「ア、アルザダ……」

声をかけたレオに、僅かにアルザダが顔を上げる。

何とか治してやりたいと思うレオだったが、ついさっきまで冷え切っていた筈の頭はパニックを起こし、治癒魔法のエフェクトが浮かんでこなかった。

「レ……」

何か言いかけたアルザダだったが、言葉は途中で途切れ、呆然とした表情のままパタリと椅子に倒れこんだ。

徐々に消えていく氷柱を呆けた顔で眺めるレオに、対照的に冷静さを取り戻した盗賊達が剣を構え直す。

その時、アルザダの指に嵌められた一つの小さな指輪が、淡い輝きを放った。

それは、本来この世界には存在しないはずの物質で作られた、一つの魔法と願いが込められた指輪。

輝きは徐々にアルザダの体全体を包み込み、グラビティワールドでは誰もが一度は受けた事のある、とある魔法が発動する。

その魔法の名は、オートリザレクション。

ゲームならばあつて当たり前の、だが現実であれば余りにもとんでもない効果を持った魔法だった。

アルザダの生気の抜け顔に意思の色が戻り、開いた目が指輪を見、そしてレオを見る。

レオを恐れて離れていた盗賊達はその光景は見えていなかったようだが、動きの止まった二人の様子を伺うように動き始めていた。

それに気付いたレオは、ともかく蘇生について気付かれないよう、迅速に敵を殲滅しなければと思ひ至る。

「アルザダさんは荷馬車の中へ」

そついい残し、急いで周囲を見渡す。

荷馬車前方に居る盗賊達は十名ほどだ、彼らには悪いが、アルザダの様子を疑問に思う前に殲滅しなければならない。

全力を出したレオにとって、普通の人間などただの脆い的に過ぎない。

鎌鼬が切り裂き、雷光が貫き、残った者も転移と飛行魔法で空間を制したレオの刃によって、瞬く間に斬り伏せられた。

それでも精一杯の手加減はしたが、特に魔法で攻撃したものの中

には、虫の息になっているものが多くなってしまった。

奮闘の甲斐もあり、ゲオルグ達が合流する頃には一頻り戦闘は終っていた。

アルザダの血塗れな服を見られると面倒なので、彼らを遮るよう荷馬車の前に立つ。

「うお、随分派手に暴れたねえ」

ゲオルグにとっては何気ない言葉だったのだろうが、その一言はレオを震え上がらせるに足るものだった。

咄嗟に返事をする事が出来ず、ゴクリと喉を鳴らす。

だが、ただでさえ口元を布で隠し、表情が伺えないレオの僅かな変化に気付いた者は、たった一人だけだった。

「 囲まれてたからな、仕方なく全力を出したただけだ。だよな、アルザダさん」

余りに現実離れた光景の連続に、完全に我を失っていたアルザダは、レオの声でようやく意識を取り戻した。

「え、ええ……そう、ですね」

レオの顔を伺いながら、呟くように言ったアルザダの言葉に急に寂しさを覚えたレオは、それきり何も言わずに荷馬車の中へ入っていった。

いかにも不自然なやり取りだったが、倒したとは言え盗賊の出た場所に留まるのは危険だ。

煮え切らない表情のまま背後の荷馬車に戻っていくゲオルグに、レオは安堵の溜息をつく。

アルザダに服を変えるように言うと、レオは疲れきって椅子にへたり込んだ。

そんなレオの様子を、着替えを終えたアルザダは躊躇いがちに見守っていた。

ところが暫く待つてもギルが戻ってこず、自分でもどうにも成らない理由でレオが苛立ち始めた頃、ようやく荷馬車に誰かが乗り込んできた。

顔を上げたレオが非難を込めた視線を送るが、そこに居たのは予想外の人物だった。

「隣に座っても良いですか」

驚いて何もいえないレオが呆然と見上げていると、リサは返事を待たずに座ってしまった。

突然の行動に困惑するレオだったが、それっきりリサは何も言わず、ただ黙って座っているだけなので、少しずつ冷静さを取り戻していく。

考えてみれば、リサには前回殺した盗賊が始めての殺人だとバレている。

来るのが遅かったのも、気を使ってギルに交代するように頼んでいたのだろう。

せめて礼だけでも言おうと口を開きかけたレオだったが、結局何も言えずに閉じてしまう。

それでもリサは、何も聞かずに黙って隣に座っていた。

それが何故かとても辛くて、俯いたままのレオは、精一杯の力で涙を堪えた。

数時間後、日も暮れかかりある程度道も開けたところで夕食を取る事となった。

食事といっても長旅の間の、さほど多くない量の物だったが、レオは一口食べるのが精一杯だった。

祝勝も兼ねて多少酒を飲んだゲオルグが、見張りのギルと共に昔見た絶景の溪谷の話などをリサにしている。

さすがに会話に入る気になれないレオが一人荷馬車に寝転がり、ぼんやりと星を眺めていると、誰かが隣に座る気配を感じた。

「少し、宜しいでしょうか」

視線だけを向けて確認すると、声の主はやはりアルザダだった。

「どうぞ」

生気の無い声で返事をしたレオの隣に、アルザダが腰を下ろす。

「今日は有難う御座いました、これで命を救われたのは、二度目です。それなのに私は」

「別に、気にしなくていいよ。アルザダさんの護衛は、俺の仕事だった。それが出来なかった時点で、俺の過失だ」

どこか投げやりに言うレオに、アルザダは小さく首を振った。

「いいえ、この指輪は今日貰った物ではありません。これは、ハウラでレオさんが何の対価も求めずに渡してくれたものです。それは、レオさんが本気で私達の事を大切に思ってくれている事の証明でし

「よう」

「それは」

それは単に、この世界にその指輪を渡すだけの人間が他に居なかっただけだ。

彼らが居なくなれば、レオはまた草原に一人残された時と同じになっってしまう。だが逆に、もし元の世界の知人が居れば、指輪は彼らに渡しただろう。

「良いんです。ただ私は、この恩は生涯忘れません」

そこまで言われてしまえば、もう何とも言い返すことが出来なかった。

助けられた者にとって、最も重要なのは本人がそれをどう思うかだ。

レオは、リサの言葉を思い出す。

『だったら、私の為にも胸を張っていてください。助けなければ良かったなんて言われたら、私だって流石にシヨックですよ』

あの言葉は、きっと今のアルザダにも当てはまる。

けれど、今のレオには、あの時のように黙って頷く事が出来なかった。

決してアルザダの命が軽いと言うわけではない。レオ自身に覚悟が足りなかっただけだ。

この世界で生きるという覚悟　だがそれは、元の世界に戻るかもしれないと言う希望がある限り、完全に割り切るのは不可能なものだ。

「ごめん、アルザダさん。今はまだ、何も言えないんだ」

苦しげに言ったレオの言葉に、アルザダは「解っています」とだけ答えた。

「ただ……こんな事を言うのは余計なお世話かもしれませんが、教国で何があっても、リサさんにだけは本当の事を話してあげてください」

お願いします。と頭を下げると、アルザダは返事を待つ事はせず、黙って自らのテントへと入っていった。

ぼんやりとそれを見送ったレオだったが、自身はとても眠る気にはなれず、真つ白な頭のまままで空を見上げていた。

どのくらい時間が過ぎたのか、気がつくとも深夜になっていたようで、少し体が冷えてしまっていた。

焚き火の近くに座ると、見張りの交代の時間になったのか、ゲオルグと入れ替わったギルも暖まりにきた。

「ん、まだ寝てなかったのか。ゲオルグの次はお前の番だぞ、寝なくて良いのか」

拾ってきた枝を焚き火にくべながら聞いてくるギルに、心ここにあらずと言った風のレオが答える。

「なかなか寝付けなくて……まあ、暖まったら少し寝るよ」

ぼんやりと空を見上げながら答えるレオに釣られ、ギルも空を見上げた。

「ああ、星を見てたのか。この辺は星が良く見えるって有名な所だからな。今の時期だと、龍神座が良く見えるだろ」

「龍神座……？」

何とも突拍子の無い星座の登場に、さすがのレオも眉を顰める。

「って、龍神座も知らないのか……まあ、大陸に来たのが最近じゃ、知らなくても無理ないかもしれんが」

そう言つと、レオは北の空を指差した。

「あの扇状に並んでる七つの星と、中心にある一つ、合わせて八つの星で出来てるのが龍神座だ。ちなみに龍神様つてのは、北の魔術帝国の更に北にある広大な山脈に暮らしてる真っ白なドラゴンで、翼が七枚あるのが特徴らしい」

「へえ」

ギルが指した方を見ると、確かに一際眩しい星が八つ固まっていた。

正直星が見えすぎて星座が逆に解りにくかったが、元の現実では都心から少し離れた程度の位置に住んでいた事もあって、こんなに星が良く見える場所と言うのは、初めてだった。

「正式には八罪竜って言うらしいんだが、何で神なのに罪なんだろうな……って、こんな事レオに聞いてもわからねえか」

そう言って笑ったギルは、置いてあった食料箱から一本の酒瓶を取り出し、グラスに注いでレオに手渡した。

丁度レオの方も飲みたい気分だったので、受け取ってグラスを合わせると、一口口に含んだ。

「この辺はホント星が良く見えるよなあ、ほれ、あれが翼獅子座だ」
言われて見上げた空には、確かに無数の星が煌いていたが、そもそも翼獅子がどんなモノか解らないレオには、想像のしようが無かった。

「俺の住んでた所は曇ってる事が多かったから、星は余り知らないんだ」

これは嘘ではない。といっても、レオの場合は単に星座に等興味が無かっただけでもある。

「何だそうなのか。もし星座好きなら面白い話できたのに」

自身は好きなのか、ギルはやたらと星を圧してくる。
筋骨隆々のギルの意外すぎる趣味に、レオは苦笑した。

「なんだ、面白い話があるなら、それだけでも聞かせてくれよ」

「まあ、興味ない奴に言っても仕方ないんだが……さっき言った龍神様の居る北の山脈には、世界で一番星がよく見える『星見の丘』って所があるらしいんだ」

仕方ない等と言っていた割に、話が始めるとギルは身を乗り出して語り始めた。

「何とそこは毎日必ず流星が見える、素晴らしい場所なんだが……」

困った事に、龍神様は自分の領地に入った人間を全て感知できる。つまり、そこに行くには龍神様を倒さなきゃならん訳だ」

目を瞑って悔しそうに語るギルに、話の先が読めたレオはつい笑ってしまふ。

「だからレオ、俺と一緒に龍神様を倒しに」

「遠慮しとくよ」

芝居がかった動きでがっくりと頂垂れるギルを見ながら、レオはグラスに残った酒を一気に煽った。

それを大分調整が効くようになった水鉄砲ですすぐと、木箱に戻す。

「じゃあ、俺はそろそろ寝るよ。また明日な」

少しだけ気を取り直したレオの様子を、頂垂れた姿勢のまま確認したギルは陽気な声を返す。

「おお、またな」

そうして、旅路の夜は更けていった。

友と敵と（後書き）

また少し間が空いてしまって申し訳ないですorz

前半と後半で分けようかとも思ったのですが、内容的にそれ程長くも無いのでつなげて出しました。

次回ようやく教国編です……長い中間だった……（；|；）

教国では、ようやくレオに大きな動きが出てきます。

真面目に書くとしたため、執筆遅くなってしまうのですが、少しずつでも書いていきますので、これからもよろしく願います。

ファーツ教国

国境の町を出て、二週間近くが経とうとしていた頃、ようやく教国の首都が見えてきた。

教国は宗教や神の直接的な干渉の影響で発言力は大きいですが、領土としてみればそれ程広くないので、通常の馬車でも国境を越えて一週間程で首都の近くまで来る事ができる。

とは言えここまで早く着いたのは、レオのある発見のお陰だった。

魔力の持続回復は他人には使えなかったのだが、スタミナSPの持続回復は、他人にも効果があることが解ったのだ。

というのも、人間相手に試すとリサの時のように問題が起きる事がある為、馬にかけたのが功を奏し、荷馬車を引く馬が殆ど疲れなくなったのだ。

黙っていた為に最初の内は首を捻っていた仲間達も、効果を確認したレオが説明すると感嘆の声を上げていた。

ただし、疲れないういっても、足や身体に疲労のダメージは蓄積される。

疲労骨折などされてはたまらないので、ある程度は休ませる必要があるが、それでも馬の体力が無限に湧いてくると言うのはとんでもないスピードアップに繋がった。

盗賊に襲われてからまた少し元気のなかったレオだったが、馬の回復に荷馬車を移動しつつ、足にも気を配ったりと忙しくなく働くうちに徐々に調子を取り戻し、教国に着く頃には殆ど元に戻っていた。

教国に入つてまず目に付くのは、彼方此方にある古ぼけた塹壕やバリケードだ。

それらは数十年程度の年季ではなく、数百、或いは数千年という長い月日をかけて、地元の人々が少しずつ作つていった物のようで、大小さまざまな石で出来た壁からは、細い木が生えている所まであった。

首都に着く途中の小さな村でもあつたのだから、恐らくは教国全体にあると考えた方がいいだろう。

ギルによれば、教国では昔から何時か来る魔物の軍に備えて、そういつた物を作つて置くようにと、恒例のように各国に求めていたらしい。

ただ、数千年の長きに渡り魔界から軍が来ると言う事は無かつた為に、他の国家は領くだけ領いて、何もしないのが当たり前だつたようだが……。

「教国意外で真面目に作つてたのは、魔術帝国と共和国の国境辺りだけだと思つぞ。といっても、あの辺りは小競り合いが多いから、戦争の準備だつたのかもしれないがな」

「へえ……」

隣でギルの講釈が続いているが、綱を握つたレオはそれ所ではない。

昨日大ぼかをやらかして馬を怒らせ、アルザダが買った酒瓶の2割を割つてしまったのだ。二の舞を避けるためにも、細心の注意を払わねばならない。

因みに先頭の馬車に乗っているのが、指導役のギルとレオだけなものもそれが原因である。

「おいおい、そんなにガチガチで大丈夫かよ。また昨日みたいに怒らせるんじゃないぞ」

「わ、解ってるよ……クソ、馬を洗脳する魔法とか使えればな……」
顔を顰めて馬を凝視するレオに、ギルは頭を抱えて溜息をついた。全く上手くいっていないレオと違い、後続の車両を操作しているリサはまだまだぎこちないながらも、きちんと操作できている。

「エルフは動物と仲良くなるのが上手いって聞いてたのに、こりゃ思ったより骨が折れそうだ」

「お、俺は普通のエルフとは違うんだ、ハイエルフだから」

「いや、そこはハイエルフなら余計に早く仲良くなれるんじゃないか……？」

「……」

ぐうの音も出ないとはこの事である。

もっと反論したい所ではあるが、余り気を逸らすと昨日のように何かミスをしでかしてしまうかも知れない。これ以上酒瓶を壊すわけには行かないし……と、心中で言い訳をしたレオは、何も言わずに馬を見つめた。

教師役という立場の為か、何とか笑いを堪えた（が、目が笑っている）ギルが気を使って話題を変える。

「ところで、馬にかけた回復魔法、そろそろ切れる頃じゃねえのか」

本来魔法の効果時間は身体に染み付いているレオだったが、手綱

を握る事に集中していたせいか、時間の感覚が麻痺していたようだ。軽く相槌を打ち、手綱をギルに渡すと、荷馬車を引く二頭の馬にSP持続回復の魔法をかけた。

荷馬車の後部へ移動し、後続の馬への魔法の継続と体調のチェックを終えたレオが元の席へ戻ろうとすると、ギルは手綱を握ったまま隣の席を指した。

「教国に来たのは初めてなんだから、景色でも眺めてるよ。この国は町並みが整ってる事で結構有名なんだぞ、折角だし見て置け」

本音を言えば、差し迫る手紙の内容に対する緊張から逃れる為に、荷馬車の操作にでも集中していたかったレオだったが、好意で言ってもらっている手前断りきれなかった。

ギルの隣に座ったレオは、背凭れに身体を預け、暫し外の景色を眺める。

実際良く見てみると、教国の風景は中々見ごたえがあった。

塹壕や壁は一見目立つが、明らかに長い歳月をかけて作られたそれらは、所々苔むし、草木と一体となって完全に風景の一部になっている。

更に城壁や石造りの家々はダールなどと違い、この地方特有の真っ白な石で作られ、それが碁盤目状に並ぶ十字路は、絵の中に居る様な錯覚さえ覚える。

「確かに、良く見ると凄いな」

純粹な驚きと、それすら気付かない程馬に集中していた自分への呆れを含んだのレオの声に、ギルは苦笑する。

「だろ。この国は出来た当時から支配構造がしっかりしてるんで、町並みは世界一だって評判なんだ。ま、その分狂信的なトコもあるから、迂闊な事は言えないって面もあるがな」

ギルの言葉で、レオにも何となくこの国の構造が少し理解できた気がした。

元の世界でも、見たことの無い神様を熱心に信仰する人は多く居た。

それがこちらの世界では現実に干渉して来たり、或いは巫女を通して擬似的に実物と会う事さえ可能なのだ。その影響力は計り知れない。

レオは元の世界は特に宗教等はやっていなかったし、正直こちらの世界の神もどこまで本当かと思う位だが、この国でそれを口に出すのは止めた方が良さだろう。

壕と低い壁が目立つ農民向けの町並みを過ぎると、いよいよ中心部の高い塀の前に行き着いた。

大小様々な門の中で、一際大きな門の前で一旦止まると、アルザダと最もランクの高いゲオルグが降りて簡単な手続きを済ませ、門をくぐる。

塀の中は流石は首都と言うべきか、この世界に来てから始めての人ごみがレオを出迎えた。

道には人が溢れており、初心者のレオには絶対に無理だと言えるほど、荷馬車の操作も大変そうだ。

そんな中、門の近くに止められた一台の荷馬車がレオの目に留まった。

「おいギル、あの荷馬車」

レオが指差した先には、始めて見る鉄製の荷馬車があった。

「ああ、ありや北方から来た荷馬車だろう。魔法を付与しやすい鉄で彼方此方工夫したとかで何年か前に帝国辺りで流行ったんだが、値も張るし整備も大変だつてんで、直ぐ廃れたらしい。まだ持つてる奴居たんだな」

鉄で出来た荷馬車など、この世界にしては画期的じゃないかと思つたレオだったが、考えてみれば動力は馬が精々なのだ。弓矢や盗賊の使うちよつとした魔法には強いかもしれないが、移動効率が落ちて商品価値が下がってしまったては元も子もない。

元の世界の技術については、車やバイクの詳しい仕組みなど元から知らないのも元々諦めていたが、目の前の鉄の荷馬車を見て、レオは改めて自分には無理だろうと再認識した。

「確かアルザダが北に行く商人に、珍しい石を売りたいとか言つたな。後で知らせてやるか」

視線を向けたギルに釣られてレオが荷馬車を見ると、二週間程前に話題に上つた木箱が変わらず置いてあつた。

今の今まで忘れていたが、売ってしまうと言われるとレオの忘れかけていたゲームー魂が疼き、売られる前に一目見てみたいと言う衝動に駆られた。

しかし、流石に勝手に箱を開けるのは不味い。後で売りに行く時にも付いて行けば良いだろう。

「よつし、小屋付きだ。レオ、宿は此処にしようぜ。帰りもあるし、これ以上奥には行きたくねえ」

レオの知る限り最も荷馬車の操作が上手いギルも、流石に人ごみ

の中を突っ切るのには慣れていないのか、切羽詰った声を上げてきた。

この状況で宿の贅沢を言っても仕方が無いので、レオも特に反論も無く頷き、荷馬車はギルの操作ですぐさま宿の隣の小屋へと向う。

結果的に宿は当たりだった。と言っても、宿の主の話では、教国は巡礼客用に国が定めた基準がある為、そもそも宿のハズレは殆ど無いらしい。

宿に入るとアルザダに先ほどの商人の話をした。

手紙は何時でも渡せるが、門の前に居た商人はもうすぐ国を出るかもしれない。長旅の疲れもあるだろうと女性陣に休憩を取らせ、箱の中身が気になるレオと、いつも一緒に品物を卸しに行くギルとアルザダで、先ほどの鉄の荷馬車の元へと向った。

魔術帝国から来たと思しき商人は、最初突然声を掛けたアルザダに懐疑的だったが、品物を見て目の色を変えた。

「おお、透貫石ですか……これは助かる。丁度お得意様から、探して欲しいと頼まれていたのでね。良かったら全部売って欲しい」

傍らに立ったレオが、開けられた木箱の中を見ると、そこには青みがかった半透明な鉱石がキラキラと輝いていた。

「といっても、透明度はさほど高くない。宝石としての価値はそれほど無いだろう。」

「有難う御座います。教国内での取引ですので、念のため此方の書類にサインを」

取り引きの方は上手く行っているようだ。品物は小さな木箱一つ

なので、護衛と荷物運びが役目のレオは、追加の注文がない限り特に用事はない。

手持ち無沙汰に鉄の荷馬車を眺めていると、相手の商人が苦笑しながら話しかけてきた。

「この荷馬車が気に入ったなら、喜んでお売りしますよ」

非難された訳でもないが、盗み見ているのがバレたような気分になったレオは、反射的に顔を向ける。

「あ、いえ、単に珍しいと思っただけで……俺はアルザダさんに雇われてる身なので、荷馬車はあまり……」

と言うよりレオの場合、一人で行動するのなら空を走った方が速いのだ。

勿論テント等は持ち歩かなければならないが、魔界に潜入するのでなければ収納袋に入れるだけで事足りる。

「ふふ、まあ冗談ですよ。本音を言えば売りたいですが、今時こんな物を買う物好きは居ませんから」

自嘲気味に笑った商人は、鉄の荷馬車に手を掛ける。

「流行と言うのは怖いもので、得意先の技術者に熱弁を振るわれた時は、とてもいい物だと思っただんですが、もう少し慎重になるべきでした……」。

まあ、耐魔コーティングなんかもあって、高級品を入れる分には安心できていいのですが、荷馬車一杯の高級品なぞ、滅多に仕入れる事はありませんから」

彼にとっては一世一代の買い物だったのだろう、それが失敗だったと解ったときにはショックだったに違いない。

肩を竦める商人に、同じく商人のアルザダは同情するような視線を向けた。

商人は少しの間荷馬車を眺めていたが、気を取り直したのかアルザダに向き直った。

「さて、では商売の続きを」

結局その後幾つか商品を売買した後、ある程度時間も過ぎたので一旦宿に戻る事になった。

去り際、これまで見たことがない程真剣な表情で、先ほどの商人の方を見るレオを不審に思ったギルが声をかける。

「どうした、何か気になることでもあったのか？」

問いかけにも答えず、暫し無言を貫いていたレオは、やがて独り言のように囁いた。

「なあ、あれって何だか……」

だが、途中まで言って頭を振り「なんでもない」と言うと、レオはそれつきり黙り込んでしまう。

ギルもアルザダも気にはなったが、難しい顔で悩むレオの様子を見て、それ以上は聞けなかった。

宿に戻ると、丁度リサとゲオルグがロビーから出る所だった。

「お、戻ってきたか。なあレオ、手紙はいつ渡しに行くんだ」

気楽な調子で聞いてくるゲオルグに、レオは緊張で喉を鳴らした。だが、その為に教国まで来たのは確かだ。未だ心中は期待と不安がせめぎあっているが、待った所で答えが変わるものでもない。

「ああ、取り合えず普段着に着替えてから、その辺の教会に当たるところだ。手紙を見せれば、取り次いでもらえるだろう」

「アタシ等も付いてっていいかい？ どうせ買物くらいしかやる事無いしね」

軽い口調を貫くゲオルグだが、以前苦言を言われた事もある。裏には、レオの正体を見定めると言う意味合いもあるのだろう。

後に続くリサも、心なしか控えめな様子で頷く。

「私も……出来れば行きたいです」

直接本人に会えると決まった訳ではないので、全員で行っても仕方ない気もするが、正直レオも心細い面もあるので、断る気にはならなかった。

「解った、一緒に来てくれ。ギルもアルザダさんも、良かったら来て欲しい」

二人は何も答えなかったが、黙って頷いてレオの準備を待った。

一行は宿の主に近場の教会を聞き、歩いて数分程の教会へ向かう事にした

どことなく無く緊張した空気の中、聞いていた通りの道順を歩いてい

ただが、曲がり角に差し掛かった時、先頭のレオがみすばらしい身なりの中年男とぶつかった。

レオのすぐ後ろに居たギルやゲオルグは、その瞬間にニヤリとしたのだが

「おつとご免よ」

「すみません」

と言ったまま当たり前のように歩き続けるレオに、困惑したような声をかける。

「お、おい……レオ……？」

「え、良いのか？」

二人の混乱したような声に、レオを含む他三人が疑問の視線を送る。

「いや、だってお前今　スられただろ？」

何で追わないんだと言いたげなゲオルグの様子に、血の気が引いたレオは懐を探る。

案の定、入れておいた財布と手紙が無くなっていた。

慌てて振り返ると、先ほどの男は今まさに駆け出し、曲がり角を曲がる所だった。

場所が人の多い大通りなので、テレポートはできれば使いたくなかったが、逃げられては元も子もない。

角へ向って走りつつ、人の合間を縫って着地点を指定すると、レポートを使い、スリの後を追う。

背後でレオのレポートに驚く声や、ギルやゲオルグが人ごみを掻き分けて走る気配が伝わってきた。

後で愚痴られるだろうなあと思いつつ、レオを振り返って驚愕の表情を浮かべるスりに怒鳴りつける。

「手紙を返せ！」

サイフの中身も惜しいが、今は手紙の方が先だ。だがスリの方も突然距離を詰めたレオにパニックを起こしているらしく、無視して走り出してしまう。

舌打ちしつつ追いかけるレオだったが、如何せん人が多くレポートが使えない。

万一他人が居る場所にレポートしたらどうなるのかなど、レオには解らない。だが、勢いだけでそれを試す気にはなれなかった。逃げるスリを追いかけつつ、空を飛ばうかと仰ぎ見たが、流石に大通りには無いものの、脇道には洗濯物を干したロープが張られていて、突っ込んでしまうと時間を食いそうだった。

「ああもう、これだから外国は……」

焦りの為か自分でも良く解らない愚痴を言いつつ、走り続けるスリを追う。

しかし、幾ら地の利があると言っても所詮は街のスリ。レポートを切り札に追い続けるレオを相手に、十分程全力で走り続けた所で体力の限界が来てしまった。

路地裏に入り、最後の足掻きに手近にある物を放り投げつつ、よろよるとへたり込んだスリの前に、レオが仁王立ちする。

「はあ……ひい……す、すいませんでした……」

精根尽き果てた様子の中年のスリは、盗んだ手紙と財布を呼吸すら乱れていないレオの前に差し出し、その場に仰向けに倒れこんでしまった。

特に逃げる様子もないスリに溜息で答えたレオは、彼が差し出した手紙と財布を確認する。

手紙は封にも傷は付いていないし、財布の中身もそのままだ。確認を終えたレオがほっと胸をなでおろした頃、ようやくゲオルグとギルが追いついた。

「はあ、はあ　　ったく、何やってんのさ。スリに財布取られるアサシンなんて、聞いたこと無いよ」

走る途中で考えたのであろうゲオルグの的確な指摘に、返す言葉も無いレオは「す、すまん」と小さな声で謝る。

幾らレオがスリに会ったのが初めてとは言え、動体視力や感覚等は常人の数倍研ぎ澄まされている。平時ならば、盗られた瞬間に気付いていただろう。

「すまんじゃないよ全く……もし逃げられてたら、この国に来た意味がなくなっちゃう所だったんだよ」

「は、はい。注意力が足りませんでした……」

流石に頭にきたのか、珍しく説教口調のゲオルグに終始平謝りするレオを、スリを縛り上げるギルは苦笑交じりに眺めた。

幾らか呼吸の落ち着いたスリを立ち上がらせると、怒り続けるゲオルグから逃げるようにレオが聞く。

「そう言えば、ソイツこれからどうするんだ？」

スリを結んだロープの端を持ったギルが、思い出すように宙を見上げながら答える。

「確か、最寄の教会に連れて行くんじゃないかな。まあどうせ近場の教会にいくつもりだったんだ、ついでに行ってみれば良いだろ」

いつもながら、聞いた事にすらすらと答えるギルに、レオは改めて関心した。

「相変わらず何でも知ってるなあ」

「別に何でも知ってるって訳じゃないぞ。商談に同行するからには、知っておかなきゃならん事が多いってだけで」

「スリの今後の話より、今はアタシの話を聞きなさいよ」

何事も無かったかのように大通りへ歩き出そうとするレオの背中に、放置されたゲオルグが恨みの籠った視線を向ける。

「もうその辺にしといてやれよ。レオだって緊張してたんだ、調子が出ない時もあるだろ」

お目付け役のギルに窘められ、そっぽを向いたゲオルグをなるべく視界から外し、レオは近くに教会が無いかと周囲を見渡した。

すると屋根の向こうに、鐘の付いた一際大きな建物があるのが見えた。

方角的にも、レオ達が走ってきた方向にある。途中でリサ達にも合流できるだろう。

暫くそちらへ向って歩いていると、案の定途中まで追いかけていたアルザダとリサを見つけた。

「あ、レオさん、手紙は大丈夫でしたか？」

不安そうに聞きリサに手紙を出して見せると、レオは捕まえたスリを指して言った。

「大丈夫だ。後は取り合えず、近くの教会にコイツを引き渡さなきゃならないらしいから、そこでついでに手紙の事も聞こうと思ってる」

こうして合流した一行は、目的の教会へ向った。のだが、ようやく疲れや抜けてきたスリがその教会を見た瞬間、恐怖に顔を歪めてレオに縋りついてきた。

「ちょ、ちょっと待ってくれ、俺をこの教会へ入れるつもりなのか」

スリの突然の豹変振りに多少面食らったレオだったが、否定する要素が無いので頷く。

そのレオの答えに、更に顔を蒼ざめさせるスリを見て、何事かと思つたレオが、事情を知って居そうなギルやアルザダに視線を向けるが、二人も困惑しているようだった。

「頼む、後生だからあの教会は……あの教会だけは止めてくれっ。金なら、財布に入ってた額の倍払う、お願いだから！」

「いや、金は要らないんだけど」

この国の法律が良く解らないレオは、判断を仰ぐ為にギルを見ると、どこと無く渋い顔をしていた。

「悪いけどな、俺達教会に用があるんだ。何でそんなに嫌がるのか知らないが、問題起こす訳にはいかん」

するとスリは、この世の終わりを見たかのような顔で膝を付き、傍目にも解るほどに震えだした。

「そうだ、隣の……五分くらい歩いた所に、話のわかる司祭が居る教会があるんだ。アイツならきつと丸く治めてくれるっ、案内もするから、頼むよ！」

必死の形相で縋られ、どうした物かと考えていたレオだったが、スリの背後に居たゲオルグが彼の尻を蹴飛ばし、ギルからロープを奪って無理矢理引き摺り始める。

「結局、自分が楽しみたいだけじゃないか。こんな奴の言う事聞く必要無いよレオ、ほら、皆もさっさといくよ」

「こ、この教会には……悪魔が、悪魔が居るんだ　ッ！」

「教会に悪魔なんて居る訳無いじゃない、何言ってるんだか」

妄言にしては鬼気迫る勢いで暴れるスリに、他の仲間達は顔を見

合わせたのだが、ゲオルグは特に気にする事も無く目の前の大きな教会へと入ってしまった。

大通りの近くの大きな教会だと言うのに、聖堂は無人かと思われるほどに静まり返っていた。

宗教が盛んな国だと聞いていただけに、レオはその雰囲気違和感を感じる。

だが当のゲオルグは特に気にならなかったようで、そのまま震え続けるスリを引き摺って奥へと入っていく。

続くレオが聖堂の奥を見ると、書物から顔を上げた司祭らしき男と目が合う。

その男は、あまりにも異様な姿をしていた。

年齢は二十台前半くらいだろうか、整った顔立ちに、ラメでも入っているのではないかと思うほど煌く金髪をした白人風の彫りの深い男だ。

ここまでは普通なのだが、問題は服装である。

全身ピンク一色のローブを纏い、薔薇をモチーフにした模様が刻まれた真っ赤な帽子を被っていたのだ。

なんて格好してんだと言いたくなかったレオだったが、ひよつとしたらアレがこの世界の僧侶の一般的な格好なのかも知れないと思い、慌てて仲間の表情を伺う。

すると案の定、全員が何度も目を瞬いて目の前の光景に呆然としているようだったので、何となく安心したレオは一足先に冷静さを取り戻す事が出来た。

混乱している仲間を他所に、取り合えず深呼吸をしたレオは服装については見なかったことすると、極力普段通りを装い彼に声をかけた。

「ええと……街でスリに遭って捕まえたので、引渡しに来たんですが」

「おや、それは災難でしたね。係りの者呼びますので、少々お待ちください」

至極真つ当な返事をされて、ようやく現実に戻ったゲオルグが生返事をしてロープの端を差し出す。

「あ、ああ、後は任せた」

ピンク色の僧侶がスリを引き摺り、聖堂の奥の扉を開けて数人のシスターを呼ぶと、彼女達はロープを受け取って元の扉の向こうへと去っていった。

連れ去られるスリから恨みの籠った視線を向けられたり、目の前の男への突っ込みを我慢したりと気になることは多いが、目下の優先事項は手紙の事だ。

「あの、ところでちょっとお話ししたい事が」

「まあまあ、ともかくお座りになってください。ちなみに、財布を盗られたのはどなたですか？」

質問に答えるようにレオが手を上げると、最前列の席を勧められ、他のメンバーはその後ろの席に着いた。

どうやら先に事情を聞かれるようだ。と察したレオが身構えてい

ると、いささかオーバリアクション気味の僧侶が両手を広げ「さて……」と切り出した。

「本日は教国にて災難に遭われたようで、司祭たる私……アルバート・フラメルも大変遺憾に思っております。

まあ、始まりは災難だったとは言え、ここでお会いできたのも何かのご縁です。折角なので、詳しい話を聞く前に、この教会についてご説明しましょう。

この教会は皆様もご存知の通り、この世界で唯一人間と直接対話することの出来る至上最高の女神様、イシス様を信望する為に作られた教会の一つで、この都市の中には同じくイシス様を奉る為の教会が二百以上あるのです。

この数は他の神々を奉る教会に比べて類を見ない多さであり、二番目に多い知識の神トート様の教会と比べても優に六十以上の差をつけて上回っています。

と言うのも、イシス様は非常に慈悲深い事で知られる愛の女神であり、始まりとなる五万年前の伝説からして

止まることなく動き続けるピンクの司祭　アルバートの口
に呆気にとられ、レオ達は五分ほど黙って聞いてしまった。

我に返ったレオが、同じく危険に気付いた仲間達と何とか話を止めようと声をかけるも、何度声をかけても

「もう少しですから、待って下さい」

と言われ、取り合ってもらえなかった。

諦めて終るのを待っていたレオだったが、もう少しもう少しと何時までも引き伸ばすアルバートに、一時間程経過した所で限界が来た。

「いい加減にしてくれッ、いつになったらその話は終るんだ!」

「いつと言われましても、事情聴取をする上で双方に誤解があつてはいけませんから。まずはこの教会に関して理解して頂かないと……」

滅茶苦茶な理由をさも当然のように言うアルバートに、頭痛を感じ始めたレオは更に怒りの声を上げる。

「俺は話を聞きに来たんじゃなくて、聞いてもらいに来ただ。話がかしたいなら、礼拝に来た奴にすれば良いだろッ」

米神に青筋を浮かせながら叫ぶレオに、アルバートはやれやれと両手を挙げて頭を振った。

「全く……いいですか、会話がしたいと言つのなら、まずは相手の話をきちんと言わなければなりません」

「貴ッ様が言つなアッ!」

渾身の怒鳴り声でも一切怯まないアルバートに脱力したレオは、一旦冷静になつて説得するしかないという結論に至つた。

眉間を揉みほぐしながら、何とか声のトーンを落とす。

「アンタだつてずっと話してたら疲れるだろ、ちょっと休んでこつちの話をして」

「ハッハッハ、大丈夫ですよ。なんとんでも、私は牢に入れられた皆様を改心させる為に、毎日二十時間程説法を説いていますから。その甲斐あつてか、この教会に来た犯罪者の再犯率は殆どゼロな

のですよ」

瞬間、レオの背中に戦慄が走る。

この世界の一日は元の世界と変わらない　二十四時間程だ。その内の二十時間話していると言う事は、睡眠やその他に割り当てられる時間が、たった四時間しかないと言う事になる。

そんな非現実的な事実を、さも当然の事のように微笑みながら語るアルバートを見て、レオは先ほどのスリの冥福を祈った。

「ち、因みにその……牢に入れられた人間と言うのは、生きて帰れるのか……？」

止せばいいのに、つい興味本位で聞いてしまったレオに教会の悪魔は変らない笑顔で答える。

「勿論です。何故か自分から壁に頭をぶつけて怪我をしてしまう方も居ますが、私が即座に治癒しますので」

アルバートの回答と、レオの脳内で撤退を決める採決が下されたのは同時だった。

決断と共に仲間に逃げると言おうと、レオは勢い良く振り返る

が、振り返った聖堂には、レオとアルバート以外の人間は一人も居なかった。

今思えば三十分程経過した辺りから、仲間達の制止の声は止んでいた。

恐らく、その頃に全員が逃げていたのだろう。彼らをアルバートが止めなかったのは、初めからスリ事件の関係者だったレオに的を絞って最前列に座らせていた為だ。

だが、気付いた頃には最早遅い。レオが誰もいない事に焦っている内に、彼方に見える聖堂の出口は、独りでに閉まり初めていた。

「さあ席について下さい。私の話は、まだまだこれからですよ」

クツクツと肩を揺らして晒うアルバートに、最早待ったなしと悟ったレオが出口へ駆け込もうとした時、不意に聖堂全体を小さな光が埋め尽す。

レオが構わず進もうとすると、体に当たった光の粒が突如凄まじい光を発した。余りの眩しさに堪らず目を瞑ると、風のような弱い力に押され、元居た席へと強制的に戻されてしまう。

「なっ……」

再びの戦慄を持ってアルバートを見ると、彼は実に楽しそうに晒いながら、両手を広げてゆっくりと中空に浮かび始めていた。

「クツクツク……如何ですか、私が十年の歳月をかけて編み出した、対逃亡信者用無血拘束魔法　スターダストノヴァの威力は！」

「な、なんて無駄な努力を……」

風に揺られて漂う光の粒は、屋外では飛ばされて無意味だろうが室内では別だ。

それでも流石に高度な演算が必要なのか、アルバート自身は浮き

上がったまま目を瞑っているが、リサの氷球と同じく維持にはその魔力を使わないようで、表情は涼しげだ。

何とかレポートで逃げられないかとレオが目を凝らしても、光の粒は聖堂全体を覆っていてどこに飛んでも直ぐに捕らえられてしまいそうだった。

いつそ椅子を投げ飛ばして道を作ろうかと手を掛けたが、したり顔のアルバートに制止された。

「それは止めた方が宜しいですよ。理由はどうあれ、教国内で教会を破壊すると、大変面倒な事になりますから」

「くっ……」

レオの悔しげな声に満足したアルバートは、広げていた両手を更に高く掲げて語り始める。

「さて、どこからお話しましょうか。そうですね……では、まずはイシス様が地上で 『どオリヤアア』 ガッハアツ」

今まさに話が再開されるかに思われた時、聖堂奥の扉が勢い良く開かれ、同時に弾丸のような速度で飛んできたモーニングスターがアルバートに直撃し、真横に五メートル程吹き飛んでいった。

自らの血の海でもがくアルバートを完全に無視し、投げた本人である背の低い女性司祭はレオの前に来て頭を下げる。

「申し訳ありません、話はシスター達から聞きました。私が留守にしている間に、こんな事になっていたなんて」

そんな事よりアルバートは大丈夫なのかと焦るレオだったが、たった今大怪我をしたはずのアルバートは既に立ち上がり、何事も無かったかのように頬に付いた血を拭き取っていた。

変わった所と言えば、邪魔をされたせいかな若干不機嫌そうに顔を歪めているくらいだ。

「全く、何をするんですか。私の大切な法衣がまた血塗れになってしまったでしょう」

「いつそ真っ赤に染めてしまえばいいと思います。今の色よりずっと常識的ですよ、アルバート大司教様」

視界にアルバートを入れもせず answers 女司祭に、先ほどと同じように肩を竦めてオーバリアクション気味のアルバートが苦言を呈する。

「やれやれ、大司教たる私に危害を加えて平然としているなど……貴方の方が、ずっと常識が無いでしょう。それにこの法衣の色は、イシス様の髪飾りの色と同じです。お揃いです。信仰の証しなので」

「私は特別に大司教様には何をしても良いと、イシス様よりお許しを頂いていますので。それとその法衣はお揃いでも信仰の証でもなく、あなたが女神様の変態ストーリーカーである証です」

呆気にとられるレオの前で、二人の司祭の舌戦が繰り広げられている。

アルバートの方はまだ話足りない様子だが、女司祭の方はこれ以上話す気は無いようで一瞬背後へ視線を向け、アルバートを指差し

た。

「相変わらず一方的に全否定とは、貴方には会話をする能力が
つてちよつと待ちたまえ君達、私の話はまだ終つて無いんだぞ」

女司祭に続いて現れたシスター達数人に両脇を抱えられ、先ほど
のスリと同じように、アルバートは扉の奥へと連れ去られていく。
両脇を抱えられたアルバートは、それでも必死にレオに向つて手
を伸ばした。

「ま、待て、まだ入信申請にサインを貰つてな ……」

手馴れた様子でアルバートを連れ去つていった彼女達をレオがぼ
んやりと見つめていると、先ほどの背の低い女性司祭が話しかけて
きた。

「本当に御免なさい。彼のせいで、最近は滅多に礼拝に来る人が居
なかつたので、少しくらい留守にしても大丈夫かと……」

謝られた方が気の毒になるような女性司祭の謝罪に、最早怒る気
も失せたレオは曖昧に相槌を打った。

「はあ、ええと」

途中レオが詰まつた事で、未だ自分が名乗っていない事に気付い
た女司祭は頭を下げた。

「ああ、申し遅れました。私はアメリカと言います」

「俺はレオ、冒険者です。ところで、さっきのは」

アルバートが連行されて行った扉をみながら呟いたレオに、アメリアが答える。

「彼は……その、昔とある街に疫病が蔓延した折に、数千人の命を救った功績で大聖堂就きの大司教になった方なのですが……本来見えない筈の、霊体の愛の女神イシス様を直接目で見てしまっただけから、あの調子で女神様にアタックを続けた為に……」

「なるほど」

やっている事はとんでも無いが、神様の能力のせいだとしたら、情状酌量の余地はあるかもしれない。と、思いかけたレオだったが

「まあ、その前から大体あんな感じだったらしいのですが」

どうやら同情は必要なさそうであった。

世間話を終えた後、レオは簡単にここに来た経緯を伝える。

捕まえたギルやゲオルグは今は居ないが、軽犯罪でもあるのでレオの証言だけで特に問題ないと言ったことだった。

「ところで其方のご用件と言うのは……」

ようやく本題に入れたことに安堵しつつ、レオは懐から一枚の黒い便箋を出した。

差出人の名前は勿論、ホワイトパールだ。

「この手紙をカークスという人に届けに来たんです。少々事情があ

って、出来れば直接渡したいのですが」

手紙を見たアメリカは目を見張った。

世界に五人しか居ないSランク冒険者と、教国では知らぬものは居ない、依り代の巫女の世話役の名前が書かれた手紙だ。驚くのも当然だろう。

数秒悩んだ末、アメリカは躊躇いがちに答えた。

「すみませんが、彼もこの国の要人ですので、今すぐ返答する事はできません。

ただ、会いたいという旨は伝えておきますので、恐らく問題が無ければ明日にでも宿に迎えが行くかと思えます。それで宜しいでしょうか」

「はい、宿は南の大きな門の」

詳しい場所と宿の名前を伝え、手紙をアメリカに渡す事で、ようやくレオは教会を出る事が出来た。

用件が終わった事で、忘れかけていた長旅の疲れが顔を出し、教会での一見も重なってめつきり老け込んでしまったレオが大通りにでると、丁度他の四人が楽しそうに買い物をしている所に出くわした。

「お前ら……」

「ん、なんだもう終わったのか。どうだった？」

何事も無かったかのように聞くゲオルグに、レオは殺意の籠った視線を向ける。

元はと言えばレオが財布を盗られた事が原因ではあるが、余りのも冷たい仕打ちではないだろうか。

だがりサやアルザダは「ゲ、ゲオルグさんが……」等と言い訳しているし、スリの件では迷惑をかけたのも確かだ。

それに何だかどつと疲れが出たレオには、これ以上怒る気力も沸いてこなかった。

「……話は通してもらった、明日には迎えが来るだろうってさ」

怒りを納めたレオが経過を報告すると、それまで露天の商品を眺めて風景に溶け込んでいたギルが、ひよっこりと顔を出した。

「それじゃ、俺とアルザダは商売の続きをしにいくぞ。ゲオルグはどうする」

相変わらず要領の良いギルに、巻き込まれ体質のレオは関心すら覚えてしまう。

「暫く居る事になりそうだし、アタシはギルドの依頼でも見てくるかね」

夕飯までには戻ると言う三人と別れ、レオとリサは一足先に宿へと戻る事になった。

ところがその道中、流石に悪い事をしたと思ったのが、リサが気を使って無言になってしまったので、何となく気まづくなったレオは、雰囲気を変える為自分から話しかける事にした。

何か話題は無いかとリサを見て、ダールから先送りにして来た問

題に気付いた。

「そういえば、余裕が出来たら、俺が前に使ってたローブをリサ用に仕立て直してもらおうと思ってたんだ。時間も掛かるらしいし、明日辺り頼みに行ってみようか」

唐突に声をかけられたリサは、一瞬意外そうにレオを見て頷いた。

「でも、良いんですか。この盾といいレオさんが渡す物は、どれも凄い物ばかりな気がするんですが……」

確かにそれらの装備品はゲームとは言えレオが苦勞して手に入れた物なのだが、職業を変える方法が無くなってしまった今、後衛用のローブ等は完全に宝の持ち腐れだ。

装備制限等も無いので、鎧や盾や剣と言った物は使う機会もあるかもしれないが、最強の装備が使えているので、それすら使う時が来るかどうかは怪しいものである。

売って金に換えようにも、出所が明かせないのでそう易々とは売れない。それで無くとも貴金属があるので、当分は金にも困らないのだ。

よって現状一番の使い道は、仲間に使ってもらおう事だ。刻印が消えて事情が話せるようになれば、幾つかギルやゲオルグに渡そうと思っている品もある。

「まあ、凄すぎるのが問題と言うか……俺としても考えた末の使い道だから、気にしなくていいよ」

本当に何でもない事のように言うレオに、急に難しい顔になったリサが躊躇いがちに言った。

「助けてもらっている私が言うのもなんですけど、幾らなんでもレオさんはお人好し過ぎです。もう少し慎重に判断しないと、いつか狡賢い人に足元を掬われてしまいますよ」

「う……」

レオに出会うまで、人間関係でのトラブルが多かったりサだけに心配になってしまったのだろうが、痛いところを通り越して完全に凶星なレオにはその言葉が鋭く突き刺さった。

胸に刻まれたリスイの刻印の件があったのに、レオの危機感にはあまり変化がないのだ。心配するなと言う方が難しいだろう。

とは言え、仲間と共にまったりとゲームをして、バイトの延長で寂れかけたホームセンターの平社員になっていたレオにとって、生存競争のような生き方などそう簡単に出来るものではない。

「それに関しては、その……追々慣れて行くと思うから、暫くは手を貸して貰えると助かる」

「勿論そのつもりですけど、レオさん一人の時はどうにもできませんからね」

呆れたような視線を胸の刻印に向けられ、反論の余地が無くなったレオは黙って宿屋へ入っていった。

ファーツ教団（後書き）

おはよう御座います。

どうも、作者です。

間が開いたせいか前の話で使うはずだった話を忘れてたりしてこっちに来てしまい、ちよつと場面の切り替えが多くなってしまうました。

ようやく勘も戻ってきたのですが、虫食いのように忘れてる部分があつて、確認の為にこれまでの話を読み返す作業が多く、相変わらずの牛歩執筆です。

手紙の方は次話でようやく片付きます。長かったですね。

最後に間開いてたにも関わらず、感想寄せてくれた皆様に感謝を。それでは今日はこの辺で。また次回、近いうちにお会いしましょう。

異界の地

翌日の朝、昨夜疲れていた為か宿に戻って直ぐ眠ってしまったレオは、午前中の早い時間にローブの裾直しを頼みに行こうと思い、部屋で収納袋を漁っていたのだが、突然宿の主人が部屋の前に駆け込んできた。

ノックに答えて扉を開けると、宿の主人が緊張した面持ちでたずんでいた。

「あの、表にお迎えの馬車が……」

「ん、思ったより早かったな」

伝えた内容は手紙の配達だけであつたし、来るとしても午後だろうと思っていたのだが、朝の冷気も抜け切らない時間に来るとはレオとしても想定外だつた。

特に用事の無かつたゲオルグやギルなどはまだ寝ているだろう、どうしようかと数瞬悩んだが、黙って行くという選択肢は無い。

「俺は先に挨拶に行くので、連れの四人を起こしてくれますか」

来て当然というレオの対応に宿の主人は僅かに驚いたが、国からの迎えを待たせる訳には行かない。

好奇心を抑えて隣の部屋へ向う主人を尻目に、レオは手紙の入った収納袋を持って、二階建ての宿の階段を下りた。

そこでレオを待っていたのは

「お待ちしておりました……。貴方が、レオ様ですね」

完璧な出で立ちの初老の執事と、汚れ一つ無い豪華な黒塗りの馬車三台だった。

伝えたのはただの手紙の受け渡しだったはずが、突然のVIP級の待遇に流石のレオも咄嗟に反応できず、人違いではないかと周囲を見渡した。が、当然レオと言う名前の者は一人しか居ない。

だが、続けられた彼の言葉で、レオは全てを理解した。

「ようこそ、我々の世界へ」

レオは僅かに目を見開くと、確信に至る問いかけをする。

「ひょっとして……。あなたがカークスさんですか」

その問いかけに、初老の執事は無言のまま頷いた。

「この先は、ここでは話せません。後の二台は、お仲間の為に置いて行きますので、一足先にカステイヨ大聖堂へ向きましょう。続きは、向こうに着いてからお話します」

いかに危機感の薄いレオといえど、この状況で無警戒で居られる程馬鹿ではない。

カークスを警戒しながら、慎重に馬車の中に入るレオを、彼は無言のまま見守っていた。

レオが中の椅子に腰掛け、対面にカークスが座ると、それに合わせて馬車の扉が独りでに閉まる。

鞭が馬を叩く音が響き、馬車はゆっくりと走り出した。

「今の内に、手紙を受け取っても宜しいですか」

「はい……どうぞ」

手紙を彼の手に渡した瞬間、レオは胸で刻印の魔力が消えるのを感じた。

カークスはそのまま無造作に封を開る。パチンという静電気のような音がして、封は簡単に剥れ、中から便箋と同じ漆黒に塗られた一枚の紙を取り出した。

レオの側からは殆ど見えないが、紙に書かれている文字はほんの数行のようだ。

彼はそれを見てほんの少し微笑むと、手紙を封筒に戻し、レオに向き直った。

「奴は」

「え？」

消え入るようなカークスの声に、聞き取れなかったレオが聞きなおすと、彼はもう一度、今度ははっきりと言い直した。

「レオ様が最後にホワイトパールを見た時、奴はどんな様子でしたか」

「ええと……かなり派手な門の前で、ずっと誰かが通るのを待っていたようでした」

ギルからホワイトパールのお話を聞いていたレオは、ネオン満載の門の趣味についてはぼやかして言ったのだが、それを聞いたカークスは苦笑して言った。

「結局、あの悪趣味な飾りは貫き通したのだな」

驚いて目を見張るレオに、カークスが微笑みかける。

「奴とは長い付き合いでね……と言っても、奴の兄弟子が昔の知り合いだった為に、多少交流があった程度なのですが」

「は、はあ」

その返答によって一つの話題が終わった馬車に、沈黙が降りる。

レオにも聞きたいことは山のようにあったが、突然の急展開に対する緊張と、馬車に満ちる不思議な雰囲気ので、中々切り出すことが出来なかった。

（いや、ただ本当の事を聞くのが怖いだけか……）

だが、いつまでも黙っていても仕方が無い。

そこでふと、何故大聖堂に向っているのかと疑問に思った。

「ところで、何故大聖堂に向っているんですか」

よく考えれば、内密に話をするなら、彼の自宅に向った方が早いのではないかと思っただのだ。

しかし、事態はレオの想定外の範疇を超えていた。

「依り代の巫女に会って頂く為です。ご存知かもしれませんが、彼女は神の言葉を代弁する力を持っています。即ち、レオ様には女神イシス様と、お話をして頂くのです」

白い石で組まれたカステイーヨ大聖堂は、さながら太古の神殿と言った風情の建造物だった。

絶えず修復されているようで、全体的には鮮やかだが、構造上問題のない部分には、一部風化したような石も残っている。

裏口から内部に通されたレオが数分程待っていると、後続の馬車で連れてこられたゲオルグとリサが、おっかなびっくり応接間へ入ってきた。

カステイーヨ大聖堂といえば、いわば教国の王城だ。今はそれどころではないレオはともかく、一般人ならば物を壊さないようにと言う思いが先に立つ。

落ち着かない様子で向かい側に座ったゲオルグが、難しい顔で黙り込むレオに声をかけた。

「えっと、レオ、アタシ乗れって言われたから乗って付いて来たん

「ただ、これで良かったのか……？」

緊張の為か、ゲオルグのキャラが崩壊している。

借りてきた猫のようなゲオルグの様子に吹き出しそうになったレオは、ようやく仲間達も来ていた事を思い出した。

いつの間にかレオの隣に座っていたリサも、どこか落ち着かない様子で辺りを見回している。

「ああ……俺も急な事で驚いてるが、呼ばれて来たんだ。問題なんである訳無いって」

ゲオルグが安堵の溜息をつくのと同時に、再び扉が開いてギルとアルザダが入ってきた。

二人はある程度落ち着いていた様子で、空いている椅子へと腰掛けた。

「随分大げさな待遇ですね……」

多少警戒している様子のアルザダに続き、眉を寄せたギルがレオに囁く。

「なあレオ、俺たちは手紙を届けに来ただけだよな。なのに、何でこんな事になってんだ？」

「それは」

「それは、後ほど私からご説明します」

答えかけたレオの言葉は、応接間に入ってきたカークスによって遮られた。

全員の視線がカークスに集まる。

「レオ様、用意が整いましたので、謁見の間へ御出てください」

「待ってくれ、皆にも聞いて欲しいんだ。行くなら全員で……」

全員に話す約束を思いカークスに提案したレオだったが、彼は首を横に振った。

「申し訳ありませんが、それは絶対に無理です。レオ様はご存じ無いかと思いますが、事は教国どころか、この世界全体の最重要機密事項に当たります。特別に結論を含めた事情の説明は後に行いますが、その場に同席する許可は出せません」

カークスに集まっていた視線が、レオに移る。

だが、当のレオはそれどころでは無かった。異世界に連れてこられたのは、本人であるレオには大事だが、この世界にレオを招いたホワイトパールの様子からも、世界全体がどうのという話が出るとは思ってもみなかったのだ。

なるべくなら仲間にも同行して欲しかったが、カークスの口ぶりからして彼はただの繋ぎ役だろう。頼むのなら、指示を出している者に頼まなければならぬ。

「解った。けど、どんな結論にしろ、話が終わったら伝えるって事で良いんだな？」

「勿論です」

頷いたカークスに伝えるように立ち上がったレオは、謁見の間へと通じる通路の前に向う。

扉が開かれる前、いつの間にか椅子から立ち上がっていたリサが声をかける。

「レオさん……」

「少し、話してくる。事情の説明は、もう少しだけ待っていてくれ」

皆が困惑の視線を向ける中、付き添いのカークスに導かれ、レオは応接間を後にした。

謁見の間では、既に数人の人間がレオの到着を待っていた。

玉座の一段下で、国王と思われる老人が王冠を抱えて控えており、その脇に二名の高官と思われる者達も見える。

玉座にあたる場所には、三人の法衣を纏った女性と一人の少女が立っていた。

琴のような道具で少女を取り囲む三人の女性は、どうも中心に立つ少女の魔力を調整しているようだった。

「ようこそ御出で下さいました。異界の民よ」

そう言って、瞳を赤く光らせた依り代の巫女　女神イシスはレオに会釈した。

こんな状況でどう対処していいか解らないレオは、取り合えず王様を見習って膝でも付こうかと屈みかけたが、玉座に立つイシスに制された。

「その前に、一度私の所まで来てもらえますか？少々調べたい事が

あるのですが、残念ながら、私はこの場所から動けないのです」

常に鋭い視線を向けてくる王様と配下の者を気にしつつ、レオがイシスの前に立つと、彼女はレオに右手を掲げた。

「貴方の身になにが起こったのか知る為に、ほんの少し記憶を覗く許可を貰えますか。勿論、関係の無い部分は絶対に見ません」

「は、はい……」

いかにレオと言っても、記憶を覗かれるというのはあまりいい気分ではないが、この場合は仕方が無いだろうと諦め、背の低い少女に合わせるように、彼女の前で膝を付いた。

イシスはレオの頭部に右手を掲げたまま、暫くの間目を瞑っていたが、一瞬悲しげに顔をゆがめた後、閉じていた瞼を上げた。

「状況が解りました。もう結構です」

玉座から一步身を引いたレオが再び膝を付く前に、イシスが告げる。

「結論から言います」

不意に掛けられた声にレオが顔を上げると同時に、ダールから始まったレオのこれまでの旅が、終わりを告げた。

元の世界に戻る事は、不可能です」

それは衝撃の事実だった。ハズなのだが、レオの心は、自分でも不思議な程落ち着いていた。

けれどもふと、これまでの恐怖の正体を考えた時、その理由が解った気がした。

(どこかで……解っていたのかもかもしれないな)

馬車の中ですら、カークスに話を聞くのが怖かった。

いつでも話せた仲間達にも、相談するのが怖かった。

その恐怖は、この世界が現実だと認識した時から生まれた物だ。心のどこかで、この世界の魔法の水準から考えて、元の世界に戻るなんて事は出来ないのではないかと思っていた。

だが、それを自覚したとしても、聞かなければならない事はある。

「どうして、無理なんだ。理由を聞かせてくれないか」

最早膝を付く事無く、責めるように聞き返すレオに、女神以外の者達から非難を込めた視線が注がれるが、知ったことではなかった。

「勿論です。その為に、ここまで来て貰ったのですから 少々遠回りな長い話になってしまいましたが、どうか最後まで聞いてください」

レオが頷くと、イシスは古い記憶を辿る為、再びその瞼を閉じた。

「世界を渡る為の転移魔法……その発端は、三千年前に遡ります。

それまで世界は、繰り返す魔界との戦争と言う歴史の中で、調和の取れた状態を維持する事が出来ていました。

ですが、三千年前のある時、 原始の海 から一体の魔神が生まれ出されます。

勿論、件の魔神が生まれ出される前にも数百年に一度、定期的に魔神は生まれ出されていましたし、 時期的には何もおかしい所はありません。

せんでした。

ところがその魔神は、それまで生み出されていた者を遙かに上回る力を持っていた……此方の世界全体が一丸となって戦ったとしても、決して勝てない程の力を。

当時各国の王達は、有力者を集めて何度か討伐隊を派遣しましたが、誰一人戻ってくる者は居なかったと聞きます。

迫り来る魔軍に恐怖した彼らは、遂に私達神々に助力を頼みに来ました。

人々が決死の思いで戦っていたのも知っていましたし、彼らでは勝てないと解っていた神々は何とか救ってやりたかったのですが、我々の力にも限界があります。

単純な能力でも劣っている上、当時の魔神は周囲の魔力を自在に操る力を持っていたので、当時既に肉体を捨て霊体となっていた我々では、相性も悪かった。

最早策も尽き、後は魔軍に蹂躪されるのを待つのみかと思われた折、神の中でも特に魔術に詳しい私と知恵の神トートが、皆に求められるまま、禁じられた魔法を創り出しました。

それが異界召喚魔法、エコーゲート。

我々では勝てない魔神に対抗する為、異界の住民を呼び出す魔法に可能性を求めたのです。

ですが創った当人である私とトート神は、あの魔法の欠陥に気付いていた……魔法名が示す通り、数ある異世界に反響のように響くこの魔法は、何らかのアクシデントで、予想もできないモノが呼び出される可能性がある事に。

それを踏まえてエコーゲートの完成を伝えたのですが、当時は人間の王達だけでなく、希望を失いかけていた神々からも、直ぐにでも使っべきだと言う意見が多く寄せられ、その流れを止めることは出来なくなってしまった。

そうして、神と人間が力を合わせて、初めて実行したエコーゲートで、一人の少年がこの世界に呼び出されました」

以前にもこの世界に呼ばれた者が居たと言う事実には、レオは生唾を飲む。

だが、周囲の王や高官達が動じない所を見ると、一部の者には事実として既に知られている事のようにだ。

「彼を初めて見た有力者や神々は、失望の色を隠せませんでした。異界の者である為か、せいふくと呼ばれる服装こそ変わっていましたが、線の細い体といい、幼さの残る顔立ちといい、とても戦える者には見えなかつたからです。

ですが大儀式を行い、多くの費用や時間を掛けた事や、元の世界に返す方法も開発中であると言う理由から、特に期待せず、当時の王達は彼に事情を話し、元の世界に帰りたいのなら、協力してほしいと言いました。

すると、彼はこう答えました

『別に、魔神を殺すのは構わない。けれど、これだけは言っておく、例え僕が魔神を倒したとしても、他所から持ってきた勝利など君達には何も齎さない。いずれ、敗北と同等の代償を払う事になるだろう。本当に、それでもいいのかい？』と。

今にして思えば、あれは強引にこの世界に引きずり込んだ我々に対して、彼が最後にかけて情けだったのでしようが、当時誰も彼が魔神を倒せるとは思って居なかつたので、その言葉の意味を真剣に考える者は、一人も居なかつた。

王達も、なにを馬鹿など一笑に付して『出来るものなら、やって見せてくれ』と言いました。

そうしてそのまま、彼は誰にも相手にされずに、たった一人魔界へと向つたのですが

彼は、想像を絶する力を持って持っていた……。

たった三日で、広大な魔界の全土を焼き払い、敵将を皆殺しにし、絶対に勝てないとまで言われていた魔神をいとも容易く葬り去って帰ってきました。

戻ってきた彼は、転移魔法に関わつた全ての者を魔界に呼び寄せ、出て行つた時と同じように平坦な声で『さあ、用は済んだんだ。早く帰してくれ』と言いました。

ですが、その眼差しに込められた怒りの色に、私達は震え上がつた。

あの時の魔界は、本当に酷い有様でした。大地は焼け焦げ、川は

干上がり、森は炭と化し、生きているモノなど居ないのではないか
と思ったほどです。

もし彼の力が此方に向いたらと思うと、居ても立っても居られな
くなったこの世界の人間と神々は、不眠不休で転移魔法を研究し尽
くしました。

そして、遂に完成した送還魔法で、彼は元の世界へと帰っていっ
た
」

「待ってくれ、そいつは元の世界に帰れたのか？」

話の方は、どちらかと言えば平穏と思しき今の状況からかけ離れ
過ぎていて、全く現実味がないのだが、帰っていったという部分だ
けは聞き逃す訳には行かなかった。

レオの問い掛けに、イシスは頷いて答えた。

「ええ。けれど、問題はその後なのです。

彼を元の世界へ返したまでは良かったのですが、後には魔軍と戦
う為に大量に増員した各国の軍隊が残っていた。

魔神のみを討伐する為の精鋭部隊こそ甚大な被害を蒙ってしまし
たが、魔軍全体と戦った期間が短かった為に、人間達も全体の被害
は少なかったのです。

そして軍部が肥大化していた各国は、徐々に険悪になり、やがて
大きな戦争が幾度と無く繰り返されました。

戦争が終つても内戦や冷戦が絶える事は無く、やがて人種差別や
奴隷制度が生まれ、そして遂にエルフ戦争　　いいえ、人間による
エルフの一方的な虐殺が始まった。

ここに至つてようやく私達も、三千年前に彼が言っていた『敗北と同等の代償』について思い至ります。

私達が必死に守ろうとしていた世界は、彼を呼び出した『代償』として失われ、全く別の、醜悪なモノへと変つていたのです。

思い返してみれば、件の魔神は侵攻には消極的だった。ひよつとしたら、対話で解決する方法もあつたかもしれない……。ですが、魔物は倒すべき敵と言う固定観念に囚われた当時の我々には、対話という発想はありえませんでした。

後に実力行使によつてエルフ戦争を強引に終結させた私達は、それと同時に異世界と交流する転移魔法を絶対の禁呪とし、更に万が一異世界の者が紛れ込んでしまった場合、直ちに元の世界へ送り返す役割を与えた『白の導師』を任命します。

その『白の導師』が代々引き継ぐ名前が……。『ホワイトパール』真珠のように、異世界からこの世界を保護する膜となるようにと付けられた二つ名です」

「それじゃ、異世界からの干渉を防ぐ役割を担っていた奴が、俺をこの世界に送つたつて事なのか」

イシスは頷くと、そのまま頭を下げた。

「こちらの事情に巻き込んでしまつて、本当に申し訳ないと思ひます。

先にも言つたとおり、近隣の諸国は最早私達の忠告には耳を貸さず、魔軍に対抗する準備をしていたのは、教国だけでした。

ただ、異界転移魔法は、魔界と此方の世界を繋ぐ空間の歪を操作する事で行います。

ですから、異界との接触を警戒するホワイトパールは、歪の調査

で魔界の不穏な動きにいち早く気付いていた。

けれど彼と弟子のリスイが、幾ら諸国の有力者に忠告しても、三千年の長きに渡り平穩の続いたこの世界の人間は、誰も信じてはくれなかった。

困り果てた彼はここへ来て、何とか力を貸して欲しいと言ったのですが、私はそれを断りました。

今回の魔神は、昔のような途轍もない強さでは無いし、このまま戦えば負けてしまうと言うのも、皮肉な事に三千年前の大敗から立ち直る為、先代の魔神が長い間統制の取れた社会を維持していたからです。

私達神は、教国を守るだけで精一杯。そしてそれ以前に、今回人間が負けるとしたら、自分達が長年やってきた戦争が原因です。

だから手を貸す事はできない。と、私は答えました。

けれど、公国の平凡な農村に生まれ、才能を見出されて帝国へ渡り、高名な魔術師になったホワイトパールには、二つの祖国を見捨てる事は出来なかったでしょう。

最後の手段として、他人を異界に送る為の魔法で自らを異世界へ送り、そこから更に、あなたを此方の世界へと送還したと思われるます。

その際、専門家であるホワイトパールはある細工をしました。

送還魔法は、送り先の世界を指定して実行するものなのですが、元の世界を割り出す為に、肉体からその座標を特定しなければなりません。

直ぐに元の世界へ戻されるのを防ぐ為、ホワイトパールはあなたに 原始の海 を通過させた。理由は、 原始の海 を通ると、一時的にこの世界の情報が上書きされるからです。

ただ、これは予想外だったのだろうかと思いますが、あなたは送られた時仮想空間にいた。その為、全てのモノを生み出す 原始の海で元の体と仮想空間の体の選択を迫られ、直前まで仮想空間に居た影響で、無意識に現在の『レオさん』の姿を創造してしまい、体に変質してしまった。

本来の肉体で通過しただけなら、自然と元に戻るのですが……全てが完全に変質してしまつては、最早どうしようもありません」

レオは視線を落とし、自分の手のひらを見つめた。

それは白人のように真っ白で、素手でも戦える程に無骨な力強さを感じられる手だ。

元の”近藤零夜”の手のひらとは、似ても似つかない。

「もう一度 原始の海 っつてのに入つて、元の姿を想像すれば戻れないのか？」

開いていた手を握り締めながら、独り言のように呟くレオに、イシスが優しく、しかしはつきりと答える。

「可能性はあります。ですが、 原始の海 は制御不能な存在の塊、そこで故意に肉体を変化させると言つたら、九割以上の確率で、溶けてなくなつてしまつてしまうでしょう」

「この姿になつて出てこれたのも、奇跡だつたつて事か……」

或いは何の雑念もなく、ゲーム中の体で門を潜つたのが良かったのかもしれないが、もう一度やれと言われて出来るものではない。

「どうにかしてホワイトパールを見つける事はできないのか？」

「彼は、恐らく既に死んでいます。元々負荷の大きい異世界転移魔法を、短期間の内に何度も使っているので、魔力枯渇を起こし、更に演算の過負荷で脳もズタズタになっているでしょうから……」

自分を騙してこの世界へ送り込んだホワイトパールの事は、レオもずっと許せないと思って居たのだが、事情や状況が解ってきた今となつては、彼が死んだ事も、騙されていた事も、何だか遠い出来事のように思えた。

だが感傷に浸る前に、もっと自分の置かれた状況を理解しなければならぬ。

「そもそも、何でホワイトパールは俺が居た世界に目をつけたんだ」

「禁呪に指定されていますが、空間の歪から、異世界を見る魔法があります。此方からの操作は殆ど効きませんが、恐らくはそれによつて前もつて有望な世界を調べたのでしょう。異界に転移すれば私達も気付きますが、見ているだけなら感知することはできないので」

「なら、その魔法で元の世界を探せば……」

「無限に近く存在する並行世界から、何の手がかりも無しに、あなたが元居た世界を探すのは不可能です。近い世界でも、別のあなたが存在する世界、あなたが既に死んでいる筈の世界、両親はいてもあなたが生まれていない世界、そんな世界が、無数に連なっているのです」

確かに、その中から元の世界を探すのは骨が折れそうだ。

もし似た世界を見つけても、実際に飛んだ先に、既に別の”近藤零夜”が居ては目も当てられない。

「魔法、魔法か……：そういうえば、元の世界での魔法が、こつちでは違う効果だったり他人には使えなかったりするのは、変質と何か関係があるのか」

状況を打開する魔法を考えているうちにふと浮かんだ疑問だったが、問われたイシスは居住まいを正し、正面からレオを見つめ直してから答えた。

「実は、それに関してレオさんに提案があるのです」

「提案？」

「はい。これまでの話で、現時点でレオさんが元の世界に戻れる可能性が、殆ど無い事は解っていただけだと思います」

レオとしてはまだ納得した訳ではないが、可能性が低いと言うのは否定できなかった。

渋々と言った風にレオが頷くと、イシスはとんでもない提案を投げかけてきた。

「過去の過ちから学んでいる我々も、異世界の民であるあなたにはこれ以上、この世界に干渉して欲しくない……：そこで、レオさんさえ良ければ、肉体を捨てて霊体となり、私達　この世界の神の末席に、加わって欲しいのです」

「は……？」

ただでさえ色々な事を言われて混乱している中で、唐突に神になつてくれと言われたレオは、混乱を通り越して訳が解らなくなつてきた。

「ちよつと……ちよつと待つてくれ、何でいきなりそんな話になるんだ。そもそも神様つてのは、そんな簡単になれるモノなのか」

「普通であれば無理でしょう。ですが、今のあなたは 原始の海で自らを創造する事で、魔神や幻獣等の、半神に近い存在になっています。後は私達、この世界の神の後押しがあれば、本物の神になる事も可能です」

説明を受ける事で益々混乱するレオに構わず、イシスは更に補足を重ねる。

「ちなみに、半神も基本的に神と同じく、司るモノがあります。レオさんの場合は『元居た異世界』を司る神と言う訳です。

魔法が変化した理由は、元の世界では当然だった魔法も、此方で理論上あり得ない部分があつた為、近い物に変化されているんだと思われれます。

置き換えも不可能な『有り得ない』魔法は、自身にのみ効果がある、特殊な能力という形になつてはいるはずですよ。

といつても、厳密に言えば、あなたの魔法は全て魔法ではなく、魔力を使った特殊能力なのですが……」

確かにレオの魔法は、術式や詠唱や魔力制御など全く必要とせず、思い描いただけで実現できるとんでもない代物だ。

何故あんな凄い魔法ができるのに、生活用の魔法ができないのかとリサは散々首を捻つて居たが、解つてみれば単純な話だった。

レオが生まれて始めて使った魔法は、あの水鉄砲だったのだ。

つい現実逃避気味に思考が脱線してしまったが、今重要なのは神がどうかという話だ。

一旦落ち着いて考えた結果、レオとしては、まだ何も調べても試しても居ない転移魔法を諦め、先の選択肢を選ぶのは時期尚早だという結論に至った。

「せめて、少し時間をくれないか。納得する為にも、転移魔法について自分で調べてみたい」

レオの要求にイシスは頷いて、手のひらで傍らに控えている王と思しき老人を指した。

「その為に、彼らを同席させていたのです。王よ、今言った通りです。彼に地下図書館の禁書を閲覧する許可を与え、暫しの間、大聖堂で連れの方々をもてなさない」

命令を受けた王が静かに頭を下げたのを確認し、イシスは視線をレオへ戻した。

「元の世界へ戻る方法自体は、幾ら調べても構いませんが、連れの方々の扱いに関しては、早めに結論を出してあげてください。事情が事情なので、引き止められたりしないよう面会は謝絶にしますが、レオさんが会いたければ会っても構いません。

今後について、心配が残る方が居るならば、そのままこちらで面倒を見ます」

考えうる限り最上の扱いだったが、レオは礼を述べる為の喉を詰まらせてしまった。

礼を言いたい気持ちはあったが、どんな言葉を言えばいいのか解らなかったのだ。

だが、イシスは無言のレオを特に気にする様子もなく、別れの挨拶を告げる。

「長くなってしまいました。これ以上はこの子に負担をかけたく無いので、今日はここまでにさせて下さい」

「あ、ああ……」

目を泳がせて生返事を返すレオに、イシスは深々と頭を下げて、一時の現世から去っていった。

謁見が終わった後、レオは使用人に導かれるまま、頼りない足取りで場内を見て回った。

地下だというのに昼のように明るい図書館や、装飾過多な通路を丁寧に説明されたが、完全に上の空だったレオの頭には半分も入っていない。

通された来賓用の部屋で、目に留まった椅子に座ると、頭を抱えて暫く動けなくなった。

考えることが多すぎて、なにかから手をつければいいのか解らなくなっただ。

だが、黙っていても始まらない。

まず最初にやるべきは、仲間への説明と、図書館の転移魔法に関する記述を調べる事、それからホワイトパールに関する調査だ。

突如目の前に山のように詰まれた難問が現れ、途方に暮れるレオ

の元に、部屋の扉をノックする音が届く。
やって来たのはカークスだった。

「お仲間への説明が終わりました。謁見の間で交わされた会話の内容は、ほぼ全て伝える事が出来たはずです」

「そうですね……」

これで用件の一つは終わったのだが、それと同時に仲間と会う理由が無くなってしまった。

勿論レオが会いたいと言えば会わせてくれるのだろうが、この状態で話題の無いままに会っても、気まずくなるだけだろう。

レオが礼を言うと、カークスは来た時と同じようにゆったりとした動きで戻っていく。

次は何をしようかと考えていたレオは、慌てて彼を呼び止めた。

「あ、ちょっと」

「何か？」

振り向いたカークスに一瞬言い淀んだ後、恥ずかしそうに頭を掻きながら頼み込む。

「実はさっき案内してもらったばかりなんだけど、ちょっと上の空だったから、地下図書館への行き方が解らなくなってしまった……」

「構いませんよ。それでは此方へ」

再度入り組んだ通路を抜け、もう一度地下への螺旋階段を下る。

そしてカークスに導かれたレオは、カステイーヨ大聖堂の地下、
様々な秘密が記された地下図書館の更に奥へと入っていった。

異界の地（後書き）

どうも、作者です。

ようやく……ホントようやく事情の説明が出来ました。

当初の予定では一月かそこらでここまで書くはずだったのですが、随分と長いことかかってしまいました……。

さて、内容の方ですが、予め言っておくと、前任の異世界の方、登場は無いです。

能力がチートすぎると言うのもありますが、彼は元々作者が別サイト様で書きかけたった小説の登場人物なので、こちらの本編とはあまり関係がありません。

ただ、多少は気になる人も居るんじゃないかなあと思うので、その内どんなカンジの人だったのかは出そうと思っています。

かなり説明過多ですが、調査の話はあんまり長くないので、もう少しお待ちください。

それでは、また次回お会いしましょうっノシ

転移魔法

地下図書館、天井の石から注がれる人工的な光の先に、黒金でできた重厚な扉があった。

扉には三つの鍵穴があり、受付で鍵を受け取っていたカークスは、それらを一つずつ開錠していく。

最後の鍵を開けた後、カークスはレオに古ぼけた眼鏡を手渡した。

「禁書は暗号化されています。此方の、解読と翻訳を兼ねた眼鏡をご使用ください」

流石に禁書と言うだけあって、警備も嚴重なようだ。

レオがそれをかけると、近くの本棚にあった本の題名等が日本語で見えるようになった。

上から張られた膜のように、顔を振る事で多少ぶれるが、読むのに支障をきたす程ではない。

「おお……これは便利だ」

素直に感嘆の声を上げるレオに、釣られたようにカークスも笑った。

「元の世界の文字で表記されている筈ですからね。さあ、中へどうぞ」

扉の中は外と違って薄暗く、その代わり中央に並べて置かれた机の上に、ライト代わりと思しき装置が備え付けられていた。

そのまま進むレオに、扉の横で待つカークスが声をかける。

「私はこの先には入れませんが、帰りの事もありますし、ここで待たせて頂きます。何かあればお申し付けください」

「す、すいません……」

カステイーヨ大聖堂は、魔軍との戦いを想定して建てられたとかで、必要以上に入り組んだ造りになっている。

数回案内されれば解るだろうが、初めて来たのに近いレオでは、自室に戻る自信が持てなかった。

「構いませんよ。ホワイトパールの奴が来た時も、良くここで待たされていましたから」

「ホワイトパールが？」

首をかしげたレオが聞き返すと、カークスは頷いて補足した。

「ええ、白の導師が扱う異界系の魔法は、例外なく禁呪に指定されていますから。」

長男が亡くなり故郷に帰るまでは、兄弟子のグリエルモ殿と共によく二人でここへ来ていたものです」

「グリエルモ？」

その名前はどこかで聞いたことが……と、立ち止まったレオは数瞬考えた後、リスイが言っていた言葉を思い出した。

「グリエルモと言うと　グリエルモ・エテルノと言う人ですか」

レオとしてはある程度確信があって聞いたのだが、問われたカー

クスの方は首を捻って答えた。

「はて……恐らく別人ではないですか。グリエルモという名前はかなり多いですし、私が知っている方は、グリエルモ・クラムという方なので」

自信があっただけに少々肩透かしを食らったような気がしたレオだったが、カークスの様子からして嘘を言っている風ではないし、これ以上掘り下げても無駄だろうと思い、曖昧に相槌を打って本を探す作業に戻った。

禁書の棚には、本当に様々な分野の本が並べてあった。

『ドワーフと鉄について』『エルフと霊木について』『原始の海』と深層心理について『果てには、『不老不死の秘薬』と書かれた本まであった。

そして、その先に真っ白な背表紙の本が置かれていた。

題名の部分には『異世界と空間の歪』と、書かれている。

白い背表紙の本を取り、机の明かりを点けて読み始める。

細かな術式や星との関係等の詳細を飛ばし、まずは基本的な構造について読み進める。

異界転移魔法は、基本的に大規模術式に当たり、召還・送還を問わず、まずは広大な土地に杭を打ち、大地を流れる魔力を五芒星・もしくは六芒星の形に循環させ留める所から始まる。

一定の魔力が貯まった後、中心部に縮小した魔方陣を書き重ね、圧縮された魔力で魔界とこちらの世界との間にある隙間を広げ、門

を作るのだそうだ。

ちなみに、前回の召喚はこの方法によって行われたと書かれている。

開けられた門から、召喚の条件をソナーのように数多の異世界に反響させ、魔神を倒せる可能性のある人間を召喚しようとしたのだが、あまりにも条件に合う者が見つからず、肝心の召喚条件の部分が途中でゆがんでしまい、とんでもないモノが呼び出されたい。

対して今回の場合は、前任者を送り返す過程で開発していた、異世界を覗き見る魔法が込められた装置を使い、前もってホワイトパールが調べていたようだ。

ちなみに、本には例外として大量の魔晶石を使って、一瞬だけ門を作る事も可能だと書かれている。

この世界に来る時に潜った門には、大量のネオンが付けられていた。恐らくは、あれが魔晶石だったのだろう。

転移対象が決まっている送還にしか使えない技術のようだが、あの場合は有効だったという訳だ。

基礎の本だけでなく、他にも数種類の本を読んだが、どうも異世界とこの世界を結ぶ魔法は、元の世界へ戻す、送還魔法の方が圧倒的に進んでいるようだった。

それでも、元の世界へ戻すのが不可能となると、水鉄砲すらまともに使えないレオが、これ以上いくら一人で考えても意味がない気がしてきた。

「うーむ、良く解らないな……他にこの城に禁書を読める権利を持った専門家は居ないのか？」

「国王様は権利を持っています。ただし、国王様も転移魔法について詳しい訳ではないので、こちらにお招きしてもあまり状況は変わ

らないかと……」

流石に禁書の許可までは管轄外のように、カークスの歯切れは悪い。

話の流れからして、国王も『許可を得ている』者の一人のようにだし、イシスに掛け合ったほうがいいだろう。

「ちょっといいかな。カークスさんは、依り代の巫女の世話役って聞いたんだけど」

「はい、左様ですが」

「次に謁見できるのはいつになるかな。時間に制限もあるようだし、それまでに質問をまとめて、用意しておきたいんだ」

一瞬考え込むように眉を寄せたカークスは、そのままの困り顔で答えた。

「申し訳ない。確か予定は無かったと思うので、明日にでも許可が下りると思いますが……念のため、確認してまいります」

「お願いします」

図書館を後にし、上階へ向かうカークスを見送り、レオは近くにあった本を手に取ると、数分読んで待つ事にした。

戻ってきたカークスは、レオに一枚の紙を渡す。

紙には、翌日の日付と予定時刻十三時と書かれた上に、判子が押されていた。

「ありがとう。随分早く会えるんだな」

「当面の間は、レオ様の予約が最優先となるようです。イシス様としても、まだ伝え切れていない所があるのでしょう」

優遇自体は有難いが、伝え切れていない所というのはあまり良い事では無いだろう。

早く一般人に戻りたいという無謀な願いを捧げつつ、レオは渡された紙を懐に入れた。

地下のため時間の感覚は掴みにくいが、禁書の置かれた部屋に入ってから、かなりの時間が経過している。

なんとなく小腹がすいた気がしたレオは、今日の所は切り上げる事にした。

本を片付け、出口で待つカークスに声をかける。

「それじゃ次は……食堂へ案内して貰えますか」

「畏まりました」

優雅な動きで案内をするカークスに『執事って良いなあ』と思いつつ、『これがメイドだと緊張するし』と想着ってしまう自分の小心ぶりに、我ながら呆れるレオだった。

一人で食事を取ったレオは、自室のベットへと倒れこんだ。

特に禁止されている訳でもないし、仲間に会っても良かったのだが、何も決まっていない状態であっても何を言ってもいいか解らないし、何より、後になって後悔しそうな選択肢の前で他人の意見を聞けば、意見を言った者のせいにしそうで怖かったのだ。

会いに行くと言った約束も守れず、愛想を尽かされてしまつかもしれないが、それでも今は、会うことはできそうに無い。

ただ、何の音沙汰もなしではあんまりなので、状況だけを手紙に書いて届けてもらおうと考えた。

幸い、翻訳機能のついた眼鏡が手元にある。どうしても言い回しわからない部分は、使用人にも聞けばいい。

ところが実際に机に向かってみると、文字の問題よりも何を書いているのか解らなくなってしまう、結局殆ど取り留めの無い事しか書けなかった。

その手紙を取り合えず封筒に入れ、ベッドの上に寝転ぶと、明日イシスに聞こうと思っている質問を反芻しながら、静かに眠りに落ちた。

翌朝、少し早く起きたレオが食堂へ向かって中庭を歩いていると、駆け寄ってきた赤毛の少女が挨拶をしてきた。

「おはようございます、レオ様。朝はお早いですね」

当たり前のように声をかけられ、一瞬誰だか判らずうろたえたレオだったが、よく見ると昨日会った依り代の巫女だった。

昨日はイシスが体を使っていた為か、どこか神々しい雰囲気を感じていて別人のようだったが、今日の前にいる少女は、何処にもいる町娘のように見える。

やっぱりその辺はさすが神様だなあ。と、レオが一人頷いていると、少女が不思議そうに顔を覗き込んできた。

「あの、どうかされましたか？」

「い、いや、何でもないんだ。おはよう、いい天気だね」

必死に誤魔化そうと曇り空を見上げるレオに、首を捻った少女が答える。

「そう、ですね……？あ、すみません自己紹介がまだでした。私はスイスイと言います。スイーと呼んでください」

ベコリと頭を下げるスイーに、レオも釣られて頭を下げる。

「スイーは、依り代の巫女なんだろう。俺なんか、様なんて付けなくていいよ」

さんを付けようかと迷ったレオが、躊躇いつつも何とか先に呼び捨てで呼んだのだが、スイーは慌てた様子で手を振った。

「そ、そんな、半神で在らせられるレオ様を呼び捨てなんて、とてもできません」

「あ………どおりでここ来てから、会う人みんなに様付けで呼ばれる訳だ……」

無神論者の国で育ったレオにとっては、神様というと、漠然と偉いんだろと思う程度の感覚しかもたないけれど、宗教主体の教国の民からすれば、半神とは言え神に近い今のレオは、人より少し上位の存在という位置づけになるのだろう。

正直、小学生くらいの女の子に様付けで呼ばれても困るだけなの

だが、かと言って呼び捨てを強要するのも問題がありそうなので、ここはあえて流すことにした。

「スイーも朝は早いんだね。もしかして俺の謁見の準備かな」

再び歩き出しながら聞いたレオに合わせてるように、スイーが横を歩く、

「はい。と言っても、私がやる事は殆ど無くて、早めに起きてその日の状態を見てもらっただけなんですけどね」

「へえ……小さいのに、頑張ってるんだね」

関心したように言うレオに、对象的に首を傾げたスイーが聞き返した。

「私が特別小さい訳ではないですよ。依り代の巫女は、あまり長く勤めると負荷のせいで短命になってしまうので、私くらいの歳の子が多いって聞いてます」

「え」

スイーは当たり前前の事のように答えたが、謁見の予約を入れているレオは身を凍らせた。

「マ………ゴホン、ち、ちなみに三十分くらいの謁見で、どのくらい寿命が縮むのか……とか、説明されてるのかな？」

「マジで!？」と叫ぶのを必死に堪えたレオが、平静を装って聞く。

「良く知りません。けど、私はイシス様と特に相性がいいので、影響はかなり少ないってカークスさんが言っていました」

「そ、そうか。それは良かった」

流石に用件もあってキャンセルは出来ないが、早く終わらせる為にも、カンペくらいは書いておいた方が良さそうだ。

まだ予定している午後までには時間はあると言っても、早く準備が終わることもあるかも知れない。事情が事情でもあるし、すぐにも戻って準備しておいたほうが良いだろう。

レオは朝食の為に食堂に向けていた足を止め、部屋の方へ向き直った。

「ちょっと用事を思い出したから、部屋に戻る事にするよ。朝食はいらないうって伝えてくれるかな」

「はい、わかりました」

スイーは一瞬キョトンとしていたが、すぐにお辞儀をして食堂へ走っていく。

その後姿を見て小さな罪悪感を覚えたが、今のレオにはどうする事もできなかった。

午後になり、部屋で謁見の準備をして待っていたレオの元に、カークスが迎えに来た。

前日と同じ道順を辿り謁見の間に入ると、女神と国王が出迎えた。

唯一昨日と違う所は、レオが半神だと解った為か、王とその周辺から注がれる視線が随分と控えめになった事くらいか。

レオが正面に立つと、イシスが口を開いた。

「お待たせしました。では、まずレオさんのご用件を伺いましょう」

「ああ……幾つか聞きたい事があるんだ。転移魔法について調べたけど、魔法には詳しくないから、概要以外の部分は殆ど理解できなかったんだ。専門家に解説して貰いたいんだが、他に禁書を読覧できる人間はいないのか」

「そちらについては、既に手配しています。今日中に到着するでしょう」

何故か溜息混じりに言うイシスの様子が少し気になったが、手配済みだったなら問題ないだろう。

レオは用意していたカンペをチラリと見て、次の話題へ移る。

「それと、昨日話した魔神について、聞いた限りかなり出来る奴だつて印象だけど、実際ここに来るまで見てきた限り、魔物の動きはあまり統率が取れているように見えないんだが」

「魔界を復興した魔神は、十年程前の代替わりで死にました。今回の魔神は、頭脳より戦闘能力に特化した魔神のようなので、統治能力はあまり高くないのでしょうか」

「代替わり？」

首を捻るレオに、イシスが説明を続ける。

「先代もそうですが、人間界に興味を持たない魔神というのは、以

前にも稀に産まれていました。

けれど、魔神は魔物達の深層心理が 原始の海^{メソ} に影響して定期的に生み出される存在なので、やがては代替わりしてしまいます」

「そうだったのか」

「主に大敗した後に、戦いより復興を望む心がそういった魔神を生み出すようで、惨敗の後に産まれた先代は特に頭が良かったようです。新たな魔神が産まれる地点を計測する方法を見つけ、産まれてすぐ脅威になる前に殺す事で、長い間統治を続けていました」

深層心理や無意識から生み出されるといふのは、自ら姿を変えたレオにも共通するところがある。

だからこそその半神という称号なのだろうが、レオとしてはあまり良い気分ではなかった。

「けど、先代の魔神は魔界を復興した業績があるだろ。暴動が起きたりはしないのか」

「魔神は、魔物達の願望が具現化したモノです。流石に今回は多少あったようですが、結局自分達が望んで生み出したという事実があるので、さほど長引かずに終わりました」

恐らく多少とは言え、暴動等でも徐々に国力を疲弊させていたのだろう。

そこへ更に今回の飢饉が起き、蓄えが底を突いたのかもしれない。

「ところで、人間については神は関知しないって話は聞いたけど、エルフヤドワーフについてはどうなんだ。彼らも見捨てるのか」

「奴隷になった同属を探して回っているエルフに、魔軍の本格的な侵攻が始まったら、教国に逃げ込むようにと伝えていきます。頑固者の多いドワーフはあまり集まらないかと思いますが、我々も教国を守るのが精一杯なので……」

「ダールで出会ったバルドなど、逃げろと言われて逃げるような性格ではない。」

「バルドを思い出した事で、レオは不意にダールで出会った人々の事を思い出した。公国を見捨てると言うことは、彼らの身も危ないのではないだろうか。」

「その……聞いた話じゃ、エルフ戦争を終わらせた時はかなりの力を使ったって聞いたんだが、他の国を守るのは、本当に無理なのか……？」

「わずかな希望に縋るようなレオの問いを、イシスははっきりと否定した。」

「無理です。肉体を捨てた我々が力を使うには、特別な触媒が必要になるのですが、長い年月をかけて集めていた触媒も、エルフ戦争の折にかなり消費してしまいました。残った触媒では、教国を守るのも危ういほどです」

「そうか……」

「言葉を失ったレオを諭すように、優しい口調に変わったイシスが語りかける。」

「今言ったように、現在の戦況はかなり厳しいものです。生涯教国から出ないと言うなら別ですが、この状況で大きな力を持つあなた

がこちらに留まれば、巻き込まれる事は避けられないでしょう。

ですが、肉体を捨て我々神の世界に来れば、平穏な日々を過ごす事ができます。どうかその選択肢についても、考えて置いてください」

「……」

確かに、無理矢理連れて来られたこの世界の為に命をかけるのは、馬鹿らしいという思いもある。

しかし同時に、今回の件に関して、直接の関わりが無いイシスからの譲歩が、異様に多いのも気になった。

「何で、そこまでして俺を世界から遠ざけたいんだ。前の異世界の人間は、そんなに恐ろしい奴だったのか」

その問いに、イシスはどこか遠い目をして答えた。

「いいえ、彼はとても温厚な性格でした。当時の王達が大変失礼な事を言い続けたので、怒ってしまったようですが……それでも、彼はこの世界を完全に見限ることは無かった。

そして、大切な事を教えてくれた。例え無残に負けたとしても、自ら戦った者と、他者に全てを押し付けた者の末路が、全くの別物であると言つ事を」

前任者を知らないレオが何も答えられずにいると、「けれど」とイシスが続ける。

「どうしてもあなたが肉体を捨てず、この世界で生きたいと言うなら、それを止める事はしません。

ただ、これだけは覚えて置いてください。ここは確かにあなたに

とって異世界ですが、全ての生き物は、あなたと同等の命を持っているのです。

三千年前の私達は、そんな当たり前の事すら見失っていた……」

それは、レオ自身も想い悩んでいた事だ。

今のレオが本気で殴れば、人は簡単に死んでしまうし、全力の魔法を使えば、条件はあるが死者を蘇らせる事すらできる。

襲い来る魔物には明確な意思を持って向かえるが、盗賊達に対しては、まだ何処か曖昧な心境のまま戦っていた部分があった。

自分の意思でここで生きるというのなら、それだけは改めなければならぬだろう。

「言われなくとも、解っているさ」

「でしょうね。あなたは何処か、彼と似た雰囲気を持っています。異世界の民だからでしょうか」

これにはレオの方が戸惑ってしまう。

話に聞いた途方も無い強さの前任者と、自覚がある程頼りないレオとでは、あまりにかけ離れている気がしたからだ。

ただ、制服を着ていたと言っていたし、ひよっとしたら近い並行世界等から来たのかもしれない。

「どうか、現代人つてのはあるかも……って、この世界じゃ今が現代だから、ちよつと語弊があるけど」

苦笑するレオにイシスも微笑みかけるが、意味が解っていないであろう国王達は首を捻っていた。

スィーの事もあるし、細々とした話は魔法の専門家が来てからそ

つちに聞けばいいので、話を切り上げる事にする。

「俺の質問はこれで終わりだけど、そっちらも何かあるんだっけ」

先にどうぞと言っていたので、何か用件があった筈なのだが、言われたイシスは怯えたような、恐縮したような、微妙な表情になって言いよどんだ。

尋常ではない女神の様子に、ただ事ではないと感じたレオが身構えていると、イシスは意を決したように切り出した。

「大変申し訳ないのですが、本来予定していた魔法の専門家が昨日体調を崩したとかで、急遽代わりの者を呼ぶ事になったのです」

「なんだ、だから昨日聞いても居ないって言われたのか。けど、代わりが居るなら問題ないんじゃないか？」

何が問題なのか解らず首を捻るレオに、心の底から嫌そうな顔をしたイシスが、とんでもない爆弾を投下した。

「それが……代わりの者というのが、数年前にとある街で疫病が蔓延した折に、数千人の命を救って大司教になった」

その頃、仲間達は遅めの昼食を取っていた。

前日の夜にカークスから説明を受けていた仲間達は、揃ってなんともしない表情をしていた。

いかにレオの強さが尋常ではなかったとか、明らかに秘密を隠している様子だったと言えど、異世界から来た半神だという話は常軌を逸しすぎて、どう反応していいか解らないレベルだった。

更に、現時点では元の世界に戻る確立が絶望的だと言われたのだから、説明をしに来るといふ約束を破っていても、攻めるような事を言う者はいなかった。

「しっかし、とんでもない事になってたんだねえ……」

沈黙に耐えられなくなったゲオルグが話を振るが、答える者はいない。

と、そこへノックの音が割り込み、ローブを持ったカークスがやって来た。

「失礼します。レオ様からのお手紙と、所用を授かってまいりました

「あ、はい」

カークスは一礼をして部屋に入ると、扉の近くに座っていたリサへ歩み寄った。

無駄の無い動きで手紙を渡し、持っていたローブを広げる。

「こちらのローブの裾直しをするようにとの事ですので、後ほど係

りの者が寸法を測りに参ります」

カステイーヨ大聖堂に来る前日、レオが話していた事を思い出したりサは、頷いて答える。

「解りました」

予定の時間を伝え用件が終わると、カークスは入ってきた時と同じように一礼して静かに部屋を去った。

「さて、何が書いてあるものやら……」

ギルが苦笑交じりに身を乗り出して聞くと、他の二人も同じようにして手紙を受け取ったりサを見つめる。

封を開けたりサは、手紙を取り出して一度深呼吸をすると、読みにくい字に眉を寄せながら読み始めた。

「ええと」

『皆へ。』

俺の置かれた状況については、カークスから聞いたと思う。

色々と混乱しているが、取り合えず本当に戻るのが無理なのか、少しだけ自分で調べて見るつもりだ。

どちらにしても決めるまで少しかかると思うから、この前言ったローブの件はここで頼む事にした。

ちなみに、俺の待遇は物凄くいいけど、そっちはどうだろうか。さつき食べた夕飯なんて、前菜からして

『

……この先は夕飯の献立が細かく書いてあります」

二枚入りの手紙の中で、状況の説明がたったの三行とは、一体なにを伝える為の手紙なのだろうか。

なんだか力が抜けた声を出したりサは、手紙を閉じて元の便箋に戻した。

様子を見ていた面々も、呆れたように溜息をつく。

「なんだか、予想よりもかなり緊張感がない手紙だねえ……アイツ、ホントに大丈夫なのかい」

気の抜けたゲオルグの声に、苦笑混じりのギルも同意する。

「けどま、レオらしくていいじゃねえか。あのレオが全部真面目な事書いてたら、俺は逆にそっちの方が心配だぞ」

「ええ、こういったユーモアがある内は、きっと大丈夫ですよ」

フォローのようなアルザダの言葉に、「これはユーモアじゃない気がする」と思ったりサだったが、あえて口には出さなかった。

だが、ゲオルグもそう思ったようで、ニヤリ笑いながら背もたれに身を預ける。

「何にしても、暫く待ちぼうけみたいだけど……神様に勧誘されるらしいけどさ、実際どうするつもりなのかね」

「さあな、俺がレオの立場だったら正直馬鹿らしいし、神様になっちまうか、戦火が迫るまでは教国に居て、ヤバくなったら……とか考えるかもしれん、レオもかなりのお人好しだが、流石に今回は

「

「帰ってきますよ」

「冗談めかして言うギルを遮るように、リサが言った。

「レオさんの事ですから、きっと直ぐに心細くなって帰って来ます。そうですね……一週間もしたら、諦めて戻ってくるに決まっていますよ」

「そりやどうかなあ、流石のレオだって二週間くらいは頑張るとおもうぞ?」

話しているうちに面白くなってきたのか、ニヤニヤと楽しそうに笑いながらギルが続ける。

「そうだ、折角だし賭けねえか、俺は二週間に小銀貨一枚だ」

「いいですよ、それなら私は一週間で。ただし、言っておきますが、私はこう言うのは強いですからね」

自信満々に笑うリサに、乗り遅れまいとゲオルグも参加を表明する。

「おいおい、アタシを外すんじゃないよ。そうさね……アタシも二週間に一票だ、レオだってその位は頑張るだろうさ」

結局レオの手紙以上に緊張感がなくなってしまった三人の様子を見て、ただ一人不参加のアルザダはやれやれと溜息をついた。

とはいえ正直、この時点では誰もが数ヶ月はかかるだろうと思っ

ていたのだが

結論から言えば、賭けの結果はリサの一人勝ちだった。

あの手紙以来音信不通だったレオから、突然連絡が来たのは昨日の事だ。

カステイーヨ大聖堂へ招かれてから丁度一週間後、『明日には戻るから、出発の準備を始めてほしい』と書かれた手紙が来たのだ。

本音を言えば、本当に一週間で戻ってくる事に驚きを隠せないリサだったが、戻ると言っているのだから、何があつたかは帰ってから直接本人に聞けばいいだろう。

まだ出発の準備の大半は終わっていないが、目的地は相談で決めるらしいので、準備をしようにも一番時間のかかるアルザダの仕入れが出来ない。

なので多少遅れる事になっても、『どうせなら色々あつたレオの為にせめて出迎えくらいはしてやろう』という話になり、応接間で落ち合う事になっていた。

そこへ買出しで遅れて来たゲオルグが無造作に入ってくると、定位置になりつつある椅子に腰掛けて愚痴った。

「まったく、ホントに一週間で帰ってくるなんてさ。レオのせいで賭けにも負けたし、今夜の帰還祝いにはレオの奢りにさせないとね」

言っている内容は愚痴なのだが、妙に楽しそうなゲオルグを、呆

れた様子のリサが窘める。

「駄目ですよゲオルグさん、奢りじゃ確実に掛け金オーバーです。意味がないじゃないですか」

窘めるといつても、リサも奢りはともかく帰還祝いを止める気はなかった。

だが単純に嬉しそうな女性陣とは違い、突然の事にギルは少々難しい顔をしていた。

「しかし、本当に早過ぎねえか。ひょっとして向こうで何かあったんじゃない……」

真面目に考え込むギルに、同じように難しい顔をしたアルザダも同意する。

「確かにレオさんの事情を考えると、ちょっとおかしいですよ。先週の手紙以降、連絡が途絶えていたのも気になりますし」

だが今回に限っては妙に楽観的なリサと、基本的に常時楽観的なゲオルグは笑って首を振る。

「いくらなんでも、この状況で教国の連中に何かされたんなら、レオだってただじゃ置かないさ」

「そうですね。それにもう直ぐ帰ってくるんですから、何があったかなんて戻ってから聞けば良いじゃないですか」

リサの説得でも納得が行かない様子のギルだったが、丁度奥の通路から足音が聞こえてきた。

「来たみたいだぞ」

その言葉で全員が顔を上げる。

全員の視線が集まる中、応接間の扉が開かれた。

「お帰りなさい、レオさ……ん……？」

扉の先に現れた困り顔のレオを、リサは笑顔で迎えようとして傍らに立つアルバートを見て、そのまま顔を引きつらせた。

凍りつく空気の中、なんとも気まずそうなレオが解説を入れた。

「ええと……な、何でか、今日からメンバーに加わってしまった、アルバートさんだ……」

続いて全員の白い目を一身に受け、それらを完全に受け流したアルバートが、髪をかき上げつつ優雅に自己紹介を始める。

「フツ、どうもアルバート・フラメルです。以後よろしく……ああ、ちなみに加入に関しては、こちらの契約書により約束されているので、反対は受け付けません。悪しからず」

差し出された契約書は残念な事に、既に末尾に『レオ』と書かされた後の状態だった。

転移魔法（後書き）

どうも、作者です。

何だかんだで新キャラ加入ですね。

それにしてもアルバートはシリアスと合わないというか水と油レベルというか……仕上げに苦労しました……あと、レオの方の事情は章の関係により次話冒頭になります。

ちなみに、どうでもいい補足なんですが、前任者さんの召喚条件は

『最強の魔神に勝てる可能性のある者』という条件だったのが、『最強の存在に勝てる可能性のある者』に、変化しました。

ちょっと違いますね。

それではまた次回、四章でお会いしましょう。

大ポカに気づきました……一部修正……

第四章 再びの旅立ち（上）

イシスと話した後、自室へ戻って直ぐにアルバートがやってきた。部屋に入るなり、初対面と同じようにピンク色の法衣を着たアルバートが挨拶を始める。

「また会えて光栄です。どうやらレオさんとは縁があるようで、半神様と縁があるとは大変嬉しい限りです。きっと女神様の思し召しですね」

あれだけ自分勝手なことをしたと言うのに、まるで記憶を失ったかのように再開の挨拶をするアルバートにレオが閉口していると、調子に乗ったアルバートがどこまでも話し続ける。

「しかし、話を聞くと色々大変だったようですな。」

ホワイトパールの悪党に無理矢理こちらの世界に連れてこられ、仲間の命を助けてヒーローになったと思いきや、エルフだというだけで踏んだり蹴ったりの扱いを受けて、魔物の將軍を暗殺してくる羽目になるとは……：しかしまあ、そんな状況で本当に暗殺を成功させて帰ってくるなんて、未恐ろしいと言いますか、その力を完全に使いこなせるようになれば、一体どれほどの事が

「今の俺は、お前の情報収集能力が一番恐ろしいよ……」

頼むから俺のストーカーにはならないでくれ。と心の底から祈りを捧げ、アルバートの話を区切る。

「って言うか、その情報は何処から手に入れたんだ。まさか、この国まで噂が広まっているのか？」

だとしたら、非常にまずい事になる。

教国はレオに手を出してほしくないから匿っているが、他の国の者がレオの力を知れば、なんとしても引き込んで戦力にしようとするだろう。

「まさか。この国まで真つ直ぐ来たあなた方より早く正確な情報が伝わる訳がないでしょう。」

今の話は、迎えに来た担当者に女神様の近況について子一時間程問い詰めたのですが、何も教えてくれないので、代わりに教えてもらった事ですよ」

噂が広まっていない事に安堵すべきなのだろうが、レオは目の前にいる変質者のことを考えると、どうしても不安にならざるを得なかった。

しかしこの国の危機管理能力は大丈夫なのだろうか、異世界に関連するレオの情報は一応最重要機密事項ではないのか。

「よく教えてもらえたもんだな……まあ、俺の教育担当になったから教えてもらえたのかもしれないが」

「そんな訳無いでしょう、レオさんの情報は最重要機密ですよ。ただ、私の場合はこの国の殆どの高官の弱みを掴んでいるので、今回はその中の一つを使っただけです」

とんでもない事をさらっと流すように言ったアルバートに、レオは一步身を引いた。

彼が言った言葉は、直訳すると『ちよつと脅して吐かせた』というものだからだ。

「ち、ちなみに、何で弱みなんて集めたんだ？」

なにやら、魔物とはまた違った恐怖を感じたレオが逃げ腰でたずねると、思い切り悪い顔で晒ったアルバートが答える。

「昔大聖堂を追い出された後、何としても戻りたくて、ありとあらゆる手段を講じたのですよ。」

しかし……ククツまさかあの気の弱い財務次官が、入り婿の身で愛人を三人も……おっと、これは秘密なんでした」

「あー、うん。この話は終わりにしようか」

これ以上聞くと、ただでさえ嫌だったアルバートとの対話が今以上に嫌になるだろう。

愛人を困った財務次官のAさんの青ざめた顔が浮かび、コイツにだけは弱みを握られたくないと思うレオだった。

「では本題に。転移魔法について尋ねたいらしいですね」

「あ、ああ……俺は魔法には詳しくないからな。一緒に旅してるりサって子に基本的な部分は教わったけど、流石にリサも異世界への転移となると知らないだろうし」

いくら魔術の適正が高いと言っても、所詮はリサも一般人だ。適正があるために上位に位置する魔法も使えるが、逆に言えばそれ以外の高度な魔法は分らないという事になる。

「ここまで来ておいて言うのもなんですが、予め言っておくと、私として治癒を主とする司祭の端くれ……無論知識があるのでここに居る訳ですが、転移魔法に関してはどうやっても本職のホワイトパールには及びません。

ある程度学もありそうなレオさんは分かっているでしょうが、専門家の立てた計画を、知識を持っているだけの私が何とかできるとは思わないように」

過度な期待はするなと釘を刺すアルバートに、頷きで答えたレオは、困り顔で頭を掻いた。

「可能性が低い事は解ってるさ。正直に言えば、単に自分で納得するまで調べたいだけだ」

「なるほど。確かに、自分が納得出来るかどうかは大事ですね。

私も自分が納得するまでは、愛し合う私と女神様を引き剥がした高官達を許す気は無いですし」

「いや、それは許してやってくれ……」

恐らくアルバートが納得するのは、相手が死ぬときくらいになるだろう。

冤罪で終わりのない責め苦を負わされる高官の為に、勇気を出して言ったレオの一言はしかし、アルバートに「考えておきます」と言わせる程度の効果しかなかった。

それから四日ほど図書館へ籠り、他の全てを脇に置いて転移魔法を調べつくした

話し好きなアルバートは休憩中の話こそ面倒だったが、講師としては優秀で、それぞれの魔法の仕組みや制御について、とても解りやすく説明してくれた。

レオはどちらかと言うと飲み込みが早いほうではないのだが、アルバートのお陰で転移魔法の詳しい発動の仕組みについても多少解ってきた。

しかしこの場合、理解が深まる程に変えようの無い結論に行き着いてしまう。

即ち、行き先が解れば飛べる。

大規模魔方陣に使う杭もあるし、適した土地も近くにある。

だが、燃料があるのが飛行機があるのが、行き先が無ければ手の打ちようが無い。

異界を覗く装置も試して見たが、結果は無残なものだった。

まず、視点を人間が見える位置まで操作するだけでも大変なのだ。その上見えたとしても、鎧を着ていたり、どう見ても黒人ばかりだったり、元の世界かどうか以前に、視点を日本に合わせるだけでも不可能に思えた程である。

これで近い並行世界までもが無限に近くあると言うのだから、宝くじを百回当てる運を持っていても見つける事は出来ないだろう。

何とか元の肉体に戻れないかと、アルバートに聞いてみた事もあ
るが

「今からまた肉体を変える　　と言つのならば、答えは一つ。『不可能』です。」

詳しく調べてみて解つたのですが、レオさんの今の肉体は、かなり無茶苦茶な造りになっているのですよ。」

例を挙げるならば、まず、ハイエルフとしての特性が全く発揮されていません。」

元が霊木であるハイエルフは、山や森の一部であつたと言つ理由から、少なくとも発生地点の植物について深い知識を持つて産まれる筈なのですが、レオさんは薬草など何も知らなかつた。」

さらにエルフなら誰でも出来る筈の動物との意思疎通にも不備があつたり、通常のハイエルフとは精神の構造までもが全くの別物。」

これらは恐らく、ハイエルフと言つ素体の上から強引に半神の特性を上書きした為に起こつた事で、元居た世界で『スキル』として設定されていた能力以外の才能が全て0になっているという、データラメな状態が原因です。」

この状態で《原始の海》から無事に肉体を持つて抜け出せた事自体、奇跡に近い訳ですが　　これが成功したのは純粹に自身を想像できた精神面に加え、現在の体に関して、ある程度明確な数値が設定されていた事も、大きな要因の一つだつたようなのです……。」

さて、ではここで質問ですが、レオさんは元の……『近藤零夜』と、いいましたかね。当時の肉体の機能を、何か一つでも創造できますか？」

レオは何も言い返せなかった。自分がどれだけ頭が良かったか、病気や打撃に対する耐性がどの位あるのか、そんな事はわかる訳が無い。

黙り込んだレオの心中を察したのか、アルバートも頷いて続ける。

「そう、そんな事はわかる訳が無い。

ただ、ひよつとしたら、何か抜け道があるかもしれません。

と言っても、少なくとも神様にすら解らない抜け道ですからね。簡単に見つかる事は無いとだけ言っておきますよ」

「だろうな……」

レオが口元を隠して考え込んでいると、禁書室の扉をノックする音が聞こえた。

幾つかの資料を机に広げていたレオに代わり、傍に立っていたアルバートが扉を開けると、飲み物を盆に載せたカークスが訪れていた。

二三会話をして盆を渡すと、カークスはレオに会釈して来た道を戻っていく。

アルバートは手馴れた手つきで紅茶のような飲み物を用意し、机に座るレオに差し出した。

「どうぞ、それとまた『レオ様に神界の話を』と言われましたが

」

「もう勘弁してくれ……」

呆れたようなレオの声に、アルバートも肩を竦める。

「神々の言いなりであるこの国の上層部としては、点数稼ぎの為にレオさんには何とか領いて欲しいのですよ」

「そう言や、お前も大司教だろ。何だか寧ろ止めてくれてるようだけど、大司教としては問題ないのか？」

いくら高官達の弱みを握っているとは言え、何をしても許される訳ではないだろう。

解説役のアルバートが来てからは、殆ど図書館に籠っているレオだったが、それ以外の食堂や庭等で出会った者達は、ある程度話すと必ず『神の世界』への勧誘のような事を言ってくる。

しつこく言う訳ではないので、強要されている訳ではないだろう。けれどだからこそ、それが教国の総意であるように感じられた。

460

「別に、反対派が皆無と言うわけではないですよ。今来ていたカークスも、建前上はレオさんの霊体化を推してますが、本音を言えば知人のホワイトパールが命を賭けて行った計画を台無しにされるのですから、心中穏やかではないでしょう」

「へえ、俺の前じゃ全く動じた様子は無かったけど……まあ、よく考えたら当たり前か」

そこでふと、同じく専門家であったリスイの事を思い出した。

「ホワイトパールの話で思い出したんだけど、弟子にリスイって居るだろ。あいつを呼ぶ事は出来ないのか」

「おや、よく知っていますね。無論彼の自宅にもホワイトパールが旅立って直ぐに、教国から念のため詳細を伏せた召集の手紙を送ったそうですが、今のところ連絡はありませんね。彼は魔軍の脅威を知らせる為に、世界各国を廻っている筈ですから無理もないかと。それに例え見つかったとしても、彼は弟子になってまだ間もないので、恐らく知識は私より少ないと思いますよ」

つまりは、宛にするだけ無駄だと言う事だ。

これ以上何かできることは無いかと考え込むレオを余所に、アルバートは茶葉が入った容器をずらし、下から小さなメモを取り出した。

ちらりと目を通すと、それをそのままレオに渡す。

「転移魔法も重要ですが、このような情報にも目を通してみては？」

紙には、『魔術帝国2教国1共和国2公国x』と書かれていた。

「何だこれ」

「近頃また、魔物の動きが活発になっていましてね。公国については距離的に判りませんが、知人に頼んでこの国の近くで襲撃のあった村の数を調べてもらったのですよ」

「魔物が……」

裏が取れたのが五箇所と言う事は、実際には数倍の場所が襲われているだろう。

とは言え、これはある程度予想できていた事だ。

レオが見て来た限り、魔界はひどい有様だった。

向こうでも政治的な混乱があったかもしれないが、彼らとて好きで混乱している訳ではないのだ。元々他に選択肢が無いのだから、混乱が収まり次第再度攻撃を仕掛けてくるだろう。

「現在は、少数の精鋭部隊がほぼ無軌道に農村を襲っているようです。

といっても、今回の魔神は脳が筋肉で出来ている性質と聞きますから、何らかの謀略と言うより高位魔族の実力を見る為に、『手柄を立てた奴を將軍にする』とか言ったんじゃないかと思えますがね」

魔軍の話も気にはなるが、今のレオが気がかりなのはダールの街だ。

現在の傾向を考えれば、城壁のある大きな街は対象外のようなのだが、いつまでこのままかは分からない。

横目でアルバートを見ると、事情を知っている為にレオの考えを読めたようで、頷いて答えた。

「どうも、レオさんの言動を鑑みるに、現状での結論は既に出している様子なのでね。差し出がましい事ですが、ならば今は決断を急ぐべき時ではないかと」

レオはそれには答えず、手に持ったメモに視線を落とす。

そのまま数分考え込んだ後、口を開いた。

「アルバート、一応聞くが、これは間違いない情報なんだな」

いつもとは違う声色のレオにも動じず、アルバートは肩を竦めて答えた。

「私はこんな低レベルな嘘はつきません。女神イシス様に誓って本

当ですよ」

地下であるために時間の感覚は狂いがちだが、恐らく昼を少し過ぎたくらいだろう。

レオは立ち上がると、机の上に広げていた本や羊皮紙を片付け始めた。

「少し……考えたい。今日はこの位にしておこう」

返事の代わりに、判っていたとばかりに本を持って去っていくアルバートに、レオが後ろから声をかける。

「悪いが、明日も無しだ。次の予定は、こっちから連絡する」

振り返ったアルバートは、妖しく微笑みながら頷いた。

「勿論、構いませんとも」

アルバート顔を見て、何故だか得体の知れない寒気を覚えたレオはポツリと呟いた。

「アイツって確か、魔法の解説に来ただけだよな……？」

だが、誰も居ない禁書室で呟かれた言葉は、答えを得る事無く消えていく。

なんで解説に来ただけのアルバートに、ここまで踊らされるのだろつかと思うレオだったが、その理由は数日後、手遅れになった頃に気づくのがあった。

部屋に戻ったレオは、禁書室での一件以来、食事も取らず数時間ベッドに寝転んでいた。

あの後魔物の動向について数人に尋ねてみたのだが、誤魔化そうとした者を除けば、答えは概ねアルバートが渡してきたメモと同じ内容だった。

窓の向こうが赤く染まる頃、ようやくのそのそと起き上がり、一度机の上に置かれた手紙の用紙を見たが、直ぐに目を背けて部屋を見渡す。

必要以上に豪華な客室には、装飾や置物が多数置かれている。

ふと、部屋の片隅に置かれた、黒い収納袋がレオの目に留まった。ゆつくりと収納袋に歩み寄り、中から防具と一緒に仕舞ってあった《天羽々斬り》を取り出す。

見た目は《グラビティワールド》で手に入れた時と同じ、美しい黒刀のままだが、この刀はここに来るまでの数ヶ月で多くの血を吸ってきた。

狼やら巨人やら、果てには魔物の將軍や人間まで、立ち止まって考える暇が無かった位、慌しい日々だった。

その上、ようやく落ち着いて考える機会が与えられたと思ったら時間制限付きだと言うのだから、冗談にしても笑えない。

「この世界に来るまでは、なるべくのんびりを心情に生きてきたんだけどなあ」

やれやれと重い腰を上げて窓の外をみると、夕暮れの平野に日が沈もうとしていた。

周りの風景はまるで違うけれど、それだけは元の世界と同じだと、レオはどこかぼんやりとした頭のままで沈む日を眺め続けた。

リサ達と再会する日、レオはもう一度イシスに会いに来ていた。

滞在していた期間こそ短いものの、色々と権利等融通してもらった事もあるし、報告がてら礼をする為にも、会う事にしたのだ。

ちなみに前日、世話にもなっているし。と、作法についてカークスに聞いたのだが、どうもイシスの方から半神であるレオは自分達と対等だからという理由で、そのまま良いと言われているらしい。本音を言えば、前任者を尊敬している部分があるイシスとしては、彼と似た所があるらしいレオとは親しみを持って話したいと思っているのだろう。

そんな訳で、あえて無造作に謁見の間へ入ったのだが、相変わらず国王や側近は置物のようにイシスとレオを見守っている。

謁見の間へ入ると、既に話を通してあった為か、イシスの方から本題について聞いてきた。

「話は聞きました。この後、城を出るそうですね」

「ああ、旅の準備もあるし、行き先も少し話し合わないといけなからな」

レオ個人としては目的地は決まっているが、辿るルートや途中で別れる場合等、色々と話し合いたい事がある。

仲間達がどう答えるにせよ、一度話し合わなければ始まらないだろう。

「本当に、もう決めてしまったのですか」

どこか無念そうに言うイシスに、肩を竦めたレオが何でもない事のように言っ。

「元の世界に戻るのには、完全に諦めた訳じゃないさ。けど、聞いた話じゃ魔軍の方も、徐々に動き始めているらしいからな。」

ここに来る前、公国のダールって街でかなり世話になったんだ。敵の拠点からも近い位置にある街だし、のんびり魔法の勉強をしてたら、恩返しする前に地図から無くなってるかもしれない」

転移魔法については、アルバートの協力の下徹底的に調べた。

だが、どんな方法にしても前提として行き先が解らなければ、どうにもしようが無いのだ。どんな説明を受けたところで、それだけは覆りようがない。

後回しにする前に魔術帝国にあるという、ホワイトパールの住居に行く事も検討はしたけれど、彼が異世界に飛んだ直後に、既に一度調査を行っているらしいので、行くだけ無駄だという結論に至った。

それに、ホワイトパールの住居や地下の禁書は無くならないが、
ダールに居るフィルやバルドや女将は別だ。

魔物の軍勢を相手に、レオ一人が行った所でどうなる物でもない
かもしれないが、ある程度戦局に影響を与えるだけの力は持っている
のだから、何もせずに見捨てる事は出来ない。

「もし、霊体と成った後の心配をしているなら、私達はあなたを暖
かく迎え入れる用意が……」

その余りにも的外れなイシスの言葉に、レオはつい笑ってしまっ
た。

訝しむ女神に、頭を掻きながらレオが言った。

「折角誘ってもらった所悪いんだけど、俺が神様になるってのは、
ちよつと有り得ない」

「何故……」

理由なんて本当は解っているというのに、わざわざ引き止めるイ
シスに苦笑しつつ、レオが答える。

「失礼な事言うようだけど、俺にとっては、この世界の神様達はホ
ワイトパールと同じだからな」

「なっ……貴様、なんと言う事を」

自らが崇める神に対する暴言ともとれる言葉に、流石の国王達も
殺気立つ。

しかし、立ち上がる前にイシスに制され、渋々と言った風に膝を
突いた。

「いいのです。続けてください」

「イシスさんだつて解つてる筈だ。

俺をこの世界に招いたホワイトパールは、ただ自分達　この世界の人間を救う為の道具として、俺を呼び出した。

同じように　イシスさん、貴方を除く殆どの神様達は、この世界の秩序を守る役割りの為に、俺と言う厄介事を片付けようとして
いるだけだろう。

目指す所は真逆でも、俺を物として見ている事に変わりはない。
そんな相手に暖かく迎えられても、俺は行く気にはなれないよ」

女神からの反論は無い。彼女個人がどう思つていようと、全体としての意見はレオが言った通りだからだ。

だがイシスは、それでも……と言葉を続ける。

「こちらに残れば……それも、最前線に近い場所へ行くのなら、戦いに巻き込まれるのは避けられません。

いくらレオさんが強くとも、死んでしまう事だつて、あるかも知れないですよ」

「その辺は心強い仲間が居るから、大丈夫さ。

俺自身はホント頼りないけど、ギルヤリサはしっかりしてるから……まあ、ゲオルグはダールまでついてくるか解らないけど」

家族は死んでしまったと言うが、共和国にある故郷も危険かもしれないのだ。もしゲオルグに戻りたいと言われたら、引き止める気は無い。

仲間を信頼しきつたレオの様子に、イシスは諭すように問いかける。

「人の心など、変わり易い物です。いくら貴方が信じていても、何かの拍子に仲間裏切られる事だって、あるかもしれませんよ」

それは長い年月をかけて人間に裏切られ続けたイシスの、心よりの言葉だった。

だがレオは、その問いかけに質問で返す。

「かもしれないけど　ちなみに、神様の世界ってのは、どんな世界なんだっけ」

『神界』について、レオは城内の者に散々あれこれと吹き込まれたが、本当のところを聞くという意味でもイシスに一度聞いてみたいと思っていた。

レオの質問はこれまで何度も聞かれてきた物だったので、イシスはまるで定型文を読み上げるかのように説明した。

「私達の世界は、何処までも続く葦の野原で、そこでは皆が争いの無い、穏やかな時を過ごしています。

何でも好きな事ができ、求めれば全てが生み出される、苦しみの無い世界です」

それは確かに、神話や聖書に出てくるような理想郷だろう。けれど

「なら、やっぱり無理だ。俺は落ちこぼれだからさ、たとえ裏切られるとしても、いつか死んでしまうかもしれないとしても、こっちの『こちゃこちゃ』した世界がいいよ。

それに……」

うっかり『何でも思い通りになるクソゲーなんて、直ぐ飽きちまうに決まってる』と言う暴言を吐きそうになったレオは、慌てて口をつぐんだ。

流石に意味までは解らないだろうが、もし知られたら教国の国王様は斬りかかって来るだろう。

「ともかく、最初から俺が出せる結論はこれだけだ。他の答えは有り得ない……本当はもう少し悩んで居たかったけど、大切な人達が全員死んでしまっってから後悔するだけは嫌だ」

最終的にレオを決断まで急き立てたのは、盗賊に殺されたときのアルザダの表情だった。

気が抜けたような、何か忘れ物に気づいた時のような、困惑した様子でレオを見たあの顔が、どうしても脳裏に浮かんできた。

あの表情に名を付けるなら、『心残りのある顔』だ。

レオが図書館に籠っている間に、あるいは、霊体となって逃げた後に、リサやギルやゲオルグが、そしてダールの人達があんな顔で死んで逝くかも知れないと思うと、とてものんびり読書などしていられなかった。

強引に連れてこられてこんな事を思うとは、自分でも甘すぎるとは思う。

けれどこの甘さを捨てれば、自分が『異世界から来たレオ』では無くなってしまふという事も、また事実だった。

「とは言え、転移魔法については、許可さえ貰えるならまた今度調

べに来るつもりだけど……」

僅かに身を傾け、そろそろ戻る。と姿勢で示したレオに、イシスが微笑みかける。

「勿論、構いません。レオさんに比べれば微力ですが、私に何か力になれる事があれば、いつでもこの国に訪れてください」

「ありがとう。それじゃ、スイーにも悪いしそろそろ行くよ」

世間話を終えたかのように何気なく去っていくレオをの背に、どこか寂しげなイシスが最後の問いを投げかけた。

「最後に一つだけ、聞いてもいいでしょうか。貴方が元居た仮想世界……確か、名前がついているんですよね」

レオとしては何故そんな事が気になったのか謎だったが、特に秘密にする理由も無いので正直に答える。

「ええと、《グラビティワールド》……グラビティは、重力とか引力とか、引き寄せるって意味だから……あの場合は、魅力ある、惹きつけられる世界って事になるかな」

「そうですか……とても参考になりました。では、またいつか」

頭を垂れてレオを送り出すイシスは、やはり何処か沈んでいる様子だったが、何が原因でそうなったのかまでは、レオには解らなかった。

謁見が終わった後、何も言わずに淡々と巫女の身を離れたイシスは直ぐには還らず、霊体のままでレオが出て行った扉を眺め続けていた。

イシスの気配を感じ取ったスイスイが、首を傾げて女神に尋ねる。

「イシス様、どうかなさったのですか」

その問いに直ぐには答えず、躊躇うように口を噤んでいたイシスだったが、やがて独り言のように呟いた。

『《グラビティワールド》……ひよっとしたら、あれはこの世界にこそ、相応しい名前かもしれない』

イシスの悲しげな声色に困惑しつつも、女神イシスを信望する少女は明るく答える。

「はい、女神様達が創られたこの世界は、とても魅力的な世界ですもの」

『そうね……』

現世から薄れ逝く女神は、かつての前任者とレオを見て思う。

名前は同じでも、この世界は人々を惹きつける魅力ある仮想空間とは違い、引力によって無関係な者を強引に引き寄せ、重力によって縛り付ける。傲慢で醜悪な《グラビティワールド》だと。

女神との謁見を済ませたレオは、一度客室に戻って収納袋を担ぐと、集合場所として決めている応接間へ向かって難しい顔で歩いていた。

アルバートが来て以降、手紙を書くとは必ず愚痴が入ってしまい『こんな時に愚痴を書いたら心配させるよなあ』と思い連絡を取れずにいたので、どんな顔をして会おうかと思いついて悩んでいたのだ。

ところが応接間へ至る最後の一本道の前に、なにやら見覚えのあるピンク色の人物の姿が目にとまり、足を止める事となる。

「何でまだここに居るんだよ。俺の用が終わったら、摘み出されるんじゃないかったのか」

これは前日にアルバート本人に言われた事だ。

昨日出て行くと告げた折、レオが出て行けば大聖堂を追い出されるから、なんとかその前に一目イシスに合わせたくれとしつこく迫っていたのだ。

「フツ、契約書に書かれていたのは、『レオ様が城内に居る間は、立ち入りを許可する』という文言だったのでね。まあ、門番を説き伏せるのには苦労しましたが……」

門番を説き伏せて入ってくるのは、彼の中ではデフォルトらしい。

「それにしても、本当にレオさんは冷たいですね。この私が、無償であれだけ親身になって魔法について教えてあげたと言うのに、結

局ただの一度もイシス様との面会に立ち合わせてくれないなんて。

貴方には全く持って、感謝の気持ちという物が足りない。お世話になった私達の恋路を、少しでも助けようとは思わないのですか」

「俺はストーカーから被害者を守っただけさ……ともかく、なんでこんな所に居るんだ。別れの挨拶なら後で教会に行くって言っただろ」

と言うか、無論感謝はしているとしても、レオとしては余り積極的に関わり合いになりたくない。

その辺りの感情も雰囲気として出して言っただつもりなのだが、言われたアルバートはそよ風でも受けたような顔をしている。

「実は、私も魔法の指導員として、レオさんに同行しようと思いついてね……愛しの女神様の元を離れるのは心苦しいのですが、何も知らない異世界で困っているレオさんを方って置けず、こうして参上した訳です」

「いやいやいや、要らない、要らないから。って言うかお前大司教だろ、魔力も凄いつて言うし、これから魔軍が来て大変になるんだから、教国を出るのは不味いんじゃないかな」

脊髄反射で断ったレオの前に、アルバートはバインダーのような物に挟まれた一枚の羊皮紙を差し出した。

詳しい内容までは読み取れないが、契約書のようなものだという事は解った。

「無論許可は取ってあります。アメリカ女史に『大変心苦しい事ですが、この国を離れなければならぬやも』と言った所、『なんて

事でしょう。貴方が居なくなるとこの教会も大変です』と言いつつ、五分と掛けずに書類を用意してくれたのですよ。

彼女は会話能力は無いようですが、仕事の方は速くて助かります」

「裏切ったなアメリカ……………ッ」

きっと教会も大変だと言ったのは、良い意味での事だろう。

その証拠にレオの脳裏には、満面の笑みで書類を作るアメリカが描き出されている。

「だ、だが連れて行くかどうかの選択権は、俺の方にあるんだ。魔法についてはリサに教わってるし、悪いが連れて行くことは」

言いつつ脇を通り抜けようとしたレオの肩を、アルバートが掴む。

「取り合えず、話だけでも聞いてくださいよ。これは、双方にメリットがある事なのですから」

嫌な予感しかしないので、強引にでも振り払って逃げ出したい所だったが、色々と世話になった手前そうも行かない。

仕方なくレオは、何を言われても決して答えは変えない。と、自分に言い聞かせて立ち止まると、溜息を一つついてアルバートに向き直った。

「……………解った、聞くだけは聞いてやる。ただし、聞いた上で俺が断った時は、きっぱり諦めると約束してくれ」

絶対に断ると書かれた顔で念を押すレオに、なおも涼しげなアルバートはそのまま語り始めた。

「ではまずは……そうですね、昨日レオさんは、知人が心配で残るのが一番の理由だといっていましたねえ」

「それがどうかしたのか」

身構えつつ聞き返すレオに、何故か鯨のように周囲を旋回し始めたアルバートが答える。

「先ほどリサさんという魔法使いの名前がでしたが、今のレオさんのチームを鑑みると、彼女は現在とても危険な状態にあると言えるでしょう」

「な、何でだよ」

「現在負傷した場合、治療は全てレオさんが行っているそうですね。確かに、飛び道具や魔法等を滅多に使ってこない下級の魔物相手ならば、問題ないかも知れません。」

ですが、文献によると高位の魔族は強力な魔法や、岩盤の投石等を行う例もあるといえます。

あんな線の細い少女では、魔物の攻撃を受けてはひとたまりも無い……そんな時！役に立つのがこの私、アルバート・フラメル。前線で戦い続けるレオさんに代わって、か弱いリサさんの傷をたちどころに癒してご覧にいれましょう」

まるでジャパットの社員のように、身振り手振りを交え感情を込めて力説するアルバートを白眼視しつつ、レオが冷静な突っ込みを入れる。

「いや、岩盤が振ってきたらお前もただじゃ済まないだろ……とい

うか、前に怪我してからは、なるべく仲間には優先で防御魔法を使うようにしてるんだ。ちょっとやそつとじゃ怪我しないさ」

アルザダが怪我をした時は、魔法を使いそうな者が見当たらなかつたので油断したが、既にレオは予め準備する余裕がある場合は低位のプロテクトアーマーを使うようにしていた。

だがアルバートは勝ち誇ったようにニヤリと笑い、レオを指差して言う。

「確かにレオさんの防御魔法は強力だ。ですが、先日聞いた所によるとその魔法、効果時間がかなり短いらしいですね。乱戦になってリサさんを見失った場合、どうする事もできないのでは？」

「う……」

これは事実だ、レオのプロテクトアーマーは約40分程度しか効果が無い。

よく考えればこれからは軍勢と戦う事になるかもしれないのだから、常に仲間を認識して置く事ができない場面もあるだろう。

レオが戸惑いの声を上げた隙を逃さず、背後に回りこんだアルバートは耳元で囁く。

「それに、私はレオさんを助けるのが第一の目的なのですから、同時に複数の人間が負傷していても、リサさんを優先的に治療する事を約束しますよ」

「だ、だが、お前が話し出すと場の空気が悪くなると言うか、フィリングが……」

「勿論、仲間に加わる以上、メンバーに悪影響を与えるような事は、

「言わないように努力しますとも」

「ここで絶対に言わないと約束しないのが、詐欺師の常套手段だ。」

「い、いや、しかし……皆の意見を……」

徐々に雲行きが怪しくなってきたレオに、わざと声を潜めたアルバートが止めとばかりにまくし立てる。

「皆の意見など、聞かない方がいいのですよ。折角のリサさんを優先すると言う条件が、大っぴらに付けられなくなるでしょう。」

それに、数ヶ月二流魔導師に教わっただけの彼女と違い、私は魔術の真髓を見えています。講師としても、他に類を見ない逸材ですよ」

「けど……」

レオも必死の抵抗を試みるが、口から漏れるのは最早反論とも言えないような呟きだけだ。

アルバートはそんなレオの右手優しく掴み、そっとペンを握らせ
た。

「では、もつと解りやすく言しましょう。」

この書類にサインするだけで、リサさんが命を落とす確立が飛躍的に減ります。彼女の為を思うなら、彼女の命を助けるためにサインするべきなのです。

「さあ、ペンを掲げて……」

と、レオの持つペンと、アルバートが右手に持った契約書の距離が近くなった時

レオの視界の片隅で、何重にも重ねられた隠蔽魔法付きの遮光布の奥深く、アルバートの左手首に付けられた腕輪が光を放った。

腕輪に刻まれたルーンは、禁術にも指定されている、最強の洗脳魔法を発動させる為のものだ。

とは言え、レオの強靱な魔術抵抗の前では殆どがレジストされ、ほんの数秒程度の効果しかない。

けれど、今のアルバートには十秒あれば十分だった。

「さあ、リサさんの、仲間の命を救うために」

その声に答え、レオが空ろな目でペンを動かす。

「命を……………ハッ」

と、名前を書いてしまったレオが一瞬遅れて我を取り戻したが既に遅く、アルバートはたった今サインしたばかりの羊皮紙をバインダーから取り外し、懐に仕舞っていた。

混乱が続くレオは、サインをした自らの右手を見ながら首をかしている。

「な、なあ、今俺なんか変じゃなかったか？」

戸惑ったような声を上げるレオに、白々しく首をかしげたアルバートが真顔で答えた。

「はて、最後まで悩んでいる様子でしたが、特におかしな所はなかったですよ」

「い、いやけど、本当になんとかぼうつとして」

尚も食い下がるレオに、アルバートは顔を顰めて答える。

「まさか、今更サインした契約書を取り消そうと言うのですか？いくらなんでも、契約書が存在しない異世界から来たとは言わせませんよ」

「ぐ」

何と言いつ返せばいいかと悩むレオを余所に、満足そうに契約書を仕舞ったアルバートは応接間へ向かって歩き始めていた。

このままでは、済し崩しに加入が決まってしまうと感じたレオは慌てて引き止める。

「ま、待ってくれ。双方にメリットがあるって言うてたが、お前には一体何のメリットがあるんだ」

心理的には敗北を認めたとような言葉だが、これを聞いておかなければレオは安心して眠れないだろう。

対して、振り返ったアルバートは、何故解らないのかと言いたげな顔で答えた。

「決まっているでしょう、この世界の神々はレオさんに借りがある。貴方を助け功績を挙げれば、誰が何と言おうと私は大聖堂に戻る事

が出来る。それ以外に何があると言つのです」

「……ああ、そう言えばお前ストーカーだったな……」

急に冷静さを取り戻したレオの口から、溜息と共に独り言がこぼれた。

アルバートの手腕に翻弄され過ぎて、彼の根本を忘れていたようだ。

そんな都合の悪いレオの独り言を受け流したアルバートは、今度こそ止まる事無く廊下を歩き始める。

「さあ、行きますよレオさん。これ以上皆さんを待たせるのは、心苦しいでしょう」

「誰のせいで　って、ちょっと待て、まだ心の準備が」

元々どんな顔で会おうかと悩んでいたというのに、更に混乱させられ慌てるレオだったが、悠々と歩くアルバートを止める事はできず、結局なんとも情けない顔のまま、扉が開けられる事となった。

リサを含む全員の視線がアルバートに集まる中、主役の座を奪われたレオが気まずそうに解説を入れた。

「ええと……な、何でか、今日からメンバーに加わってしまった、アルバートさんだ……」

全員の白い目を一身に受け、それらを完全に受け流したアルバートが、髪をかき上げつつ優雅に自己紹介をする。

「フツ。どうも、アルバート・フラメルです。以後よろしく……あ、ちなみに、加入に関してはこちらの契約書により確定しているので、反対は受け付けません。悪しからず」

満面の笑みで契約書を差し出すアルバートを見て、レオはあの時一瞬でも悩んでしまった自分を恨んでいた。

暫し全員が硬直していたが、木枯らしが止んだ頃、大仰に溜息をついたゲオルグが撤収を始める。

「じゃ、アタシら先に宿行っておくから、レオも夜までにはきなよ」

「そうだな。レオ、行き先は宿で相談するから、早めにくるんだぞ」
釣られるように、アルザダやギルもそそくさと部屋を出ていく。
更にアルバートまでも、かき上げた髪を整えつつ彼らに続いた。

「私は行き先など興味はありませんが、旅支度があるので失礼しますよ」

いつの間にか二人きりになってしまった応接間で、醒めた目をしたりサが言う。

「レオさん」

「はい」

「ここに来る前の日に、一人の時は気をつけてくださって言いましたよね？」

「言われた……ような、気がします……」

いつにも増してしよぼくれ、慎重さが逆転しているのではないかと思う程に萎縮したレオに、リサはもう一度溜息をつく。

けれどその後、アルバートを見る前のような笑顔に戻ると、扉が開いた時に言おうと、用意していた言葉を言った。

「お帰りなさい、レオさん。皆あんな事言っていました、きっと途中で待っていてくれますよ。ほら、早く行きましょう」

「ああ……そうだな」

なんだか情けないなと思いつつ、リサに連れられたレオは、重い足取りで足取りでカステイーヨ大聖堂を後にするのだった。

四章 再びの旅立ち（上）（後書き）

フツハハハハッ 見るがいい、作者がゴミのようだ！

大幅加筆と修正で、活動報告で書いた予定より投稿が遅れてしまいました……深くお詫びしますm(____)m

結局これはどうにもならんという事で、上下に分割したのですが、その為次回ちょっと短くなるかもしれません。ご了承ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3869u/>

グラビティワールド

2011年11月6日02時39分発行